

ピーター・ハワード

世界の再建

フランク・ブックマンとMRAの実体

世界の再建

“THE WORLD REBUILT”

ピーター ハワード

「世界の再建」目次

第 1 部

第1章	マルキシストの新しい方向……………	一
第2章	新しいヨーロッパへの道……………	二三
第3章	階級闘争に代るもの……………	三七
第4章	経営者側も考えを変える……………	五六
第5章	ゆるぎなき防衛……………	七四
第6章	東洋と西洋の使命……………	八七
第7章	全アジアは耳を傾ける……………	一〇六
第8章	岐路にたつアフリカ……………	一一五
第9章	思想は翼にのつて……………	一三三
第10章	ワシントンの反響……………	一四五
第11章	光をともせ……………	一五三

第12章	新しい世紀のメッカ、コー	一六八
第13章	フランク・ブックマン	一七九
第14章	世界は再建される	一九五

第 2 部

1	東と西の使命	一九八
2	優れたイデオロギー	二〇六
3	或る共産主義者の十ヶ条	二〇九
4	ゲシュタポ報告	二一〇
5	共産党员とMRA	二一四
6	大衆は支持する	二一六
7	シューマン仏外相とMRA	二一八
8	西ドイツの歓迎	二二一
9	アーノルド知事の招待	二二三
10	生産への刺戟	二三四
11	労働者の使命	二三五

12	炭坑のイデオロギー	二二七
13	希望の谷間	二三一
14	炭坑問題の新しい方策	二三五
15	労働界の矛盾	二三六
16	コーと世界の労働者	二三九
17	世界産業会議	二四一
18	産業界の人間性	二四七
19	産業の新しい必要	二四九
20	アメリカ産業連盟への報告	二五一
21	将来への希望	二五三
22	裁かれる人	二五三
23	アメリカ産業界の問題	二五九
24	第一目標（ビルマ首相のメッセージ）	二六一
25	危機より解決に	二六二
26	パキスタンのメッセージ	二六五
27	より偉大な歴史	二六六

28	アメリカ国会議事録より……………	二六七
29	敵を友とする……………	二七一
30	全アジアは耳を傾ける……………	二七三
31	最大の記憶……………	二七四
32	インド居留民……………	二七五
33	コー(アメリカ国会への報告)……………	二七七
34	コーの秘訣についての反省……………	二七九
35	MRAと西欧キリスト教……………	二八六
36	ブラーグ学生会議には行かぬ……………	二八九
37	MRAの出發……………	二九一
38	輝く明星……………	二九五
39	忘れられた要素…………… <small>フネゴトシニツアナイ</small>	二九六
40	ギリシヤ……………	二九九
41	生きる目的は何か……………	三〇一
42	新精神の興隆……………	三〇六
43	劇評「ジョサムの水門」…………… <small>ゴッレ</small>	三一

44	道義の指導精神……………	三二四
45	光をつけよ……………	三二七
46	サンフランシスコでの努力……………	三三四
47	文明を救う機会……………	三三六
48	アジア・アフリカ代表の声明書……………	三三九

• 第 1 部 •

第1章 マルキシストの新しい方向

何が彼らをコミニストにするか。

どんよりと曇つたある日のこと、陰気な鉦^{かね}山の谷合いを鉦夫^{かねづ}たちは陽気に歌をうたいながら製鋼工場へと、鉦^{かね}山の山と山との間を登つていった。この日こそ、彼らの住んでいた家が永年のぞんでいたように自分のものになるので陽気になつていたので。会社がこの住宅を彼らに売り渡すことにやつと同意したのはつい最近のことだ。で今日はその最後の払込みがすんだのである。

この人たちはその丘を登るのが、これで最後になるということは知らなかつた。その晩、彼らは製鋼所が閉鎖されることをいい渡されたのである。会社は鉄鉦石を輸入する港に近い海岸へ、工場を移転することにきめたのだ。こうしてこの谷合いの人びとはその後仕事にありつく望みもなくとり残され、彼らが買いつた家はほとんど無価値なものとなつてしまつた。

この町の男や女たちに、この地方が革命的に有名になつたのは、なぜかとたずねると、人びとはかならずこの物語をする。彼らは憎むことをおぼえたのだ。この町の人びとは自分たちに対して行われた不正を是正する方法として、マルクスとエンゲルスによつてつくりだされた方法、つまり西欧の産

業の発達をもたらした無慈悲な、しうちを憎んでつくりあげたイデオロギー以外に知らなかつたのである。

非道なしうちは人びとを実力行使へとかりたてる。そのうえ人類の歴史を階級闘争の立場から説明して、虐げられた人びとの必然的な勝利を確約する理論が加えられると、一つの勢力がつくり出される。野心家、陰けんな人、理想家、浅薄なインテリ、希望をもたぬ人、憎しみをもつた人など、それぞれいろいろの理由からこれに加わる。しかしあらゆる国の共産主義の本当の力は決意の固い、また訓練された筋金入の指導者たちの中にある。その多くは、はなはだしい非道なしうちにあつた人たちであつて、自分たちや子供たちのためのより良い世界をつくる唯一の望みを共産主義にかけているのである。

コミニストは別の新しい考え方と生き方を獲得することができるであろうか。

これはきびしい試練である。しかし、コミニストたちが現在、マルクスのイデオロギーよりも、もつと強くなるのすべてを要求し、満足を与える生活をもたらし、新しい世界をいつそう確実に約束するイデオロギーを受けいれていることは意義深い事実である。MRAのイデオロギーがそれである。

ドイツのルールや、イギリスのロンダ、パリーの赤色地帯、イタリー工業都市ロンバルジーなどヨーロッパ共産主義の熔鉱炉できたえられた鉄の信念の人びと、二十年あるいはそれ以上コミニストとして党員生活をした人びとで、MRAに変わつてくる数は増している。彼らは革命家として訓練され

た気力と機略をもつて、MRAのために闘っている。

何がコミニストを変えるのか。

ヨーロッパ産業の心臓、ルール地方では、過去一世紀にわたつてマルキシズムの訓練が着着と行われてきた。この地方は貧富の差が甚だしいので、怨恨の感情が深刻で烈しい。ルールの多くの労働者は、イデオロギー戦の訓練された行動隊員である。

一九四八年から一九五〇年の間に、西ドイツではMRAの会合が工場や労働組合支部のみでなく、各州の地方議会で何百回となく開かれた。大衆はMRAのことを新聞で読み、またラジオでたびたび聞いてきた。十四万の労働者、労働組合役員、産業および政界指導者が二十四の都市でMRAの劇を見た。

寒い冬のある晩、老練なコミニストの指導者マックス・ブラデックはこのようなMRAの人たちが話をするある労働組合の会合で議長をつとめていた。ブラデックはルールのある大炭鉱の労働評議会の議長であつた。背は低いが闘志いつばいの男であつた。その眼は鋭く、額は知的で、胸は硅肺を病んでいた。彼は二十五年このかた共産党員であつた。その会合はピヤホールで開かれていた。

MRAの人たちが、この会場にはいると、場内は煙草のけむりがたちこめて、卓上にはピールのコ

アップが散らばり、あかりにてらされて雑然としたふんいきであつた。そして議長のパラデックが、あらかじめ自分の地区の弁舌のたつ最も優秀な党員をよんでおいて、議論をふっかけて粉砕しようとしているのが、この人たちにはわかつた。

六人のコミニストがつぎつぎと話をした。彼らは攻撃に終始した。すべての資本家の内心はファッシュストである、西欧諸国は次の大戦を準備しているという論旨で一時間も話しつづけた。彼らは機構の改革の必要をマルクスから引証し、またブルジョワは、いままでに道義を利潤より先に考えたことがないというスターリンの意見を引合にだした。キリスト教会の歴史を指摘し、キリスト教は二千年の間、新しい世界をつくろうと努めたが失敗していると断言した。こんどは自分たちコミニストが新しい世界をつくる番だというのだ。

ここでMRAの人たちが發言のために立ちあがつた。その一人はランカシヤからきた労働者であつたが、彼は自分の国、イギリスもときにはまちがいを犯したと、事実を認めながら話はじめた。ドイツ人はイギリス人の口からそんなことを一度でも聞いたことがないという様子であつた。聴衆の関心が集中してきた。

『誰でもが』とこの人は話を続けた。『相手の変わるのを期待している。あらゆる国は相手の国の変わるのを待っている。しかも、みんな相手がさきに始めるのを待っている。』ここまできるとみんな傾聴しはじめた。ホールにはヒヤ、ヒヤという声さえも盛んに起こるようになった。

『しかし、一番よいのはまず自分からはじめることだ。まず自分たちの階級、自分たちの民族、自分たちの国からはじめて世界にまで及ぼすようにできないものだろうか。』

他のひとりとは機構の^{チェンジ}変革について話した。『心ある人たちは、みな世界の社会的不正義や経済的貧困を憎んでいる。世界にはすべての人の必要を充たすだけのものはあるが、人びとの貪慾を充たすだけのものはない。もしすべての人がたがいに思いやり、分ちあえば、すべての人の必要が充たされるのではないか。機構の^{チェンジ}変革だけでは不十分である。キリスト教徒はしばしば自分の説くところを實踐しかねてきたが、根本的思想はいまでも正しいのではないか。MRAはあらゆる面の^{チェンジ}変革を意味している。社会的^{チェンジ}変革、経済的^{チェンジ}変革、国家的^{チェンジ}変革、国際的^{チェンジ}変革はみな個人の^{チェンジ}変革がもとである。この^{チェンジ}変革を認めないものはすべて反動といわねばならない』

たばこの煙が立ちこめ、緊張したしじまのなかからスコットランドのクライドサイド港からきた造船工が云つた。

『労働者は現在ほど強力になつたことがない、しかしまた現在ほど分裂してしまつたこともない。われわれは原子破壊の方法を学んだが、人類を結ぶ方法はまだ学ばない。労働運動も人間性を変えることを知ろうとしない限り、その内部に自滅の種をもつことになる。人間性は変えることができるんだ。それはすばらしく広範囲な^{チェンジ}変革を必要とする。——資本家、アメリカ人、イギリス人、それにコミニストやドイツ人も含めて世界中の人びとの^{チェンジ}変革が必要だ。そうすれば階級のない社会が現われ

る。われわれは自分の墓場へはいるまでその変革を待つてはられないのだ。』

カナダの実業家が紹介された。労働者に対する彼のすつかり変つた態度がコミニストたちをびつくりさせた。会合は四時間続いたが、そのあいだ、たれ一人として席を立つたものはなかつた。

このような闘いが毎日ルールで続けられ、質疑応答がさかんにかわされた。くる日もくる日も、数ヶ月ぶつとうしてMRAの人びとは鉱夫と家庭や炭坑内で接触した。その結果、数百名の労働者とその指導者がMRAの本部スイスのコーへ出かけて行つた。そこではMRAの世界大会が開会中であつた。この人たちのなかにブラデックと、もうひとりの老練なコミニストであるポール・クロウスキーがいた。

この人たちはコーで変革をもととしたイデオロギイのいきた实例を見た。それは一つの階級のためのみでなく、すべての階級の變革を意味していた。

『二十五年間、私はインターナショナルをいつしようけんめい歌つてきたのだが、こんどはじめてその実践を見たのだ。』とコーにきて数日してから、クロウスキーが述べた。

彼らは変りはじめた。しかし變革はコミニストであろうと、資本家であろうと、だれであろうと決して楽なものではない。絶対的道義標準に直面することを意味するからである。それは家庭での變化を意味し、個人的習慣や長い間もつていた考え方を捨てることにもなる。

ブラデックとクロウスキーは夜おそくまでおたがい同志や、またMRAの人たちとも語りあつた。

彼らはマルキストとしての秘術をつくして闘つてみた。しかしこの新しい友人たちはつねに温く接してくれたし、一方MRAのイデオロギーの妥協のない論理は間断なく彼らに迫つていった。

ついにクロウスキーは『正直、純潔、無私および愛という絶対の規準に従わないものは、自己の階級および自分の国家に対する裏切者である。』と結論した。

ヒトラー治下の十三年間、コミニストとしての主義を放棄しなかつたクロウスキーが、コーの実証に照してマルクス主義を評価し直した。

『私はマルクスの基本理論が時代おくれであるということを知るようになった。その哲学はドイツ古典哲学の上に築かれ、人間は変わることができるといふ重要な事実を評価し損つてゐる。当時労働者が得ようと苦闘した多くのものをわれわれはすでに得ているし、いまでは産業時代からイデオロギ―時代へと推移したのだから、彼の経済理論も時代おくれとなつた。階級闘争という戦術は自殺行為だ。何故なら階級闘争は必然的に二つのグループを全面的戦争にかりたてて世界の破滅へと導くからである。』(註第2部3参照)

一方ルールでは、ブラデックとクロウスキーがMRAのイデオロギーを受け入れてゐるとの報告が西ドイツ共産党へ届いた。党は警戒しはじめた。ブラデックとクロウスキーおよびMRAと論争するために、党はその最も信頼する党員ウイリー・ベネーデンスを派遣した。

ベネーデンスは共産党地区政治局書記長であつた。かつて彼は結成準備中の統一共産・社会党のル

ール地区議長に選出されたこともある。また西ヨーロッパ側が同党を圧迫したときに、モロトフが抗議を申し入れたのは、彼の動議にもとずいたのであつた。もうひとつベネーデンスについて語られているのは、彼が軍隊に在籍中彼の思想傾向を危険と認めてヒトラーの親衛空軍から東部戦線に追いやり、両脚を失つたことである。

彼がコーへ行つて何が起つたか。それは彼自身の言葉が最もよく語つてゐる。

『私は友人であり、また共産党の幹部であるこの人たちとはげしく論争した。しかし自分が長年月その獲得のために闘つてきたもの、すなわち階級のない社会をそこで見出した。私はコーで、社会正義に通じ、かつ人の心が求めるものを満足させるイデオロギーを知つた。MRAは有害なものでなく有益なものであり、西欧の社会問題を解決し、東西の問題を解決する考え方である。世界のあらゆるところのあらゆる人の変革（チェンジ）に役立つものである。』

ウイリー・ベネーデンスは彼の確信をまず自己の生活改変（チェンジ）で裏付けたが、これこそ有能なイデオロギー闘士としての純粹さを現わすものであつた。彼はいつた。

『私は徹底的に変わらねばならないことを知つた。第一に私の家庭の中で、それから近所の人や鉱山の同僚のなかで変わらねばならなかつた。私は平和についての卓越した話し手であつたが、私の同僚の職長たちとうまくやつていけなかつた。コーで私は、私の方から自分の同僚へのかけ橋を見出した。この変革こそ、すべての国の国民が相互に通ずる道を見出すことのできる共通点である。』

ベネーデンス、クロウスキーおよびブラデックの三人はいつしよにルールへかえつた。三人は共産党執行委員会に呼びだされた。彼らは簡単に説明して、『私たちは共産主義よりも偉大なイデオロギ―を知つた。』といつた。

西ドイツ共産党はジレンマにおちいつた。レーニン主義者の戦略は共産主義を社会組織のなかに滲透させて、これを変革する方法をとつてきた。ところが単なるひら党員でない、党の幹部であつた者が、コーへ行つて変えられてしまつたのである。

一方、この三人は党の強硬派を集めて話をした。この会合について三人は次のように書き送つていゝる。『会合は相明けわしい空気がつた。しかし長い話というものもいつかは終るものだし、十人がいつしよに歌をうたうことはできても同時に話すことはできない。十人が一度に話をしたら誰が何をいつているのかわからない。われわれがコーのことを話し出すとがやがやした声が静まつて、すぐ一同が傾聴し、沈黙し考え込んだ。そのうちに議長はまるで自分自身がコーへ行つてきたのかと思うほどになつた。』

執行委員会あての公式文書のなかで、ブラデック、クロウスキーおよびベネーデンスは党が自らMRAの「世界革命的な新しいアイデア」を知ることゝ勧告し、また彼ら自身はマルクス・エンゲルスを引用してその所論をうらづけ、「合理的で現実に即した根拠」にもとづき自分たち自身を^{サニジ}変革することに決定したことを述べ、また「すでに多くの他の共産党員を変えた」と発表した。

激烈な党委員会のあとで、一党員が話した。

『諸君がもしそこに出席していたならば二時間ばかりの議論のおわるころには、MRAこそまさしくマルクスが求めて闘いつづけたところのものであり、かつ今日までモスクワもまた他の誰もがマルクスの真意を知らなかつたのだということに気がついただろう。』

西ドイツの共産主義機関紙フライエス・フォルクは一九四九年十月六日に、ルール地方党委員会議長フューゴー・ポールの書いたMRAについての論文をかかげた。

『MRAの危険な活動が党の地区委員会および地方委員会で過少評価されてきた。また党のある部門にはイデオロギー的動揺をもたらした。コーから帰つた党員は、党が自らMRAの世界革命的な新しいアイデアを研究せよと勧告している。』と。

コーから帰つた人たちは微動もしなかつた。エッセン、ドルトムンドおよびルールその他の地区から、練達したマルキストたちが戦列に加わつた。強力なステイラー・エッセン共産党を組織し、エッセン市の書記長であるヘルマン・ストッフメルは、いまではMRAが世界が求めている団結のイデオロギーであるという確信をもつようになつたと発表した。もし共産党がこの所信を受けいれないならば彼自身が離党するばかりでなく、その地方の党員の三分の一も彼と同一行動をとるであろうと述べた。

ついに西ドイツ共産党は、MRAについて論文を書いたフューゴー・ポールを含む四十人の地方の党指導者たちを反イデオロギーと関係しているとの理由で除名した。『MRAは人類の再教育と階級

間の妥協を狙っており、したがって階級闘争の闘士を混乱させる。』と党は説明した。

西ドイツの共産党の執行部は一九五〇年一月八日にデュッセルドルフで緊急会議を招集した。それは執行部と書記局が『党と相容れないイデオロギーによつておかされた。』との理由で全執行部および書記局を再編成をしようとしてしていると発表した。

マンチェスター・ガーディアン紙は一九五〇年二月八日に『共産主義者の新たな異端とMRA』の標題の下に、当時の全執行部の追放に関連してルールの共産党新委員長ヘール・レッドヴォンが『最も危険な兆候は黨員とMRAとの関係がますます近くなつてゐることである。』といつたと引用している。一方、この革命を引き起したブラデック、クロウスキーおよびペネーデズは激しい攻撃に会いながら、万以上の得票で労働評議会への選挙に勝つた。

二

八才の少年が十二時間交替の作業のために暗い坑内へと降りて行く。——ストライキや工場閉鎖のあいだ軍隊が鉱山を接收している。——南ウェールズの人口の過半数が数年間つづけて失業している。——炭鉱主は炭鉱でもうけた巨万の金をウェールズの外で有利な投資に使つてゐる。こうしたことが南ウェールズの鉱山地区の人びとに怨恨をいだかせ、彼らをイギリスの革命運動の急先鋒へと押しやつたのだ。

MRAのチームが、ウェールズの山峽地方に『忘れられた要素』という劇を持つていった。六週間のうちに三万五千人がそれを見た。イデオロギーに敏感であつたので、彼らはその重要性をたちまちに把握した。そののち、サウス・ウェールズ・アーガス紙は『マルクスより偉大だ。』と報じ、『マルクス主義より一段と強力なイデオロギー。』とその地方の最有力紙の一つ、アバーデア・リーダー紙が推奨した。

鉱山の人びとと製鋼業の人びとが交わりはじめた。二十八年間も共産党の方針に同調してきた製鋼労働者のジャック・ジーンズの物語は典型的である。彼は自分の娘を、彼以上に尖鋭化するよう訓練した。彼ははえぬきの鉱夫で、坑内で一眼を失つた。十三年間も彼は失業していた。『私は階級闘争であらゆるものを犠牲にした。家庭も、慰安も、妻の愛情も。その上自分の娘までも私はマルクスの祭壇へいけにえに出した。』とジャックはいつた。

ジーンズはヨーロッパ最大の製鋼工場の一つであるエプウ鉱山製鋼所の職場で支部組合の代表に選出された。彼は独裁者であるとの噂のあつた支配人と交渉するために出かけて行つた。しかしジーンズが知らぬあいだに、支配人はすでにMRAを経験していた。人生に対する彼の態度はすでに変化していた。

『私があの男の事務所——私が憎んでいた男、私が信用しなかつた男、私にとつて悪魔のような男のところへ行つたとき、私は卓越したイデオロギーをもつた男と対座していた』とジーンズはいつ

た。

『その男は絶対の正直や、何が正しいかについて話してくれた。また労働者に対するその男の態度がなぜ変わらなければならなかったかを私に語った。私は彼が相当な悪党だと思つた。帰宅してから家内にむかつて私が、「頭のおかしくなつた男に会つたよ」と云うと、「なぜ鏡で自分を見ないんですか、あなただつてミクロアンジェロじゃないでしょう。」と家内は答え、それから「あなたは誰のこどもでもけなすけど、あなた自身はどうなの。」といつた。私は夜通し寝もやらず考えた。』

『それから支配人のところへ出かけて行つて、「こいつをあなたといつしよにやつてみましょう。」と申し入れた。しかし最初は彼がみなをいじめようとするだろうと案じて、手を出しかねていた。しかしわれわれがいつしよに打ち建てた精神はずつとつづいてゐる。』

ジョンズは新しい男となり、家庭も新しくなつた。カール・マルクスの所説をしつかもつて二十八年間急進的生活をしてきた一労働者が、それに勝るイデオロギーに生きる男と出会つたときに何か起るかということを示すために、彼とその支配人はヨーロッパ、アメリカおよびイギリスのすみまで旅行した。

MRAはウェールズ地方に迅速に拡がつた。「ウェールズの声」という愛称のあるもう一人のジャック・ジョンズがこれをこんなふうによ約した。

『共産主義よりずっと革命的なものがロンダヴァレイ地方にきた。MRAが大衆のこころのなかに

革命を起しはじめた。大衆はこれまで自分たちをあてもない方向へ駆り立ててきた「イズム」から解放するものとしてMRAをよろこび迎えた。』

この山間の人びとの考え方に起つた変革の姿は、生きた事実が雄弁に物語っている。例えばイギリス共産党書記長ヘーリイ・ポリットは一九四五年、東ロンダの選挙で一五、七六一票を得た。一九五〇年にはたつた四、四六三を得たのみである。ロンダ市議会の投票も同じ傾向を示している。現在その市会には共産党員はひとりもない。

三

イタリアは西欧で最も爆発しやすい事態にある国の一つである。二百万人が失業していて、一方さらに数百万人は人口過剰と原料不足のために、一週間の半ばを稼ぐだけである。賃金は低く、——一家族が一人のはたらき手の賃金だけではほとんどやつて行けない。——しかも、他方では少数の者がひどくぜいたくな生活をしていて、中産階級はほとんどいない。イタリアはロシアをのぎせくと、ヨーロッパで最大の共産党を擁しているのだ。

五百人の労働者が、——その百人はコミニストであるが、北イタリアの産業地帯から一九五〇年にコーの大会へ出席した。彼らは五十人一組の団体で、なかには自分たちの経営者たちといつしよのものもいた。

モンテカティニの工業地帯からの労使代表たちがミラノへ帰つたとき一人の重役は工場評議会議長に対しそれまでのひどいやりかたを謝まつた。この工場従業員の八十パーセントがコミニストである。しかし一週間たたぬうちに投票で満場一致、その食堂にあるスターリンの肖像を引き下ろして、十字架上のキリストの絵をこれにかえることにした。同時に会社幹部と工場員が同じ食堂でいっしよに食事をすることもきめられた。

この工場の会社役員の一人は非常に工員の受けが悪く、そのため彼がコーへくる二、三ヶ月前には従業員が道具をほうり出して彼を工場に入れなかつたほどである。この人がいつた。『私は従業員に睨みを利かす唯一の道は力だと確信していた。私は彼らをむごく扱つてきた。』

コーにおいて彼は変わつた。彼は自分の従業員に対して非常に誠実になつた。従業員の一人は、自分の女房や三人の子供たちの手に渡るべき金がどうして他の女につき込まれていたかを内証で彼に話した。で彼はこの人がその妻に隠しごとをせず、また不倫な関係を断ち切るように助けた。その従業員は以前には彼を憎んでいたが、彼が自分の家庭を建て直してくれたことに感謝するようになった。新しい精神が工場全体に拡がつていつた。

ある工場の労働評議会の議長でミラノ地区出身の有名なコミニストの一人が、二人の労働評議会の代表といっしよにやつてきた。コーでの第一夜を過したのち、彼はこれが真実だ、といつた。二、三日してから『われわれがいままで大衆に話してきたことは必ずしも正直ではなかつた。』といつた。

彼は自分自身の生活を正直、純潔、無私および愛という絶対的の道德標準ではかつてみようと決意した。その晩、彼の工場の人事部長といろいろ語り合つた。以前にはこの男を彼は最大の敵とみていた。その夜どうしても彼は眠れなかつた。朝早く、彼は労評のもう一人の男を訪ねた。この男は政見を異にしていたが、彼に向かつて自分自身および自分の行為について正直に話した。

コーを去る前、彼はミラノ近辺の細胞中で五万のコミニストと關係があるから、自分は帰つたらMRAのために闘おうとつけくわえた。彼が帰るとすぐ共産党は彼を呼び出し、党の指令に服さなかつた理由をただした。彼は直ちに追放されたが、彼のそれに対する答えは数人の自分の友人をコーへ送ることだつた。彼の変わったということは、その地方での大きな話題となつたという。

ミラノの共産党の支配する労働評議会は、MRAおよびコーを訪問することを攻撃した。この警告が共産党系新聞に全面的に載せられたにもかかわらず、次のイタリアからの代表は四十パーセントがコミニストであつた。彼らは小スターリングレードとして知られた地方にあるイタリアの大製鋼所から参加した。ここでは終戦直後、重役の一人を生きながらに熔鉱炉に投げ込み、他の二人を射殺した、というところだ。一度は労働者たちがある重役に会いに事務所へはいつたが、彼らはテーブルをたたくかわりにその重役をなぐつた。この労働者たちの一人がその重役といつしよにコーへ行つて、そこで彼に謝まつたのである。

この製鉄工の第一陣がイタリアへ帰つてのち、一コミニストは『MRAは爆弾が炸裂したかのよ

うだった。』といった。そのなかの二人は労評の最も理解のある代議員として、『もし共産党がM R Aの原理を受け入れないなら、われわれは党を去るだろう。』といった。もう一人のコミニストは『私が数年前にここを訪ねていたら、私の家内は私を捨てなかつたらうに。もう私はクレムリンには従わない。私はコーに行つた男だ。』といった。

四

コーで、フランスのあるコミニストが二人の上級将校を相手に話し合つていた。彼はぶつきら棒だ
が物静かにいつた。

『あなた方は国防のことをいわれる。しかし、あなた方の指揮に従つて兵隊となるフランスの労働者は何を防衛するのか。現在は守るべき何もものもないのが現状だ。生活程度はこれ以下に下がりやうがない。失う何ものがあるだろうか。フランスの労働者に守るに足る生活、搾取されない生活を与えない限り、彼らは目前の利益を与えてくれるものに飛びついて行くだけだ。今日のフランスの労働者にとつて二つの道しかない。それは共産主義の革命かM R Aの革命かである。』

コミニストのロベエル・レブロンはバリーから同僚のジェラル・フォモンといつしよに出席した。彼らはフランス自動車工業に必要なユニバーサル・ジョイントの六割を供給しているポァンイ工場に働いているのだが、この工場はフォード工場のむかい側にある。

この地区での最近の大ストライキのときに、フォモンの人気は大したものだった。というのは、投げれば必ず上を向いて落ちるといふ新しい釘を発明したからで、これがたくさんフォード工場の前にまかれ、警察自動車をパンクさせたのだ。フォモンがMRAの精神でやろうと決心したとき、まずこの釘を会社の材料で、勤務時間につづていたことを工場主に打ちあけた。フォモンもレブロンと同じくMRAのために戦いはじめた多くのフランス共産党員の一人である。

北フランスの工業地帯では、三万の労働者がフランス人の配役による『忘れられた要素』を見た。一九四八年の石炭ストライキの最中にルトウケでのMRA大会が十日間にわたつて開かれたが、労働者も経営者も多く集まつてきた。このストライキによる損失は、マーシャル計画のアメリカ援助の六ヶ月量に匹敵するといわれていた。四十五の団体に分れて労働者たちは、工場から炭坑から、またストライキを指導していたCGT（共産党系総評議会）組合からもきた。全フランス石炭局の理事ジャン・サバティエーは、仕事にもどるきつかけをつけたのは、ルトウケ大会から帰つてきた炭坑夫たちだといつている。

フランスでMRAのために立ち上つたもうひとりのマルキストは、パリに近いマントのロジエル・ブラクエーである。生まれてまもなく父に棄てられ、やがて母からも離れてしまった彼の子供時代は絶えず飢餓線上を彷徨し、橋の下でねたり、残飯をあさつたりして過したのだ。

『マルキシズムは私の情熱となつた。そして新しい世界への一步として、破壊、破壊、つねに破壊』

を望んだ。しかしいま、私はMRAがマルキシズムよりも徹底していることを知った。それもごく簡単な理由だ。MRAは私が前と同様に他の人びとの幸福と生活を守るために闘うとともに、私自身と私の家族の幸福を与えるからである。十五年間、私は妻と子供を階級闘争の犠牲にしてきた。反抗者の妻になる女はかわいそうだ。しかしいまでは私の妻はいう。「ロジエル、私たちの家庭には融和ができたのね。私はあなたとどこへでも行きますよ。たとえ子供を一時誰かにあずけても。よい世界をつくるためにいつしよに働くことが、子供への私たちの愛を現わす一番よい道ですもの。」しかし、実際には私たち三人でいつしよにやつている。』

ロジエルがMRAの最初の集会から帰ってきたとき、彼の小さい男の子は喜びの涙を浮かべて母のところへ走りよつて『パパはいつも今日みたいになるの』ときいたものだ。

五

西ヨーロッパ諸国の政府は、ロシアの国境をはるかに越えて拵げられた世界共産主義の長い触手を、もはや過少評価しなくなつてきている。長いあいだイデオロギー的に眠つていた彼らは急に活動しだして、新しい政府機関を設けたり、莫大な予算を組んだり、無電局をつくつたり、労組の役員から共産主義者を追い出したり、共産党を非合法化したりしている。

しかし毎日のように明らかになつてくることは、共産主義を非難攻撃するだけでは世界の融合は生

まれないということである。これはいちどアジア、ドイツ、フランスまたはイタリアを旅行した人はよく知っている。またMRAは西ヨーロッパ諸国政府の宣伝が額面以下で聞かれている地域に、かえつて有効に働いていることも事実である。その説明は大してむずかしくない。すなわちMRAは胸に一物をもつていず、コミニストにも反共主義者にも同じように変わる必要を説き、そして説くことを実行する人びとによつて進められて行くからである。

いつたいこれは何ものかを生むであろうか。時代の傾向を変えるまでになるだろうか。少くともドイツでは、すでに共産党は黨員がMRAの集会に出たり、あるいはその指導者たちと交わることを禁止している。

その党令は戦前及び戦時中、MRAに対してナチがゲシュタポ本部から出した指令によく似ている。(註第2部4参照)ナチの指導層も共産党の指導層ともにデモクラシー側の多数の指導者よりも、MRAの世界的活動を重要視しているという奇妙な事実は一考に価する。彼らはMRAに対して真剣なそして峻烈な反対をしている。

しかしMRAは戦前に反ナチ言動に加わらなかつたと同様に、共産主義に対する御題目的反対運動に手をつらねようとはしない。MRAは共産主義を弾圧するかわりに、不必要にしてしまおうとしている。共産主義と同じように変革のために戦うが、しかし一つの階級を変えるだけでなく、すべての階級、すべての人を変えるために戦っている。

コミニストもこの新しい考え方を受け入れつつある。この章に書かれた事実——ドイツ、イギリス、フランス、イタリーの事実は、その国ぐにでも、また他の国ぐにでもぐんぐんとふやすことができるのである。この事実は現在多くの国に拡がりつつある新しい思想と生活のパン種であつて、（註第2部5参照）インド、日本、南北アメリカ、オーストラリア、ロツテルグムの港灣から、北スエーデンの鉱山にいたるまで、あらゆる場所のマルキストに影響している現象である。

MRAの提唱者フランク・ブクマンが一九五〇年の五月に次のように述べたのは、こうした事実を背景としていたのである。（註第2部1参照）

『危機の今日マルキストたちは新しい考え方を発見している。階級闘争はすでにすたれつつある。経営者も労働者も、階級闘争にかわる建設的な生き方をしだしている。

雇主に「彼こそわれわれの最も良い友人である。」と云われるほどにマルキストが変わり得るだろうか。実業家があまりにも変わったので、その旅券をみるまでは本人とは思えず、彼の改変の奇蹟を信じ得ないというようなことが起ることを想像できようか。ところがみんな本当なのだ。それが実際に起つている。これこそすべてのものが融合できる唯一の希望である。これが事実となるとき、東とか西とかの区別はなくなるのであろう。

すべての人が変わることが、すべての人が融合できる唯一の基礎ではなからうか。はたしてマルキストは改変し得るであろうか。彼らはこの新しい考え方をもちことができるだろうか。マルキストが

より偉大なイデオロギーの道を拓き得るであろうか。できない筈はない。彼らは常に新しいものに心を開いている。彼らは先駆者であつた。彼らは信ずることのためには牢獄もいとわれない。彼らは信ずることのためには死をも辞しない。この優れた考え方のために生きる者となれない筈はない。』

第2章 新しいヨーロッパへの道

ヨーロッパ各国は国内が階級闘争によつて分裂しているだけでなく、その国ぐにの間も、幾度かの闘争によつて生じた憎しみや心の傷手でひどく不和となつてゐる。

紙上の条約や不本意な譲歩や果てしない会議だけでは、これらの傷手を癒すことはできない。フランスとドイツのような国と国との間にある幾世紀も続いている恐怖と苦々しい気持の問題を解決できなければ、本当の解答はあり得ない。

例えば、欧洲共同防衛組織を完全なものとするために、この二国をどのように融合させるかが政治家の悩みの種になつてゐるのである。

軍関係者はドイツの人的資源が欧洲防衛にとつて不可欠であると主張するが、フランスの輿論はドイツの武装に強く反対してゐる。フランスは今まで幾度も侵略されてゐるので、ドイツを恐れてゐるのだ。

その一方、西ドイツの多くの人は、自国の歩兵部隊だけで、東からのあらゆる攻撃を食いとめ、フランスや他の連合軍が英仏海峡に近い防衛陣地に退却するまでの任務を受け持つことを心から嫌つて

るい。

ところで、東ドイツの場合を考えてみよう。ロシアはフランスと同様ドイツによつて侵略された。しかし、ロシア人は東ドイツを武装することを何ら躊躇していない。彼らはドイツの青年層に一つの新しいイデオロギーを吹き込んだので、ドイツ人たちが向かつてくることを恐れてはいないのである。これらの青年たちは、喜んで兵隊になれる用意ができてゐる。彼らはすでに戦う目的を与えられているのだ。

ここに再びイデオロギー的要素が決定的なものであることが現われてくる。自由世界防衛の中心問題は『如何にしたら独仏間の多年の憎しみを乗りこえて、結ばせることのできる偉大な目標を見出し得るか』ということになる。

防衛問題はしばらくおくとしても、ヨーロッパの融合はドイツとフランスが仲よく生活する何らかの方法を見出さない限り不可能であることは何人も疑う余地がない。チャーチル氏もその必要を明らかにしたが、『誰がこの解答を与えるか』の問題は残されているわけである。

一

一九五〇年六月四日、ルール地方の中心、ギルセンキルヘンで珍らしい催しが行われた。この地方はドイツ重工業の八十六パーセントが集中し、過去三回の大戦においてドイツに巨大な力を与えたの

もこの地方の熔鉱炉や鉱山であつた。ここでフランス上院議員のユージエ・エブウエ女史は有力なドイツ人たちの前で、フランク・ブクマン氏にフランスの名においてレジョン・ドノール勲章を授与したのである。『これはフランスとドイツの民衆の新しい友情を表徴するものである。』と女史はいつた。フランス政府の有力者たちからは祝電がきた。(註電報署名者。労働大臣パウル・バコン、建設大臣クロウディアス・ブテイ、大統領府國務大臣ロベア・ブリジエン、五名の前閣僚、二名の国会副議長、内務委員長、労務委員長、十九名の下院議員)

あるイギリス人が、この『ドイツとフランスの新しい交友関係』を評価した言葉は意義深い。それはドイツ占領管理委員会の参謀次長カービー少将の言葉であるが、彼はMRAの功績について次のようにいつている。

『MRAの影響は相当に速く、フランスとドイツの関係を種々な意味で改良し、上層部に浸透している。各方面の報告を総合すると、このイデオロギーの推進と西欧国家群の中にそれを徹底させることが将来に大きな希望を与えることと思う。』

二

この話の裏には何があるか。大戦終結後、ロシア、アメリカ、フランス、イギリスがドイツを占領したとき、多くの人がイデオロギー的空白状態ということを口にした。幾百万の人びとのこのイデオ

ロギーの空白が満されぬ限り、コミニズムか、あるいは狂的な新しい国粹主義がドイツに起るのではないかと恐れられていた。はたして何がこの空白を満したか。

一九四七年に、コーから幾人かの人びとがその当時ドイツ占領のアメリカ側の責任をもっていたクレー大將のところへ行つた。そしてコーの目的は国ぐにの健全な道徳基礎を再建するために訓練を与えることであると説明し、当時国外旅行を禁止されていたドイツの指導層をコーに送つて訓練することとはどうであらうかと相談した。

クレー大將と、当時英内閣のドイツ管掌大臣であつたロバート・バケンナムの後援によつて、その年一五〇名の有力なドイツ人がコーに來た。

ノース・ライン・ウエストフリアアのカール・アーノルド知事はこの招待について次のようにいつている。『われわれはM R Aに負うところ頗る多い。というのは戦後M R Aだけが、われわれを侮辱的な不信頼の気分なしに取扱つてくれた。……われわれは誤つた道を最後まで歩んできた。

しかし今われわれの前には大きな機会がまつている。今までと全然ちがつた道をわれわれは歩みだすことができる。……われわれの内閣では、このイデオロギーの生きた結果をみることができるようになった。私は世界の国ぐにが「善い道」を確信と熱情をもつて求めるようになるとき、世界は新しい出発ができると信ずる。』

一五〇名のドイツ指導者は、一九四七年にコーで得た自分たちの新しい人生哲学を一つの冊子に綴

りたいと考えた。その表題は「エス・ムス・アルレス・アンデルス・ベルデン」(「すべてのものが変わらねばならない」)であった。

しかし敗戦直後のことで、資金も、紙も、人力もなかつた。ところが、コーにきたことのあるスイデン人が集まつて百トンの紙を送つてきた。その当時ドイツでは頻びんとして停電があつたばかりか、あまり寒いのでインクが印刷機の中で凍るといふ有様であつたが、有志の者が夜に日をついで働いた。百万部の冊子が印刷され売りつくされた。鉄のカーテンの向う側にもその何千部かが入つたのだ。

一九四八年には四五〇名の各層指導者たちがコーにきた。(例えばノース・ライン・ウェストファリア知事カール・アーノルド、ウエッテンベルグ・バーデンのライノールト・マイエル、ババリアのハンス・エハート、ウエッテンベルグ・ホーヘンツォーレンのゲブハルト・ミュラー、連邦大臣数名、例えばグスタフ・ハイネマン(一九五〇年十月辞任まで内務大臣、避難民大臣ハンス・ルカシエク、労働大臣アントン・ストーク、厚生大臣エベルハート・ヴォイルデルムット、労働組合関係としてハンス・ペクレル(労働総評議会会長)、カール・ゴロンシイ(全ドイツ炭鉱組合財務)、エルンスト・シャルノウスキイ(西ベルリン労組総同盟会長)、産業界代表としてオットー・シュプリングラム(ギルセンキルヘン炭鉱会社総支配人)、テオ・ゴールドシュミット(ゴールドシュミット化学会社社長)、マルティン・シュワブ(スタトガルト・テレフオンケン理事長)、フリッツ・ヘルダハ(クルップ専務)、なお西ドイツ連邦首相コンラド・アデナウアーも出席した。彼の九名の家族もきた。そし

て彼の關係も改名)

一九四八年にコーにきたドイツの指導者たちは、MRAの人びとをドイツに招聘することに決めた。その結果、一九四八年十月九日には占領下のドイツにはじめて軍に關係のない多数の人びとがスイスの国境シュアフハセンから大挙訪独した。音楽劇『善き道』——MRAの精神によるデモクラシーを示す音楽劇をもつて三十ヶ国の二百六十名の人びとが、ミュンヘン、シュタトガルト、フランクフルト、デュセルドルフ、エッセンの各市を訪れたのである。

三週間のうちに二万のドイツ人がこの劇をみた。劇場に入場できなかった幾千の人びとは、路傍やカフェーで劇に出演した人びとと長時間話し合つた。

ロンドンのニューズ・クロニクル紙は、『MRAはわれわれが三年間かかつてやつた以上に、僅か三週間で人びとをデモクラシーの側に引きよせた。』という一軍政部員の言葉を掲載した。

一九四八年十一月にはカール・アーノルド内閣の懇請によつて、ルール地方に国際チームが働くこととなつたが、ドイツ語の『忘れられた要素』が最重要な武器であつた。

その初演は、クルップ軍事工場のみじめな荒廢の真只中に立つているエッセン市の一劇場で開かれた。これが皮切りで十二万の坑夫やその家族が、『忘れられた要素』をみた。(註第2部4参照) デイ・ベルグバウ・インドストリエ紙はルール五十万の炭坑労働者の機関紙であるが、この劇を次のような見出しで報道した。『MRA——新しい見方』

MRAチームの代表は七つの西ドイツ地方議会で社会党協議会に出席して、講演をした。また二百の労組集会で話をしたが、聴衆の九割まではマルキストであった。

この国際的な代表団はベルリンにも招かれた。空輸時代に当時のベルリンに飛んだのである。市長エルンスト・ロイター教授に会見、議会で講演し、ベルリン社会民主党委員長フランツ・ノイマン及び幹部たちと会談し、ベルリン労働総同盟会長シャルノウスキーとも談合した。

ベルリン社会主義日刊紙『テレグラフ』は次の報道をした。『実にこの一群の人びとは驚くような明快さをもつて、政治、経済、国内および社会の諸問題を根本的に解明する原理をもっている。』

これにだんだんと惹きつけられて、一九四九年と一九五〇年には二千五百名のドイツ指導者が代表としてコーに来た。

三

MRAのイデオロギーを受け入れたドイツ人は国としての誤りと自己の責任とに対して心から謝罪する気持になつてゐる。これは単なる言葉の上ではなく、心からの改変である。最も懐疑的な人びとも納得させる力強いものである。

一つの典型的な例をとつてみよう。ハムブルグのペーター・ペーターソンである。八歳のときナチに徴集されたが、後に第三ドイツ帝国の将来の指導者を養成する特殊な学校に送られ、精鋭な大ドイ

ツ師団に入隊した。終戦後彼は英軍によつて投獄された。彼自身の言葉をきこう。『私は敵国が勝つたのは優秀な武器があつたからだと思つていた。だから私のイデオロギーを改変する理由にはならなかつた。私が不注意にそれを他の人に話したために、英軍は私を獄に投じたのである。出獄後は前より要心深くはなつたが、私の考えを変えようとは思わなかつた。』と。

ペーターソンはドイツに來たMRAの人びとと話した上でコーに行つた。暫くたつて彼はいつた。『私は子供のときから間違つたイデオロギーによつて養成されて來た。国家が滅亡したときも、私の確信はくつがえられなかつた。しかしMRAがそれをくつがえした。彼らが正しい道を示してくれたとき、私の悪かつた点がよく分つた。私はペーター・ペーターソンという一個人としてのみでなく、ドイツ人として改変せねばならないと感じた。ドイツと私はひとつであることを認めねばならなかつた。前には幾度もそれを拒否してきたが、ただ忘れるだけでは新しい出発がない。赦すことによつてそれがあり得ることを悟ることができた。』

ルール地方でヒトラーの弾圧に苦しんだ共產主義者たちは、ペーターソンや彼の仲間にあつて、彼らと話し合つたり、幾日も一緒に働いたりした。彼らははつきりとひとつのことを悟つた。すなわち、もしペーターソンのような青年たちが、いま改変しているように、彼らを改変させる秘訣を知つていたならば、ヒトラーが権力を握るようなことはなかつたであろうといふことを。

ペーター・ペーターソンがコーで話をきいた人の中で、ドイツとフランスの民衆の間によい橋を架

ける大きな役割を受けもつたフランス婦人は、イレヌ・ロール女史であつた。彼女は長年のあいだ、社会主義運動の有力な指導者であり、十四年間党役員の地位をもち、生まれ故郷マルセーユ選出の議員で、フランスの社会主義婦人運動の首領であつた。

彼女の職業は看護婦である。夫は船員で、四十七年間マルキストとして老練なフランス共産主義指導者マーセル・カーシエンにきたえられていた。ロール女史は物静かなバツとしない姿で、ものでもいわない限りほとんど存在も認められないような婦人である。しかし一度口を開くと、体験に基く確信がほどばしりである。

彼女は戦時中、地下抵抗運動の中核であつた。ツーロンでフランス艦隊が自沈したときに、水兵たちをナチからかくまつた一人である。

ドイツ当局がマルセーユで食料配給を減らして民衆を圧迫しようとしたとき、市当局の男たちは恐れて何の手段もとらなかつたが、彼女はマルセーユの婦人大衆を組織し、ナチ弾劾のため復讐の天使のように無言で市内を行進させた。そのため配給はもと通りとなつた。

ゲシュタポは彼女の息子を捕えて拷問にかけ、母親のもつ地下運動の秘密をはかせようとした。鉄のような彼女は、胸はりさける思いであつたが一言もいわなかつた。戦争が終つたとき、彼女を絶対支配していたひとつのものは——ドイツ人への憎しみ。『私のただひとつの願ひは、彼らを全部滅亡させてしまうことであつた。』

彼女はコーに招かれたとき、懐疑的であつたが、自分の息子のためによい休暇になると思つてでかけた。最初の日に幾人かのドイツ人が大会で話をするのを聞いた。しかしそのドイツ人たちは、ロール女史が今まで一度も聞いたことのないことをいつた。彼らは過去の誤りを正直に認め、自分たちの国の改変（チェンジ）が必要であると述べたのである。

このフランス婦人の心には憎しみとためらい、恐れと希望、疑いと信頼の感情がこもこも起つた。三週間、彼女はこれと闘つた。いわゆるコーの「アラさがし」もやつてみた。しかし誰よりもドイツ人を信用できないでいた彼女も、このドイツ人たちの改変（チェンジ）は見せかけではなく、また一時的なものではないということがわかつた。

彼女自身のドイツに対する憎しみがヨーロッパを分裂させていたのだということ、他の階級に対する彼女の憎しみがフランスを分裂させていること、党内のある人びとを嫌つていることが社会主義運動を分裂させていることなどがわかつた。心の中に激しい闘いがあつたが、ついに彼女が演壇に立つてドイツの人びとに赦しを乞う日がきた。

六ヶ月後に彼女と夫とは、家を後にM R Aの人びととドイツ国内を旅行した。彼らと一緒に行った人びとのうちには、十五人の家族をヒトラーのガスチエンバーで虐殺された青年と、二十二人の親族が収容所に送られたままになつてしまつたという男もあつた。

ロール女史たちは、ドイツ人の家庭に泊り、幾百万の民衆にラジオや大会を通して語つた。西ドイ

ツ諸州の七地方議会でも話した。イレエヌ・ロール女史は語る。

『ドイツに来ることが私にとつて、どんなに大きい改変チェンジを意味するかわかつて頂けるでしょうか。私は心の中でドイツの荒廃を望んでいたが、この荒廃を目のあたりにみました。人の子の母として、祖母として、また社会主義者として、私は友愛を説いて来たのですが、こうした荒廃を心から希望していたのです。しかしいま、私はこの廃墟に住む人びとを憎んで、いたことを赦して貰わなければなりません。ペルリンで廃墟の取片づけをしている五万の婦人たちに赦しを乞います。市長は少くとも三十年復興にかかると言っていました。』

私はもちろん、連合国にドイツが侵入して行つた破壊を忘れはしません。しかし、私のすべきことは自分の憎しみを悟つて謝まることでした。私の改変チェンジが多くドイツ人を改変させました。MRAはわれわれ独仏両国の間を融合させる最大の力です。第一と第二の二つの大戦の間に感情ではとうてい成し遂げられなかつたことを、この共通なイデオロギーが今日ドイツとフランスの間で成就しているのです。』

四

この精神はフランスをも動かすようになつた。工業の中心地である北フランス地方に根を張つてきた。一九五〇年九月レバン首相は『フランスの道義再武装(MRA)は絶対必要である。』と声明

したのである。

彼の管理下にあるフランス国防協会は三つの課題をあげている。すなわち、

(一) ヨーロッパの融合

(二) ドイツ問題

(三) フランスの道義再武装(MRA)

MRAのイデオロギーをフランス外相ロベール・シューマンは非常に信頼している。シューマンはフランク・ブックマンの親友である。ブックマン講演集『世界を再造する』の仏語版に彼は序文をよせている。(註第二部7参照)その中で彼はいう。

『MRAは一つの人生哲学の行動的表現である。……政策の改変を云々するのではなく、人間の改変を問題にするのである。デモクラシーとその自由とは、デモクラシーを語るものの生活の質によつてのみ守られる。それをブックマン博士が簡単に力強く云つてゐる。博士はマテリアリズムと個人主義に宣戦布告している。この二つが利己的分裂と社会不正義とを生むものである。彼のいわんとすること
が今日なお同胞相喰む世界で明らかにされ、支持されることを望む。』

フランク・ブックマンはドイツ首相コンラド・アデナウアー博士の友人でもある。共産党が一九五〇年の聖霊降臨日(ホイットサン)にベルリンで大会を開きデモを決行しようとしたとき、ルールではフランク・ブックマンを呼んで民衆大会を開き、イデオロギー的答えを示威しようという計画が

なされた。アデナウアー首相はそれに大賛成で早速ブツクマンに『東ドイツの全体主義的思想が攻勢に出ている今日、ドイツ連邦共和国、その中のルールこそはM R A 思想示威の最適の場所であると思えます。』（註第2部8、9参照）という手紙を書いた。

三千の炭坑夫、鋼鉄工、産業人、政治家が西ドイツの各地から集まつてブツクマンの話をきいた。彼の主題は『東と西の使命』であつた。ギルセンキルヘンのハンス・ザクス・ハウスの大会場はルールの労働組合運動の中心であるが、その壁を貫いて幾百万の大衆は西ドイツ放送局の放送に耳を傾けた。西ベルリン・ラジオは街頭行進の群に、また遠く彼方の東にまでそれを及ぼした。

フランク・ブツクマンとともに壇上にいたのは、前共産黨員であつたブラデック、クロウスキー、ベネンデンズ、ストフメール及びその同志たち、その傍にはルール地方の産業指導者が座つた。（壇上にはこの他、ビルマの前首相アング・サン大将未亡人、日本国鉄組合委員長加藤開男、米国ロード・アイランド選出上院議員セオドーオ・グリーン、ギルセンキルヘン炭坑企業連合の総支配人ハンス・デュティンクラがいた。なお当日の司会者はボン議会上院主事ヘルマン・カッツエンベルガーであつた。）組合を代表する人も、経営者を代表する人も一つ気持で話しあつた。三時間後に司会者が集会を終ろうとしたが、何百という人がとは会場を去りかねていた。講壇のまわりに来てもつと聴かせてくれと要求した。

ギルセンキルヘンでのフランク・ブツクマンの言葉は聴衆の心に深い共鳴感を呼びおこした。『融合こそ我らの唯一の希望である。それがフランスとドイツの今日の使命である。それが東と西との使

命でもある。その反対は分裂と死である。M R Aこそは世界に対しすべての国が改変し、存続し、融合し、生存する最後の機会を与えるものである。』

第3章 階級闘争に代るもの

誰が世界を支配するかを決定するのは、結局は世界の労働者である。であるから労働大衆の心を捕えることがイデオロギー戦の根本である。

多くの人は、どの政党が国会で力を得るかに重きをおきすぎている。しかし、イギリス共産党の指導者ヘリー・ポリットは、はつきり問題の重点を見ている。一九五〇年二月の選挙で、百名の自党議員候補が全部落選した時、彼はこう云つた。『本当の勝敗は工場や街頭で行われる労働大衆の闘争で決定されるのだ。』

この戦いには要所がいくつかある。例えば港灣労働者、炭坑労働者、労働接衝代表委員等（シフトワーク代表委員等）の出方が国の運命を決定する。そして経済的生存のために必死の努力を続けるイギリスほどこの問題が著しいところはない。

一

港灣は世界の動脈である。それを通して国ぐにの血液が流れている。イデオロギー時代の今日、世

界の港灣労働者は大きな力を持つてゐる。彼らは速かに一国の經濟を枯渴させてしまふこともできるが、同時にすべての人が求めている解答を速かに全世界に送ることもできる。

港灣労働者はその仕事の性質上、世界的な兄弟である。沢山の腕、黒、白、黄、茶色の腕が、小樽や大樽、箱や袋を港から港へと運ぶ。

ある時、リバプールで一人の港灣労働者が財布を船艙に落した。船が出る前にそれを拾い上げる時間も人手もなかつたので、船口の扉に『財布を船艙に落した』とチヨークで書いておいたところ、果して地球の反対側からもどつてきた。これが港灣労働者の国際家族としての特徴を物語つてゐる。

八十年以上もイギリスのドックは戦場であつた。一八八九年にベン・テイレットに率いられて、ロンドンの港灣労働者たちは『タナー』（少額の賃金）と、未熟練労働者の団結権とを獲得した。ベンは数年前に死んだが、病床からフランク・ブツクマンに次のようなメッセージを送つてきた。『あなたをやつておられることは大きな国際的運動です。活用してください。明日の希望ですから。この運動が世界を正気に立戻らせるでしょう。』

世界の港灣労働者は、長年、社会正義のために共に闘い、しかも流血の経験を通して団結と戦闘心をもつた家族として、攻撃に対しては互いに助け合うことになれてゐる。

港灣労働者は人情味にあつく、のぼせ易い。だから弱者を助けよという訴えには直ちに心を動かされる。

港灣労働者にとつて共産主義は、それが一市民のために社会正義の戦士として、弱者の側に立つて戦う大きな一勢力であるから強い魅力である。

しかも、改革を必要とする多くの状態が現実であり、コミニストはこれを是正するために一心に闘つてゐるから尙更である。だが港灣労働者の人情味は、知らず知らずのうちに社会正義のためでなく、階級闘争のために利用される場合が多い。ドックでMRAは絶対の道德標準と神の導きを基礎としたイデオロギーを人びとに伝えるために働いてゐる。

一般交通労働組合のジャック・マニングは、一九五〇年十月に辞職するまでは、ロンドン港灣労働委員会の有力な指導者であつた。この委員会は非公認なものだが、ドックでの勢力は強かつた。過去二年間、彼らは労働党政府と全英労働総同盟の方針に真向うから反対して、何干という労働者の支持のもとに二つの大ストライキを執行してゐる。

マニングは同時に『港灣労働者ニュース』紙の責任者であつたが、彼は、この新聞にくらべるとデイリー・ウァーカー紙（共産党機関紙）もタイムズ紙のような保守新聞に見えるくらいだといふ。

マニング一家はドックに百二十年も関係してゐる。彼の曾祖父はロンドン港灣労働者の最初のストライキに参加してゐる。ジャック・マニングはいふ。「MRAに会うまでは、この世界で正しい人間はジャック・マニング一人だと思つてゐた。自分が間違つてゐる時でも、自分が正しいと主張したも

のだ。』

戦争中、マニングの家は四回爆撃された。『私は憎しみで満ちていた。戦争を起こす連中は資本家——ドック仲間という金持の我利我利者だと思っていた。』

ノルマンデーの上陸作戦に加わつて、マニングの息子が戦死した。戦死する前に彼は次のような手紙を送つて来た。

『父上、こんな風にフランスにやつて来るとは思いませんでした。私が戦死したならば、二度と再び世界の若い者が戦いに出ることのないための戦いをつづけてください。』

ジャック・マニングは、一九四九年の終り頃、ドック地域の中心にあるキャンピング・タウン公会堂のMRA集會にでた。非常に批判的な態度で、弁士のいうことが気に入らなかつたら、会場を飛出するか、或いは会をめちやめちやにするつもりで出席し、席に坐りもしないで後の壁のラジエーターに寄りかかつていた。しかし彼は次第に心を奪われてしまった。資本家を代表して、イギリス北部の皮革業の専務が、彼の生活と事業とに起こつた徹底的な変化オニシヨについて語るのを聞いた時、『これだ！』と独語した。集會がすんでから、彼は二時間も残つていろいろ話を聞いた。

彼はいう。『私は長い間探し求めていたものをMRAに発見した。階級のない世界というものが、ほんとうに実現できれば戦争は決して起こり得ない。私は考えた。「待てよ、相手を変えようと思つたら、先ず自分から始めなけりやなるまい。」自分を變えることはなかなか難しいことだ。特にお

れのようにいつでも自分は正しいと思つていた人間が、たまには間違ふこともあるということを認めるのは——。』

マニングの家族は家庭で、また職場でMRAの精神を実践しはじめた。一九五〇年の春、ある事件が起つた。起重機でマツチの大箱を積み込んでいた時、労働者が危険と感じるほど、組長が一度に沢山積込ませようとしたことから喧嘩になり、沖仲士のひとりが組長をなぐつた。

棧橋主任がその男を解雇し、二度とその棧橋では雇わないと云いわたした。ところが、ドッカーたちはすべて懲戒事件はドック委員会にかけるべしというドック労務法に反する行為として憤慨し、直ちに数百名がストライキをやり、拡大しそうであつた。

この時、ジャック・マニングがのり出した。ところでマニングは一九四九年ビーバーブレイ・ストライキを主導したばかりでなく、幾つものストライキに関係していた男である。(註ビーバブレイ・ストライキは一万五千名が参加し、ロンドン港で九十一隻の船を五週間引きとめた。)

ジャックは妻のネリーと話しているうちに、問題のおこつている棧橋に行つてみようと思つた。『しかしあそこへ行くためには仕事を一日棒にふらなければできない。』彼がネリーにいうと妻は答えて、『何かやろうと思つたら、犠牲を払う位はあたりまえですわ。』つまるどころ、彼は棧橋に出かけた。その後のことは彼に語らせよう。

『先ず私はなぐられた組長のところへ行つた。最初、彼は私のいうことを全然受けつけようともし

なかつた。彼は自分が絶対に正しいと思つていたので。私はなくつた男のところへ出かけた。彼も聞こうとはしなかつた。そこで私は棧橋主任のところへ行つていった。「あの男はあなたが間違つてゐると思つてゐる。あなたはあの男が間違つてゐると思つてゐる。私は二人とも間違つてゐると思つてゐる。しかし、そういう私も間違つてゐるかも知れない。これを解決する唯一の道は何が正しいかを考えることしかあるまい。」主任は数分黙つていたが、やがていつた。「私も間違つてゐたことは認めらる。」そこで主任は再び労組代表を集めて交渉をはじめた。問題について徹底的な議論が行われ、誰が正しかつたかを争う代りに、何が正しいかを実行することに努めたため、その棧橋で件の男を雇わないという禁止項目が撤回された。彼は再び就業した。双方ともこの事件をドック労働委員会にかけること賛成し、全員が直ちに復業した。』

スコットランド一般交通労働組合附属港灣労働組合会長のトム・クリスチーはグラスゴーの人であるが、一九五〇年にコーの大会に出席した三十六名のドッカーのひとりであつた。

『コーはロケット弾に打たれたような衝撃をおれに与えた。』と彼は云う。『おれも試してみたが確かにうまくいく。今までに何千人もの人が、おれに変われと言つたおれは「お前、先に変われ」と答えたものだ。ところがコーでは、みんなだれでも自分から変り始めるといふ点で一致していた。これは新しい考え方だ。楽な道じゃないが、善い道だ。古いやり方はおれの家庭を破壊した。おれはみんな妻が悪いからだと思つてゐたが、この「^{チェンジ}変わる」といふやり方はよい結果を生み出している。お

れたち二人は出直すことにきめて、おれも今まで他のことに無駄に費つていた金を家に廻すことにした。おれの妹のいうのに、「兄さんを感化できるものだつたら、どこでも成功する」のだと。」

トム・クリスチーと一緒にコーに行つた同じスコットランド一般交通労働組合附属港灣労働組合書記長のジェームス・マクラーレンの二人は、毎週雇用者側の代表と会つて、賃金率をきめたり、不平調停をしたりする。マクラーレンはいう。「前のおれたちは喧嘩腰で出かけたものだが、「何が正しいか」を土台にするとみんなが利益を受ける。」クリスチーもつけ加えていう。「つい昨日のことだがある使用者は向こうから仕事の賃金率を上げるといつたよ。」

クリスチーは続けていう。「MRAはイギリスにとつて最も必要なことだ。党や政策はいくらあつても結構だけれど、結局はMRAの四つの道徳的絶対標準をイギリスの政治家は認めなければならぬ。いだろう。港灣労働者には闘志は十分あるのだから、正しい闘争目標を与えることが必要だ。それがすでに始つている。港灣労働者の国際勢力がこれを支持すれば、止めようとしても止めることは出来ない。これこそ新しい世界に直通する道だ。」

彼はまた、最近イギリスにおきた二つの大きいストライキに指導的役割を演じたときのことを想起していう。「このストライキは、イギリス本国の経済すべてを麻痺させてしまった。革命の道は楽だが、神の導きに服従する方は困難だ。だが、導きに従えば、貧困をおこさずに、労働階級の境遇をよくすることができる。今後、おれはMRAの四原則にあてはめた上でなければストライキの指導は

しない。』

一九四九年十一月から一九五〇年七月までにロンドンの港灣地域で集会が八回開かれ、またグラスゴー、リバプール、その他の地方でも会合があつた。この集会には、主として港灣の一般労働者、労組の有給役員たち、その他の指導力を持つ人びとが集まつた。

MRAの目標は、権力争いにひそんでいるイデオロギー性を十分に理解できる指導者を養成すること、又道徳による改変チェンジを通じて、長年、互いに反撥しあつている労組内に新しい融和を創り出すことである。老練なコミニストは夜おそくから、明け方近くまで港灣労働者たちに主義を吹き込み、MRAのチームは夕方その同じ家庭を訪れて、より革命的なプログラムを示すということがよく起つている。この戦いは毎日、毎日続いている。港灣労働者たちは、社会的経済的改変チェンジのための戦いが終つていないことを知っている。しかし多くの港灣労働者たちは、社会的経済的改変チェンジだけに努力しても、あらゆる階級の道徳的改変チェンジがともなわなければ、自分たちも革命的どころか反動的だということを認識した。

マルクスは『資本主義はそれ自身のなかに自壊の種を宿している』といつてゐる。が、多くの港灣労働者は、恨み、ねたみ、よくばり、にくしみを癒し、彼ら自身の中の分裂に解答を見出さない限り、労働運動自体も自壊の種を宿していることを認めだしている。

港灣での闘いは毎日繰返されている。

港灣労働組合会長のビル・ヒガティは、コーに行つてからMRAに反対する港灣労働者たちから攻撃されたとき、『君たちはカメレオンみたいだ。赤と一緒にいると赤くなり、社交界にいると蒼白になるが、ほんとうは黄色（卑怯者という意味）じやないか。』と応じた。

またある港灣労働指導者は、MRAは自分にとつて三つのことを意味したといつてゐる。

- (一) 三年間別れていた妻と和解することができた。
- (二) コーへいつた他の港灣労働者と同じく、長い間忘れていたカトリックの信仰に立ちもどつた。
- (三) 彼は港灣の健全なイデオロギーのために毎日闘つてゐる。

二

イギリスの港の船に積まれる主な荷物は石炭である。港灣を支配するものは世界経済を支配するところが事実であれば、石炭を支配するものが、イギリス経済を支配することも事実である。従つて炭坑も港灣と同じようにイデオロギーの戦いの激しい戦場である。一九四七年にイギリスの外相は『石炭を与えよ、されば外交政策を示そう』とまでいつてゐる。

イギリスの石炭委員会には技術的と心理的との二つの任務があると蔵相ヒューゲイツケル氏が燃料電力相をしていたときにいつた。すなわち「坑内施設を大巾に変化させることと、従業員の内構えを完全に變えることである。」MRAは第二の点で、石炭産業に深い影響をあたえた。

ロンドンのウエストミンスター劇場で九ヶ月間『忘れられた要素』が上演された時、毎晩、違つた炭鉱の坑夫が幕前に代る代る立つて劇を紹介した。芝居が終つて、出演者が舞台からおりて観衆にまじる頃には、場内にはミドランド地方の柔い低音、ヨークシャの活潑な声、ウェールズの歌のような音調、ランカシャの悠長な滑音などの地方色でいっぱいになるのだつた。イギリスの各地から、坑夫たちは何度もこの劇をみるためにロンドンにきた。帰りは混んだ夜行で立つたまま、朝の仕事に間に合うように帰ることも度たびであつた。

イギリス全土の炭鉱地区の百五十の炭坑から劇を招聘して来た。やがて劇がヨークシャ、ミドランド、スコットランド、南北ウェールズの炭坑地区を巡回したときには、七万の坑夫が見にきた。

ノース・スタフォードシャの炭坑夫で全英炭鉱労働組合の中央委員の一人ハロルド・ロケットは劇の効果についてこう語つている。『MRAが入つてくると共産主義が逃げ出す。生産は上り、欠勤がへる。この精神が炭鉱全部に入れば、国の復興は確実だ。』

ノース・スタフォードシャのピクトリア炭坑はMRAが好結果を示した良い例である。一九四七年十月二十九日のストーク・センチネル紙は週に一万一千七十五トンというレコード破りの生産をだしたことを報道している。最初、目標は八千トンであつたが、先ず九千トンに上げられ、ついで一万トンになつて来た。この生産増加について全英炭鉱労働組合支部長のビル・イエーツは『忘れられた要素』を仲間の者と一緒に見てほしい、自分の役割が何であるかが解つてきた。坑夫と経営者の間柄は今ほ

どよくなつたことはない。』という。

過去三年間にビル・イエーツは、

(一) 坑内に新しい精神をつくつた。

(二) 産業の融和を確立するため地域石炭庁の役員と協力した。

(三) 自分たちが坑内で実行したこのイデオロギーを広めるため、坑夫スポーツスマンを養成した。

彼らは九ヶ国の政治家や指導層の人びとにMRAを伝えることに成功した。

二十一名のNUM（全英炭鉱労働組合）北スタフォードシャ地方支部書記は連名で、MRAがこの地方にもたらした新しいチームワークに対して、ブックマンに感謝文を送つている。その中の一人、グリーンブ炭坑のエーロン・コルクローはいつている。『MRAが炭坑にくる前は一度として生産目標に達したことはなかつた。』^{フョゴトシツツアゲイ}「忘れられた要素」が上演された後では、目標を突破するのが当り前になつてしまつたので、石炭庁も坑夫と協議して、目標を引上げた。』

パーミンガム・ポスト紙はこれについて次のように書いている。

『この新しい精神は生産の増加することが明らかだが、最近の数字で計算すると、もし全イギリスの炭鉱で同じ結果が起るなら、一九四七年度の生産目標二億トンを三千万トンも突破することになる。』

多くの場合、経営者側の態度の変化が、坑夫たち仲間の新しい協力を起す鍵となつたのである。イギリスきつての最大最新の炭坑の一つを経営しているスペンサー・ヒューズは彼の体軀と性質から『豆

戦艦』といわれていたが、MRAの影響を受けてまもなく、彼の炭坑の一週間の生産額は一万三千トンから一万七千トンに増した。増産の原因について彼は次のように語った。『あの「忘れられた要素」^{フォゴットン・ファクター}という劇は私に謝罪することを教えてくれたし、また仕事について全然新しい考え方を示してくれた。』一年後にも増産の傾向は続いて、労働者の数も増加せず、新しい機械も入れずに二万トンに達した。現在では二万一千トンのレベルになつてゐる。

南ウエールズ炭坑地区に対する『忘れられた要素』^{フォゴットン・ファクター}の影響について、ロング・ラウンド・アバウト紙でジャック・ジョンズは次のようにいつてゐる。『すべての人に心を変えることを要求すること「忘れられた要素」^{フォゴットン・ファクター}は保守といわず、コミニズムといわず、すべてのイデオロギーの固いよろいを貫き通して、幾千の人びとを新しい道に進ませている。』

ロング炭坑（全英石炭産西部区域第三地区）の地区生産課長トム・ピーチャムは『忘れられた要素』^{フォゴットン・ファクター}上演を境として、『目立つて生産が上つた。』といつてゐる。

『この劇の影響はわれわれの人間関係に大きく、石炭産と労組との接衝によい結果となつて現われている。どこでも一番の問題は、坑内での協力の有無だが、MRAは協力をもたらしている。かつて見られた毒々しさも苦々しさもなくなつてゐる。ウエールズの炭坑夫は現実主義者だから實際的に事が運ばれるのを喜ぶし、経営者側の変化にはすこぶる敏感である。』

サウス・ウエールズNUM（全英炭鉱労働組合）の書記長ウィリアム・アーサーとサウス・ウエー

ルズTU C (総同盟) 顧問委員会会長兼全英一般都市従業員組合会長ウィリアム・ホブキンは「忘れられた要素」の上演に対していつている。

『夢にも思わなかつた大成功だつた。この精神はこの地方に大きな、また恒久的な影響を与えるであらう。』

炭坑内の事故で死んだスコットランドのピーター・オコナーは二度も大西洋を横断して、アメリカの産業人や国会人にイギリス炭坑内におけるMRAの成果について語つている。そのなかで『炭坑夫が石炭を前より多く掘り出すことだけではイギリスは救われまい。しかし炭坑夫が神に導かれ、イデオロギーの情熱に燃えて一つ心になつて働けばデモクラシーを救うことができる。』

全英炭鉱労働組合スコットランド支部の書記長トム・ガンは、生産低下のために炭坑の閉鎖を石炭庁から命ぜられたことがあつた。その時の出炭量は一人当り半トンぐらいであつた。「忘れられた要素」を見て、彼は自分の指導が誤つていたことに気づき、いままでのやり方を変える決心をして、石炭庁に数ヶ月の余裕を申し出で、職場で絶対の道徳標準を実行することにした。彼と経営者とはともにこの新しい考え方を土台として仕事を始め、今日に至つている。出炭量は一人当り半トンから一二トンにのぼつた。炭坑も閉鎖せずすみ、坑夫たちも家族離散の心配から救われたのであつた。経営者とトム・ガンとはいまだではお互いに敵視していない。

前スコットランド炭鉱労働組合副会長で現在は全英石炭庁スコットランド地域労務次長のジョン・コル

サートは、オコナーとガンの例をスコットランドの炭鉱全部の模範とすべきだといっている。

イギリスの炭坑からは百名以上の坑夫たちが代表として、また訓練を受けるためにスイスのコーのMRA大会に出席している。彼らはノールウェイ、デンマーク、スエーデン、オランダ、アメリカ、フランスの炭鉱地区や、ドイツのルールに行き、その国ぐにの産業人、内閣大臣、労働指導者たちに、いまイギリスに起つてゐることを伝えた。彼らには必要と確信に応じて世界のどこにでも自分たちの代表を送るための資金を自分たちで準備しはじめてゐるが、誰でもこれに寄附できるのである。

MRAの十周年を記念するために開かれた全英大会には、 Staford シャのNUM会長と書記長、レスタシャのNUM地域代表と書記長、ウォーウィクシャNUMの会長が連名でフランス、ドイツ、ベルギー、オランダから炭鉱関係者を招待した。(註第2部12参照)

ウォーウィクシャ炭坑労働組合長のフランク・ベインターはいう。「イギリスの石炭産業界には唯物主義以外のイデオロギーはなかつたが、MRAがそれより優れたイデオロギーであることを示した。MRAはチームワークと出炭量の増加をもたらしたばかりか、イギリスの炭鉱で試験ずみのこの解答の実証を、われわれ自身が世界各地に行つて伝えることができるようにした。」

三

港灣労働者と炭坑夫の他に各工場の労働代表委員たちは、産業界の支配を目標とするイデオロギー

戦の中心である。

労働代表委員シヨツクズツクニョウビは一般工員から選挙された人たちである。工場で毎日いろいろな接衝に直接当るのはこの人たちで、問題を始めに解決させるか、拡大させるかの立場にいるわけである。この人たちの多くは熱情的な社会正義の士で、組合運動に対する労働大衆の無関心を克服して情熱を燃えさせようとして願っている。

ロンドンをはじめ、重工業地帯にMRAの劇が行つた結果として、その地域の労働代表委員シヨツクズツクニョウビと労組指導者たちがイデオロギーの訓練講習を計画し出した。最近バーミンガムで行われたのもそれであるが百名以上の労働代表委員シヨツクズツクニョウビが十四の労組と合計十万の従業員を数える二十二の工場から参加した。なかにはオースチン自動車会社、モリス・コマーション自動車会社、BSAオートバイ・自転車製造会社、ルーカスランプ会社、ジェネラル・エレクトリック会社、カドベリーチョコレート会社、ガスト・キーン・アンド・ネトルフォールド・ボルト・スクリュー会社等が含まれていた。過去二年間、（一九五一年現在）この人びとの関係している工場や職場では一度もストライキがなかつたことは注目値する。同様な講習会がベルファスト、サウスウェールズ、ヨークシャ、マーシイサイド、クライドサイド、ロンドン地域等でも開かれた。

交通一般労働組合の全国執行委員であり、バーミンガムの労働代表委員会の議長のジョン・レーノルズは長年の共産党員で、モズクワに行つたときにはスターリンと同じ壇上に立つたこともある。一

九五〇年八月、彼はこの講習会について次のようにいつた。

『MRAの有難いことは理想郷の到来を待たずに、いま直ぐにもそのために働き出すことができることだ。私の家庭でも訓練講習をやつてゐる。私の家といつてもバーミンガム市の大通りに面した屋根裏の二間だけで、家具もろくにないけれど、きてくれる人を親切に迎える気持だけは十分にある。この貧しい家庭にバーミンガムの有力な産業人もやつてきて、工業界が直面している問題を私たちと語りあつて、いつしよに解決を見出している。』

ダゲナムのフォード工場の労働代表委員会議長で一万六千人の従業員の責任をもつてゐるアーサー・モレルはいう。

『私と工場監督とは長い間ひどい敵同志だつた。というのは彼が私にしたことに対して、私は憤慨してゐたからだ。私はできるだけ彼を困らすことに苦心してことごとく問題を起してゐた。MRAに出会つて、最初にしなければならなかつたことは一番難しいことだつた。つまり監督のところへあやまりに行くことだつた。正直なところ、ぼくはそれまで誰にも謝つたことはなかつた。十回もドアの前を行つたりきたりしたが、ついに勇気をだして、監督の事務所に入つて謝つた。何日か経つてから、ある人が監督のいつたことを私に教えてくれた。「MRAはモレルにあんなことをさせるのだとすると何かあるぞ。おれも研究してみよう。MRAは人びとを交換^{チェンジ}することができる。労働者を変えることもできる。経営者を変えることもできる。MRAはフォード工場にとつて大きな変化^{チェンジ}をもたらせ

た。フォード工場の主任自身も「今年（一九四九年—一九五〇年度）は自分の経験からいつても接衝が一番うまくいった年だった。自動車生産も記録的な年であった。これはMRAの副産物だと自分は思う。MRAは経営者と労働者に協力する精神をもたらしめている。増産は自然の結果であるが、増産があれば従つて増給もある」といつている。』

アーサー・モレルがこの声明をする数ヶ月前、コミニスト・レビュー誌はダゲナム工場の一部にMRAが強力となり、フォードへの浸透が困難になつてきていると書いている。

ジェームス・リースクはパーミンガム労働組合の指導者でエンジニアリング工業関係六万の労働者の責任をとつている人だが、労働者に対しても、また将来についても希望を失つたことがあつた。リースクはMRAを知つて、彼と彼の同志が心の奥で望んでいた世界を見た。

イギリス共産党委員長ウィリー・ギャラガーとのイギリス放送協会放送の討論においてリースクは次のように述べている。

『コミニズムのイデオロギーは二十世紀の必要を十分にみたしえない。しかしイデオロギー戦においてコミニストに教えられるところは多い。

彼らは情熱と、計画と、理論とをもつている。われわれにもそれが必要だ。労組の使命は団結にある。改変を拒否する人びとこそ反動勢力である。新しい世界は清算によつて生まれるのでなく、改変を通じて生れるだろう。選択すべきものは唯物独裁主義か、自由民か、いづれである。今日の世界に

は人の心を捕えようとする戦が行われているが、最も偉大な思想が勝利を得るだろう。すべての人のためによい世界を作ろうとする健全な精神をもつた人びとが一つになることが必要だ。』

四十九のイギリス労働組合と二十五の労働評議会を代表する人びとがコーに行つた。(註第2部15参照)新しい声が労働評議会、地方的、全国的労働委員会に響くようになり出している。多くの決議文は産業の真の目的は幾百万の大衆の衣食住を満たすことにあるとの新しい理想、また世界の労働者の使命の達成とその団結ムニヤイに対しての新しい情熱を反映するようになった。

フランク・ブックマンはいう。『神に導かれる労働者は、世界を導くことができる』と。これはMRAの革命的思想である。西ドイツの多くのマルキストがいう。『これこそ社会主義者が百年間求めてきたものだ。』

ベルリン労組会長シャルノスキーはいつた。『フランク・ブックマンに話してほしい。私はベルリンで彼と同じ戦いを続けると。これはわれわれの必要とする理想だ。階級闘争はすでに時代遅れとなつた。』

イギリスのILO(国際労働機構)労働代表首席がコーを去るとき、いつた。『絶対の道徳標準が全世界の労働者の推進力にならねばならない。』

十九世紀の標語は『全世界の労働者よ、団結せよ』であつた。それは当時から今なお存在する社会不正義や貧困に対抗して団結することであつたが、しかし今日の必要は、偉大な積極的な思想をもつ

て『労働者よ、世界を団結せよ』である。それだから世界から労働指導者がコーにくるのだ。それゆえ一九四九年には、国際自由労連の構成会議の有力代表百名がその会長ポール・フイネーとともにロンドンのMRA本部を訪れたのである。ヨーロッパの経験深い労働指導者エバート・クーパースは『私はフランク・ブックマンといつしよに前進する。社会的安全保障と社会正義の支配するよき社会を目指して進む。』といつた。(註第2部16参照)

第4章 経営者側も考えを変える

港湾、炭鉱、工場等で労働者が変つてMRAのために戦つていようように、経営者も全世界にわたつてイデオロギー的勢力をつくりだ出す努力をはじめている。

スターリンは、モスクワで共産党指導者に講演して、『資本主義が最高利潤を得るために生産するのではなく、大衆の生活改善のために建設的な努力をするようになれば、経済危機はなくなる。しかし、そのときには資本主義は資本主義でなくなる。』といつた。

スターリンは資本家たちが変ることは先ずあり得ないとはつきり考へている。しかし彼の夢想だにしなかつた事実が、現在人間社会に起こりつつあるのだ。人間の動機と心は変わることができるといふことが現実となつた。新しい時代の基調となる言葉をフランク・ブックマンは次のようにのべている。『人間性は^{チェンジ}変わり得る。それが根本的な解答である。国家経済も^{チェンジ}変わり得る。それがこの解答から生まれる結実である。世界歴史も^{チェンジ}変わり得る。それが現代の使命である。』と。

MRAは資本家を変えて、現在の経済組織に支柱を入れようというのではない。MRAの目的はすべての人が、再建される世界のために生命も財産も、神聖な名誉も、すべてを喜んで投じるまでに変

えることを目ざしている。

資本家が変わつた結果、マルキストや労働者も変わつて新しい、また効果的な調和が生まれ、それによつてすべての人が協力でき、すべての人が福祉を得られる結果が生まれる。資本家と労働者とともに、自分たちの従事している仕事全体に対して新しい視野と目的をもつて、利潤や賃金や、また支配権のためではなく、世界の富と職を、少数者の搾取にまかすことなく、すべての人の目的のために一致すれば、能動的な団結が生まれてくる。

一

イギリスの、ランコーンのキャムデン皮革会社の専務で靴底生産全英連合会会長ジョン・ノーウエル氏は次のように述べている。

『マルキシズムの挑戦を、経営者が取り上げない限り、われわれは現代の問題に不感症となり、ほんとうに時代から取り残されてしまうだろう。……経営者は変わらねばならない、われわれは多くの場合、経営者側として労働者が変わり易いようにしてやることが自分たちの役目だと思ひやすい。賛成したり、支援したり、恩恵をかけたリするが、自分たちはなかなか変わらない。私自身としても、理想家になることはできる。非常に寛容で、会社の利益を分配するところまで考えたとしても、自身が変わらなければ大した効果はない。右翼反動勢力の存在が、唯物的社会機構を成立させている

ともいえる。反動家とは、変わることを拒絶する人である。変るところから新しい社会機構がはじまる。……世界を再造する、これが課題だ。』

キャムデン皮革会社は約二十五年のあいだに、信用を築きあげた。この会社は年々二十万の皮革を製造し、七百万ポンドの良い靴皮を生産する。

数年前、工場の労働代表委員でトム・タタソールというのがストライキを指導したことがあつた。彼は前から問題の人間で、工場主任はよくこういつていた。『私はタタソールに注意し、いつも気をゆるしたことはない。』

ストライキになつたとき、ジョン・ノーウェルは工場の至るところに疑いの気分が漲っているのを何とかしなければならぬと思ひ、タタソールを呼んでみた。そして、今まで労働者全体にも、また特にトムに対しても信用をおいていなかったことをすまなかつたと謝つた。また自分にこんな気持があつては、トムの方としても、協力できないのは無理はないと思ふといつた。

ノーウェルは更に言葉をついで、これからはすべての問題を正直に持ち出して、何が正しいかを土台に努力したいといつた。トム・タタソールは半信半疑であつたが、とにかく一応やつてみる決心をした。ノーウェルはこういつた。『その後、妙な固い気持から解放されて、自由な雰囲気の中で、両方がどう変わらなければならぬかを落着いて話し合うことができるようになった。』

工場評議会が設けられ、それ以来今日まで、これが工場での規律問題決定の支柱となり、また種々

な意見を交換する場所ともなつた。そして紛争のために一ポンドも失われるようなことがなくなつた。無届欠勤の率は一千時間中に一時間ぐらいになつた。原料が始終変わるの、工員たちは一つの部門から他の部門へと仕事の種類が変わり、賃金もそれによつて上下があるのだが、すこしも紛争がなく生産は何ら支障なく行われた。

組合の地区組織オルグは『これこそすべての産業のよい模範である。私の関係している四千の組合員は、全部この皮革会社で学んだことからよい影響を受けている。』といつている。

戦争中、人力が極度に不足して、人員が二割五分減つたにもかかわらず、工員一同が非常に努力したので生産率に影響がなかつたこともある。ノーウエルは『私は自由と幸福をうちに宿している人間がいかに多くの生産力をもっているかを実際にみた。そして国家経済が破産に瀕したり、生活水準の低下によつて革命の危険にさらされたりせずに、国防産業に力を十分に注ぐことができるという確信がついて、デモクラシーに希望がもてるようになった。』といつた。

ノーウエルはまた、立派なクリスチャンの家庭に育つたある青年の例を出した。彼は事務員を志願したが、何かの間違いで筋肉労働に廻された。その後、幾つかの不幸な出来事が重なり、そのあげく会社側としては当然な理由があつたが、医者のおすすめに従つて病気の妻と一緒に休暇をとりたいう願ひも拒絶した。この青年は、それを恨んで共産主義に走つた。ノーウエルはこういつた。『この物語をきいたときほど私に経営者としての責任を痛感させたことはない。悪徳というよりはわれわれ

の盲目さが問題である。われわれはあまりにも盲目で、不感症で、なるほど当然なまた必要なことではあるが、人よりも計画とか、生産率とか、利潤とかを先にしたがる。しかし私に起つた改変は、この青年をふたたび『健全なデモクラシーのイデオロギーに引き戻すことができた。』

ノーウエルの産業に対する態度の改変が、先ず家庭での改変から起こっているのは面白い。彼と妻との間からは、『無理解という深い淵に礼儀という弱弱い橋をかけておくような』ものだったと彼はいう。ある日、彼は妻に自分のありのままの姿を正直に話した。それが二人の間のチームワークの最初であつた。その後まもなく彼の妻は『工場の人たちにも、私とあなたの間のように正直に実行なさつてはいかがですか。』といった。

ノーウエルはその工場の精神を「革命的なチームワーク」といつている。『それは同じ意見の者同志の協力ではなく、意見のちがう者が、衝突しても心を変えて協力するチームワークである。それが新しい弁証法だ。私の工場のショップ・スチュワード主任は外国から見学にきた人に、「今でもちろん問題はありますが、前だつたら紛争と行きつまりになるのが、今では、その問題を通して、人も変わり、よい解決の途が開かれていくようになりました。』といった。』

ノーウエルが会社の経営者として、また労働者の使用者の立場から革命的な改変をしたことを、ロンドン・ドックの港労働指導者たちが関心をもつたのであるが、彼のロンドンのイーストエンドの港労働者の大会での話しをきいて、彼らはMRAに参加するようになった。

エリック・ロービイはイギリスの建築材料関係の全国連合会会長である。あるとき政府が産業界に物価の引き下げに協力を要望したとき、彼は国のために利潤を下げて、売値を下げるべきだとの確信で、いろいろな反対もあつたが、道義的な問題として強い確信をもつて主張したことが大勢をきめた。新しい定価表がイギリス全国に送られ、当時建築されていた建物に大きな影響を与えたのである。

その後まもなく、労働党政府は自由産業の調査報告書を発表して、この産業のやり方を非難し、統制の強化を国会に求めたとき、担当大臣は、この報告書が準備されだしてから、産業内自体に改善が自発的になされるようになったから、政府として統制を強化する考えを取止めたと答弁した。

エルネスト・デイードリックセン氏はブラジルからきた紡織業者であるが、こいつた。(註第2部19参照)

『経営者側が改変しなければならぬ。改変してMRAのイデオロギーに生きる者にならなければならない。このイデオロギーは三つの特徴をもっている。第一に世界的規模のものである。第二に「自分のあり方が、国のあり方であり、工場のあり方である」という点を明らかにしている。第三にすべての者に対して計画をもっている。経営者のためにも、労働者のためにも。』

経営者側に改変（かくへん）が起りはじめると、労働者側にも敏活な反応が現われる。ある銀行家とコミニストの例をあげよう。

ヘルマン・ヒンツエン氏はヨーロッパで一番古いある銀行の重役であるが、自分は事務所でも家庭でも良い意味での独裁者——フレデリック大王のような人物であると考えていたという。ところが彼は次第に変わりはじめた。ある日、彼はカルロス・ブロンクというオランダで独立のマルキスト・グループを組織した戦闘的な進歩主義者に会った。この銀行家はブロンクと三時間話し合ったが、そのとき彼は、自分自身や他の雇主たちの今まで足りなかつた点を知り、そして今では新しい世界再建のために戦おうと決心していることを話した。

一九五〇年にブロンクはコーにいつたが、その後、同志たちの承認を得て彼の機関紙を『ニュー・ウワールド』（新世界）と改名し、そのなかで次のようにのべている。『怨恨と憎悪が存在する理由はわかる。しかし、それは新しい世界の基礎にはならない。MRAを基礎とすれば、世界の民衆はもとと速かに団結できる。社会主義を家庭で実行することが、他の人たちに言葉でくどくど説明するよりはるかによい。』

彼は家庭で変わる必要のあることを感じ、その結果、「子供にとつてのよりよい父」となつたのである。

コーで彼は語つた。

『原子爆弾戦が起れば、資本主義も社会主義も消滅し、未開時代になるだけである。今までのような戦いをつづけたら、残るは荒唐だけである。しかし新らしい道徳的な道に従って行けば、暗黒から光明へでるように新しい世界がやつてくる。より良い世界はより良い人間によつてのみできるのだ。』
もう一人の、オランダ人の食料品製造業者チャーレス・リドレーが一九五〇年にコーへきた。

『私は敵を多くもつていながつたが、その少数は本当の敵であつた。ある競争相手に対しては九年間、憎悪の心をもつていた。彼の会社は私のより小さかつたが、彼はオランダ全体の連合会会長になつていた。九年間、私は彼の仕事を妨害してきた。』と彼はいう。

リドレーは変わる決心をして、この憎い相手に会いたいと申し込んだ。相手は会いたくない様子で、少くとも三週間は会う約束ができないと電話で断つてきた。それでは三週間たつたら会つて下さいとリドレーが答えた。その会見の様様をリドレーは次のようにいつている。

『私はまず、過去九年間自分がやつてきたことについて謝つた。私の動機は嫉妬であつた。私はオランダの食料品製造の有力な業者であつたから、当然会長になる資格があると思つていたので。それまでの私のきたないやり方を全部わびた。彼は鼻をつまらせながら、涙をみせまいと努力していたが、二三分間はものもいえなかつた。私たちは馬鹿らしいほど夢中になつて握手をした。』

その結果、会長はかつての敵に次のような手紙をかいた。『今度のことは必ず物心両方面に影響を与えるにちがいありません。これを私たちは最も意義あるように、連合会の人びとに知らせる必要が

あります。』

物質的方面の影響はすでに現われている。チャーレス・リドレーは改変チェンジしてから、労働者に対して今後は労働者も彼と一緒に民衆に仕えるため、共同の責任をとってもらいたいといった。労働者は彼のもとにきて、工場の生産率を二十パーセント増加する方法があるが、それが実現した場合、リドレーはその二十パーセントの増産を、会社の利潤と株主の配当の増加に使用するつもりか、それとも値段を引下げ、オランダの物価を引下げるに役立たせるかどちらかと彼らは尋ねた。リドレーは第二の途をとると約束し、労働者は二十パーセントの増産をはかるため努力することを誓った。

三

バーナード・ハルワードはカナダのセント・レーモンド製紙会社の社長であるが、道徳的な絶対標準にぶつかつて、カナダの税関に相当額の小切手を送らねばならないと感じた。これがカナダ諸新聞の大見出しになつた。

ハルワードはこのことを通じて、西欧諸国に行われている社会不正義は、自分のような人間の道徳的ないかげんさが原因になつていふことを理解するようになった。『私は右の唯物主義の冷酷さは、そのまま、左の唯物主義に反映してこれを峻烈ならしめているということが分つた。共産主義は西欧の良心の欠除の産物である。鏡にうつる自分の顔が気に喰わないといつて、鏡に石を投げて

も無駄だ。自分の表情を変えれば、おそらく鏡の中の顔も変わるだろう。』

ヘルワードは大西洋を十五回いつたりきたりして、ヨーロッパの各国にMRAを伝えるためおしまずに協力している。ドイツのルールでは、沢山のマルキストやコミニストに歓迎され、敬愛された。一九四九年には、一五〇名のルール地方産業人の集会で話をしたが、その集会は七時間も続いた。この集会は、どうしたらMRAの精神をルール地方全体に浸透できるかを目的として開かれたが、ドイツ産業界の事情に精通していたある人がこの会を評して、『もし爆弾がその会場に落ちたらルールの産業が停止するようなきわぎにならないとも限らない』と思われるほどの大実業家が、みんな集つていて、十二、三ヶ国からきた産業、労働界代表の言葉に耳を傾けた。

ラインプロイセン会社の専務でドイツ石炭委員長とを兼任しているハインリッヒ・コスト博士は、当夜の司会者として次のように語つた。

『分裂をすて、団結を生まなければならぬ。われわれが本気になつて変わる願望と決心をもつときにそれが起こりうる。われわれは計画よりも人を先に考えなければならぬ。そうすれば互いに人間として団結することができる。そのとき、単にわれわれの事業ばかりでなく、社会にも、祖国にも何事かが起つてくるだろう。雇主は労働者の先ず変るのを待つ必要はない。満場の諸君、われわれの変ることは要求されている。改変チェンジの必要があるか無いかではなく、どう変わるかが問題である。』

この演説のあとで、彼の炭坑の坑夫で老練な共産主義者のブラデックとクロウスキーは彼のところ

に出かけて、過去数年問題になつていた苦情を陳述した。ところがこの精神によつて僅か半時間のうちに、全部を解決することができた。

ハンス・デュテイングもルール炭鉱会社の専務で、二万五千人の労働者の責任者だつたが、コーの経験をこういつている。

『私は産業の目的と性質とに対する私の考えを全部変える必要に迫られた。もちろん生産と分配は正しくやらなければならない。人類が必要とするものを十分生産するように努めねばならない。また、労働者の安定性と生活向上のためにも計らねばならない。しかし最も大切なことは、世界の労働者と使用者とがその生活の中に、心の満足をもつことである。世界の再造——これこそはわれわれが努力し、また犠牲を払う価値のあるものだ。』

デュテイングはコーから帰つて直ちに労働者にMRAのことを話した。彼の期待は裏切られ、何事も起らなかつた。彼らは一向感心しなかつた。MRAが人に共感を起すには口ばかりでなく、生活実践が大切であることが彼に分つた。彼自身が変わりはじめた。次に記すのはデュテイングの関係している炭鉱グループの炭坑労働評議会会長パウル・デイカスの結論である。

『二年前には経営者との間に強い緊迫感があり、デュテイング専務がコーに行つたときには、われわれ労働者は笑つたものだ。しかし彼が變つた事実には、われわれはすつかりびつくりしました。数年前、全力をつくしてデュテイング氏が現在の地位に尽くのを妨害した私が、現在コーで彼と同じ演壇

に立っている事実は何を語るか。私は二十五年間社会主義者であつた。階級闘争はわれわれの旗幟であつた。しかし、それは労資関係の問題を解決する道ではないことが分つた。われわれの炭坑ではすでに、問題を階級闘争によらずして、すべての人に公平なことは何かという立場から解決している。……それゆえ、私は労働者の立場からMRAに絶対に賛成する。』

ルールでは『労働者企業管理』が左翼の闘争標語である。一部の事業家はいろいろの共同管理案をもつて対応しようとしている。他の者は資本家として伝統的な権利を主張している。デイクスとデューティングはこれに対して何と答えるか。

デイクスはいう。『現在ルール地方では事業経営に労働者を参加させるかどうかについて大論争が行われている。しかし、現在私と専務との関係が続く限り、その論争は私にとつて問題ではない。われわれはすでに他の会社が法律によつて達成しようとするよりもはるか彼方に到達しているからである。』

デューティングもいう。『われわれが実際に正直で無私であれば、労働者の企業参加は問題でない。絶対の道德標準を実行する事業家はいかなる法律が要求するより以上に多くのものを労働者に与えるのだ。彼がそれを躊躇なく実行出来るのは、労働代表も同じ標準によつて努力することを知っているからだ。』

われわれは絶対の道德標準に基くイデオロギーを全世界のすべての人に与える必要がある、そのた

めには努力と犠牲を払う価値がある。われわれ労使が協力して、東欧と西欧のいずれにもある唯物主義の傾向に対して強く立つことができれば、われわれの将来には新しいものが生まれうる。』

四

フランスでも多くの産業人がMRAのために戦っているが、ロベール・テイルジはその一人である。彼は北フランスの経営者連盟の創設者であり、現総務理事であるが、同連盟には一万四千の工業団体と五万の実業団体が含まれ、フランス重工業の四十パーセントを代表している。

彼は巨大な体軀の持主で、フランスのラグビー選手であり、レスリング選手として度たび国際競技に参加したこともある。彼のことを、友人は象という仇名で呼び、労働者はブルドッグと呼ぶ。彼が一度喰いついたら離さないからである。

彼は精力家で、多年、使用者側の権利擁護のために戦ってきた。当然彼はフランスのあらゆる重大な産業問題の紛争に顔をだしている。ある年の如きは百六十件のストライキに関係したことがある。

しかし、悪感情は増加し、行きづまりが、深刻になるばかりだった。テイルジも本当は愛国者であったから、フランスがこうした紛争によつてひへいし、衰弱するのを憂いていたが、どうしたらよいか答を知らなかった。

コーでテイルジは改変した。帰国後、北フランスの各地から集まった労使関係指導者の大会で演説

をしたが、そこに出席していた労働者にそれまで彼がとつていた悪い態度について謝罪した。これを契機として、フランス産業界にMRAのイデオロギーが攻勢となつたのである。

一方、ロベール・ティルジは、MRAチームとともにアメリカ、カナダおよびヨーロッパ各国を訪問した。

一九五〇年二月にロンドンで四百名の有力な実業家に向つて彼はいつた。

『みなさんは誰一人、自分が共産主義に責任があるとは思ひになるまい。なるほどそうであろうが、しかしわれわれの国の状態、現在の社会状態、また共産主義の勢力が世界の人びとの恐怖の的になつてゐる現状に対してわれわれとわれわれの祖先に責任がないとはいえない。われわれ経営者は、とにかく僅かばかりの金や時間や計画を惜んで時機を失いやすい。これは現状維持に及々として、人に与えることをしないからである。われわれは工場において、事業において、国家に対して、壊滅に直面している文明を救うため、責任をとらなければならない。MRAは私に先ず自分から始め、利己主義と戦ふ必要を示してくれた。それができれば次の戦争を止めることもでき、文化とデモクラシーを救うこともできる。』

五

アメリカで戦時中、陸軍の使用する乾燥林檐の四十パーセントを供給していた会社の社長が、ある

日電話でパッキング・ハウス・ウァカーズ・ユニオン（箱詰従業員組合）を呼びだした。『私の名前はエドガー・ゴールウェイだが、工場の従業員の要求で組合を組織したいと思うからきてもらえないであろうか。』と組合役員に伝えた。

組合の書記長と組織部長が工場にきて、社長にあつた。彼らは用心深かつた。というのは、アメリカの企業家でこんな要求をしたことを、彼らはそれまで聞いたことがなかつたからである。ゴールウェイは労使間の正しい関係をつくるために援助を頼んだのだと素直に語つた。

組合は十七頁の契約書をつくつてきた。ゴールウェイは、『これは良い契約書にはちがいないが、互いに相手を信じないという精神を土台としてあらゆる注意がはらわれている』といつた。彼は組織部長の提案を入れながら、新しく一頁半の契約書を作り上げた。これは賃金、労働時間、組合員の規約及び休暇についての簡単な文書であつた。附加契約として、万一問題の起つた場合には、正直と公平の精神でこれを取扱ふと記されてあつた。

一年後に組合連合会会長はゴールウェイにいつた。『私はこの契約書を他のどの契約書よりも誇りにしている。』と。アメリカ総同盟機関紙も、『カリフォルニア州全体を通じて最も満足な契約書である』と記述している。

それ以来八年間、会社と組合とは再協定のため、数時間を費したに過ぎない。一回もストライキも怠業もなかつた。また組合連合会の手をわずらわすような経営側に対する不平問題も起らなかつた。

彼の工場における労使の努力の目標は、大衆への奉仕であつた。一方では賃金も相当に増額し、他方会社として契約期限内に政府に対し十五パーセントの価格を引下げをしたが、これは従業員たちの改良工夫が費用節約の大きな原因であつた。ある従業員の発明が、一年間に二百万ポンドの乾燥果実増産となつたが、費用は三千ドルの増額にすぎなかつた例もある。

重役たちは、はじめゴールウェイの組合と何一つかくさずにやるやり方をあやうんだ。ことに注意深いある重役はなかなか納得しないでいたが、ある日ゴールウェイを訪問したとき、ちようど、陸軍の要求で緊急積荷がされているところ、にぶつかり、考えを変えた。というのは社長と重役が積荷の現場を歩いていたとき、シャツ一枚で重い林檎の箱を運んでいる男をゴールウェイが指さして、『あれはあなたの信用なさらぬ組合の連合会の組織部長ですよ。』といつた。彼は会社の従業員ではなかつたが、組合の会費を集めにきていたのだが、急ぎの仕事を見て、上着を脱いで働いていたのであつた。一九四八年の春、会社に大きな不況がきた。それは会社が資金の借入を完了した後で、多額の注文が突然解約されたためであつた。

ちようど新しい組合契約をするときで他の産業では全体的に十パーセントから十五パーセントの賃金増額をしていたときであつた。会社は増額に不賛成ではなかつたが費用節減の必要に迫られていた。組合代表はこの事実を知つてゴールウェイに『われわれとしてできることを考えて見ましよう』といつて、前年通りの賃金で契約を結んでもよいといつてきた。ゴールウェイは非常にそれを感謝し

て、特に一項を契約書に入れることを主張した。それは、会社は事業の様子、実情をいつも組合側に知らせ、契約期限内でも事業状態が良くなつた場合には、賃金の交渉を始めるということであつた。

従業員大会では、全員一致で賃金増加の要求をしないうことにきめた。契約満期五ヶ月前、即ち七ヶ月後には、主として従業員たちが無駄をしないで費用節減のために努力した結果、会社の経営状態が非常に改善し、全従業員に多額の増給をすることができた。

一九五〇年、ロスアンゼルス市で開かれた産業会議で、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ、東洋の労働関係代表の前で、ゴールウェイは次のように結論した。

『これはイデオロギーである。——実践されている思想である。アメリカ産業界が今日しなければならぬことは、物資の生産を計るばかりでなく、わが国と世界の将来を形づくる生命を生み出さねばならない。』

六

ここに記した経営者の改変した物語は、各国に起つてゐる新しい思想と実践の一端である。

今日、モスクワは資本家の慢性的な利己主義を利用して、西欧文化の破壊を計り、マルキシズムの勝利への扉を開こうと考へている。

コミニストは、彼らの主義の勝利こそ、歴史過程をはやめるものであると信じてゐる。しかし歴

史はマルクスが忘却し、スターリンによつて僅かに暗示されたものが、究極においては決定的な要素であつたと記録するかもしれない。すなわちそれは、経営者もその動機を変える可能性があるということ、^{チェンジ}改変を土台としたイデオロギー的勢力を鍛え上げる可能性があるという点である。

一度この過程が実現するならば、マルキストの説くところはその核心を失つてしまう。事実、それがすでに始まつているのである。

第5章 ゆるぎなき防衛

イデオロギー時代の一つの大きな特徴は総力戦において現われている。現代の戦争は軍隊ばかりのものではなく非戦闘員も含み、武器ばかりでなく宗教信仰も、また軍事的戦略ばかりでなくイデオロギーをも含めたものである。

一九三九年以来M R A ははつきりと、デモクラシーは二つの戦争を、すなわち「武器の戦争と思想の戦争」を戦っていることを認めている。双方とも世界戦線で戦われているのである。究極の勝利者はその両戦線において勝利を得るものでなければならぬ。

戦後の一年一年はこのことが真実であつたことを裏づけている。この点は、各国進駐軍とドイツや日本の民衆との関係をみるといつそうはつきりとする。ことにソ連の戦後における膨張力がそれをよく示している。ヨーロッパ諸国のうち六ヶ国、すなわちポーランド、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、アルバニア、チェッコスロバキヤがソ連に接収された。いづれの場合にも、軍隊も原子爆弾も、決定的な要素ではなかつたのだ。

中国において赤軍が南下したとき、一般市民層の道德の低下と国府軍の志気沮喪とがもともになつて、中国の大部分の無血征服が成立した。ある国府指導者が『われわれは戦争で破れたというよりも、米の配給の不始末で破れたのである。』といつた。中国大衆の心と思想を強力なイデオロギーが捕えたのであつて、それは爆撃機や大砲が役に立たないところにまで達するのである。

過去五年間に朝鮮、インドシナ、マレイ、ビルマ、東インド諸島でおこつた事變のかけには、この新しい要素と見なされる勢力がひそんでいたことを見逃せない。そうした勢力につねに敗北しないためには、より優秀なイデオロギーの武器をもつて対抗するよりほかはない。

イデオロギー戦を無視する国は、武力戦に勝つても平和を失うことになる。フランク・ブクマンの言葉に、『イデオロギーのないデモクラシーは武力戦に勝つことができるが、平和を建設することはできない。イデオロギー的国防は国民全体の仕事であり、道德的、軍事的、経済的国力の最も強い基礎である。』とある。

一九五〇年八月にコーでトウゼ・デュ・ヴィジエー中将（前ド・ラトル・デ・タシニー大將付參謀長であり、戦時中はフランス第一機械化兵団の司令官であつた。）が強調したのはこの点であるが、『われわれの安全保障は西欧側のもつイデオロギーの力の強さの如何にかかつてゐる。どの国も三つの国境を防衛しなければならぬ。すなわち歴史によつて決定される政治的国境と、戦略的に形づくられている地理的国境と、現在ますますその重要性を増している国民ひとりひとりの胸中に横たわる

イデオロギー的国境である。』

一

デュ・ヴィジュー中将とヴェネジュール少将は各国においてこの新しい国家的、国際的防衛に関心をもっている上級将官たちとはかつて、一九五〇年の九月に自由国家群の軍事代表をコーの大会に招待した。大西洋防衛条約国を四人の国防大臣が公式に代表し、その他、フィンランドの総司令官、フランス植民大臣、ロンドンにあるパキスタン高等弁務官等も招かれ、十六ヶ国から百二名の将官が出席し、将官級二十一名、佐官級四十七名が参加した。

彼らが参集していたとき、ニューヨークでは大西洋圏の外相会議が開かれ、ヨーロッパ防衛問題をどうするかが緊急題目の一つとなっていた。

こうした事情を背景として開かれたコー会議の最も注目すべきことは、そこがかつての敵同志の間に和解の精神がつけられたことであつた。数日の間に精神的結合が起こり、根強い猜疑心は克服され、技術的計画をたてる有効なチームワークをつくる道が開かれた。

ドイツの元将校たちは戦争責任を謝罪するようになった。あるドイツの元大佐は、戦時中に没収したあるフランス人の所有品を返還することを申しでた。ドイツの上級将校のひとりホッスバツヘ元大將は、ドイツ陸軍の参謀次長として戦前、いくたびも公然と国家社会主義（ナチス）に反対意見を発

表した人である。戦時中、ヒトラーはホッスバツハに、その部下をソ連軍に包囲されたままにすておくよう命令した。ホッスバツハはそれを拒絶した。そして部下を窮地から救い出したのち、ベルリン召還命令を無視して家に帰り、米軍到着まで自宅を防禦してゲシュタポと戦つたのである。

ある日、ホッスバツハはイギリス海軍のフイリップス少将の話をきいた。フイリップスは、世界が今日のような状態になつている責任の一部を、自分の国が負わねばならないといつた。イギリスが二つの大戦のあいだに力強い思想をもつて自国を改変し、ひいては他国にもそれをおよぼすようにしなかつたことが残念であると彼は述べた。

ホッスバツハ將軍はこの思いがけないイギリス提督の言葉に深く動かされ自分自身が改変し、M A Rのために戦う役割のあることを自覚した。『私が敵として二度の世界大戦において戦つた相手である同僚諸氏が、ドイツ人を兄弟のように平等に取扱つてくれることに対し、心から感謝したい。』と
いい。

『コーでドイツ人はM R Aの精神によつて、過去においてわれわれを分裂させたあらゆる相違に橋を架け、さらに将来われわれを団結させるものを得たのである。自己の将来、自己の友人、隣人、子供の将来に関心をもつ者は、みな各国の安全保障のために全力をつくさねばならない。』ともいつた。

コーの軍事会議の結果を、陸、海、空軍関係の将官たちが集つて次のように評価した。

(一)自由国家群の軍事指導者のあいだに、イデオロギー戦の全面的な性格と範囲についての一つの新

しい諒解が成立したこと。

(二) 港湾や、工場や、炭坑や、国内各方面において冷戦に勝つ必要のあることを新たに自覚できたこと。

(三) 各国に軍関係者間の融合を土台とした新しいチームワークが保証され、新しいイデオロギーを基礎とした強い個人的結合がつけられたこと。

(四) 国防関係者一同は、MRAのイデオロギーこそ唯一の現実的な団結勢力として急進的唯物主義の世界戦線にも対応できることを確信したこと。

フランス第五機械化部隊を指揮して、アルサス解放のため南フランスに進攻したヴェネジュール將軍は、会議の終りに次のような結論を語った。

『MRAは唯物主義の潮流を変え得る理論と、熱情と、計画とをもっているから、われわれにすばらしい希望を与える。これは唯物主義のイデオロギーよりはるかに優れたものであり、その信奉者さえも獲得する力をもっている。単に西欧のみでなく、鉄のカーテンの向う側をも味方にできる。』

二

MRAの戦時記録は、それ自体がよい証明である。今次大戦には全世界の戦線において、MRAで訓練を受けた数千の人びとが戦った。多数の者がその戦功によつて叙勲された。ロンドンのMRA

本部には、イギリス軍に参加した人びとの勲章リボンが大きな記念帳になつてゐる。それらの勲章はピクトリア・クロスからジョージ・クロスまで多種多様である。

戦時中アメリカ、フロリダ州のモリソン航空部隊幹部将校であつたフランク・マクヘンリー大佐は、MRAについて次のようにいつた。『軍隊内でも、銃後でも、MRAの人びとほど建設的な努力してくれるグループはない。』

軍隊内におけるMRAの人たちの行動が勇敢であつたことは確かであるが、彼らの特殊な貢献はイデオロギーの分野であつた。この分野における努力についての公平な価値判断が、事実を知る人びとによつてなされた。(註第二部22及び23参照)

アメリカ徴兵局次長ジョン・ラングストン大佐はいう。『MRAは共産主義、ファシズム、その他の全体主義的イデオロギーと最も有効に戦いうる方法である。』

さらに『MRAの仕事について一九四一年に特別な調査をおこなつたが、国防上最も必要な産業界で労使間の理解をますために、MRAがどれほど広範な、有効な働きをしたかを知り非常な感銘を受けた。大統領直属徴兵再審査委員会の委員長として、また徴兵局次長として、私はグループの愛国的努力に対し絶対の信頼をもつてゐる。開戦当初にMRAが「アメリカをかく防げ」(You Can Depend America)を幾百万となく販布したこと、それにつづいて彼らが努力したことはアメリカをめざし、軍需品生産と、デモクラシー理想の防衛強化のため、最大級の努力をさせたのである。MR

Aの優秀な働きが共産主義の潮流を押し返したことをきいて、心からよろこぶものである。諸氏はこの巨人的な戦いにおける正しい武器をもっている。』ともいつた。

アメリカ海軍の巡洋艦、駆逐艦、潜水艦を建造したクラムプ造船所副社長のパーチャード・テイラー氏は、造船界におけるMRAの貢献を観察した後に行った。『この人びとは海軍にとつて大きな分遣艦隊くらいの値打ちがある。』と。

ロスアンゼルス市のロッキード航空機製作所に、MRAで鍛えられた十九歳の工場労働代表（インダストリアル・ワーカー）がいた。彼は六万九千の従業員のひとつであり、のちには組合の中央委員にも選出されたが、彼のつくつたチームが共産主義者の組合乗取りの陰謀を阻止することができた。そのため、戦時中一度も怠業やストライキが起こらず、行き詰りが打開され、生産は増加した。大戦の真最中にその組合の委員長がワシントンで『もしMRAの人びとの努力がなかつたならば、現在戦線に出ている飛行機もできなかつたであろう。』といつた。

この若い航空機製作所の労働代表がはじめた仕事は今も継続している。彼の父親は、最近、彼が属していたインターナショナル・マシニスト・ユニオン（国際機械工組合）のある役員から手紙を受けとつた。

『共産党系の連中がダグラス航空機製作所の出口でピラをまいたり、ストックホルム平和宣言のサインを求めたり、大分うるさくて困りました。それにつけても、MRAが私に与えてくれた訓練を大

変有難いと思います。そのおかげで製作所の出口を取りまく共産党の支持者をどう処置するかについて非常に大きな力をえています。』

三

カナダでも戦時中徴兵局長をしていたエリオット・リトル氏が、同様にMRAの戦時中の絶大な協力をよく認めた。彼はドミニオン・ステイル・アンド・コール・コムパニー（鋼鉄・炭鉱会社）にたいして、その会社の争議解決に、MRAの訓練を受けた人たちの援助を求めてはどうかとすすめた。その会社はカナダ全鋼鉄生産額の二割五分と、石炭の四割までを産出していた。激しい木枯しに吹きさらされて、ろくに立木も見えない殺風景なこの東部沿岸地方に、百名の訓練された共産党員が送られ、意気沮喪した従業員の気持を利用して支配権を握ろうとした。生産率が五割減少した。欠勤は四割に達した。リトル氏はその生産が五分増加するだけでも、カナダの銃後戦力にとつて、五万人の努力に匹敵すると考えた。

MRAで訓練された六十六名の人びとがその地方に行つた。彼らの努力は『団結せよ、カナダ』（Pull Together Canada）という劇を前衛として推進した。二ヶ月の間に三万三千の人びと——労働者も経営者も——がその劇をみた。平均毎日五十回ぐらい、労働者や重役の主だった人びとを訪問した。MRAの人びとは炭坑のなかにおりていつて、坑内で坑夫と話あつた。造船所にもでかけて行

つた。

こうした彼らの努力の結果の一つは、ボブ・ターンプルの物語であろう。

彼は炭坑組合の委員であり、怠業の指導者であつた。ターンプルは会社に対する激しい敵として知られ、また恐れられていた。しかし、そのかげには彼の家庭の問題がひそんでいた。彼には十二人の子供があつた。妻との関係は、会社との関係と同様に悪かつた。それは簡単な家庭の出来事の中にも現われていた。ターンプルの妻は台所にリノリウムを敷きたがつていたが、彼はその金を外で使つてしまつていた。

MRAの人がひとり、彼の家に泊り込んだ。ターンプルは自分のために金を使うのをやめて、妻にリノリウムを買つてやつた。改変チキンするといふことが、ターンプルにとつて体験となつた。それからまもなく坑夫会館で集會があり、炭坑夫も、支配人も、監督もいづばい集まつてきた。みんなターンプルが何をいうかと待ちかまえていた。そのときこそ仲間の面前で、会社側にいいたいことを思う存分いえるいままでない機会であつた。会衆の前に立つた彼は予期通りというよりは、一寸予期しないことをいひだした。

『戦時中にも平和になつたときにも私を教えてくださいましたMRAに対してできる一番よい感謝の表現は、私がどこにいつても協力を第一にすると公約することだろう。』彼はその後で総支配人に組合の仮委員会を組織して増産のために具体案を提出したいと話した。

ターンブルはしだいに神の導きの原理が、ノバスコシャ地方の産業危機解決にも当てはめられることがわかつてきた。組合員に向かつて彼は次のようにいつた。

『成功している人間はみんな自分の計画をたて、それを書きつける。われわれ労働者はそれをやらない。われわれも自分自身のことや自分たちの問題を直視し、与えられる考えを書きとめるようにしたらどうか。善いものは実行し、悪いものはすてたらよい。』

その後まもなく、第十八炭坑で突然不法ストライキがおこつた。ターンブルは早速その支配人に会いに行つた。彼とこの支配人とは長い間反目していたが、彼の態度があまりに変わつていたので、支配人は坑夫が職場にもどりさえしたら、彼らの要求に満足な答を与えようと約束した。ターンブルは労働委員を一人づつ訪問したが、その結果、全員一致の決議で坑夫は職場にもどつた。

ポブ・ターンブルはその炭坑委員長とその妻をお茶によんだ。彼らはその翌朝、この頑固な支配人のところに行くことになつてしたが、何といつたらよいか導きを受けることとした。彼らは紙と鉛筆をもちだして、彼らの心に与えられた考えを書きとめた。

炭鉱組合委員長の書いたことは『支配人に微笑をもつて会うこと。』妻も書いた。『まず相手にいいたいだけいわせてから、こちらの考えを話すこと。』

二日目の朝の新聞には『第十八炭坑の争議円満解決』という見出しがでた。

支配人はターンブルを事務所に呼んでこの事件を取り扱つた方法について感謝し、会社の地域代表

者たちにも万事を報告した。こうしたことが炭鉱地方の各所にくりかえされるようになって、その結果が生産凶表にまで表われてきた。第十一炭坑の支配人は、三ヶ月間に欠勤から生ずる生産低下の八割までを喰いとめることができたと推定した。

カレドニヤ炭坑では、一日三百トンの生産増加が報告されている。シドニー炭鉱のプリンセス炭坑では、それまで一ヶ月に二度ぐらいの作業中止があつたが、MRAの運動にふれて以来、数ヶ月間一度の作業中止もなかつた。

米国炭坑労働組合(UMA)に属するケーブプレントン地方組合の委員長はかつてその地方の怠業運動の始唱者で、一日一万九千トンの生産率を九千トンにまでひき下げたこともあるが、組合のなかに『協力委員会』(Pull Together Committee)をづくり、他の組合幹部や経営者側の代表も集めていくたびか会議を開いたのち、坑夫がその職場を交換するようにしたら、さらに生産増加になるであらうとまで提唱した。

カナダの労働相は、首都オッタワから次のような電報を送つてきた。『労資ともに来るべき明日の困難を克服するために、新しいチームワークの精神を必要としている。本省には、MRAの一群がこの緊急要素を生み出すために非常な貢献をしているという多くの実証が集まつている。』

ハリファックス・クロニクル紙の社説は、『MRAがわが国の戦闘力にどれほど多く寄与しているかは筆紙に尽しえない。』とのべた。ノバスコシヤの炭鉱労働局ではMRAの努力によつて、その地

方に送り込まれた百名の共産党員の努力を全く無効にしてしまったと発表した。

四年後に、ノバスコシヤの副知事がイギリスにメッセージを送った。

『劇「忘れられた要素」は未解決の問題に対する根本的解答である。今日世界に横行しているイデオロギーは、われわれが「忘れられた要素」によつて与えられる光に従つて処理せぬ限り、万事を破壊する結果になるであろう。私は心からこれに賛意を表し、世界が今日直面している広範な問題の中心にまで、そのメッセージが達するよう衷心より望んでいる。』

四

現代国家では、イデオロギー的訓練を受けた人びとのみが鍵をにぎつてゐる。平時にも戦時にも、その人びとの双肩に国の運命がかけられている。

平時における彼らの責任は、砲弾を一発も用いずに国を占領しようとする無法なイデオロギーの攻勢から国を守り、国内及び国際間の団結統一を計り、平和を恒久的にし、世界を再造することである。

もし一度戦時となるならば、この人びとの使命は国にゆるぎない信仰を与え、国内の工場、港灣、炭坑等を誤つた唯物主義や反戦主義の人生観による計画的侵入から防ぎ、真のデモクラシーの使命を伝え、そのいうところに多くのものが理解をもつて加わり、全世界の支持を受けるまでにしなければならぬ。

らない。

今日のデモクラシーにとつて、これは最大関心事といわねばならない。各国は、平時にも戦時にも、幾百千万の大衆を獲得し、彼らの共感を起こさせる訓練を受けた強力な一群の人びとをつくり上げる秘訣を学ばねばならない。

第6章 東洋と西洋の使命

物質万能主義のあらゆるイデオロギーに勝るイデオロギーは、同時に東洋と西洋の両方にうけいられるものでなければならぬ。それは東洋と西洋の人びとの使命について、予言者的な構想を与えるものである。

『アジアに対してどうあるべきか。』ということとは、西欧の政治家の頭を悩ましている最大の問題である。コロンボ、シドニイ、ロンドン等で開かれた大英会議は、アジア地域への経済的、技術的援助計画を開始させるとともに、ビルマへの借款を成立させた。アメリカもまた一九五〇年九月十五日に同国への借款を決定した。他の東南アジアの国々には現にワシントンから経済援助を受けているか、または将来に受けるのを期待しているかいずれかである。

中国で不成功におわつた経済援助が、この地域では、はたして成功するであろうか。西欧はソ連や中共が思想を注入しているのに、ただ金を注ぎこむだけでよいのであろうか。いかなる技術的、財政的の援助計画も、イデオロギーの援助計画によつて補足すべきでなからうか。もし西欧がこれに失敗した場合には、底知れない穴に経済的援助を流し込み、再びこんどの大戦のジレンマをくりかえす

か、援助を中止して共産主義の支配にこの地域をゆだねるか、二つの道しかないのではなからうか。アジア自身もまた一つのジレンマに陥っている。ソビエット化か西欧化か——しかしそのどちらも望んでいないのである。

東洋の民族は西欧の考え方に対して、ほとんど興味をもっていない。インドの首相パンデット・ネールは韓国問題に際してそれを明らかにしている。彼は『西洋は東洋に愛されるようにならなければならぬ。』といった。

ダブリンで最近開かれた世界議員会議の席上で、白色人種に対し激しい悪感情をもつたアジア代表の発言を聞いてアメリカ代表が驚いたという。何百年というあいだ、白人たちは東洋の無数の人びとに対し絶対優位の態度をもちつづけてきた。しかし産業的に、イデオロギー的に目覚めたアジア人は、この態度に反感をもちはじめたのだ。

ある東洋人の訪問を受けた西欧のある首相は『東洋諸国に独立を与えても役に立たない。独立してからも彼らは内戦をしているではないか。彼らには独立の資格がない。』と語つたが、この言葉は西欧にさらにある態度のあらわれである。

あるビルマの婦人はこの会話を耳にして、ほほえみながらいつた。『いつたいヨーロッパの人たちにそんなことをいう資格があるでしょうか。あの人たちは私が生れてから二度も世界大戦を起こしてひじょうにたくさんの人を殺しています。まあお互いに相手を批判するのはやめて、東洋と西洋とが

いつしよに新しいものを学んでいこうじゃありませんか。』

—

この人は、国外で最もよく知られているマ・ニエン・タと呼ばれるビルマの婦人であつて、東洋と西洋との融和をきずくために努力をしている人である。

彼女はバツキングダム宮殿でイギリス国王に非公式に拜謁を賜つたこともあり、マハトマ・ガンジーの小屋の土間にすわつて話したこともある。ガンジーは非常に深い印象を受け、あとで、『あの人がすつかり気に入つた。』と語つたという。またルール地方の炭坑夫の家や、ロンドン東地区の労働者の家にも泊つた。イギリスとアメリカから世界放送をしたこともある。ホリウッドの野外劇場では三万の聴衆が彼女の話聞いた。あるトルコの新聞は最近彼女を評して、『アジアの最も賢い婦人』と書いた。

マ・ニエン・タは二十一才で、ビルマのある女学校の校長になつた。その学校はビルマで最も古い、有名な女学校であつて、六百五十名の少女の生徒がいた。そのころ、彼女はあまりテキパキしてゐて近づきにくい婦人であつて、『まるでビルマにいるイギリスのお役人さまのようだったのでしよう。』と彼女は笑いながらいう。ところがある日、ある生徒たちが反抗して抗議文を新聞に投書した。彼女は怒つた。自分の仕事に自信があつただけに心に受けた痛手は大きく、いたたまれずにラング

ーンに逃げて行つた。彼女はこう語っている。

『ラングーンで神さまが、あの少女たちのことについて私に教へてくれました。私は少女たちを憎んでいたこともわかりました。また私が校長になつて、のぼせ上つたのだということもわかりました。のぼせて頭が大きくなると、心が小さくなります。』

マ・ニエン・タは学校に帰つて、少女たちにあやまつた。意外なことには、少女たちはもちろん先生のなかにも、彼女をこわがつていたというものが出てきた。前にはそんなことを誰も彼女に向つて絶対にいわなかつたのだが、こうして融和ができあがつた。

マ・ニエン・タは絶対的道德標準の必要を知るようになった。相対的標準による愛とか正直とかいうものが彼女と学校を分裂させ、たがい信頼感を与えなかつた。絶対正直と愛とが受け入れられたときに、一致と融和とが生まれた。そのことが学校で真実として通用するならば、一国においても通用する。それ以来、それが彼女の世界に与えているメッセージである。

一九五〇年の九月にコーでマ・ニエン・タは、真黒にたばねた髪に花をさして、輝いた眼と、表現的な指を上手に使いながら、音楽的な声で、全世界から集まつた代表に話した。

『私は中途半端な標準はすきではありません。朝飯の卵がある程度新しければよいという人があるでしょう。ある程度の雨なら防げるという家に住みたいという人はありますまい。大体沈まないだろという船なら乗つてもよいという人はありますまい。決つた給料の全部をもらわなくてもよいと

いう人もないでしょう。正直、純潔、無私、愛がMRAの標準なのです。そして、それはみんな絶対の標準なのです。百パーセントです。人間は四つの脚のテーブルのようなものです。一本が少しでもほかの三本より短いと、ちよつとさわつてもグラグラします。体裁がよくても、安全じゃありません。ランプをのせたら床に落ちて、火事になるかもしれませんよ。

絶対の道義標準に従つて生きたならばどうなるでしょう。澄みきつて、せいせいした清水の池のような人になり、誰もがそれを飲んで新しい生命を見出します。ところがそのうちに木の葉が一枚落ち込み、石が、茨が、枝が落ち込むこともありましよう。そしてそれが底に沈みます。誰かが池をかきまわすと、誰もその水のをむことができなくなります。しかしきれいに掃除をし、木の葉や枝をとつてしまえば池をかきまわしても大丈夫です。池は澄みきつて輝き、飲んだものは誰でも新しい生命を得られます。そのような掃除はいつも大切ですよ。』

ビルマの国家記念日に放送を依頼されて、マ・ニエン・タは次のように話した。

『不正直に対する答は何でしょう。不正直に対する答は正直な人間なのです。正直に足が二本はえて歩くのを見たいものです。それはそうと、みなさんはみんな足を二本お持ちですね。』つづいて彼女はいった。

『私たちにごたごたがあるのは、私たちがみんなわがまま、つまり個人主義だからです。それを英語で Individualistic と綴ると、五つのI—すなわち自分があつて、U—すなわちあなた、或いは相

手は一つしかありません。ところが融和 Unity の綴りにはUが一つとIが一つあるだけで、しかもU―すなわち相手が先にあります。私たちが人を指さすと、三本の指が私にさし向けられています。』とマ・ニエン・タは人さし指で人を指さしてみせた。

ビルマをつくりなおすために、マ・ニエン・タは戦いはじめた。ビルマでも、インド、中国、ロシアのように人口の九割までが農民である。このような国ぐにに一つのイデオロギーがうけ入れられるには、農民の生活にあてはまるものでなければならない。MRAの感化を受けたあるイギリス人がビルマのある地方に行ったが、その辺にはビルマ人、カレン、中国人、インド人、ヒンズー教徒、回々教徒、キリスト教徒、仏教徒が住んでいた。この人が正直に村の人びととつきあつたら、村の人びとも正直になつた。村の人びとは改変チェンジの秘訣を学び、他の人びとを交えるようになった。

マ・ニエン・タに水牛を話してもらおう。

『この村の一人が水牛を一匹なくしました。ビルマでは大事件です。水牛がいないと畑を耕せないからです。どうしたらよいでしょう。ビルマの諺に「何かをなくすと、十度も地獄に陥る」といつていますが、そのわけは誰が盗んだかと考えて他の人を疑うからです。しかし、この村の人びとは神に聴くことを学んでいました。聴くと、ある近所の村に出かけて、その村の村道のまんなかにある大きな樹の下で夕飯を料理したらよいという考えが浮びました。そこで彼らは出かけて、お米とカレーの料理をはじめました。だんだんとその村の人たちが畑の仕事から帰ってきて「あの樹の下にいるのは

誰れだ」とたがいにふしぎがつていましたが、やがてみんながぐるりと取りまいて坐り込みました。料理をしている人たちは水牛のなくなつた話にはふれずに、自分たちは絶対正直を学んでいるということを話しはじめたのです。体験を話せばそれは心から出て相手の心に入るものです。意見をのべるのでなく、真実をもととするからです。まもなくまわりの人たちは立ち上つてどこかへ行つてしまいました。この村は、乱暴者のいる村だつたので少し心配になりました。しかしその人たちは帰つてきて、「もしもし、あんたたちは水牛をなくしたんじあないかね。実はわしらがとつたんだが、もう食つてしまつて、返すことができない。」といい、それで弁償したいというのです。持主だつた人がその水牛は六十ルーピーするといいますが、盗んだ人たちは八十ルーピー払うといつてききません、それでその差額の二十ルーピーでみんないっしょにふるまい合つたのです。

これでお分りと思いますが、この村むらは、ある国ぐにやある人種や階級のように、たがいに争うかわりに、誰が正しいかでなく、何が正しいかという偉大な智慧に耳を傾け、どうしたらよいかを学びました。その結果はおたがいに友たちになり、融和するようになったのです。』とマ・ニエン・タは話を結んだ。

その村の精神がその地方全体に拡がった。その地方の責任者である政府役人は村の主だつた者から『賄賂をやめたい』と要求された。この役人はできの良い方だが、——腐敗した政府の役人というものがビルマの大きな問題の一つになつてゐる——彼は要領よく『あなたが賄賂を出さなきや、私たち

は取ることができない。』と答えた。

その結果、木材切り出しの許可書の費用が、賄賂を出していたところとくらべると六十分の一になった。

また、この地方では米作をしていたが、土地が適さないので損ばかりしていた。ある朝、みんなが集まつて神に聴くと、他の穀類すなわち「矢の根葛」がそだつという考えが浮かんだ。いろいろ研究のすえ、この地方から産出される「矢の根葛」が全国一のものであることがわかった。

また、この村での酔っぱらいが九割も減つて、この地方の平均負債は二百ルーピーから五ルーピーに減つた。

日本軍がビルマに侵入した当時、ほうぼうで内乱や殺戮があつたが、この地方は平穏であつた。前にはたがいに盗みをはたらいたり、しばしば殺し合つていたこの地方が日本軍から没収される危険に直面し、たがいに持物を保存し分ち合う計画をしたので、他の地方いつたいが飢饉になつた場合にも難をまぬかれた。

終戦後、この地方にはいろいろの民族が住んでいるにもかかわらず、また他の地方には内乱や流血の惨事が起つたにもかかわらず、こゝには平和と融和とが続いたのである。闇市場もまつたくなかつた。他の地方では刑務所はいつぱいであるが、ここではほとんどからつぽである。

アング・サン將軍が首相であつたときにわずか三十時間の旅行であつたが、このイデオロギーが実

際におこなわれているのを直接に見てきた。それはこの地方に住む二万の住民がその村に集まつてMRA大会を開いたときのこと、彼は『これこそ私が全国的にひろげたいもの。』といった。

アング・サンと七名の閣僚が暗殺されたとき、アング・サン未亡人に大臣の待遇が与えられた。未亡人は一九五〇年六月にギルセンキルヘンのホイットサンMRA大会に出席し『私も主人といつしよにビルマのある地方でMRAが実際に働いているところをみています。MRAは融和と団結を与えています。現首相タキン・ヌー（註——彼は一九四九年にコーの大会のフランク・ブックマンにメッセージを送った。第2部20参照）も融和と正直とを欲しています。MRAの助けによつてこの目的を果したいと思いません。』と語つた。

一九五〇年にタキン・ヌーはマ・ニエン・タの友人でこの村むらに解決の道を示したイギリスのラングーンの聖公会監督ジョージ・ウエスト師のすすめによつてロンドン訪問を思い立つた。

このイギリス人は、当時英国政府はもちろん誰もがタキン・ヌーがビルマを離れることは絶対不可能であると思つていたとき、マ・ニエン・タにいわせれば神に導かれて、英国ウエストミンスター・アペイ会堂で催されるビルマ戦没英兵慰霊式に同首相を招待した。タキン・ヌーはその招待を即座に受諾した。

一九五〇年九月、彼の訪問以来四ヶ月目であるが、タイムズ紙はその主要ページをさいて、ビルマの事情が目に見えて改善されたと次のように記載した。

『現首相は数ヶ月前はほとんど絶対に不可能と思われていた困難を征服し、当局に反抗するすべてのグループに対して現政府の道義的優位を護りつつ、ついに反乱グループは次から次と降服し、現在有利な条件で平和が回復しつつある。』

最近彼が訪問したとき、ロンドン在住のビルマ人が彼のために催した晩餐会の席上、首相は『イギリス国内で正直な生活をせよ。それによつて諸君は諸君の国の真の大使になることができる。またイギリス人と融和を保つべきである。』と話した。

彼はフランク・ブクマンの家を三度も訪問し感謝の辞の中で『ここには西欧各地にない温かみと理解がある。』といった。

二

タキン・ヌーの訪問後数日して、インドからきた有力な客が同じテーブルについた。その一人はインド労働総同盟副会長ダイヤラム・ペリであつた。彼は五十余年の生涯の大半を英国刑務所のなかで過した。彼はまたインド独立のための激烈な闘士であつた。彼は鋼鉄のような魂をもつたまじめな人物であつた。

彼はコーで、MRAによつて改変したイギリス人に出あつた。彼はイギリス人の変わる必要はみとめていたが、彼らが変わることはあり得ないと思つていたので、これがペリの心を捕えずにはおかな

かつた。そこでそのようなイギリス人にもつと会つてみたいと思つて、彼は訪ねてきたのである。

食事はカレーだつた。インドからきたお客が一口食べて『ヨーロッパの人にはこの料理の味付けはでない・・』という、すかさずベリは『誰が料理したのですか。』と尋ねた。

パキスタン海軍の上級将校の夫人が夜通しかかつてカレーの料理をしたのであると聞かされると、彼はフオークをおいていつた。

『信じられない。パキスタンの婦人が夜通しかかつてインド人のために料理するとは、回々教徒がバラモン教徒のために？ カシミヤでは戦争しようとしているのに。』

それから他の客の方に向いて、

『もうこの人たちは私の家族です。私はMRAを心に入れて、この人たちと一緒に、いままで憎んできたイギリス、二十五年間も私を刑務所につないだイギリス人の国を旅行しようとしているのです。』

そして、それをベリ氏は実行した。

MRAがインドに最初に大きな影響を与えたのは、あるイギリスの役人が東の人びとの心を捕える最善の道は、まず自分がそれまでインド人の同僚や部下に対して冷たく気位を高くしていたことを認めて謝ることであると決心したときからである。この影響の結果は驚異的であつた。インド人はそれまで白人には『すまなかつた。』ということではできないものと思つていたが、このときからその地方に大きな変化が起こりはじめた。

マハトマ・ガンジーはこの珍らしいイギリス人の話を彼のアシラムで聞いたが、ほんとうのこととは思わなかつた。数ヶ月後に彼はこの話を伝えた者に語つた。『あの話の真偽を調査したが、ほんとうだつた。』と。ガンジーはMRAを評して『西洋の生んだ最善のもの』といつた。

戦後コーは、インド指導者にとつてマグネットとなつた。最初にきた人びとの中にラグナス・ニムカというインドの共産党の開拓者がいた。ニムカの記憶している幼時の経験は、ボムベイ附近の小さな村が莫大な負債に苦しんでいる一方、大都會では商人やイギリス人が贅沢な生活をしていることだつた。両親が儉約して彼を大学に送つたけれども、彼は過激な政治運動に身を投じたために試験に落第してしまつた。

一九二二年に彼ははじめて刑務所入りをした。刑務所から出てきてから共産主義者との関係ができ、後に全インド共産党の創立委員となつた。

一九三三年に共産主義者たちは党の闘争力をためしてみた。しかしカルカッタでその計画が発見され、ニムカは有名な「ミートラット陰謀事件」の首魁として検挙され、十二ヶ月禁錮の重刑に処せられた。のちにそれは一年の禁錮に変更されたが、十二ヶ月の気の狂うような憎しみと沈思とが、鉄格子の中の彼の心にうつ積していた。

一九三九年に彼はILO（世界労働機構会議）の労働代表として選ばれてゼネバに行つたが、そこからモスクワに廻つた。そこで彼は赤い広場を見下す豪華な部屋に案内されたが、最後に彼よりも特

権をもつた客がきたために、ニムカはあまり上等でない部屋をあてがわれた。彼は内心非常に傷つけられたし、党に対して幻滅を感じてモスクワから帰ったが、共産思想についての未練はすてなかつた。

一九四一年にイギリス政府は、「帝国主義戦争」反対運動のゆえに彼を投獄した。一年後にソビエツトが味方となつたので、彼と仲間の共産主義者はインド労働層の支持を得るために解放され、政府の厚生顧問という名目の下に、六千万のアンタツチャブルス（インド最下層階級）の指導者であるアムベドカ博士の指揮をうけることとなつた。

一九四四年にボムベイで起ろうとしていた郵政ストライキ事情の調査委員会に、彼は政府側として加わつた。そのころ、ボムベイ郵政局々長のクリシュナ・ブラサダは彼と六名の委員を自分の家に招待したのであるが、それはタリシュナ・ブラサダが新築した家の披露をかねていたものだった。クリシュナ・ブラサダはフランク・ブツクマンの古い友達であり、MRAをよく知つていた。

ニムカはその家で多方面の人に会つた。タイムズ・オブ・インディア紙の主筆サー・フランシス・ロート、パロダのイギリス上級行政官ライオネル・ジアルディン氏（マハトマ・ガンジーにMRAへの関心を呼び起した人）、エジプトからきた木棉商や、ボムベイ知事等であつた。

ニムカは用心深かつた。彼はハッキリといいきつた。『私は郵便関係従業員の職場問題についての具体的解決のみを考えているのだ。』と。誰も議論をしなかつた。イギリス行政官は簡単に、前には

自分はインド人に対して無関心であり、優越感をもち、まちがつていたから、変わる決心をしたのだといった。

郵便局長は自分が特別に念を入れて従業員の賃金と物価指数との関係について研究しなかつたことをすまないと謝つた。そのとき、エジプトの木棉商は労働者に対して少しもつつみかくさず、彼らの賃金を考える場合には自分の給料を考えると同じ注意を払うようにしていると語つた。ニムカのマルキシズム公式である——社会機構を^{チヤンジ}変革しない限り人は^{チヤンジ}改変せぬ——という主張が、この目前に示された証拠によつて崩壊した。それまで彼は^{チヤンジ}改変は強権発動によつて起こるので自発的な選択として起こることはあり得ないと信じ切つていた。

翌日煽動家のニムカが、イギリス行政官のジアルディンが泊つていたタジマールホテルにやつてきた。一生の間うつつ積していたはげしい不平が彼の口からほどばしりてた。彼はイギリス人に向つて遠慮会釈のない攻撃をした。

『百五十年イギリスの統治下にあつたインドの貧困状態と同じものが世界のどこにあるか。あなた方は栄養失調のわれわれから取りあげた莫大な恩給金をもらつて隠退する。何百万の巨大な富を国外にもち出してしまふ。その上、われわれのところに来てMRA（道義再武装）を説く。われわれは宗教的な人間だ。改^{チヤンジ}変の必要なのはあなた方だ。』と。

ジアルディンの心にはたくさん自分の自己弁護がこみあげてきたが、彼は素直に自分のようなイギリス

人が多くのまちがいを犯したことを認め、これからはそれを改めて行きたいと思つてゐるということを語つた。

ニムカの憤怒はこのような素直な正直の前にとけ去つた。しかし彼の懷疑心は消えなかつた。

彼の疑問に対する反証は、クリュシナ・ブラサグが郵便従業員の危機を処理した方法のなかに見出された。政府と労組との正面衝突ではじまつた問題が、結局下級従業員八千人の賃金値上げという点に一致した契約によつて解決し、間接には他の八万の従業員の賃金にも影響を与えることになつたのだ。

ニムカはデリーにもどつた。MRAの原理には賛成するようになったが、自らそれを実行するまでにはならなかつた。彼は上司であつたアムベドカ博士との意見衝突からその職を辞したが、ちようどそのとき、五千の紡績工争議が起こつてそれにまき込まれた。十八日間のハンガーストライキによつて争議は激化されていた。そのストの最中に、彼はジアルディンの友人であつたイギリス人から彼の安否を問う温い手紙を受け取つて驚いた。ニムカは後で『苦しんでゐるときにああした態度を示してくれたことは、如何なる議論よりも力強いものであつた。』と語つた。

彼はコーへの招待を受けた。パンデット・ネールとマハトマ・ガンジーは大賛成で、帰つたならば報告を聞きたいといつたので、彼は招待を受け入れた。そしてコーへ行つたことが彼の生活にとつてひとつの大きな転機となつた。彼はコーを去るときにいつた。

『数年前、私は労働者以外の者は全部憎んでいた。イギリスの帝国主義者はとくにひどく憎んでいた。ここで多くのイギリス人に会い彼らが自己の誤ちを認め、^{チェンシ} 改変しているのを見て非常に感動した。私は握手をしていいたい。「インドとイギリスがいつしよに努力すれば世界再造の大きな力になる」と。』

彼はアムベドカ博士に手紙を送つて、自分が怒つたことと、そして頑固なために厚生顧問の職を辞任したことについて謝つた。この手紙がついたとき、アムベドカ博士はインド憲法討論の困難な場合に遭遇していたが、その手紙がこのインド最下層階級指導者の心を非常に動かしただけで、その後の彼の討論の論調に大きな影響を及ぼしたという。それが憲法討論の転機ともなつた。

彼がインドに帰つたとき、国内の民族不和が起こつていた。ニムカは新聞記者に『こうした不和の状態はインドの自由を脅かす敵に乗ぜられる機会を与えるものだ。M R Aはこうした事件に第三の道を示すことができる。』と語つた。

一九四七年初頭に彼は賃金・職場事情調査委員会の委員長になつた。一九四八年四月に彼はその報告書を完成したが、それは労資双方の代表によつて受け入れられた。しかもそれは経営者側にとつて大譲歩を意味しているものであつたのだが……。

労組指導者のムケアルジはインド与論に衝撃を与えたこの一致についてこう説明した。『彼のもつていた確信の力が、周囲の者をみんな改変^{チェンシ}させたのである。』と。

かつての共産党パイオニアであつたニムカは、一九四八年にこの世を去るまで、マルキストと経営者代表たちをコーに送るために努力した。彼は労資ともに、彼が発見したこの偉大なイデオロギーの力を必要としていると感じたからである。

パンデット・ネールを首班とする企画委員会の副委員長は次のように述べている。

『ここに利己主義、貪慾、その他すべて人の魂を破壊するものを改変し得る力がある。私はMRAに会うまでは、普遍的に適應し得る満足な解答をもつた思想が存在すると自信をもつていい得なかつた。』

(註——一九四六年ニムカがコーを訪問して以来、MRA大会に出席したインド指導者の中には政府関係者が二十名あつた。その中にはウエスト・ベンガルの首相ロイ博士、インド企画委員会副委員長ガルザリラル・ナンダ氏、同委員サー・クリシュナ・マキアリ、ビハール州労働大臣ジンナー氏、国連事務次長前インド労働大臣ラル氏、電通次官クリシュナ・プラサダ氏、前国連経済社会委員会委員長サー・ラマスワミ・ムダリアー等があつた。)

コーに來訪した労働指導者の数は十七名であるが、その中には十三名の労働総同盟の会員、副会長、書記長及び幹部があり、一九四九年度総同盟会長シャストリー氏もコーに來訪した。

産業界代表としてはタタ産業の重役五名のほか、ダルミヤ・ジエイン工業の社長セス・ラムクリシエナ・ダルミヤ氏、前インド商工会議所会頭サー・シュリ・ラムもいた。

一九五〇年コーにおいて、東と西との人びとの間に融和一致が可能であるという印が、パキスタン

とインド独立記念日に示された。(註——コーに出席したパキスタン代表は次の通りである。パンジャブ知事
政治顧問マリク・モハメッド・アンワー・カーン氏、フアルキ大將、パキスタン海軍軍令部長ハジール・モハメッ
ド・シデク・チュードリー提督、ラホール商工会議所会頭ザウル・アーメッド氏。イースト・ベンガル首相ヌルル・
アミン氏の声明については第2部26参照。)

新しい国旗が三人のひとによつて全大会出席者列席の下に掲揚された。ひとりはモハメット教徒
で、彼の住んでいた地方がインドに譲渡されたとき、所有財産を後に残して来なければならなかつた
人、他はインドの革命運動者でその首に賞金のかかつていた人物と、彼を追いまわしてようやくコ
ーで出会うことになつたイギリス官憲のひとりの三人であつた。

この光景を見た者は、シンナー氏がロンドンを訪問した時、その最後の夕べをMRAで過し、そこ
でいつた言葉を思い出した。彼がきたときは神経が興奮し疲労の様子であつたが、だんだんと時がた
つに従つて打ちとけて、彼を知っている誰もがかつて聞いたことのない語調で話し、そこを辞する前
に『諸君はここに世界の憎しみに對する答をもっている。』といつた。

二

ネールがいつた『西は東の人びとの心を勝ちとらなければならぬ』という言葉を思いながら、一
九五〇年九月にインドからフランク・ブクマンのところに来た手紙を引用することは意味がある。

(第2部25参照。署名者中には企画委員会副委員長と三名の委員、労働総同盟会長、マドラス大学副総長、ウエス・ト・ベンガルの首相、ユナイテッド・プロピンスの教育大臣、ビハー州労働相及びタタ工業社長があつた。)

『社会的経済的状态に永続的な変革^{トランスフォーメーション}をもたらし、世界に平和を築くための真の希望は、MRAが成就したと信じられる多くの実際的な結果を、幾層倍にしていくことであると我われは確信しています。……道徳の再武装こそ各国にとつて時代の必要であり、将来に対する希望でもあります。……今年冬、貴下並びに国際チームの方がたがインドに来てくださるといふことは非常な喜びであり、貴下の御体験を通して得るものが頗る多いことと今から楽しみにしています。……ご一緒に協力して全世界を危機から解決に導くことに成功し、経営者と労働者、左と右、東と西を結ぶ包含的イデオロギーを實際に示すようにせねばなりません。』

第7章 全アジアは耳を傾ける

レーニンの考え方と、発言のなかにはいつでもイデオロギーが土台になっている。かつて彼は、クレムリンからホワイトハウスまたはダウニング街十号館（英首相官邸）への近道は北京やカルカッタにあるといつたことがある。

東洋におこるいろいろの事件は、彼の理論の力強さを証拠だてている。ロシアはアジアへ進出してワシントンとロンドンを震駭させ、それが今日の国際関係を緊張させるものになっている。

自由世界の政治家は、どうしたならばアジアにおける正しい影響力をもちうるだろうか。

たとえば、どうしたら日本のイデオロギーの空白を満せるであろうか。決定的な敗戦が日本に新しい憲法を与えることになり、この島国の生活にデモクラシー社会の構想が与えられたのである。しかし数マイルの彼方には、ロシアと中共の海岸線が横たわつていて、その数億の人民の生活を支配する思想は、以前から海を渡つてこの国にきている。日本の運命を決定する鍵は日本の国土にいる八千万の国民の手中にある。

一九五〇年七月二十八日にワシントンで特筆すべきことがおこつた。広島と長崎に原子爆弾が落ちて以来僅かに五年足らず、真珠湾以来約九年しかたつていなかったが、アメリカ開關以来はじめて日本の代表が米國議会上下両院で話をしたのであつた。(註第2部28参照)

彼らはコーの大会出席のために世界のうらがわから飛んできた七十六名の日本代表団の人びとであつて、東京への帰途であつた。

ニュー・ジャージー州選出、アレキサンダー・スミス上院議員は、日本代表団の一部である国会議員を上院の議席に案内した。他の代表は傍聴席についた。

アメリカ副大統領アルビン・パークレー氏が代表団を紹介した。その後で、政府与党を代表して栗山氏が挨拶した。

栗山氏の話は少くとも七回、万雷のような拍手を受けたが、拍手は議席のみでなく、傍聴席からもおこつた。話の終つたとき、上院は全部起立してこれに応えた。栗山氏は語つた。『われわれはデモクラシーの真の内容を研究するためにコーへ行き、日本のデモクラシーを養うに足るイデオロギーと、共産党に対する偉大な解答とを発見した。』

さらにアメリカの寛容の精神と、日本の復興に必要な援助とに対して感謝した上で次の如く述べた。『われわれは心から日本の行つた大きな過ちに対して遺憾の意を表したい。われわれはほとんど一世紀も継続した両国の関係を断絶したのである。』

上院議席も傍聴席も水を打ったように静まった。相手国からの正直な謝罪が、強く強く彼らの心を打ったのである。

下院においても、代表団は同様な温い歓迎を受けた。下院においては前大蔵大臣北村氏が一行を代表して挨拶した。『われわれ日本人は共産主義に対する解答と、極東に真のデモクラシーを建設するためにその基礎を与えるものを見出す責任を感じている。』と述べ、更に彼は語をついで日本代表団はその答をコーにおいて見出したと語った。

敗戦日本にとつての緊急事は経済復興であると考えていたが、それよりもはるかに根本的な復興が必要であること、真の経済機構を建設できるもとななる道徳的基礎をM.R.A.の中に発見したと結んだ。ニユーヨーク・タイムズ紙は、一九五〇年七月二十九日の社説で大要次のように論じた。

遺憾ながら個人の間でも、国際間でも、昨日の味方は必ずしも今日の味方ではない。それと反対に、昨日の敵は必ずしも今日の敵ではないということもある。……平和と親善は、非常に激しい衝突の後でも回復され得るのだ。広島と長崎の市長が昨日の訪問者たちのなかにいた。彼らも赦す立場にたつと感じたとしたなら、すでにゆるすという奇蹟を彼らは実現している。実にその瞬間、現在の暗黒を通して、将来人類がすべて兄弟となる日をかいまみることができた。

この歴史的事件はどうして起こったか。

一九四九年にマッカーサー司令部の許可を得て、終戦後はじめての主な代表団がヨーロッパを旅行してコーにきた。総計三十四名に達したが、その首席は、戦後の最初の選挙で選出された首相の社会党党首片山哲氏であつた。(註。その他には前駐米大使堀内謙介氏、前大蔵大臣北村徳太郎氏、広島選出議員山田節男氏、中央労働委員会事務局長鮎沢博士、及び朝日、毎日両新聞論説記者がいた)

片山氏と同時期に来訪した人びとの希望によつて、一九五〇年の春、二人のMRA関係者が日本をおとづれた。彼らが町から町を訪問したあと、工場にそして町々に、MRA細胞が生れていつた。彼らはまた日本の軍部が専横を極めた時代をとおして、MRAの焰を消さずにした人びともあうことができた。

彼らの話に対する反響は大きなものであつた。数ヶ月間に七十六名の日本の各界指導者たちが、彼らの国のイデオロギー的解答をうるためにさらにMRAを学ぶ旅行を決心をしたのである。

三

この代表団は、戦後日本から海外に出た最も有力な政界、産業界、公共団体の指導者をふくめていた。七名の知事、衆参両院にぞくする、自由党、改進黨、社会党各党の議員、広島、長崎、神戸、長野の各都市の市長、経営者代表、労働組合代表、および教育、新聞、ラジオ関係の指導者たちであつた。

これらの人びとが日本を出発する前に、吉田首相は送別午餐会を催し、その席上で次のように述べた。

『一八七〇年にも一団の代表が西洋に旅行したことにより、日本の生活が一変した。今回のこの代表団諸氏が帰朝されたときには、わが国の歴史に新しいページを加えることとなるであろう。』

代表団は帰国の途次、スイス、ドイツ、フランス、イギリスを経て、アメリカを訪問した。コーには三週間滞在し、戦勝国や戦敗国の政治家や産業指導者と直接にふれあう機会を得た。

ドイツではアメリカの最高弁務官がボンの官邸に代表を招待した。ドイツ連邦共和国首相アデナウア博士は公式歓迎の席をもうけ、代表団にむかつてコーをよく知っていることと、ブククマン博士が国際的団結と社会正義のために偉大な貢献をしていることについて述べた。(註。ドイツ連邦共和国副首相ブルユッヘル氏は復興大臣のウイルドムット博士、避難民大臣ルカシエツ博士、労働大臣ストーク博士とともに代表団を招宴した。ベルリン、コローン、デュースブルグ、デュッセルドルフ、エッセン、ギルセンキルヘン、ハンブルグ、ブレーメン各市長もそれぞれ招宴した。)

十一名の代表はベルリン市長エルンスト・ロイター氏の招待で同市に飛び、広島市長浜井信三氏は、広島建設以来四百年を経た楠で彫った十字架をロイター市長に贈った。この樹は神木であつて、その根が道路やベープメントの下に拡がって道に凸凹をつくつたが、神木の根であるので伐りとることをしなかつた。原子爆弾によつて幹は消滅してしまつたが、その根は生き残つた。この根から十字

架がつくられたのであつて、樟腦の香がふくいくとしていた。

代表団の一部の人びとはローマを訪問、法皇に謁見し、イタリー政府関係者と面接した。全員パリとロンドンを訪問し、民間および政界の公式招待を受けた。

四

日本代表団はその世界旅行中、国内融合の秘訣について代表団自身の中にその型ともいうべきものを見出した。

その中には当時、大阪警視総監だつた鈴木栄二氏がいた。彼の仕事は危険である。妻は朝、彼がかけるとき、その夜無事に帰つてこられるかどうかを心配しなければならぬほどであつた。それは彼の職務遂行について、大阪市民の一部に非常な反感憎悪をまきおこしていたからである。

彼は大きな体軀のもち主で、職務にふさわしい厳しい顔つきであつた。代表団中には、彼とは対称的な立場にあつた前産別会議全金属労働組合役員の中島勝治氏がいた。

中島氏は総監の半分ほどの背丈であるが、強い闘争力を宿していた。彼は広島で原子爆弾に遭遇し、いまなおその影響に悩まされている。思いやり深い夫であり、父であり、仕事のかたわらには美しい絵を描くこともある。

しかし、彼の総監に対する憎悪の感情があまりにも強かつたので、世界旅行の機上、一言も交わそ

うとしなかつた。

眼鏡のかけには火花がかくれていた。しかし、ある日コーで彼が総監を訪れて、彼のもつていた憎しみについて謝つたとき、涙がその火花を消した。人類兄弟主義を説きつつも、人に向かつてこのような憎しみをもつてゐることは全く矛盾しているということが解つたと彼はいつた。

翌日総監は大会の席上で立つて、各国から集まつた千四百の代表の前で、中島氏に向かつて、彼がもつてゐた社会主義者や共産主義者への憎悪の念をわびた。

『私は君の心に強く動かされた。私の心には連鎖反応が起つた。私は共産主義には反対であるが、共産主義者に対して長い間もつてゐた憎悪の念がまつたくとれてしまつた。』

他の国からきたある人——日本に長く住んでいて、日本人の遠慮勝ちの性質と正しい意味での自尊心についてよく知つてゐる人が、この事実を目のあたりに見て、ただきいただけであつたらば、決して信じられなかつたであらうといつた。

日本国會議員の一人は

『日本への最大の贈物である。日本を分裂させる内乱に解答を与え得るものである。』といつた。

中島氏と総監とは、憎悪に対する解答と全東洋を團結させる秘訣を示すため、ともに戦う決心をした。

一九五〇年八月六日——広島原子爆撃五周年——の夕べ、アメリカを離れる直前に中島氏は別れの

挨拶として次のように述べた。

『私は労働運動のための唯一の武器として憎悪を用いてきた。コーにくるまでは、アメリカ人と資本家に対する憎悪の念が組合員をはげます唯一の思想根拠であると信じていた。しかしコーで、憎悪は私の心の問題、私の家族の問題、同志である労働者の問題に解答を与え得ないと知った。私のうちにあつた憎悪の念を取去ることは、広島で肉体に受けた大衝撃以上の精神的衝撃であつた。日本にとつても、世界にとつても、これは唯一の道である。言葉をもつて私のいわんとするところを十分表現できない。どういつたならばよいか分らない。しかし私は明日ここを去るに當つて、われわれの心はしつかりと互いに結び合つていとう固い信念ができた。日本につくとたくさんの友人が私を待っている。その中には共産党の人びともいる。コミニストの友人たちは、多くの質問をあげせかけるであろう。——たとえば、私はアメリカで何を見たか、等々と。彼らに対して私はこういおうと思う。

「日本とアメリカは結ばれねばならない。しかし、どうしたら結ばれるか。日本が今先ず変らねばならない。しかし、アメリカもまた変わる必要がある。新しいイデオロギーが日本とアメリカを結びつける。改変オージェンシブと融合フュージョン、この二つが世界に真の平和をもたらすのだ。」東洋の一角にはすでに血が流されている。しかし、どうかわれわれがすべてを投じて、新しいイデオロギーのために戦つていゝことを覚えてもらいたい。』

この代表は帰国後、人びとに呼びかけ、集会や新聞やラジオを通じて語つた。彼らは実際にこの建

設的イデオロギーが生む新しいチームワークを示している。保守派と社会党の人びとが協力したり、いつしよに講演をしたりしている。公開の席における謝罪や融和の起つてゐることは、これらの人びとが自己の信念を実行に現わしている証拠である。

国会議員の一人がいつた。『MRAのイデオロギーは日本の社会のあらゆる層に浸透するであろう。』鈴木総監は便りの一節に『二つのことが大衆を感動させています。——私自身のコーにおける改変（チェンジ）と、世界最高のイデオロギーの実践です。この国の復興のため、私はMRAを日本に拡大する固い決心をもつています。』と書いています。

五

イギリスの日刊新聞オブザバー紙の一面に掲載された声明の中で、彼らは今度の旅行がアジアに対してもつ重大な意義を次のように述べている。

『ロシアがアジアに進出したのは、ソビエツト政府がイデオロギー戦の技術を知っているからである。彼らは大衆の心をめがけているのである。われわれは西欧の政府と大衆に訴える。——貴方たちも同じ努力をしてもらいたい。——きたるべき世紀のイデオロギーたるMRAの理論と実際とに通ずるものとなつてもらいたい。そのとき、全アジアは耳を傾けるであろう。』（註第2部30参照）

第8章 岐路にたつアフリカ

アフリカ大陸には一億五千万のアフリカ人が住んでいる。三世紀にわたつて奴隸船がやつてきて、鞭と鎖をもつた商売人が人間を荷物として積み込み、それを世界中に引きずり歩いた。また過去百年近く、アフリカ人はヨーロッパ各国の絶対統治下に生活してきたのである。

これらのアフリカ人たちは、百年以上も黄金、ダイヤモンド、木材、ヤシ油、その他さまざまに富が、自分たちの郷土から流れでるのを見ていた。自分たちアフリカ人が労力を提供し、商売人や移民たちが巨大の富を積んでいくのを見ていたのである。

西洋文明の与えた恩恵である政治、法律、秩序、健康、教育、それに加えて働き盛りの生涯をアフリカに献げたヨーロッパ人もあるにはあつたが、アフリカ人としては自分たち自身ですべてを処理したいと望んでいる。現在、世界情勢にめざめたアフリカ人の夢、そして情熱は自治政体である。

彼らは西欧社会の物質主義を知りぬき、嫌悪しているし、東欧の唯物的イデオロギーも未だ彼らの心を捕えていない。しかし彼らを支配する者の権力を破り、彼らの搾取者——と彼らは信じている

——の力を粉碎するものとして、共産主義を歓迎する傾向がある。帝国主義者たちが「共産主義の危険」を指摘することぐらい、アフリカ人をいらだたせることはないのだ。

そうかといつて、彼らはいずれの陣営についたらよいかというジレンマを感じている。彼らの安全と使命とは西欧デモクラシーに属するものであると感じていながらも、感情は東欧の共産主義に走ろうとする。

しかしアフリカ人が東とか西とかいわず両方のために働いているイデオロギーの活動——白人種をはじめ、すべての人種の改変チェンジを土台としたイデオロギーの実際をみると、喜んで受け入れる。

一

この大陸の白人種の大部分は南阿連邦に住んでいる。改変チェンジのイデオロギーがアフリカ在住のオランダ系白人とイギリス人の間に、また黒人との間に、どのような影響を与えているであろうか。

一九四九年と五〇年を通じて『忘れられた要素』は南アフリカで百四回上演され、観客の延人員は七万五千名にのぼり、政府閣僚の半数と議員の過半数がこの劇をみたのである。

議会の両院でMRAの集会在三回にわたつて開かれた。最初は時の下院議長バンコラー氏によつて、二回目は現議長ナウデ氏が（註第2部31参照）第三回目は上院議長ヴァン・ニイカーク氏によつて司会された。

これらの集会があつてから、南阿議會会から四人の議員がコーにいつた。ユナイテッド党から一名、アフリカナ党から一名、ナショナルリスト党から一名である。コーの訪問を終つて彼らはMRAの活動を視察するためドイツ、オランダ、イギリスを訪問した。そのナショナルリスト党の議員は、ロンドンの実業家たちの集会で次のように語つた。

『イギリス人の集会でこんな歓迎を受けるのは自分にとつて非常な驚きである。一生を通じて反英のために戦つてきた私にとつて、それは何か新しいものが生まれてきた証拠だと思ふ。私の父祖たちも反英運動をやつてきた。私は学校で英語を習うことを強制されたが、家に帰るとそれを憎むように仕込まれた。私もまた子供たちに憎むように教え込んだ。』

私はコーで多くのことを学んだのち、ドイツとオランダに行つた。その国々には個人の家庭に泊り、みんなと個人的に話し合つた。ギルセンキルヘンの炭鉱会社の支配人の家で一晩過したとき、教養の高い彼の妻が、夫の炭鉱で働いている共産主義者で労組指導者である男を客としてもてなす有様をみた。私自身反共産主義者であつたが、かつて共産黨員であつた人の家で生涯で最もたのしい一夕を過すことができたのだ。

もしも南阿のわれわれが自分自身を救おうとするならば、国外に目を向けねばならない。われわれの国境はリムボポにあるのではなく、この世界の最後の一人が住むところにあるのだ。』

「忘れられた要素」はあらゆる南阿各層の人びと、ヨーロッパ人、原住民、ケープの黒人、インド

人たちが見た。原住民だけの会衆のため上演したのは、ゴールド・リーフ地方においてであつた。この地方では劇におくれてくる習慣があつたが、開幕の二十分前には大入満員になつた。劇が終ると、会衆は立ち上り大きな感動をもつてズールー国歌を合唱したのである。

その後、各産業地帯とナタルのアダムス・カレッツジおよびラヴディ・カレッツジで原住民会衆のために上演した。ある者がこういつた。『われわれバントス族が向上進歩しない一つの理由は、われわれ自ら融和しないからである。ズールー人が会議の議長になると、バントス人は協力しない。バントス人が議長になると、ズールー人はでて行つてしまふ。』「忘れられた要素」をみてからは、市会の議事もすこぶるやりよくなつた。』とまたバントス族の一指導者は『この劇は人びとの心をなごやかにした。この国で最も必要なものはこれだ。』といつた。

南アフリカでの人種間の闘争はいつ勃発するかも知れない。そのために最近人命が失われている。しかし、こうした紛争が危く未済に終つた場合が幾度かあつたが、この地方の官吏のあるものは、『忘れられた要素』がこの流血の惨を未然に防いだ理由だといつてゐる。

マニラル・ガンジーは「インデアン・オピニオン」紙の主筆であつて、同紙は彼の父マハトマ・ガンジーが創刊したものであるが、彼は家族同伴でこの劇を見にきた。そして同紙上に次のように書いた。『MRAはこの嵐の吹きすさぶ暗黒な世界における燈台であり、これがわれわれを正しい道に導いてくれるであらう。われわれの心を取りまいていた暗黒が取り去られたように思う。』(註第2部32)

参照)これはダーバンのガンジー会館で、人種雑居禁止法反対のインドの夕の實際上演されたときのことであつた。

エラスマスは南阿鉱山労働組合の副会長である。一九二二年、彼は南アフリカ史上最大のストライキを指導した。一万三千のストライキ坑夫が武装ゲリラとして組織され、ヨハネスバーグは戒厳令下に置かれた。七百人を超える人命が失われて、これがスマッツ政府の命取りともなつた。エラスマスは指揮をとつたが、今日でも彼は「エラスマス將軍」と呼ばれている。ストライキが鎮圧された後、彼は捕えられて死刑の宣告を受けたが重労働刑に変更され、三年後には怒りに燃えて再び鉱山労働組の運動に当るようになった。

エラスマスは、「忘れられた要素」^{フオゴットン・フオグデー}を、彼の働いている鉱山の支配人と同じ晩に観た。彼は六十六歳で今なお坑内労働をやつてゐるのだが、翌日その支配人がいつた。

『エラスマス、私は昨夜「忘れられた要素」^{フオゴットン・フオグデー}を見て、二度と再びどんな人間でも見くださすことはしまいという決心をしたよ。』

エラスマスはそれに答えて『私も二度と再びストライキはやらない。この方法で話をつけることができるから。』といつた。

数ヶ月の間、彼は口数少く、彼の確信を静かに築き上げていつた。その後、金鉱町のスプリングの町長の招待会に彼は出席した。数名の者が公式の演説をしたあとで、彼は立ち上つて話をしたとい

い出した。

『忘れられた要素』の上演された後で、私は支配人とお茶を飲んだ。これは私の四十年に及ぶ鉱山生活中、はじめてのことであつた。それまでは互いに相手をこの世界から抹殺しようとしていたのである。あるとき、私は狒狒とブルドックの喧嘩をみたことがあるが、結局狒狒は噛み殺され、ブルドックも始末しなければならぬ状態になつていた。私どもはちやうどそんなことをやつていたが、今は変わった。チームワークが確実になされるとき、光明がもたらせられるだろう。そうでなければ、われわれは暗黒の中に沈んでしまわなければならない。』

エラスマスはナシヨナリスト党员であつて、ポール・クルーガーの率下で戦つたが、今でもボア戦争のことは決して忘れない。のちにゼネバ湖畔の、この老いた大統領が亡命中死んだ家を訪問して、彼は泣いた。一九四九年にエラスマスはアフリカの鉱山労働者がコーの大会に参加するのを反対したが、一九五〇年には組合の費用で代表団を送るよう提唱したので、会長、副会長および組織部長が出席した。

彼らは最近起こつた争議のことを話し、それと類似した事件が前にもあつたが、そのときには解決のために二年間かかつたといつた。政府、組合および会社を含めた調停委員会がつくられた。鉱山組合長がいつた。『私は鉱山関係で始終争議があるのをつくづく嫌になつたが、会社側もそうではないかと思つた。そこで私は双方が今度の問題をMRAの光によつて再考するために、一時委員会を中止

するよう提議した。その結果、二週間て解決がついた。経営者側の中立的な立場の人の言葉によると、「今度の解決はこの産業にとつて劃期的なものであつた」と。

組合組織部長ヴァン・レンスバーグ氏も他の二人よりおくれでコーにきたが、会長の言葉につけ加えて、『鉱山労働者と経営者連盟との関係は、MRAのお蔭で現在最も好調である。』といつた。なお『労働者と経営者間に一般に存在する問題に加えて、南阿では人種の問題がある。人種の問題も政党関係を超越し、神の導きによつて解決するよう全力を尽すつもりである。』とつけ加えた。

エラスマスはイギリスに招待されたが、最初は『自分の行く処ではない。』と思つた。しかし最後に行く決心をしたが、イギリスでは非常に親切にされた。彼の会つた人の中には、三代のイギリス国王の秘書をしていたロード・ハーデングがあつた。エラスマスにはロード・ハーデングを嫌う三つの理由があつた。先ずイギリス人であること、第二に上流階級であること、第三には資本家であることであつた。しかしMRAは、彼らの間に信頼と友情の堅い基礎を築いた。

エラスマスは南阿に飛行機で帰つたが、そのとき、彼が最も大切にしていたのは二人で取つた写真であつた。彼はいつた。『飛んでかえる道すがら、私は悪感情を一つ残らず海中に投げすてた。』またヨハネスバーグの集会で、彼が旅行の報告をしたときこういつた。『私はイギリスに行つて、たくさんの変更したイギリス人に会い、多くのことを彼らから学んだ。』

エラスマスの家庭は再建された。前には、エラスマスの給料は家のそとで使われてしまつた。しか

し今では、新しい敷物や安楽椅子になつてゐる。彼の妻はいう。「以前には、私は必ずしもあの人の帰つてくるのを、待ちかねるようなことはありませんでしたが、この頃ではとても待つようになりました。』

南阿に帰つてから、エラスマスは組合内で彼を攻撃してきた階級闘争支持者たちに対して、一年間MRAを基として働いた結果、労働者は長年の闘争によつて得たより遙かに多くのものを得たという事実を示して反撃したのである。

二

アフリカの将来を考えると、この大陸からイギリスに留学する黒人学生ほど重要なグループは少ない。彼らはみんな、アフリカへ帰つてから指導的地位につくのであるが、すでに黒人社会で優れた地位を得ているものが多い。

しかし彼らはイギリスでは、しばしば困難にあつてゐる。ある成功したゴールド・コースト出身の若い画家の言葉に『私たちは先ず下宿を探そうとして幻滅を味わう。下宿の所番地の表を入手することはたやすいが、黒人学生を喜んで受け入れてくれる下宿のおかみさんを探すことはむづかしい。その結果、われわれは混んだホテルにすみ、イギリス人の生活と全く引き離されてしまふ。われわれは自分たち同志で固まつてしまひ、不満や不愉快な気持は内訌するようになる。教育をうけた多くのア

フリカ人はイギリスに来る前にすでに民族主義的な感情をもっているが、イギリス人に、のけもの扱いされるに従つてますます強くなる。』

共産主義者は、こうしたアフリカの学生たち、つまり将来の国の指導者のためにあらゆる努力をおしまない。例えばブラーグのチャールズ大学に行けば、動物学から原子研究に至るまでどんな科目でも無料で勉強できると誘いかける。幾人かの者がこの好餌につられて、将来の結果も考えずにそれを受け入れたのである。

また共産主義者の家は黒人学生たちのために開かれ、彼らを大いに歓迎する。次第に共産主義者の集會に招待され、人種問題について語り合う機会を与えられる。今日では、植民地からの学生は大部分共産主義に共鳴を感じている。あるアフリカの学生が、その理由を次のように述べている。

- (一) 共産主義者は、共産主義者でない人たちよりも、われわれを丁寧に取り扱ってくれる。
- (二) 彼らは人種的偏見を除くことを約束し、実際に実行している。
- (三) 彼らは経済的搾取からの自由を約束する。
- (四) 自治政府を直ちに与えると約束する。
- (五) 他民族によつて支配されている大衆が当然もつ人種的悪感情を煽り、また利用することに努める。

一九四七年から五〇年にかけて、七十余名のアフリカ学生がコーを訪れ、その大部分がそれぞれの国にMRAを伝える決心をした。その一人は一九四九年に短期間コーにきたが、大学に帰つてから国内の大衆が持つている悪感情を解決しようとする非常な努力を始めた。その大学の学生のあるものは学業をやめて、爆薬や革命技術の習得をしている者もあるほどであつた。彼の努力と土地の一部の人たちの協力によつて、六ヶ月のうちに学生間の空気が全体として変わりはじめた。翌年には、彼と彼の妻につれられて六人の学生がコーにきた。

アーロン・オボンナはナイジェリアから来た医学生である。コーで彼は多くの人びとが絶対の道徳標準をあてはめ、神の導きガイダンスに従うようになったとき、如何にその生活が改変チェンジしたか、またそれが一国に影響を与えるようになったかを実際的にまた単純に話すのを聞いた。コーを去る日に彼はいつた。

『最初私は、みんなが文学的な修練でわれわれを楽しませてくれるのかと思つた。しかしいま、私ははつきりとこの演壇から話される事柄は全部真実であることが分つた。私は今朝、導きガイダンスを次のように書きとめた。「MRAイデオロギーを提唱し、アフリカのわれわれに伝えてくれたことにより、フランク・ブックマンは白人種が有色人種に対して行つた多くの不正を正した。われわれはこれを受け入れ、このイデオロギーを遵奉し、永遠にもちつづけるであらう。これはアフリカにとつて唯一の希望であり、全世界にとつてもそうである。』』

過去十六年間植民省のにつとめていたイギリスの一官吏が、コーでアーロン・オボンナの話の聞き

て、次のように語つた。

『二十世紀後半の大問題は、如何なるイデオロギーが世界の有色人種を味方にするかということである。彼らが共産主義に傾倒するようになった場合には、その原因はわれわれがそれに代るより偉大なイデオロギーを与えなかつたためである。私はこれに気がつくまで長い間かかつた。オボンナはアフリカで白人種が行つた不正について話したが、私はそれをすぐには受け入れかねた。私の家族——私の父も二人の祖父もアフリカや、インドや、その他の地方で長い間官吏をしてきた。われわれは今までやつてきたことに大きな誇りを感じていた。しかし、われわれの教えたデモクラシーを世界の有色人種が望んでいないとしたら、それは誰の責任であろう。私の心の奥底には、アフリカの人びとに向つて「諸君のためにわれわれがしていることを見てくれ。われわれの骨折りを見てくれ」という態度があつた。私は感謝を要求し、それが得られないときには不快に思つた。しかし、だんだんと白人種が世界の各処で行つた不正に気がつくようになり、それについてすまない気持になつた。アフリカに最も必要なのは、人びとを感激させ、改変させ、白人種も黒人種ともに団結できるイデオロギーである。MRAのイデオロギーが現在おこなつてゐることはこれである。私はこれらのアフリカ人を支持して、絶対の道德基準と神の導きに従つて、新しいアフリカを建設する一助としたい。しかしそのためには、先ず私自身の根本的改変^{チェンジ}が出発点とならなければならない。』

ナムデ・アゼイキウエイ博士は、幾百万の原住民の間にゼイクと愛称されているが、ナイジェリアとキヤメルーンズ全国民議会の議長で西アフリカの最も有力な人物の一人である。

彼は四十六歳で妻と四人の子供をもつてゐる。彼はイポー種族で、彼の父親は彼をイギリスに送つて教育しようとしたが、あるときイギリスの将校に侮辱されたので、考えを変えてゼイクをアメリカに送つた。少年ゼイクはアメリカで勇氣と品性のある生活をして、大学の學費を得るために、炭坑夫もやつたし、血洗いから筋肉労働もし、ボクシングの職業選手までやつた。

彼はリンカーン大学を卒業した後、ペンシルバニア大学でマスター・オブ・アーツの学位をとつた。運動競技も拔群で、一九二四年の大英帝国体育競技会出場のため、ロンドンのホワイト・シティで練習中、他の英連邦選手たちが彼と彼の種族を侮辱したと感じたので、それ以来ベンジャミンというイギリス名を棄てて、ふたたび用いようとしなかつた。

一九三五年に西アフリカに帰つて一連の新聞連合をつくり上げた。現在そのうちの五新聞が発行されてゐて、幾千のナイジェリア人が読み、その影響力は他の新聞を全く制圧してゐる。一九四六年にゼイクはナイジェリアとキヤメルーンズの全国民議會議長に選出された。この會議は二百の労組と、各政党と、種族団体によつてできているが、彼は毎年辞職したにもかかわらず毎年再選されてゐる。

近年ナイジェリアには憲法修正の声が高く、アフリカ人の自治制を増大する要求が強かつた。ゼイクは全国議会の議長として憲法修正を主張した。イギリス当局は最初彼が公式代表でないかと拒否したのである。

そこでゼイクは立法議会に立候補し、決定的多数をもつて当選したが、イギリス当局はなおも彼に猜疑心をもつていた。ゼイクは九ヶ月間、ナイジェリア国内各地を巡回して民衆の支持を得、内務大臣に面接するためにイギリスに行き、十五ヶ年内に英連邦に参加する自治体となる方針を提出することとなつた。彼はイギリスで歓迎されず、新聞の一部で悪宣伝をされた。それで、結局のところ、『アフリカへ帰つてイギリスに協力しろ』といつた挨拶を受けたにすぎなかつた。

ゼイクが帰国すると彼の団体は早速憲法修正の提案を破棄して、もつと過激な『自由憲章』をつくり、英連邦に關係のない自治国となることを主張するようになり、一九四九年十月、彼はその運動の第二段階に入つた。彼の団体が提案したことをナイジェリア政府も英植民地当局も承認しないから、彼らに意見発表の機会を与える国際団体には如何なるものでも代表を派遣することを決定した。

ゼイクはロンドンで開かれた『反帝国主義人民議會』に演説するよう招待を受け、そこからブラーグにある『人権會議』に出席し、さらにモスクワへの招待も受けた。イギリスにつくとまた一部の新聞がゼイクを攻撃し、彼の全身肖像の上に見出しとして『黒いいたずらもの』と書いたりした。

彼はロンドンのある家庭に招かれて一夕を過したが、その家の主人からは賓客として温くもてなさ

れた。その家で彼はMRAについてきいた。「幾度もロンドンを訪問したが、個人の家には招かれて対等の取扱いを受けたのは今度が最初だ」と彼は語った。

彼と彼の党の全国書記長はコーの招待を受諾した。のちにゼイクはコーを『分裂の大海における平和の島』と評した。人間が交わり得るものだという充分な証拠を見て彼は、三日目には深い確信をもつて語った。

『問題の中心は、ナイジェリアが正しいか、イギリスが正しいかではなく、何がナイジェリアのために正しいかである。ナイジェリアに対するわれわれの祈りは「神の導きによつてナイジェリアの人民びとが、憎悪と恐怖と猜疑への隷属から解放されんこと」であり、「ナイジェリアの地域から愛の火が消えず、また絶対正直、純潔、無私、愛の炬火が新たに燃え上り、新しいナイジェリアを生むのみでなく新しい世界の黎明の第一歩となること」である。』

彼がロンドンに帰るとまもなく、エヌグ炭鉱ストライキの現場で警官が発砲したため、二十名の人命が失われた報せがきた。直ちに彼は、共産党のアフリカ人黨員から報復しろと圧迫され、鉄道従業員のストライキを起せといわれた。ゼイクは敢然としてこれを拒否した。そのかわりに電報を打つたのだが、その電報は状勢を緩和するに非常に役立つたといわれている。

彼は強い圧迫に抗して、ブラーグとモスクワに行くことを取り止めた。これは彼にとつて非常にむずかしい決断であつた。「デイリー・ワーカー」紙（共産党新聞）はこのことについて彼を攻撃し、

帰国後は困難な状態が起るだろうとのめかした。彼はイギリスを去る前に、植民相に面会した。タイムズ紙は彼の言葉を次のように掲載している。『今後は双方ともに良識と理解をもつようになりたいものである。英政府がその態度を改める用意があるならば、絶対独立の要求は修正する意図をもっている。』

ゼイクはナイジェリアに飛び帰った。彼を空港に出迎えた人びとのなかには、政敵の主な人びとがいた。

その一人を彼は自分の自動車にのせて帰り、その途上、彼は相手に対して政治的競争心を持つていたことについて謝まり、融合をもたらすために政敵であつたこの人の下で仕え、喜んで協力したいといつた。

ゼイクの主な目標はナイジェリアの政党を統一することであるが、この目的を達するために彼はコーで学んだものを絶えず活用している。他の多くの人たちと同様、未だ聖者にはほど遠いが、問題解決の方法が変わつてきたことは確かである。最近彼が行つた政治演説の結論にコーでの体験を語り、他の人に向かつて非難の指をさしたならば、三本の指が自分の方に向いていることを悟らない危険について聴衆に警告した。『態度を変えろということとはナイジェリアの政界には忘れられた要素である。反対党の誰が悪いかが問題でなく、何が正しいかをみていかねばならない。ナイジェリアがコーの精神に生きられない理由はあり得ない。』

彼の新聞には、新しい世界秩序のためになされるMRAの闘争についてのニュースが、のるようになり、ブックマン博士の演説が全文掲載されたりした。友人あてのある電報にゼイクはこういつた。

『ナイジェリアに帰つて以来、コーの精神はわれわれの政界で素晴らしい成績をあげている。私はむかしからの政敵と全部融和した。御安心を乞う。ナイジェリアは喜ぶとともに啞然とした。何がこの変化を起したのかといふかつている。『忘れられた要素』の結果である。フランク・ブックマンのお蔭である。コーの精神は奇蹟的だ。』

一方ゼイクも彼の政党も、それまではナイジェリア憲法修正の公式討論には加わらない立場をとっていたが、いまは積極的に参加をするようになった。ゼイクはまた三万の労働者に関係のある経営者対労働者の争議を平和に解決するのにも大きな役割をした。彼の新聞の中で有力な『ゼ・ウェスト・アフリカン・ポスト』紙上に、一九五〇年六月五日附で次のような社説が掲載された。

『各人から出る疑問はこれである。アフリカ人はその使命を達成することができるであろうか。悪の勢力に対抗するだけの知識的かつ道義的な力を十分に發揮できるであろうか。われわれはできると確信する。しかしこの確信は、大衆と指導者がともにコーの精神に従うことを必要とする。……それのみが、アフリカにとつての自由への門である。』

一九五〇年のラーゴス選挙ではゼイクの党が完勝し、二十四の議席中十八を獲得した。

その年の終りに、党の過激分子が彼を暴力の道へかり立てようとした。ゼイクはその道をとるには

絶対の道義標準をすてなければならなかつたので、彼は政界を引退するといつた。

ロンドンの『デイリー・ワーカー』紙は直ちに第一頁の紙面で彼を攻撃し、スイスのMRA世界大会に出席して以来、彼は鬪争をあきらめるようになつたと記した。一方、ナイジェリアに派遣された政府の委員会は『全国民がゼイクのチェンジについて語っている。』と報告した。

ゼイクの政界引退声明は民衆の間にあまりにも大きく騒がれたので、一九五一年には再び政界に出馬した。

彼はラーゴスで演説をしていつた。

『私はみなさんのご期待にそいたいと思う。自治政權をいま得たいのなら、国民派は全部その偏狭な党派心をすてて、ナイジェリアの榮えのために一つにならねばならない。国民派の心に先ず改変チェンジが起こらねばならない。

政敵は互いに猜疑心と不信の心をすてて意見の相違を清算して融合する必要がある。先ずわれわれのうちに絶対の正直、純潔、無私、愛という標準をうちたてる努力をすることによつて分裂の代りに団結が生まれる。そのときわれわれは建設的イデオロギーをうちたて、われわれの夢を実現するために前進できる。』

第9章 思想は翼にのつて

一九五一年の初頭、ナショナル航空会社内の紛争について、アメリカ操縦士組合（ALPA）副委員長スリム・バビット氏は『MRAが紛争を急転直下に解決させた。』と語っている。

この紛争というのはアメリカの航空会社史上、最も長い期間にわたつてストライキをひき起した事件であつて、解決をみないままに再びストライキに入ろうとした時の話しである。

中心人物はスリム・バビット自身とナショナル航空会社社長ペーカーの二人であつた。『われわれはお互いに徹底的な仇敵同志だつた。』とスリム・バビットはいう。

ペーカーは頑固できちようめんな男だが、下積みの仕事から叩き上げて産業界の大立物にまでなつた人である。中西部の貧乏世帯に生まれ、飛行機をとぼす情熱だけは人一倍もつていた。パイロットとして一時は米大陸横断のレコードを保持したこともある。最初は単独でシカゴと二、三の南部諸州に航空サーピスをやつていたが、その後フロリダに移つて非常な努力をつみ重ねてついにナショナル航空会社を築き上げた。ひとつの仕事を完成するには常に寸時をも争う努力が必要であるが、ペーカーはまさにその努力の権化である。あるパイロットは彼のことを次のように評した。

『社長はコチコチの石あたまだ。』

スリム・バビットは自身が操縦士であるばかりでなく、操縦士組合を代表して経営者側との交渉にも当つていたので、機敏で活動的な人物だった。その言葉づかいは生彩に富んでいたもので、労資の交渉技術にも熟達し、操縦士の利益代表として常に果敢な闘争をしてきた。

ナショナル航空会社の紛争は何年も前に始まったが、そのあいだに不信と恐れと憎悪の念が強まるばかりであつた。一九四八年の二月にはそれがついに表面化して、ペーカーが解雇理由を明らかにしないで一人のパイロットを解職したのをきつかけに爆発した。ナショナル航空会社の操縦士たちはストライキを始め、それが未曾有の激しいストライキとなつた。

ペーカーはストライキを破るために、労組に加入してはいないパイロットに操縦させた。

組合側のパイロットは種々な対抗策を講じた。ストライキ側の操縦士に忠実なステュワデース（女子乗務者）は、長距離飛行にでかける非組合員の操縦士に下剤を入れたコーヒーを出したりした。ナショナル航空の事務所前にはピケットがはられ、ナショナル機に乗ろうとしたお客たちはストライキ側の操縦士たちから、機体は安全でないしその操縦士たちは未熟であるとおどかさされた。

自動車が覆えされたり、騒ぎの最中には一人の機体整備員が足を射たれたりした。

ストライキ側のパイロットたちはエジプトのカイロまでナショナル航空会社攻撃のプロバガンダを拡げた。

ペーカーは彼らが会社の名誉毀損をしたといつて五百万弗の訴訟を起こした。

十ヶ月のストライキと憎しみが続いた後、民間航空委員会が調停にのりだした。ペーカーと従業員の間が妥協の余地がないという理由で同委員会はナショナル航空会社を解体し、その航空路を他の航空会社に分配するための調査を指令した。

この圧力に抗しかねたペーカーは操縦士組合の操縦士たちを再び雇傭し、ストライキは一応解決した。しかし一九四八年から五一年まではスリム・バビットの言葉によると『両者間の関係はストライキ中よりも、はるかに悪かつた』という。

この期間中、ペーカーと操縦士たちとの間には苛烈な闘争が続けられた。ペーカーはあくまでも会社内の組合を破壊しようと努力した。ストライキの指導に当つた連中に対しては、ペーカーの傭つた医者が健康診断をして、飛行不能の極印を押した。バビットはそれに対抗して、全米操縦士組合の傭つた医者に調べさせて立派な健康の所有者たちであることを証明させたりした。

パイロットたちはペーカーを嫌つていたので、ナショナル航空会社の飛行機をなるべく乗りにくいよう、激しく振動させて操縦した。乗客が文句をいうと、他の会社の飛行機にお乗りなさいといつた。

そればかりでなく、パイロットたちは非常に濃い混合ガソリンを用いたので、何百ガロンの揮発油を無駄にしたばかりでなく、エンジンは度々修繕が必要であつた。

パビットの言葉によると、一九四九年から五〇年にかけて操縦士組合はペーカーを破産させるために少くとも十萬弗を支出し、『またわれわれの立場を維持するために何百時間もの仕事をし、相手が次にどうするかを研究したものだ。』

ペーカーもこういう。『おれもそれと同じことをやつてきた。』

一九五〇年の終りにはパビットとパイロットたちはナショナル航空会社とペーカーを完全に破産させる決心をした。民間航空委員会の解体指令はまだ有効であつたから、五〇年の十二月にパビットはナショナル航空会社のパイロットたちにストライキ賛成投票をさせた。彼はこれで完全に会社をつぶせると思つた。

各新聞はこのストライキ賛成投票を一面の見出しで取り扱つた。

この頃、はじめてMRAがこの物語に登場した。フロリダのある実業家で、ペーカーとは未知であつたがMRAのことを知つていた人が、ペーカーがMRAにふれたならばよいと感じた。航空会社の重役たちはペーカーと会つても無駄だといつた。ひとりがかういつた。『大統領がペーカーに会いたといつても、ペーカーは多分一ヶ月間位の余裕をつけるだろうし、いよいよその間きわになると秘書に電話をかけさせて会うのをしぶるだろう。』

しかしこの実業家はひるまなかつた。ペーカーの事務所ににかけていつてそこに座り込んだ。とうとうペーカーに会つて彼はいつた。『新聞でみると、またあなたの会社ではストライキがあるそうで

すね。』

ペーカーは答えた。『そうです。これは誰にも君にも私にも、どうすることもできないことだ。前にも私たちは一つのストライキにあつたし、今度のもやつつけるだけだ。問題の中心は、この会社を傭主が経営するのか、労働者がやるのかを決定するだけだ。』そういつてから彼は両手を頭の上で振りながらいつた。『どうなつても大したことはないではないか。共産主義者が労働者の支配権をにぎりはじめているし、今のままで行つたら数年の間にアメリカも全部あいつらのものになるだろう。』この実業家は、MRAが世界にどういう影響を与えつつあるかを話しはじめた。各国で産業界の労働の紛争が、経営者も労働者も『誰が正しいか』ではなくて『何が正しいか』を基調として考えまた行動したとき、解消していつたと語つた。

彼はまたMRAが普通の人びとに新しい愛国の精神を与え、相手を指さし相手の変わるのを待つ代りに自分のした間違いを改めて、それを正直に話すようにさせていることを話した。

後にペーカーはこの時の経験を次のようにいつた。『どこかに種か仕掛けがあるのだからうと考えていたが、一向それも出てこなかつた。それで私は多分労働者側が新しい戦術をはじめたのだからと思つた。また会費を払えとか、会員になれとでもいうのかと思つた。ところがそんなことはなかつた。人を助けてやりたいというだけなので、こんなことをするものもあるのだということが分つてきた。ただ何が正しいか、何が間違つているか、それだけのことだ。とんでもない簡単なことで、しか

も深さの知れないしろものだ。』

その午後、ペーカーは副社長の部屋に十五分か二十分おきに入つてきた。彼の心が新しい高さに飛翔しはじめた。彼はいつた。

『おれたちは正直でなかつた。とはいへ、おれは今までどちらかと云えば相当正直な方だつたが。——絶対正直となるとちよつとこれは違う。おれたちはパイロットたちを今まで自分勝手に取り扱つてきた。おれたちは幾度もこの部屋に集まつたが、いつも経営者側の利益となることばかり考えてきた。一度もパイロットのためを考えたことはない。何かをつかむことにいつも努力してきた。心から正直に自分のことと人のことを考えたことはない。これはたしかに新しい考え方だ、このMRAというやつは。おれの考えをずいぶん変えてしまつたよ。』

ペーカーの態度が変わつたという報告がベビットの耳に入つた。彼は全然それを信用しなかつた。闘争委員のパイロットたちをナショナル航空会社の事務所へ送つて様子をさぐらせた。

彼らは出かけたが、ペーカーがいるとは思つていなかつた。しかし彼らが出たことがわかるとペーカーは早速自分の部屋に呼んだ。今までに一度でも彼らは部屋に入つたことはなかつた。まもなく彼らのひとりがベビットに電話をかけていつた。

『委員長、どこから電話をかけていると思ひますか。ペーカーは今ちよつと部屋から出ていますがね、われわれは彼の部屋にいて、社長のシガーを吸つています。われわれは四フィートも大地から足

が浮いていますが、ペーカーはまるで天井に登つてしまつて降ろせないという騒ぎなんです。』

ペーカーはパイロットに提案した。すなわち一月二日に全米調停局が引き受けることになつていたストライキの調停を延期して一九五一年一月初頭に開かれるMRA大会後にもち越し、ペーカーと一緒にパイロット及び闘争委員のパイロットたちと重役たちも大会に出席して、解決の曙光を見出そうという提案であつた。

パイロットは信用しなかつた。『おれはそれが、仲良くしましようといつたパイロットたちへのいい加減なごまかしではないかと思つた。』しかし彼はペーカーの態度の改変チェンジには感じ入つていた。彼はいつた。『ペーカーがこつちの言い分をきいてくれるので、こつちにとつては気味がわるい位だつた。』

結局、彼はパイロットたちにいつた。

『さあ、椅子からオッコちないように聞いてくれ。そして妙な考えももつてもらいたくない。頭から後光がさしたり、聖者さまのように羽根のついた白い衣をきているわけでもないんだ。しかし火花に火がついたんだ。それがやたらあちこちにパチパチやつているわけだ。今度はじめてペーカーとゆつくり膝をつき合せて話し合えそうだ。おれは調停局要請を一時延期して、ワシントンのMRA大会に出かけるのがいいと思う。』

それで決定したがパイロットはまだ用心深かつた。『おれは様子を探るのを第一としてでかけた。』と

彼はいう。彼らはペーカーや他の代表が泊つたホテルにさえ泊らなかつた。

あるMRA劇の終幕後、劇場内で彼らは会う機会ができた。争議の際、公判廷で争うために出合ったことこそあつたが、普通の場合に人として会つたのはそれがはじめてであつた。やがてホテルに戻つて話し合つた。彼らは後でいつた。『前に三年かかつたときよりも、今度の三時間をはるかに効果的であつた。』

二十五ヶ国から政府、産業界、労働者等を代表した千五百の人びとの集まつたワシントン会議の雰囲気の中で、パビットとペーカーは世界情勢について語り合つた。そのあとちよつとの沈黙がきた。

ペーカーが突然い出した。『おれは今まですつかり間違つていた。そのことをいいたかつたのだ。』パビットはビックリしたが油断しなかつた。彼はいつた。『私の両腕は防禦のためにあげてある。

この腕を下げたら、とたんに社長は私の背中をドヤすだろう。しかしいつておきますがね、もしそんなことをやつたら、あなたの息の根をとめますぜ。』

ペーカーはいつた。『そんなことをおれはしやしないさ。』パビットは続けていつた。『われわれは会社の格納庫や機体を盗もうなんて毛頭考えていないが、遠慮や譲歩は絶対にしませんよ。』

ペーカーはそれから順を追つて、彼が今までパイロットたちに対して正しくなかつた点を話した。

パビットはいつた。『社長は話の中で一度でもパイロットの悪い点をいわなかつた。今までに起こつたことについて全責任が彼自身にあるといつた。おれはまるで鶏小屋の中にバブルガム(チュウイ

ンガム(一種)をほうり込んだ子供のように呆然としてしまった。ペーカー社長はだんだんと具体的な問題にふれてきた。彼が犠牲にしたあるパイロットに一年分の未払い給料を払うといいだした。ペーカー社長はなんでもかんでもくれるようにさえ思えた。それでおれの方も何とかしなければと思いはじめた。これからはおれの決心ひとつだと思つた。』

パビットは十三ヶ条の不平条項も大部分はペーカーを破綻させるために考え出したものにすぎないといひだした。そこで彼は早速昇給の未払分と賃金減額の修正要求から十万弗を削除する旨を申し出たために、要求額がほぼ正しいものとなつた。

ペーカーと重役たち、パビットと闘争委員たちはフロリダに帰つた。パビットはMRA大会に電報をよせて報告した。『われわれはいまナショナル航空会社とパイロットと双方の発展を阻害していたものをのぞくための技術的方面的努力をしているが、これが出来ればわれわれ双方はチームとして、何ものにもとられずに無限の将来を開拓できる。今のところ、MRAは人をほんとうの人間味のある者にする不思議な特効薬であると私は思つている。』

一九五一年の二月と三月をかけて、ペーカーとパビットは煩雜なもつれをのぞき解決方針を固めることに努めた。

この努力がどういふ精神で続けられていたかを示すよい例として、ナショナル航空の事務所近くにあつた店で誰かが聞いたことを記そう。買物をしていあるパイロットが店員にいつた。『おれたち

の会社は、いま新しい人たちがぎゅうじるようになってきた。昨晚ベーカー社長に偶然あつたらワザワザおれに話しかけたよ。社長と話をするなんて七年ぶりだ。』

一九五一年の三月にはベーカーとバビットが新聞社にストライキが満足に最後の解決をみたと発表した。ベーカーはいつた。

『MRAを通して争議の中に全く新しい要素が加えられた。問題の根本は双方のもつていた不平、悪感情と不信の念であつた。先ず私の方から謝ることと絶対の正直になることが会谈再会の基本であつた。私はパイロットが人間であると考えるのを忘れ勝ちであつた。私の責任はパイロットが当然もつべき自己の尊厳性と、安全感を彼らに充分与えることだ。』

バビットは『パイロットたちも経営者のこの新しい態度を認めこのような考え方が有効であることを証明しようと努力している』といつた。

彼はさらにつけ加えた。『悪感情があまりにも積み重なつていたので、普通の問題にさえも解決をみつけることが出来ないほどであつた。会社とパイロット側がナショナル航空会社のよきチームとなつて過去三ヶ月のように努力するならば、われわれの会社はアメリカ中で最もよいものとなり、パイロットの仕事に従事する者が競つて入社したがるものとなるであろう。』

ナショナル航空会社内に新しい精神が起るにつれて民間航空委員会も解体指令を變更し、長期資金貸出を拒絶していた銀行もナショナル航空会社が幾台かの新しい飛行機を購入する資金をだした。

ペーカリーの感想を記そう。『MRAについてのわれわれの経験から推すと、解決し得ない争議なんてあり得ないことだ。解決の鍵はMRAの四つの絶対標準、すなわち絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛を会社側と労働者側がともに実行するところにある。』

バビットは全米操縦士組合員にこの四つについて次のように述べている。

『おれを長年知っている君たちは「スリムの奴はいつたいどこを押しさらば、この四つに關係があるなんてほざけるのかい」と考えるかも知れない。ごもつともだが、誰でも変わることは許されるだろう。それにもし誰でも「バビットの奴は少々どうかしたのだろう。地平線がグルリと廻つたか、ジャイロ・コンパスが狂つたか、それともコンパスフルイド液を飲みすぎたのだろうか」などご心配になるならちよつと一言申し上げる。おれは生まれつき猜疑的でいまでもそうだ。教会で献金皿が廻つてくると、それが二重底になつていて教会が四割とつて残りは世話人がとるのじやないかと考えるような人間なんだ。ただすすめたいのは、君たちと君たちの家族が直接にMRAにふれる機会をもち、長年の仇敵同志が殆んど数分間でその対立を解消できるというすばらしい力を見てもらいたいのだ。そしてこの力が入り込めば、今まで全米操縦士組合がナショナルに注ぎ込んだ闘争資金が今後は全然 unnecessary になることも知つてもらいたい。全米操縦士組合の費用はみんな君たちの金なんだから。』

ナショナル航空の大きなニュースが出たのち、MRAのチームがナショナル、イースタン、パン・アメリカン航空等の諸会社から招待されて、フロリダ州のマイアミ市に行つた。每晚デード・カウ

テイ公会堂には二千名以上の観衆が集まつて、バビットとペーカーの氣持を改変チェンジしたこの思想を表わした劇を見た。(註第2部43参照)

CIOもAFLも指導者たちがこれを支持した。イースタン航空会社はナショナルの例にならつて会社の経費と時間で会社側の代表たちに訓練を与え、MRAを産業界に及ぼす方法を研究させた。労働者側からも同じような訓練を与えてほしいと要求が起こつた。会社側は訓練指導を受ける希望者の経費を負担することに同意した。

人びとは航空会社とその広汎な組織網を通して、産業界にも、また国全体にもこの新しい精神をつぎ込む大きな役割のあることを思うようになった。航空会社は世界の紛争にも解決のあることを示し、真にアメリカの声として、問題の解決はすべて「何が正しいか」という考え方によればよいのだということ全世界に知らせるようになった。

スリム・バビットは次のように結論している。

『MRAの年令は飛行機より若い。原子爆弾は六年位だ。——ところでこの三つは世界のはじめからあつて、人類が使うように備えられていた。飛行機、原子爆弾、MRAに必要な要素はみんな آدمとイブとが喧嘩した頃からあるのだ。どれも新しいものとはいえない。つまり使えるように組み合せができたというにすぎない。全世界にあるMRAの業績は、今日空を飛んでいる航空機と同様に事実である。おれはほんの僅かだけMRAの地平線をのぞいただけだが、MRAの人びとはすこぶる実

用的なものを編みだしている。」

民間航空委員会のレンツェル委員長は、次のような公式声明を発表した。

『長期にわたつて未解決であつた航空操縦士組合と（ALPA）ナショナル航空会社との問題が突如として解決したことは航空産業界にとつて愉快な驚きであつた。MRAがこの満足な解決を与えた主役であることを認めなければならぬ。……この問題が長らく重苦しいまた苛烈な紛争を続けてきたことを知つているものにとつて、当事者の双方にあつた猜疑と反抗の態度が変わつて、相互の信頼と協力の態度に一変したことは奇蹟というほかない。この苛烈な紛争に解決を与えたことによつてMRAは航空産業のみでなく、国全体に非常な貢献をしたのであつて、これによつて労使関係の広範な問題にも解決の方向を示している。』

第10章 ワシントンの反響

一

一九五一年一月十五日の正午、二百二十五名のMRA海外代表団は、フランク・ブクマンとともにアメリカ国会の傍聴席で議事の開始をまつていた。

その年の初めにワシントンで開かれたMRA世界大会に出席した人びとであるが、この大会には世界を動かすイデオロギーを主題として、アメリカ全土および二十五ヶ国から指導的人物が集まった。特に海外から来た人たちはドイツ、フランス、イタリアでの共産党の作戦に対して実際的な解答が発見されたこと、イギリスの港湾や炭坑の階級闘争に、またフランスとドイツの不和に、そして極東に進出している急進的イデオロギーに解答が与えられた事実を強く語った。

会期中、多数のアメリカの国会議員がワシントンのシヨラム・ホテルで開かれた会議に出席したのであるが、今日はMRAの人びとが上院に招待されて、彼らの努力に対するアメリカの感謝をきくわけである。

議事が開始されると何人もの議員が発言を求めた。第一に話したのはニュージャーシー州選出のア

レキサンダー・スミス上院議員であつた。『大衆の心をとらえようとする闘争に勝利を得るためにアメリカは、イデオロギー的勢力を大いに強めなければならぬ。この人びとにわれわれは充分な支持と承認を与えなければならぬ。』

他の上院議員がつづいたのち、外交委員長トム・コナリー上院議員の提案によつてワイリー上院議員は上院の賛同を得て傍聴席の特別来訪者の起立を求め、『全世界において人びとの考えと生活の安定のために、非常に有意義な仕事をしているグループ』として紹介した。フランク・ブクマンとその友人たちが立ち上ると、上院は拍手をもつてうずめられた。

その数日前、下院でも同様な感謝が表明された。ジミー・ジャ出身のコックス議員がいつた。このよ
うな精神が全国にみなぎつたならば、幾百万ドル、いな幾十億ドルの歳費を政府は節約できるであ
ろ。ことに今日、われわれは世界共産主義の脅威に対抗するため、幾十億ドルの金と幾百万人の人び
とをよぎなく動員しているが、われわれの目前に世界勢力の芽生えをみ、それが人びとの心と知性に
ひそむ共産主義に対してよき答えを与えている実証を知ることができたことはわれわれにとつて大き
な力づけである。MRAは世界の危険地域の指導者を味方にして、ヨーロッパとアジアにおける共産
主義潮流を變更しつつある。』

大会中MRAの人びとは、下院議長レイバインと多数党の院内総務、マコマック（註第2部42参照）
と少数党院内総務マーチンと副大統領バークレーに招待された。上院軍事委員会は一時間四十五分に

わたつて、ヨーロッパの軍事専門家から種々な事実を聴取したが、その他にもMRAが提供する事実
に多くの人が耳をかした。

ルールからきた前共産主義者たちは多くの質問を受けた。その一人で二十五年間党員であつた男
が、MRAは階級と階級、国と国とを結ぶ力であると語つた。

『クレムリンにとつて、西欧が団結することは原子爆弾よりもおそろしいことなのだ。共産主義者
は西欧がどんなにサーベルをガチャ／＼させてもこわがらない。彼らは、西欧の世界がどんなに軍備
を完全にしても、イデオロギーをもたねば倒れてしまうことを知っている。またたとえ戦争に勝つて
シベリヤのウラジオストツクまで進駐したところで、それからどうするのだ。』

フランク・ブックマンはいつた。『アメリカは手に銃をもつばかりでなく、頭に思想をもち、心に
答えをもつていなければならない。』

二

その大会中言葉ばかりでなく、行動でワシントンに印象を与えた。アメリカと世界に与えなければ
ならない思想を人びとは実践しはじめた。

ここにある議員の話がある。中年の、よくある型の議員である。中流階級出の中位の商売をしてい
る議員だ。

大会中に彼はMRAの劇をみた。その後で、彼と妻は劇の出演者のいく人かを食事によんだ。その中の一人の娘が自分の体験を話し、彼女がある朝、食事のときに父に向つていつた言葉がその家庭に革命をもたらしたいきさつを語つた。娘は父にこういつたというのだ。『お父さん、あなたが話しおえると、だれも何にもいわなくなるのはどういうわけですか。』

議員は考えはじめた。そして妻にきいた。国会開会中、自分がワシントンにでかけて留守になり、妻が家で全責任を負つているとき、家の中のゴタゴタが少いかときいた。妻の答えは彼を驚かせた。

『ほんとうにお知りになりたいならばいいいますが、お留守のときの方がゴタゴタは少いです。』

その晩、この議員はそれきり一言もいわなかつた。そのあとで彼は一つの決心をした。アメリカと世界を変えようと思つたら、まず自分からはじめなければならぬと。

彼は子供たち——二人の娘と一人の息子に手紙を書いた。正直な手紙だつた。家庭で自分は操縦士、副操縦士、航空羅針士、ラチオ技師、爆撃士から機上事務員の仕事まで、全部一手に収めていてすまなかつたと謝つた。

この手紙を受け取つたとき、高校生の娘が母親にいつた。『お父さまはどうなすつたのかしら。とても妙なお手紙が来たのよ。今まで一度もこんなお手紙来たことないのに。お父さまはすこし変になりなのかしら。まるで遺言か何かみたいだわ。』

すこし後にこの同じ娘がいつた。

『高校も上級になると、いろんな問題があるし、誘惑もあれば解決しなければならぬこともあります。今まで私は勇気がなくて、自分でも分っている最高の道德標準を学校で生きようとはしませんでした。もうこわくはありません。煙草を吸つたり、男生徒とふざけたりするのはよしました。父や母にもみんな正直に話してしまいました。今まで心の中ではそうありたいと思いつながらできなかった生活が、本当にできるようになりました。その上、私は今ではこの新しい生活をする目的と理由がありました。』

もう一人の娘は、数年間、背中ひどい痛みをなおすために幾人もの専門医にかかつていたが、治療費がかさむばかりで何の効果もなかつた。父親からの手紙が来てからしばらくして、この娘はそれまでベッドの下にひいていた治療板をすてて、ゴルフ道具をひっぱり出した。いまでは何の苦痛もなくゴルフをやっている。

この議員はまた自分の息子にウソつきになる教育をしていたことに気付いた。たとえばキフォーバー調査委員会が発表した腐敗や不道德を家族といつしよに非難する彼は息子が電話口で、受話機に手をあてながら、『お父さん、誰かが会いたいと云つてますよ。今、るすですか、在宅ですか』と聞いたりすると、『ああ、五時ごろには家にいるといつておくれ』と答えていたことに気がついた。

この議員はすべてこのことに真実であるよう、息子を教育しなおすことにした。金のことについても彼は妻に正直になつた。二十四年間の結婚生活中、彼は相当な金をつくつたの

にいつも足りないことが多かつた。自分の使い方が正直でなかつたと彼は妻に話した。妻もまた手紙で、今まで知らせなかつた借金のあることをいつてきた。

彼は妻が家計を一切の責任をとるようにと提案した。家族全部で計画し、すべての問題をみんなできとりあげるようになった。夫と妻と子供たちみなが一致して、毎月M R Aに五十弗づつ寄附することにした。

ある朝、議事堂の彼の事務所です務員たちが仕事をせずにて噂ばなしをしているのを見て、彼はものすごい見幕でどなつた。しばらくたつてベルをならし秘書をよんだが、彼が怒つたあとなので秘書は手がふるえて彼の口述をよくとれなかつた。この議員はM R Aを知つてから毎朝静かに聴き、自分の生活、社会、また国に対する神の意志を知る秘訣を学んでいたので、次の朝、その静かなときに前の日を反省して何が正しいかを書きつけた。

事務所についてから、彼は事務員をみんな集めていつた。『きのうどなつたことはすまなかつた。私が悪かつた。ゆるしてもらいたい。』秘書はあとで部屋に来たときにいつた。『私はワシントンで十五年間働いていますが、あなたが今日私たちにいつて下さつたような言葉をきいたことはありません。お礼申し上げます。』

そのときから彼の事務員たちの仕事の能率は上がり、妙な緊張は少なくなつた。彼らの疲れも少なくなり、新しいふんいきが事務所にできた。

ある朝早く、この議員は一つのことを考えた。彼は、ある外国の政府に対して手紙を書いた。その国に対して彼がかつて取つた行動は、間違つた動機に支配されていたということを明らかにした。アメリカと他の国の融合を彼は具体的に建設しはじめたのである。

この議員の物語には三つの要素がある。

第一は、何が正しいかを土台として闘う決心。

第二は、絶対の道德標準を生活にあてはめ、変わる必要のある部分を変える努力。

第三は、私的、公的のすべての行動に神の導きを求めること。

三

ワシントン大会後まもなく、フランク・ブックマンは一九五一年のノーベル平和賞の候補に推選された。

人びとはどこでも世界危機に解決を求めている。ロスアンゼルスジョーゼフ・スコット氏はアメリカの有力なカトリック教徒であるが、大会で次のように述べている。

『ここには世界の人種がみない。私は二十人の孫をもつている。彼らの血にはアイルランド海の両側、英仏海峡の両側、ライン河の両側、そして大西洋の両側が入っている。クリスマス・ツリーを囲んで二十人の孫たちがベツレヘムの話をきいていたとき、私は心の中で思った。いつたいこの子供た

ちが成人したときに、世界はどうなつてゐるだろう。……エブラハム・リンカーンは九月月大学生生活をしただけだ。われわれ大学卒業生はそのことを忘れやすい。「神の示す正しさを正しく行うための強さ」……国連にこの精神があつて、その如く実行するとしたらどうだろう……。」

春が進むとともにM R A が与える解答に対して、アメリカの関心は深まつていつた。六月にはミシガン州マキノ島で世界大会を開くことが決定された。アメリカ上下両院の外交委員会の委員長並びに有力委員たちの名によつて、各国の有力者を会議へ招請すべく招待状が発送された。

『貴下がアメリカに來朝されることは、世界共產主義の脅威に対する健全な答えを如何にして与えるかについて、アメリカ国民の注意を喚起するのに最もよきことであると確信する。われわれは道義精神の団結力を宣揚する必要がある。』（註第2部44参照）

第11章 光をともせ

一

『新しい高度な生活、今までにあるものよりずっと高い生活が必要である。』（註第2部45参照）とフランク・ブックマンは、一九五一年六月一日より十二日間にミシガン州マキノ島で開かれたMRA世界大会の開会演説の中でいった。

この十二日間の出来事は世界中にこだまを呼びおこした。マキノには一千三百八十三名の代表が三十二ヶ国から参集し、そのうち六十四名は極東七ヶ国から来た代表であつた。

十台の特別機が海外と国内から多数の代表を運んで来た。

新聞、ラジオ、テレビジョン、ニュース映画班等がニュースを各大陸に伝えた。世界有数の通信社APは、ミシガン州の特派員に『マキノ島でのMRA大会の報道活動は、あの週間の最も大きく継続的に行われた。……それは開会当初より、各新聞が普通以上に興味をもっていたからであつた。』といつている。

マキノでは新しい型の人間——新しい動機と新しい目的を持つ人間がつくられた。政治家も自己や

党のためばかりはかるのをやめて、国ぐにや世界のためにつくすようになった。そして実際に役立つ、また人の心をかちうる真のデモクラシーを計画し、その型をつくりはじめた。

世界が分裂しているように二つに分裂しているアイルランドのペトラー婦人上院議員はいった。『理想主義だけでは駄目だ。人が変わるチェンジると団結が生まれる。この包含的解答は無限の可能性をもっている。このことは私自身が変わり、絶対の道徳標準を受け入れるようになった途端にわかった。神の意志が人の意志に流れ込むという理想をみたとき、われわれが始終口にする人民の意志という意味がはつきりしてきた。これはわれわれがみんな求めていたものだ。真のデモクラシーとは人が神の意志を個人の生活に、産業に、国家の生活に、国際の問題に受け入れて行くときに実現するであろう。そのときデモクラシーは始めて内容ができたといえる。』

産業界にもこの新しい高い生活が始まった。労働指導者も世界のルネサンスということが労働者の目標として受け入れるに従い、ストライキや怠業は、紛争解決の方法としてかえつて反動的だということが分つて来た。一方、経営者も利潤追求ではなく、世界の再建を自分らの目標として考えるようになる。労働者を搾取するとか、不十分な賃金とか、社会不正義が時代遅れで正しくないものだといふことが分つて来る。

交通労働組合のある代表が、経営者側の変化チェンジを話した上でこういつた。『数ヶ月前まで生産能率は六十パーセント台であつたのが、今では百十一パーセントに上つた。』

ある大きな会社の監督もこういつた。『われわれの会社の志気は最良である。……ある組は二十五パーセント生産が上つた。』黒人の赤帽がいつた。『私は何年も働きましたが、会社の待遇は一度もよくなりませんでした。そこへMRAが来て、会社の態度がすっかり変つたのです。』イギリスのダンロップ・ゴム会社の職場代表委員長（シヨップステュワード）はこういつた。『十八ヶ月間も未解決でいた不平問題が解決し、賃金が上つた。労働者が協力して、過去三十年やつて来た制限労働のやりかたを変えたので賃金が上つた。』

階級闘争は凡ての階級の人が変わることに同意するにつれ、無用になる。コミニストが資本家を変える秘訣を学び、資本家も自己に正直になると同時にコミニストを変えるようになった。ヨーロッパのある工場支配人で数ヶ月前、労働者と激しく衝突し、その一人をなぐつた男が、労働者に謝つた。彼は演壇に労働者たちと並んで立つて、「この頃では、どうしたら自分のように家庭の破局に解答が得られるかをみなが開きにくるようになった」と語つた。

前コミニストで、幾度も革命的なストライキを指導したある港灣労働者がいつた。『MRAは戦争に代わるものだ。マルキシズムに優る思想だ。MRAは階級闘争をなくす。階級闘争がなくなればすべての戦争もなくなる。』

新しい型の人間、過去と将来について自分の国の全責任を負う型の人間がマキノから生れ出した。東京から大会に飛来した五十一名の代表の一人がこういつた。

『現代の危機の原因は過去にあるが、私もその原因の一部だ。前に日本は国際連盟を脱退した。傲ぶつた心と誤つた自信をもつて、日本がアジアを團結させ、新秩序を建てられると思つた。そこから始まつて、現代の危機にまで及んでいる。満洲事變、支那事變、更に太平洋戦と展開した。この十四年間、日本は種々な間違いをして来た。私は昨日の敵である人びとから温かくもてなされ、われわれをゆるし、過去の間違いをゆるすその心に心から感動した。私はこの人びとに過去のあやまちをおわびせずにはいられない。日本人が全部M.R.A.の四つの標準によつて変わる必要がある。私は今、この精神を日本にもつていく気持で一杯である。私はこの思想を同胞に伝えるために身を献げたいと思う。』

この言葉をきいて、オランダの前参謀総長が立つていつた。『三週間前には、日本人とドイツ人を許すことは出来ないと思つていた自分だ。しかし今、日本の代表の一言をきいて心から恥しいと思う。憎しみを土台として新しいものは一切成立しないということがよく解つた。』

ベルリンからの人も話した。彼の名前は、アーネスト・シャルノスキーでベルリン労働総同盟の首領である。ベルリンは今日、赤い大海の中にある浮島だ。自由世界への信頼を公表する人の首には印がつけられている。シャルノスキーは言つた。『M.R.A.だけが共産主義の起す麻痺状態と中毒症状を癒し、それを克服する唯一つの勢力だ。ベルリンを自由世界の後尾燈と思うな。東の暗黒を照し、それをつらぬく自由のヘッドライトと思つてもらいたい。』

ある航空会社重役会の会長が妻と一緒に演壇に立つた。彼らは新しい世界再建を目的とする新しい

家庭の建設について話した。妻はいつた。

「三十四年前にフランスで私たちは結婚しました。何一つ不自由のない身分でした。主人は航空に興味をもっており、家の中はすばらしい旅客機のようなものでした。私は一生、楽しめると思いました。ところが、まもなく私どもは、ラジオも、コムバスも、地図も、航空図もないことに気付きました。どこに向いているのかも解りませんでした。そこで、操縦席を夫から取上げてみたらどうかと考えました。五人の旅客——私たちの子供が乗つて来ました。みんなつらい旅行をしました。子供たちの行きたい先をきいたことはありません。私の思うところへ連れていつたのです。目的地は大抵北極か、ジヤングルでした。墜落しそうになつたこともあります。力と無理押しをする意志とで、どうにか飛行をつづけて来たわけです。MRAは何もかも変えました。マキノに到着してみると、私たちの旅客機がすこぶる貧弱だとわかりました。MRAは実的です。地図も、コムバスも、ラジオもあります。どこに向いているのかも解ります。偉大なる操縦士である神がついています。私も夫も、その命令一下に動くので、無事にコースにのつて行きます。」

夫もいつた。『私は航空会社の重役であるが、本職はニューヨークの証券調査である。MRAは私が調査したもので、一番よい投資だ。彼と妻が今後は収入の一角をささげるとつけ加えて自分の言葉の裏書きをした。『われわれは幾百億弗をつかつて誘導爆弾を製作しているが、神の誘導を受ける人間を作らねば、世界は破壊されてしまう。』と彼はいつた。』

各国からマキノの世界大会に集まつた陸、海、空軍の上級将官の一人に、有力なアメリカ海軍中将モートン・デーヨーがいた。第二次世界大戦で、彼はノルマンデーのユタピーチの掩護作戦、シエルブルグと南フランスの上陸作戦、硫黄島、レイテ、沖繩等に転戦し戦功をたてた。

二年前、彼は絶対に演説をしないし、また演説をきかないと決心した。ところがマキノを去る日に彼はこういつた。

『ここで私は毎日少くとも四、五時間話をきいた。しかも膝をのり出してきいた。諸君はサイクロトロンが何であるか御存知であろう。科学者が約五百万ボルトの電圧をつかつて、人間の寿命を長くするために原子を粉碎する物凄い機械だ。私はちょうどサイクロトロンの中に入れられた原子のように感じた。……われわれは解答の前に立っている。MRA思想の時代が来たのだ。ここに新しい型の指導精神がある。フランク・ブックマンの指導精神は神に導かれることで、みんなが同じ波長をとる指導者だ。ここにほんとうのチームワークがある。みんなが一つになり、一人がみんなとやる——その最高の一人は全能の神である。』

もう一人のアメリカ海軍中将がいつた。『この人びとは他の誰よりも、人の心と家庭とにひびいて
いる。』

カナダのオッタワ市のセシル・モリソン氏は、心と家庭を貫ぬくMRAの力は、国の問題の核心をもつくという実例をしめしている。モリソン氏はパン屋だ。第二次大戦中、彼はカナダでパンの統制局の長官をしていた。原料と賃金ははね上つたが、彼はMRAの精神を生かして、カナダ全国のパンの値段を戦前の値段に喰いとめた。マキノに集つた人びとにモリソン氏はこう話した。

「私はオッタワ市から約五十哩はなれた農家で生れた。家はいつも貧乏だつたので、私は金持になる決心をした。やがてパン屋をはじめた。金持になるのが唯一の目的で、そのためには手段を選ばぬ考えたつた。

四十才の時、私はモントリオール（東カナダ）からビクトリア（西カナダ沿岸）までパン屋の連鎖店を経営するに至つて、ますます目的を達したと思つた。そこへ不況時代がやつて来た。一九三二年、ちようど私が四十二才の時、財産全部を失い、その上三万ドルの借金を作り、事業は全部失敗したわけだ。二十才の時よりもみじめな私となつた。

ところが、私が最後の十萬弗をなくした日に不思議なことが起つた。私が家に帰つてみると、机の上にMRA集会の招待状が来ていた。私は妻に「破産だから一文もないが、これはただらしいから行ってみよう」といつて一緒に出かけた。話をきいているうちに私は妻にいつた。「こいつは簡単だから、ひよつとしたらいいかも知れん」

当時の私は自分の財政状態で悩んでいたので、当然自分の問題は純経済的なものだと思つていた。

だから、数千弗の金さえあつて商売をはじめれば万事が解決すると考えて、MRAの集会で会つたあ
る人にそのことをうちあげた。彼はいつた。「あなたはぜひぶん大きな財政問題をおもちですね。し
かし財政問題はあなたの本当の問題ではありませんね」「何をいつてるんですか」と私はきいた。彼
は言葉をつづけて「あなたの問題は道德の問題です。道德の問題を先ずかたづけられてごらん下さい。財
政問題もよくなる見込みがつくでしょう」「よし、やつてみよう」と私はいつた。「本当ですか。本
気でやるつもりですか」と彼が言うので、「本気だとも。」と私は答え、その場で彼と一緒に祈つた。
ところが一つしか祈ることが頭に浮ばなかつた。私は、「神よ、罪深い私をあわれんで下さい」と本
気で祈つた。このことが、私の一生を變えるきつかけとなつた。

次にやつたことは妻に正直になることだつた。妻には知らしてない大きな借金証書が銀行にあつ
た。しかし、このことが、私の家を健全なものにするはじめとなり、私が独裁主義であつたのが、妻
との協力者になつた。

そのころ、私は悪魔が聖水をきらうように労働指導者を嫌つていた。あるときサスカトーン市で、
解決の道があつたのに、ストライキ破りをやつたこともあつた。頑固一徹でストライキには勝つには
勝つたが、そのために人に二十五万弗の損失をさせた。

この問題についてMRAは私の目を開くのにずいぶん骨を折つた。あるとき工場で組合の組織がす
すめられていると聞いた時、こんなことがあつた。ある晩、従業員の一人が「労働組合の内容が知り

たくありませんか」といつてカバンを持つて来た。彼の話によると、このカバンは夜勤のある男が置き忘れていったものなのだ。私は好奇心につられて、中をのぞいてみた。私が一ばん怖れていたことが実現した。彼——カバンを置き忘れた男は、夜勤の連中を組合員として署名させていたのだ。私はすぐさま工場の組織変えをすることにして、この男ともう一人あやしい男を解雇してしまつた。解雇した二人が労組の会長と書記長だつたことは次の日にわかつた。組合を組織している人間を解雇するのは法令違反だつたので、労働省から問合せの手紙がきた。営業状態が悪いから解雇したのだと返事を出した。これで労働省の方は満足したが、満足しないのは労働者だ。

ある朝、四時頃目がさめた。「おれはとんでもないえらい事をやつたものだ」と考えた。神に聴こうと努めてみると一つの考えが浮んだ。「この問題を解決したかつたら、先ずカバンから仕末せよ」。カバンのことはすっかり忘れていたので、私は早速解雇した二人と労働指導者たちを呼んで、解雇を取消して謝罪した。次の日、私はカナダ労働総同盟会長から手紙を受取つた。それには過去三十年間、経営者が問題をこんな風に解決したのを見たことがないと書いてあつた。

このことがあつて、私は労働組合対策を全然新しい目で見える必要を感じた。それが動機となつて、現在私の工場で行われている厚生施設、従業員の医療代の全額支払い、生命保険、病傷保険、年金等を決定した。

次に経営者は、労働者の住宅にも責任があると感じた。そこで会社の信用で住宅を建て、今では従

業員がみな自分の家に住み、二十年後にはそれを所有できるようになつてゐる。

私はMRAが実際に役立つことを知つてゐる。私のパン工場の連中は、みんながみんな、私が自分が変つたと思うほど彼らは変つたとは思わないが、少くとも二つの点でわれわれは完全に意見が一致している。その一つは物よりも人を第一にすること、第二はすべての決定を何が正しいかをもととしてやること。こうしたことを実際にやり始めると、いろいろなことが起つてくる。』

一九五一年一月にワシントンで開かれたMRA大会に、西インド諸島のジャマイカから労使を代表する人びとがきた。彼らは非常な危機に直面していた。ジャマイカの経済は富裕な砂糖農園に依存しているのだが、そこに働く労働者を中心に、二つの労働組合が支配権を争つてゐた。一九五〇年十二月には、ジャマイカの旧い有名なワジーパーク農園でこの争いが最高潮に達し、代表はワシントン会議に解答を求めてきた。こんどのマキノ大会にはその結果の報告にきたのだ。イギリス人の農園主ジョージ・エドワード大佐は次のようにいつた。『今年MRAは、ジャマイカの内乱にも発展しかねまじい危機を解消した。』

マキノへの代表団の中には、ジャマイカ製糖会社連合会会長カージャレット氏、問題の焦点であつたワジーパークの共有者ケネス・クラーク氏、ワジーパークの問題を紛糾させた労働組合の組織

部長フランク・ヒル氏、社会党の議員ウイルス・アイザック氏がいた。これらの人たちはMRAを通じて、新しい団結の道を見出した。

マキノの演壇で、彼らは一語に話をした。ウイルス・アイザック氏は、ジャマイカでの生い立ち、そして学校で学んだイギリスへの誇りについて話した。『私たちが「ブリタニヤよ支配せよ」とうたうとき、みんな戦艦を一そうぶもつてでもいるような勢いであつた。その後はじめてイギリスに行つたとき、自分ではイギリスを母国と思つていたのに、イギリスは皮膚の色がちがつているので子として扱わなかつた。私がジャマイカに帰つたときには、イギリス人全体に対して強い反感と憎悪をもつていた。イギリスを絶対にゆるさないと決心した。自治政の運動を起したりした。過去十二年間に、私はジャマイカの、百人の政治家を集めたよりも強く民衆に反英思想を植えつけた。敵を激しく攻撃することを喜ぶようになった。』

やがて、彼はジャマイカ人ばかりでなく、イギリス人の間にまで交わりつつある人を見出すようになった。一人はカージャレット、他はエドワード大佐であつた。『今ではわれわれは世界中で一番よい友だちだ。イギリス人もよく知つてみればあまり悪くない。われわれはこの新しい精神をジャマイカに入れるために協力している。』

マキノの演壇で、ウイルス・アイザック氏は公けにクネス・クラーク氏とその妻に謝つた。というのは、ワージーパークの紛糾最中に、八週間も水道の鉄管を切つて、彼らのところに水が出ないよう

にしたからであつた。

『私は最も憎んでいたイギリスを救わねばならないと決心した。世界を救うにはイギリスを救う必要がある。』とウイリス・アイザック氏はいつた。

幾千哩かなたの極東にも、暴風地帯がある。それは世界のゴム産地のマレイであるが、過去数年間、人種問題のために悩まされている。マキノの演壇に二人のマレイ人が立つて、自国の分裂と紛争に解答を与えることのできる新しい精神が起つてゐることを語つた。一人はマレイ連邦議會議員ウー夫人、他はシンガポール評議會評議員テオ・チャン・ピー氏であつた。

テオ・チャン・ピーは五年前、スイスのコーのMRA世界大会にきた。次は彼の言葉である。『マレイに帰つたとき、まさに内乱が起りそうな気配であつた。われわれはマレイに新しい国をつくらうとしてゐるのだが、団結のイデオロギーのない限り、新しい国などつくれないうことに気が付いた。』

テオ・チャン・ピーは自国にある対立的な人びとの間に新しい理解をつくるため、全力を傾倒した。多くの人は手後れだといつた。しかし、彼はあきらめなかつた。その結果、イギリス弁務官マルコム・マクドナルド氏はマレイ人と華僑社会を代表する人びとで連絡委員会を結成することに成功した。『われわれはMRAが国内を団結させるイデオロギーであることを実証した。世界をも一つにできる筈だ。このイデオロギーが東洋と西洋の融和をさまたげるとするならば、それは政治家と大衆がこれを早く受け入れないで、実践が手後れになることだ。』

ウーン夫人はつけ加えた。『マレイがもし破壊分子に支配されたならば、東南アジアの将来は暗黒になる。二年前、私はヨーロッパにいたが、攻撃はヨーロッパではなく、アジアに起るだろうといった。いくつもの朝鮮問題が起り、イデオロギー的攻撃がなされると思う。MRAは第三の道を示し、西洋も東洋も交わつて団結できることを示している。』

彼らと同じ演壇に、サラワク王国——アメリカのニューイングランド地方位の大きさで、五十万の住民をもつ——の王子も立っていた。彼の人民はこの王子の支配下に服することを望んでいたが、前の国王が国の主権をイギリスに渡してしまったのであつた。流血の惨事がおこる危険があり、一人のイギリス総督は暗殺された。ある夜、この王子は神の声に耳を傾けた。彼の感じたことは、自分はどんな犠牲を払つても、サラワクに融和を築く必要があるということであつた。彼は王位の要求をやめることにし、国民に手紙を送つて、憎しみによつて伝統を亡ぼすよりも、イギリスと融和するようにすすめた。

大会の終りの日に、出席中の中国代表に、蔣總統夫妻からの電報で、前中国監督教会長でMRAの先覚者ピショップ・ルーツ（アメリカ人でマキノに眠る）の墓前に花環をささげるようにと言つてきた。世界中からきた人びと、ルールや、イタリー、フランスの赤色地区から来た前コミニストや、イギリスからきた港灣労働者、日本人、マレイ人、産業家などみな丘をのぼつて、その墓前に立つた。

国際コーラスがピシヨツプ・ルーツ師の徳を頌えた。

ビルマ首相の導師である仏教高僧ウレワータ師は、この島に葬られた多くの勇敢な人びとの霊をむらつた。中国代表（現駐日中国大使）はライラックと百合とバラの花環を墓標の大きな石の十字架の前にささげていった。『われわれ中国人は欠点が多いが、しかし、感謝の念だけは欠けていない。われわれはピシヨツプとMRAに心からの感謝をもっている。』

フランク・ブクマンはこの旧友のことを感動的に話した。ある実業家は、花と太陽の光のなかを多くの国ぐにと多くの人種とすべての階級の人びとが列をなして墓前をすぎるのを見て、讚嘆の言葉を発した。『私はこんな光景を見ようとは夢にも思わなかつた。これこそ人類の兄弟愛だ。何とも云えない感動だ。そしてこれが、みんなたつたひとり人の確信と勇氣から生まれたのだ。』

フランク・ブクマンはマキノでのすべての活動の中心であつた。大きなホテルの部屋を一つ一つ調べて、代表がみな適当な部屋に割当てられているかを見た。ヨーロッパのある新聞人がブクマンに会い、また彼の話をきき、その会の指導ぶりを見て、こういつた。『あの人物には真の天才の印がある。単純な心に神の力が宿っている。』

フランク・ブクマンは神の意志が人と国の生命を支配するものとなるために日夜若者をしのぐ力と彼自身の智慧以上の叡智を見せて働きつづけた。笑いと涙、新鮮さと現実さ、愛と忍苦、力と癒し、あらゆるものを通じて神の意志は表明されるのであつた。

ホテルのベルボーイや給仕まで、大会に一役を買っているように感じるのであつた。その人はこういつていた。『こんな人たちの世話をしたことは今までにありません。』村の人びととその子供たちが代表に会うために招待された夜、四人の給仕は大会の開かれている間中、ホテルにみちみちていた雰囲気に感激して、ニグロ・スピリチュアルを歌つた。

世界の緊迫状態をよく知つていある外交官は、マキノを去るときこういつた。『ここに参加したわれわれとしては誰一人、今まで通りの生き方はできない。人びとの生活に生まれた奇蹟、国の問題についての新しい光、平和への新しい希望をわれわれはみた。』

フランク・ブックマンは次のような言葉をもつて結論した。

『私の願ひは、アメリカ人のひとりひとりが神の導きによる自由を得て、アメリカのために闘うことである。そのとき、アメリカ自身が目に見えない実在である神に導かれて、罪の専制から真の自由を得られるのだ。このことを私はまた他のすべての国のためにも望みたい。われわれの子供たちにも答えをもたせたい。答えのないことは彼らを罪にしばらくすることである。それではだめだ。答えがないと、われわれに対抗している人びとと同じものの考え方が彼らを支配するようになるだろう。そんなことでは真のデモクラシーは築き得ない。正しい革命を遂行するには信念をもたねばならない。この革命を早く遂行できれば、アメリカと世界を救うことができる。』

第12章 新しい世紀のメツカ、コー

世界は来るべき時代への戸口としてデモクラシーに期待をかけたこともある。しかし今日では幾百万の人びとが懐疑的になつてゐる。デモクラシーは受身になつて、あらゆる方面からマテリアリズムの巧みな理論と勇敢な攻撃になやまされてゐる。物質万能主義だけが残された道のように見える。

デモクラシーは一度失つた幾百万の人の心を再びとらえることができようか。

過去五ヶ年間にスイスのコーで実践されたデモクラシーのあり方は、あらゆる人種、背景、文化の異なる人びとの心を捕え、彼らが真のデモクラシーのイデオロギーをそれぞれの国の礎にするため、革命的な情熱を傾けるようになってゐる。

いままでに百三ヶ国から三万の（一九五三年にこの数字は六万にふえている。）代表がコーの大会に出席してゐる。十名の首相、九十三名の閣僚、四千万の労働大衆を代表する労組幹部も三十四ヶ国から多数出席してゐる。

二千万のマルキストとコミニストたちは、ここで優れたイデオロギーを発見してゐる。

アメリカ上院議員十四名（註第2部38参照）と下院議員二十三名も、世界各国の国会議員とともに出

席している。(第2部33のアメリカ国会議事録には、超党調査委員の報告が記録されている)

ヨーロッパから二十一ヶ国、アフリカから二十二ヶ国、南北アメリカから二十二ヶ国、回々教各国と中東からは十三ヶ国が代表を送つて来ている。極東からも十四ヶ国が参加している。コーは正しいイデオロギーのメッカである。

一九五〇年の九月、インドの指導者が自国のイデオロギー的訓練の指導を求めたのは、モスクワでも、ロンドンでも、ワシントンでもなく、実にコーであつた。

人びとがコーに集まる理由は、東洋にも西洋にも、すべてのところのすべての人にルネッサンスの秘訣、再建された世界の型を示しているからである。(第2部34、35、36参照)

一

他の会議にはなく、コーにあるのは何か。

フランス上院の副議長はこういつている。『われわれはヨーロッパを政治的、経済的に団結させようとして失敗している。コーで見られる道徳的団結が必要だ。』

国連代表の一人はこういう。『多くの会議ではテーブルを囲む人びとのもつ問題の方が、テーブルの上のせられている問題よりも大きい。コーの会議には解決がある。それは他の会議では議題にさえのぼらない要素、すなわち人間性の問題を深く取扱うからである。』

・インドの航空事業関係労働者二万八千名の指導者がコーにきた。彼の記憶には投獄や殴打の経験がなまなましく燃えていた。コーに到着したときの彼は、冷笑的な、絶望的人物だつた。彼は次第に^{チン}変わりはじめた。そして自分個人の生活の道德的問題に直面したとき、国家が直面している道德的問題に気付いた。それまでの彼の考え方は、自分の国は傍觀的立場で、ソ連とアメリカが世界の将来を決定するのを待てばよいというのであつたが、このとき彼は世界の将来を決定するのはアメリカでも、ソ連でもなく、彼自身のような幾百万の大衆だということが分つた。コーを去るときの彼は、人間をつくりかえるものになる決心をしていた。インドに帰つた彼は、国民大衆とともに世界をつくりかえる仕事に積極的に働く決意を固めていた。

コーでは、人が新しくつくり出される経験は毎日普通のこととなつているが、政界でもそれが当り前のこととなつてもよいわけだ。

コーで新しく造り変えられた人は、すべての人、すべての事柄に今までと全然ちがつた態度をもつようになる。

フランク・ブックマンはこういう。「耳あたらしいことでもないが、新しい人が必要だ。新しい人が土台となるイデオロギーは優れたイデオロギーだ。認めざるをえない力だ。優れた思想の力。今までのものよりも良いものであれば、優れたイデオロギーではないか。人間の性質がすっかり変わつて、他の人が「あの人は一緒に暮すのにすばらしい人間だ」というようになるとしたら、どうだろ

う。会議に出席する人も新しくなることだ。生活の態度が内でも外でも今までとはちがう人である。こんな変化を労働者は経営者に期待するわけで、こんな変化がおこれば、要求の半ば以上が満たされるであろう。この優れたイデオロギーを生きる人びとがいれば、分裂は解消して、生きることは現実の喜びとなる。』

コーで人びとは生命を発見する。信仰のある人も、また信仰のない人も、誰もが、自分の生活にも、国家の生活にも絶対標準が役立つことを発見する。

イギリスのリバプールからきた港灣労働者はいう。『クレムリンから出た思想でM R Aの四つの標準に匹敵するようなものはない。』

変わることは誰にも出来る。この四つの標準を徹底的に生きようとするとき、変化が起こってくる。この体験をもつた人は、他の人に与える真実なものを持つ。人が変わりますと、今までとちがった世界を知るようになる。到底解決できないと思われていた問題も、その問題を起こす人間の憎悪、貪慾、恐怖などが解消するに依じて急速に解決されて行く。

コーへ来る人びとは人間性が変わり得ることを学ぶ。ただし、それは神のみがなし得るということ

も。
この真理が毎日新しい体験を通して試されて行くにつれて、ある人には信仰が生きたものとなるし、またある人にとってはそれが強められる。例えば回々教徒がイスラムの教に忠実になり、絶対の

道徳標準を受け入れ、神の導きに従うようになるとき、自国の道徳的、精神的覚醒の大切な一部となるばかりでなく、世界にもそれを及ぼすようになる。この生きた信仰がなければ、彼も形式的なクリスチアンと同様に無力である。

つくり変えられ、信仰まで達した人は、国と世界を脅やかすすべての問題が解決されるという信仰を生きることができる。問題が行き詰まったとき、その陰にひそむ道徳的、精神的原因が明らかになると解答が出てくる。

それだから、コーでは共産主義者も資本主義者も、経営者も労働者も、あらゆる階級と人種に属する人びとが、世界の待ち望んでいる団結の境地に達することができるのである。

このことは、決してコーに来る人がみな、すべての問題について同じような考えをもっているというのではない。しかし、コーで彼らは党派、階級、人種、個人の意見、自己の利益を如何にして超越できるかを学ぶのである。このとき、はじめて団結ができるのだ。

二

コーはまた新しい社会の模型である。あらゆる人種、階級の人たちが行動と方針に対して神の導きを求めるときに生まれる共通の生活である。人びとが人間的意欲を神の意志におきかえようと決意するとき、起り得る生活のあり方を示唆している。神の叡智を聖人でない普通の人や懐疑的な人にも

分らせる秘訣を教えている。コーでは幾千のんびとが、「人が聴くとき神は語る、人が従うとき神は働く」という事実を経験している。

この忘れられた真理を通じて、家庭は融合され、効果的な経済計画も生まれ、人と人、国と国との新しい団結が生まれてきている。フランスのイレヌ・ロール夫人は深い反省ののち、自分の心に燃えていたドイツに対する悪感情に対する答えを得た。あるドイツの指導者は、彼女がこの答えを見出した後にドイツを訪問したことが、長年くりかえされていた会議よりもドイツとフランス両国を結ぶのに役立つといっている。

港灣労働者がコーにくる。一九四九年のイギリスの港灣のストライキは、二億一千七百万ポンドの国家的損失であつた。このストライキに指導的役割をしたある男の推測によると、彼や彼の友人のいく人がコーで新しい精神を学んでいなかつたら、その後少くともイギリスの港灣では二回ストライキが起るはずであつた。人間の智慧が最高でないことを認める謙虚な気持になるときに与えられる優れた叡智を彼らは発見するようになった。彼らの一人はいう。「私は神にきいて、心に浮かんだ考えをみんなこのノートブックに書きつける。このノートは私が持つて歩くカバンより大切だ。なぜならカバンに入れて持ちあるく問題の答えを、静かに私が書きとめたものがこれなのだから。」

すべての大陸、すべての国で現代の問題を解決しようとして重ねられている会議や委員会がコーの精神で行われたなら、直接にも間接にも、莫大な費用が節約されたにちがいない。

あらゆる境遇の人が神の導きを体験すれば、すべての分裂を結びつける橋を見出すことになる。アフリカのナイジェリアの代表たちは、これが白色人種と有色人種の間にある悪感情をのぞく道であるといっている。

ヨーロッパのある工業地帯で、マルクスの理論を十万の労働者に教育していた男が経営者側が神の導きに従いだすのを見て彼はいう。『経営者がコーの言葉で話し出すとき、階級闘争は時代遅れとなる。』帰国後彼は、この情操と良心を土台としたイデオロギーで労働者の訓練をはじめている。（註ハインツ・グロス博士の声明——第2部2参照）

共産主義者たちはコーで黨員カードを破棄してしまう。導きの声に耳を傾けるようになると、固い唯物史観論者にも信仰への扉が開かれる。初めは試験的にはじまるが、次第に実証的体験となる。

コーが与える新しい世界の観念は非常に大きく、しかも個人生活にも満足を与えるものであるから、コミニストも拒絶できないといっている。この人間社会のルネッサンスこそ、流血革命に対する答えであると彼らは考える。このルネッサンスの焰のなかでは鋼鉄のような利己主義も、鉄のような社会不公正から生れる暴力思想もみな熔けるのである。

コーは今まで民主主義国家の政府、労組、学校等を悩ましてきた浸透作戦の歴史を覆しはじめている。今ではコミニストたちがコーから彼らの細胞に、また党組織にもどつて、より大きな革命への道にすすむための同志を獲得している。彼らは唯物的信仰の基本的断定をくつがえす体験をしているか

らである。

コーは人間が造り出した問題に、神の答えを求めさせようとする。

三

さらにコーは訓練されたイデオロギーの勢力と武器とを供給する。どうしたらそのような勢力がつくられたかをフランク・ブックマン自身の言葉で答えよう。

『一時代前、唯物的イデオロギーに熱中した一群の人びとが、世界を手中に入れようと決心した。その目的のためには生命をも賭した。二十五年間、彼らは全世界に拡がつて、寝ているときも起きているときも、間断なく巧みに、遠慮会釈なく努力した。

デモクラシー諸国の政治家たちが突然目を覚ました。いつたい何事が起つているのかと目をこすつている。どうしてわれわれの立場がこうなつたのか、どうしてこんなことが起つたのかと。

理由は簡単である。大部分が居眠りしたり、自分の問題にとらわれていた間に、唯物主義者は理論と情熱と計画とをもつて、革命遂行のため全力を傾倒していたのだ。

それに対する答えは何か。

一世代前にMRAの勢力も闘いはじめた。MRAは全世界にわたつて、計画には計画をもつて、思想には思想をもつて、神をみとめない急進的唯物主義には、同じように急進的な神をみとめるデモク

ラシーのイデオロギーで対応してきた。

この考え方が根をはつた。人を造り変えた。国から国へと衝動を与えて行つた。今では世界をゆすぶつてゐる。

今日、コーのMRA大会ではこの勢力が実際に活動しているのがみられ、いつでも人の役に立つことができ。政治家が手後れではないかと感じているいま、MRAは二十五年の努力の成果を惜しみなく与えている。』

フランス外相シューマンはいう。『MRAは、国に任せ、和解の使徒となり、新しい世界の建設者たるべく訓練された人びとのチームを用意している。』

デモクラシー諸国が彼らの主義を世界に如何にして知らせようかと考えているとき、コーではすでにイデオロギーの武器が完成され、大衆に働きかけて効果をあげている。『忘れられた要素』は十二

ヶ国語に翻訳され、十八ヶ国の有力指導者を含む八十五万人の観衆の前で上演された。(註第2部39

参照) 『善き道』はアメリカとヨーロッパで幾千幾万の人びとに、デモクラシーの精神を劇化して見

せた。他にも五つの劇があるが、いづれも破壊的思想のために混乱している人びとの心に訴える大きな役割を果たしている。

そうした劇や歌を通して、MRAは芸術のルネッサンスの種をまき、新しい劇と新しい文化を世界に訴えようとしている。

コーでは共産主義に対する生きた答えが生まれている。

共産主義は新しい思想体系をうちたて、普通の人に分らせることに成功した。階級闘争という言葉によつて、あらゆる世界情勢を解釈できるようにした。

であるから共産主義者は、全世界どこでも、あらゆる場合にイデオロギー的に対処して行くのである。国連の代表であろうと、労働会議の労組代表であろうと、新聞を読む一般人であろうと、彼がコミニストであつたならば、彼はすべての情勢を解釈し、共通のイデオロギー的観念から行動をする。

このイデオロギー的態度はあらゆる面に、政治に、産業に、教育に、文学に、芸術に、また競技にさえもあてはまる。スターリンの言葉をかりると、『われわれのイデオロギーの強さは、いかなる事態に処しても党としての態度を決定できること、情勢の内部事情をつかむこと、単に現在その情勢の起つている原因を見極めるばかりでなく、何時、如何にして将来発展するかを知り得ることである』。

しかしコーでもまた新しい思想体系がうちたてられ、普通の人を理解できるようになつてゐる。コーは共産主義より普遍的で根本的なイデオロギーを与えている。人間生活のあらゆる面に浸透し、あらゆる場合にイデオロギー的に効果的に活動できるイデオロギーを与えている。しかもこれは強制さ

れるのでなく、自由に選べるイデオロギーである。暴力でなく、自由のイデオロギーである。

階級と階級、人種と人種間の闘争を必然的と考える代りに、善と悪との果てしない闘争を認め、人間が心と意志によつて決定をする背後には常にこの闘争があることを示している。

フランク・ブックマンはこういつている。

『共産主義者はひとつの信仰によつて動いている。人間が当然望むべき新しい世界を造るには、超国家的考え方が必要だが、そのためにわれわれは、より偉大な信仰を持たねばならない。これこそ、われわれに必要な規律正しい生活である。新しい世界は悪を黙認する状態では動かせない。神に導かれた人によつて歴史は変えられる。さらに神に導かれた人が、世界を再造するに役立つ国、すなわち神に導かれる国をつくることができる。』

われわれの手からぬけていつた信仰を再び捕えなくてはならない。われわれの先祖はそれをもつていた。リンカーンもその思想をもつていた。彼は神を知っていたから、国を融合させることができた。新しい世界を形造り、これを融合するには神が話しかけられる人が必要である。』

第13章 フランク・ブクマン

ごく少数ではあるが、自分の世代よりも一代先きを生きる人がいる。そうした人はその世代の論議の対象となるが、後世からは感謝される。このことは歴史が証明している。フランク・ブクマンの場合もそうである。

フランク・ブクマンはスイス系のアメリカ人である。彼の祖先の一人はツリーッヒのツイングリ（ルーテルと同時代にスイスで宗教改革のために努力した指導者。）の後継者で、コーラン経典をドイツ語に翻訳している。一七四〇年に一家はアメリカのペンシルバニア州に移住したが、アメリカ移住後、祖先の一人はバレー・フォージの激戦のとき、ワシントンの部下として戦い、また一人は南北戦争のとき開戦当初リンカーンの軍隊に志願した。

今日、ブクマンは七十五歳である。彼は広く世界を旅行し、各国について深い智識をもっているが、その智識は世界各国の大衆と指導者との個人的接触から得たものである。大学卒業後、彼は毎年各地に旅行し、ペンシルバニア州立大学その他の大学で教えるかたわら、できるだけだけの時をさいて人びとや国ぐにを知ることにつとめた。

一九二一年、彼はイギリスのある軍事顧問に招待されて、ワシントンの軍縮会議を傍聴しに行つた。このことは二つの点からいって意義深い。第一はワシントンへ行く列車のなかで、彼の心のなかにひとつの考えが迫つてきた。それは『辞職、辞職、辞職』であつた。経済的に安定した容易な生活をすてて未知の道を選べという挑戦であつた。第二は会議の模様をつぶさに見ていた彼は、人間性を変えない限り世界平和の計画だけでは足りないという日頃の確信を強めたのである。『新しい世界は紙の上で計画をすることはできるが、その実現は人によつてしなければならない。』

であるから彼は、個人の変革を土台として経済、社会、国家及び国際間の根本的変革を計るため、あらゆる階層の人たちを訓練しはじめた。オックスフォード大学（註）ブックマンはイギリスのオックスフォード大学に行き、当時第一次世界大戦の戦線から再び学窓に戻つてきていた青年学生たちと共に世界を再造するための新しい闘いをはじめた。で彼に会つた南アフリカから来ていたローズ奨学金の学生たちがブックマンと一緒に帰国したとき、あまりにもその影響が強かつたため、ブックマンの業績は南アフリカ全体に知れわたつた。そのとき、南アフリカの新聞が『オックスフォード・グループ』という名前をつけたのである。

多年スマッツ内閣の副首相であつたホフマイヤ氏はこのときのことを次のようにいつた。『一九二九年にブックマン一行が南アフリカを訪れたことは国全体として重要な意義があり、白人と黒人、オランダ系とイギリス系の人びとの間に人種的融和をもたらす恒久的な、そして偉大な感化の基となつ

ている。……南アフリカのデモクラシーの将来は主に彼らの努力の結果によるであろう。』
 運動は急速に発展し、一九三〇年代には世界的に発展した。ノールウェイの国連代表としてゼネバ
 について、のちに国際連盟の議長となつた人がこういつた。『われわれが政治の在り方を^{マニシ}変革しよう
 として成功しないのに、諸君は人間を変えることに成功し、多数の人びとに新しい生き方を教えてお
 られる。』

一九三八年にブクマンは、軍事的抗争では世界のイデオロギー問題を解決することはできないと
 いう現実を直視して、道徳の再武装(MRA)を唱え、戦いに勝つためにも、また正義にもとづいた
 平和を築くためにも道徳力が必要であることを明らかにした。(註第2部37参照) ブクマンはいふ。
 『神がひとつの考えを与えてくれた。世界のすみずみまでおよぶ大きな道徳と精神の再武装運動が起
 こるであろう。新しい人びと、——新しい国ぐに、——新しい世界。』(註第2部41参照)

一

フランク・ブクマンの洞察力と行動は、各国にイデオロギー的闘争への心構えを与えはじめた。
 これはファシストとコミニストが一番恐れていたことだつた。すなわち、デモクラシーの産業力と武
 力にさらに真のデモクラシーのイデオロギーの偉大な力が加わることである。ブクマンの行動はデ
 モクラシー内の最良の愛国的勢力を自覚ます一方、破壊的勢力の反対をも誘発した。

一九一七年に極東を旅したときの経験から、ブツクマンは共產主義の無神主義をよく認識していた。コミニストの方では彼のもたらす道徳と精神のルネッサンスは、彼らにとつて最も危険な敵であることを早く認めた。同様にブツクマンは、ファシズムもその根本は唯物主義であることをはつきり認めていた。『ファシズムとコミニズムという二つの世界勢力がある。これはどこから発生しているか。すべてのイズムの母ともいふべきマテリアリズム（物質万能主義）からである。これは腐敗と無秩序と革命の温床となる反キリストの精神である。家庭の基礎をこわし、階級と階級とを戦わせ、国内を分裂させる。マテリアリズムがデモクラシーの最大の敵である。』

一九四五年に西欧の政治家たちが未だはつきりと気付かなかつた根本的真理を彼は語っている。『今日三つのイデオロギーがその支配権を争っている。ファシズムとコミニズム、それにキリスト教的で、デモクラシーの中核ともいふべきMRAのイデオロギーである。他のどんな強力なイデオロギーに勝るより強力な、より完全なイデオロギーを発見する必要がある。それまで人びとは迷い、道を見出さないであろう。』

運動の始めから、道徳的イデオロギーが世界に根強くなるのを喜ばない人びとから彼はひどく攻撃された。コミニストは公式通り彼にファシストの烙印をおした。ナチスは彼の仕事を『これはデモクラシーの目標にクリスチャン的な衣をきせるものだ。その会員はキリストの十字架に忠誠を誓うことが要求され、キリストの十字架を亡ぼそうとするスワスチカ（ナチスの十字）を排撃するものである。

これは明らかに国家社会主義に反するものである。』……。

ところが一方、ブックマンに向かつて『ほつておいてくれ』とか『さつさとヒトラーを変えてきたらよかろう』とかいつた人びとの自己満足は、数年後にはデモクラシーを危険に追い込んだのであるが、彼らは後になつてなお、MRAがドイツでやつたことはブックマンがナチスびいきだつた証拠だなどといふらした。ブックマンは一度もヒトラーに会つたこともなく、ヒトラー自身も注意深くブックマンの影響下におちることを避けた。ブックマンはヒトラーや他のナチス指導者と親しい関係をもつたことは全然ない。

しかし、ブックマンの影響は事実ナチスドイツにも浸透していた。ちようどいま鉄のカーテンを浸透しているのと同様である。ルーデンドルフの雑誌はその誌上で『MRAの甘い毒が国境を越えて浸透しつつある。』と警告を發したほどである。それゆえナチスが戦前からMRAの文書を禁止したことは驚くにあたらない。ナチス進駐軍は行くさきさきでMRAを抑圧せよと指令されていた。

これらの事実自体がブックマンの影響力を証明していると思う。デモクラシーが変革チェンジというイデオロギーで身を固め、大戦と大戦の間の年月にドイツをはじめ、他の国ぐくに伝える方法を知っていたなら、おそらく歴史は変わつていたのであろう。

今日になつて、ブックマンのイデオロギー的洞察の正しさは次つぎと証明されてきたが、彼はコミニズムの危険を力説する一方、反共は解決でないことをも強調してきている。『真の解決は道徳と精

神を基としたイデオロギーによらなければならない』と彼はいう。『このイデオロギーにはわれわれの文明に含まれている道徳的弱点をあらため、現状維持を打破しようとしている世界大衆の支持を受けるだけの創造力がなければならぬし、真の勝利はこの迫力ある解決が、軍事力というしつかりとした右腕によつて支えられるときに来る。そのとき、政治家は思想的に、軍人は軍事的に相手に後れをとらなくなる。』

二

戦時中、ブツクマンはたえずイデオロギー的明確さと道徳的強さをつくるための努力をつづけ、それだけが勝利の根本であり、また恒久平和の基礎であると信じていた。

一九四一年六月、真珠湾攻撃の六ヶ月前にフィラデルフィア市でこういつている。

『MRAの目的は、一国を内外の敵から防ぐために強固にすることである。これは国にとつて必要なものである。』

MRAはデモクラシーが円滑に運営できるようにするものだ。すべての人に、その人が必要としている心の規準と、望んでいる心の自由を与える。すべての人の道徳的、精神的、責任を呼び起こし、結合させ、直ちに実行にうつすようにする。

MRAはデモクラシーの骨組となるべき人びと——無私で奉仕的で、真の融合を作ろうとする決意

にもえ、私的利益に動かされない人びと、そしてまた、神の導きに従つて、いかなる危機に直面しても恐れにまけない体験を人に伝える道を知っている人びとを作る。

彼らは真の闘士だ。国にとつて必要なこの精神を与える準備のため、長年努力しつづけてきた真の愛国者だ。……混乱と分裂の根本をたち切り、また破壊勢力の作戦を見やぶる人びとだ。』

当時アメリカの戦時産業の上院調査委員長をしていたトルーマン氏はこういつた。『どこに行つてもMRAが拡がっているのを見て、アメリカの安全保障に一段と強い確信を得た。』

戦争の終るころ、国連憲章を起草するため、サンフランシスコで会議が開かれたとき、ブックマンもそこにいた。代表のある人びとの提案で、会議に出席している全代表に劇『忘れられた要素』(第2部46参照)を通してMRAを知らせる機会が与えられた。ちょうど国連憲章の字句について長ながしい論争や、時にはすこぶる悲観的な討論が行われていたためか、この劇は非常に歓迎され、幾度も上演された。また多くの代表から戦災にあえぐ国ぐにの再建を援助するために、訓練されたチームをつくつて来てもらいたいという招請がブックマンにとどいた。

このイデオロギーが世界的に歓迎されるのを見て、あるイギリスの外交官が次のようにブックマンの業績を評価している。

『第一に、ブックマンは他の人が全然気づかない前から、陰で行われていたイデオロギー的闘争の重要性を、しかつりと見ぬいていた。過去十年、十五年間の彼の演説をみるとそれがよく分る。(講演

集「世界を再造する」毎日新聞社発行参照）しかし彼はそれだけに止まらないで、第二の段階に進んだ。このイデオロギー闘争の必然的結果を考えた彼は、デモクラシーの解答となる建設的なイデオロギーをあみ出した。そして、第三のことをした。各自の生活の中で、この答えを実践するイデオロギー的な訓練をうけた人びとによる世界勢力をつくりだした。これがMRAである。』

アメリカで法人組織をつくつたときの前文が、このMRAという世界勢力の精神をよく表わしている。

『富、名譽、休息はわれわれの目的ではない。

われわれのもつ智識は聖靈に示された真理に基づいている。

われわれの安心はキリスト・イエスを通して与えられる神の富である。

世界家族としてのわれわれの融和は聖靈の指導と、相互の友愛によるものである。

われらの喜びは神の指導権を確立するために心の^{変革}をもたらす戦いとにもすることである。

われらの目的はどこでも、すべての人の心と意志の中に神の国を樹立し、神の国を地上にきたらせ憎悪と恐怖と貪慾から自由な世界をつくることである。

われわれは神の意志を成就することによつて報いられる。』

世界の政治家が陰に陽に彼の助けを求め、また世界的に拡がった大運動の指導者であるがブツクマンは一瞬もユーモアを失つたことはない。また彼の人に対する思いやりと、その人たちの必要に敏感であることは独自のもので、年とともに深まつている。

彼は世界再造を使命として一生をささげているが、現代にあまり見られない偉大な素質を持つていることが分る。それは人が責任を十分に果たすように訓練し、人をのばすことである。彼はよくいう。『十人の人が自分より上手に自分の仕事をやれるように訓練するまでは、成功したとはいえない。』

彼が一生をかけた事業は、革命的チームワークによつて将来続けられていくだろう。革命的チームワークによつてすでに世界至るところ、道徳と精神のイデオロギーが自由に入れる国には細胞とチームが作られている。さらに鉄のカーテンの向うにまでも及んでいる。

人に対する彼の愛、彼らの必要や失敗についての敏感さ、人に自分の最善を生きようとする意志を与える力、これは賜ものであり、それが彼の仕事のここまでのびて来た秘訣であり、彼にいわせると誰もが身につけることのできるわざである。スコットランドの炭坑夫ピーター・オコナーはフランク・ブツクマンとの会見の印象を次のように語っている。『あなたに会つた半時間に、今まで誰に会つたときよりも大きな助けを得ました。』それに対してブツクマンはこういつた。『私のしわざじやない。神の賜物です。』

神の導きを受けることは彼にとつては食べたり、眠つたりすると同じように自然なことである。彼のよくいうことは、『神は人間に二つの耳と一つの口を与えている。人間はしゃべることの二倍聞いた方がよい。』

彼はある時、放送演説で次のようにいつた。

『テレビジョンが物質面で空間を征服する映像であるように、導きは精神面での先見的な知覚である。その限界はわれわれがどれだけ服従するかによつて定まる。』

神と交わる時、導きが得られる。神との交わりの初まりは、しゃべることの二倍聞くことである。極く簡単な出発である。しかし、この中にこそ、自己中心の病いから世界を救う戦術がひそんでいゝる。国でも、個人でも、自己が中心になるとき、戦争が起こる。恐怖に支配される人もある。彼らはこわいからといつて毎日利己主義に対して戦おうとしない。

『神の導きは大衆が精神的にも、肉体的にも生きるための最少限度の必要であり、それはまた国にとつても生命の血管である。それなくしては国は亡びる。政治家がこのような生活をするとき、神を中心とすることができると。政治家にこの質がないと、国はその大切な生存権さえも売り渡すことになる。』
「神によつて支配されぬ限り、われわれは暴君によつて支配される」とウイリアム・ベン（駐アメリカ大陸に理想のデモクラシーを建てるため安易なイギリスの貴族生活をすて、新大陸に渡りペンシルバニア州を開拓した人。）がいつた。』

三十年前にこの仕事をはじめて以来、ブックマンは自分の家をもつたことがない。十分な訓練を受けた彼の協力者の数は何百人に達している。彼らは月給なしで働いているが、決して飢えたことはない。幾千幾万の人びと——家庭の主婦から政府の閣僚に至るまで各種類の人びと——とともに、一つの真理を生活に実践している。世界にはすべての人の貪慾をみたすものはないが、すべての人の必要をみたすものはある。互いに思いやりを分かちあえば、みなが必要がみたされるといふ真理に生きていくわけである。フランク・ブックマンはこうもいう。『神が導くとき、神はそなえる。』

この解答が根本的必要であると確信している多くの人が、この革命的勢力を進展させるために犠牲を払っている。多額な寄附はめつたにないが、生活費をきりつめての些細な寄附が多い。アメリカ独立宣言に見られると同じ精神がこの運動をまかなっている。『神の摂理による守護を固く信じ、互いにわれらの生命、財産及び神聖な名譽をも賭けて誓う。』最初からブックマンの仕事は、これが正しいと信ずる人びとの犠牲によつて推進された。人は最も貴重な信仰のためには、最善なものを出すものである、人びとは給料を、資本を、家を、貯金を出している。

イギリスでは港湾労働者や炭坑労働者、ショップ・スチュワードたちが各地で闘争資金を積立てている。労働者は自由にこれに寄附できるようになっている。この資金で彼らは代表をコーに送り、世

界大会の援助をするわけである。

ヨーロッパのある前共産党員にある人が、MRAは実業家の寄附を受けているかとたずねたとき、彼は次のように答えた。『寄附する人もある。もつとたくさんの実業家が寄附してくれたらよいと思う。実業家が社会正義と新しい世界秩序のために力強く闘うグループに金を出すのを、労働者は大いに喜ぶはずだ。』

ブックマンとともに運動の中心になつて働く人びとが、世界再建の闘いにすべてを投じている犠牲的精神、それがMRAのメッセージをきく人びとの心を打つのである。

新しい精神が自分の家庭、自分の産業、自分の社会を変えた経験をもっている人は、この絶対に必要なものを普及するためにあらゆる努力を惜しまない。金銭とは限らず、家を解放するとか、時間を提供するとか、自分の才能、食料などあらゆるものをいろいろな人が寄附している。

コーのMRA大会場にはドイツのルールから石炭、デンマークから卵とバター、イギリスのシェフィールドからナイフ、フォークの食器類、アフリカのケニヤからコーヒーが送られてきた。

できるときに出来るだけ寄附する人もいれば、期間をきめて一定額の寄附を約束する人もいる。その他MRA書籍の販売から来る収入も運動のために使用される。

伝統的な経済理論である『上品な利己主義』が、世界を今日の混乱に導いたのだといつても過言であるまい。フランク・ブックマンは世界に、非利己主義の経済が実際に役立つことを実証している。

MRAで使う金は、他のいかなる事業や政府で使うものよりはるかに経済的に使われる。というのは、どんなに経験や資格のある人でもMRAで働くときは無給で働くのであるから、運動費は最少限度に低いわけである。運動の発展がその予算の額とは比較にならないほど大きいのもこの理由による。ホテル、印刷、ガレージ、医薬、歯科等は多くの場合、どの国でもこのイデオロギーを世界に拡げたいと願う人びとによつて、無償か、或いは最低の料金で与えられている。

仕事を持つ人で金もあまりないという多数の人は、週末や夜の時間をさいていろいろな仕事の手伝いをしてゐる。

MRAの活動はすべてこの運動進展を最大にするため、犠牲によつてそなえられた資金と奉仕を最も経済的に活用してゐる。

五

フランク・ブックマンは全世界に多数の友人をもつてゐる。ギリシヤに対するMRAの貢献を表彰して、ポール国王はロイヤル・オーダー・オブ・キングジョージ・ファスト・オブ・グリース章のコマンドーに彼を任命した。しかし彼が最も貴重に考へてゐるのは無数の人びとの友情であつて、それが前共産党員であらうと、軍人、または産業界の指導者であらうと同じである。

フランク・ブックマンに会うまで二十五年も党員であつたドイツのルールの共産党指導者からの手

紙はその典型的なものだ。

『闘いはなかなか激しいのです。しかし素晴らしいことだし、特に家族一緒にこの闘いができることは感謝です。善が勝たなければなりません。仕事のあい間にも私は人にこのイデオロギーを伝えるため、話をしていきます。そして出来るだけよい手本になろうとしています。私はたくさんの人間らしい間違いをしたり、また弱点もあります。家族も同様です。神が助けてくださらなければならぬことが度たびです。しかし一つだけ確かなことは、かつて今ほど幸福と満足を感じたことはありません。これはあなたのおかげです。』

これで残念ながらペンをおかねばなりません、私の家族全体から——妻と娘と娘婿及び私からの心をこめた挨拶をお送りし、併せて、あなたの御健康を心から祈ります。

それにもまして、全世界各地でこの素晴らしいイデオロギーが勝利を得て、人類が再び幸福を得るようにと祈ります。』

第14章 再建される世界

デモクラシーには最後の勝利が約束されているであろうか。

この答えが、将来の歴史を決定するであろう。

デモクラシーが勝つためには港灣であろうと、政府内であろうと、あらゆる面での破壊活動に答えを持たなければならぬ。さらに炭坑や製鋼所の行きづまり、市民と官吏のなかにある腐敗、家庭の分裂などにも答えを持たなければならぬ。

これらはみな人間生活の破綻から生まれて来るのだ。その原因は大衆が公私ともに何が正しく、何が誤ちかをつきり見きわめることができないところにある。

レーニンは人間生活の根本に道徳的なもののあることを認めた。コミニズムと階級闘争は『人の心から神についての神話が除去されない限り絶対に成功しない』といい、コミニストにこう忠告している。『敵の道義の腐敗が甚だしくなり、致命的打撃を与えることが容易、且つ可能になるまで、最後の一撃を加えるのを待て。』

エブラハム・リンカーンはこういう。『危険はどこから来るだろうか。私はいう。危険は必ず内か

ら来る、決して外からではない。かりに破滅がわれわれの運命であるとすれば、それはわれわれ自身
が招くのである。自由人の国家として永久に存続するか、それとも自殺行為によつて断絶するかを決
定するのはわれわれ自身である。』

デモクラシーの理念は現在人間の最善の社会形態を示している。しかしデモクラシーが今日批判の
俎上にあるが、それはその理念のためではなく、実践の欠陥のためである。

MRAは個人と国家に善悪の絶対標準を与え、真のデモクラシーの基礎を示している。

人と国との道德^M再武装^Rは、今では見逃せない世界的事実となつている。労使対立の行き詰まりは解
消している。マルキシストは新しい思想を発見している。フランスとドイツ両国間に新しい融合が生
まれ出している。東洋人も西洋人も、人間は変わる必要があるということ、共通点を見出ししてい
る。家庭が新しくなり、夫と妻との間に、母と娘、父と息子の間に新しい正直が生まれ出している。
港灣や、製鋼所や、工場や炭坑では、労資が協力して人類の富と労働力の使い方についての新しい模
範が生まれている。青年は創造的情熱に燃え、軍事指導者は完全な防衛の秘訣を見出している。

世界のどこに共産主義革命よりもさらに革命的な、世界的規模の勢力があるだろうか。

だからこそMRAはコミニストを変え得るのである。

世界的独裁か、世界戦争か、MRAは第三の道を示している。再建される世界がそれであり、この
ためにすべての人が役割を演ずることができるのだ。

現代の世界は思想が人の心を捕え、人を動かす時代である。この事實は好むと好まざるとにかかわらず認めなければならない。

われわれが時代の子である限り、この事實から逃れることはできない。新しい時代が目の前で生まれつつあつて、それをどのように形造るかはわれわれの決心で定まるのだ。

歴史に浮き出ている四つの大きな流れが、現在のクライマックスに到達しようとしている。

第一は西欧の伝統的な信仰が薄らいで来ていること。これは十九世紀の産業革命と科学的発見に起因している。家庭と教会の力がゆるんできているのだ。

第二は、第一のことが行われていると同時に、力強く人類の心をひきつけたのが唯物主義の考え方であつた。歴史上はじめて物質を根本とする考え方が合理化され、歴史を新しく解決する鍵として発展してきた。

第三は、アジアとアフリカの眠れる数億の大衆の目覚めである。彼らは新しく勝ち得た自由と独立を裏づける信仰と哲学を求めている。

第四は、この二世代之間に世界の通信と交通が交錯してしまつた。どんな思想でも、ラジオ、映画、新聞などによつて、よかれあしかれ、われわれの祖先が夢見たこともない早さで、その影響を世界に拡めることができる。新しい時代の塑像も非常なスピードで作れる。

この四つの大きな歴史の流れが集結しつつある今日、われわれは過去五百年間に見たことのない決

定的な運命の岐路に立つているわけである。世界的独裁か、世界戦争か、或いは再建される世界か。

再建される世界は人間改造によつてのみ実現できる。これ以上の近道はなく、速効薬もない。

これはわれわれの心、われわれの家庭に始まり、国全体に拡がつていく。フランク・ブクマンは次のように結論している。

『人間性は^{チエンジ}変わり得る。これが根本的解答である。国家経済も^{チエンジ}変わり得る。それはこの解答から生まれる成果である。世界歴史も^{チエンジ}変わり得る。それが現代の使命である。』

• 第 2 部 •

1 東と西の使命

この講演はブックマン博士が一九五〇年聖靈臨日曜に、ギルセンキルヘンのハンス・ザックス・ハウスで二千六百の聴集を前にしたものである。そして西ドイツ全体の各ラジオ放送局及びベルリンRIAS局からも放送された後、全世界に放送された。

危機の今日マルキストたちが新しい考え方を発見している。階級闘争はすでにすたれつつある。経営者も労働者も階級闘争に代る積極的な生き方を生きている。

マルキストがすつかり変わつて、使用者から『彼はわれわれの最も良い友人である』といわれるようになるとは夢にも思ふまい。産業経営者があまりに変わつたので、その旅券を見るまでは彼の改変の奇蹟を労働者が信じえないというようなことが起こるとは誰が思うであろう。ところが、みなほんとうなのだ。それが実際に起こっている。これこそすべてのものを結合融和する唯一の希望である。これが事実であるとすれば、東とか西とかの区別もなくなるであろう。

すべての人が変わることこそ、すべての人が団結する唯一の基礎ではないか。果してマルキストは改変し得るであろうか。彼らがこの新しい考え方をもちことができるであろうか。マルキストが、よ

り偉大なイデオロギーの道をきり拓き得るであらうか。

できない筈はない。彼らは常に新しいものに心を開いている。

彼らは先駆者であつた。彼らは信ずることのためには獄屋もいとわなない。彼らは信ずることのためには死をも辞さない。この優れた考え方を土台として生きる者となれない筈はない。

二人のマルキストがコーにきた。三人目が迎えにきた。彼も帰つてきたときには改変チェンジしていた。

彼をもとにもどそうとみなが骨を折つた。だましてもみた。しかし彼は共産主義者、非共産主義者双方にこの新しい考え方を示すよい模範となつた。彼は北歐に旅して総理大臣たちに会う。彼らは今日の時代に幾百万の人びとを動かすような大規模な奇蹟を可能とする事実を見たいと希望していたので、喜んで彼を迎える。

このマルキストは北歐の大指導者の一人に会つた。互いに違つた思想と伝統とをもつていた。しかしこの指導者は、彼の中に時代を越えた兄弟愛を発見した。『彼こそ本当の人間だ』と彼はいつた。心の中の障壁が取り去られたのである。

このマルキストの改変チェンジは、急速に一国の話題となつた。どんな問題にも常に明答を下せると自信していたある外交官が、彼のことだけは解りかねるといつて訪ねてきた。この外交官は友人たちを集めて、彼について話しはじめる。マルキストが分裂に答えを見出したことが、彼らの大きな驚異となつている。

世界の問題の中心になつてゐるある国のことだが、国内の紛争があまりにひどいので、変わる必要があると誰もが考へてゐる。変わる決心さえあるならば、思想、伝統、宗教等、解決に必要な道具立は全部一応はそろつてゐる。しかし、ある婦人議員がジャンダークの精神をもつて人びとを目覚ましはじめるまでは、みなミイラのように静まりかえつてゐるだけであつた。

もちろん最初の間は誰も大反対であつた。互いに相談した上で彼女に、その職を失うかもしれないと警告した。彼女は知つてゐる限りの事実を伝える。彼女は自分の目でドイツのマルキストが、この新しい考へ方の秘訣を発見した事実をみてゐた。

賛成するものがでてきた。偏見がなくなつてきた。彼女は満足な人生の答えを見出し、その新しい真理を他にも与えうる者となつた。至るところで人びとが、その答を彼らの生活に要求してゐることを発見した。

彼女は北フランスにきた。その地方で彼女は綿毛紡織関係の労働者と使用者、社会党の市長と保守的な産業者の間に、今まで誰もが見なかつた立派な解決の道が開きつつあるのを見た。彼らはロベール・シューマン外相の言葉に動かされたのである。『ここにわれわれの注目すべきものがある。動かし得ない実在がある。古い真理がみな含まれてゐる。古い真理を決して拒否せず、かえつてそれを生きたものにするのである』。

さらにこの賢明な政治家はいう。

『われわれはすべての差異に橋を架け、団結を与える何ものかを発見する必要がある。』
 イタリアにもこの聖年キリスト・イヤーには、国としてまた国際的にも新しい生き方をしたいという深刻な熱意が見える。イタリアの大実業家がその同僚に向かつて、MRAこそ善き世界への道であると話した。彼の言葉は今日の来賓の一人であるフランスの大実業家によつても裏付けられている。彼は『すべての条約や経済協定は、私がコーにおいて見出した一致の精神によつて裏書きされぬ限り真の効果を發揮し得ない。』といった。

今日われわれは、如何にして国を再建するかを知らねばならない。あなたの国は別かも知れない。『戦争に勝つたのだから』と考える人もあろう。しかし日本のような国について考えてみよう。日本は敗戦した。そして今や再び立ち上ろうと必死の努力をしている。

種々な勢力が国の中に働いている。特権を失つたために苦々しい気持をもっている者がある。危機を回避できるこの新しい考え方にふれていないマルキストたちもいる。彼らを味方にする必要がある。彼らは国を分裂させる。ちようど東西ドイツの分裂から起こる悪感情のあるように、日本にもその気持がある。行くべき道を見出そうとして、反対勢力と闘っている政治家もある。

再生の恩寵から来る融和の精神を彼らは必要としている。こうした国ぐにとつてそれは決して楽なものでない。しかし、これのみが、可能の道である。

日本はこの新しい考え方に会つた。三十四名の指導者が昨年の夏コーにきた。

日本最初の社会党首相、前蔵相、二大新聞代表、前駐米大使、三井家の人びと。今では国中がMRAの名を知るようになって、一國の指導的人物、知事たち、新聞の主要な人びと（新聞の仕事は國の使命を映したすものである）、鉄道従業員（彼らは人びとに交通の便を与えている）——一従業員から社長にいたるまで。日本タイムズは社説に次のように述べている。『MRAは日本人にデモクラシーを生き、デモクラシーを実行する機会を与える。現在とかく口先きばかりのデモクラシーが實際的に生かされてくると、日本はもちろん、他の國ぐにおいてもそれはますます偉大な善の勢力となるであろう。MRAは単純な公式を土台としている。その根本は個人である。社会國家の各層をなす個人である。彼らの毎日の生活に正直、純潔、無私、愛の原則をあてはめることを要求する。個人の精神的浄化が彼の周囲の人びとを感化し、一人より一人へと拡がり、ついには國全体に浸透しそれを動かすに至る。』

MRAはすべての人のためのものである——全世界のすべての人のためのものである。日本最高裁判所長官でカトリック教徒の有力者が『私はMRAに多大なものを期待している』といった。

東南アジアはどうか。その幾百万の大衆はようやく獲た自由を国内の分裂によつて失おうとしている。その地域からきた一人の外相がいつた。『MRAは原子弾と同様に重要である。』

それはMRAが新しい一致への扉を開き、各人種、各階級、各國家間に、すべての人の改変チェンジを土台とした團結への扉を開くものであると彼が悟つたからである。

東洋のある偉大な政治家が話した。『私はあなたの仕事の原則理念に対し、深く共鳴している。』知識の進歩に比して人格の進歩が並行していかないこと、指導精神確立の必要等について彼は語った。さらに言葉をついで彼はいつた。『どこかで神学者たちは道を間違えたようだ。それで時代への感覚も失われた。社会の勢力となるべき力が、ある場合には一番大きな頭痛の種になっている。ある国ぐには新聞記者が生活のため人格中傷をやる。彼らは人の自信を傷つけ、社会がもつその人への信頼を亡ぼす。しかも自分はそれに対して何らの責任も負わない。ある国ぐには、国全体の生き方が指導者を傷つけている。』

そこに問題がある。新聞は政治家に靈感を与えるものでなければならぬ。新しい世界の先駆者であるべきである。人生観を先ず変えて、世界を再建する偉大なプランに対し、すべての人が責任を自覚し、その計画の一部であることを感ずるようになる必要がある。現在われわれの考え方は歪んでいる。同意することを考えるよりはまず反対を考える。しかし、MRAの行くところには団結が生まれている。紛争がなくなっている。ストライキが解決している。ストライキが開始されたというニュースの代りに、ある工業都市でMRAの記念大会を市全体に労資が協力して挙行しようという提議を組合指導者と有力な経営者がしたという電報を私は受け取っている。これは改変の生む当然の結果である。

アフリカのある国家主義的指導者がヨーロッパにくる。彼の民族の指導者たちは激しい政争のため、

ひどく分裂している。彼の国を救うためには、東か西か何れかを取らねばならないと考える。ロンドンで彼の同国人がMRA（道徳再武装）のことについて話す。彼は予定を変更してコーにくる。そこで彼は東と西とを結ぶ一つの道を見出す。コーを去る前に彼は自分の政敵に、飛行場で面会したいと電報を打った。彼が帰国して最初に会う人は、この人びとであつた。彼らは彼の変わったことを認め、協力を約する。六ヶ月後、彼の親友が彼についてこういう。『彼が政敵と融和し、誰が正しいかではなく、何が正しいかという真理を示すようになって以来、わが国の政界には新しい雰囲気が生まれてきた』と。彼の経営する五つの新聞はこの新しい精神を伝えるものとなる。三千万人の人びとにとつて、分裂が団結に変わりつつある。

全世界にわたつて港灣は一つの戦場である。港灣を支配する者は、一国の生命線を支配することになるからである。経営者は狼狽する。政府は審査機関をもうける。組合の指導者は秩序を回復しようとするが一向に効果がない。問題は継続する。労働者は不満をもっている。その不満を分裂の勢力が利用している。そこにMRAが入ってくる。ここに港灣の指導者で、港灣の労働新聞主筆であり、昨年夏ロンドンの大ストライキを指導した人物の言葉がある。彼は解決の道を発見した。彼は書いてゐる。

『MRAのイデオロギーと神の導きが、過去十ヶ月に何を私に与えたかをお知らせしたいと思つてこの手紙を書いています。導きに従つたことが二つの港灣紛争を解決するものになつています。また

私自身、私の妻及び家族に対し、何という大きな変化を与えたことでしよう。私はよい人生の伴侶をもつています。すなわち私の妻ネリーです。彼女はすばらしい闘士です。妻とともに導きを受けるようになって、とても色々なむずかしい問題が解決されています。たとえばトーレー・ストリートの事件にしても、私は導きによつてこれに関係しました。使用者、組合、労働者がみな一致できなかったとき、私は使用者のところに行つて、真すぐな事実を話しました。彼は私を事務所に案内しました。私は誰が正しいかではなく、何が正しいかを説明しました。そして私たち二人はMRAのイデオロギ―をもととして、使用者は組合の指導者をよびました。一時間もたたないうちにストライキ問題が無事に片付きました。

最近の港灣紛争については、すでに新聞でお読みになつたことと思います。私たちのような者でも神の導きによつて、労働者を職場に還せたのであることをどうぞお憶え下さい。もし導きというものがなかつたならば、恐らくストライキは今でもまだ続いているでしょう。神の導きがわかると、変わった光明が与えられます。もし世界の政府が過去十ヶ月の私のように、神の導きに従うならば、われわれのこの時代に世界の平和が実現するでしょう。』

数週間前に私の古い友が死んだ。彼は真のフランス人であつた。アルサスの人である。過去二十年間、彼はドイツとフランスの融和と一致のために努力してきた。死の床に横たわつていた彼の心は、世界の分裂を思つて暗かつた。そしてフランス語でこういつた。『将来、起る出来事を思うと恐ろし

い』と。しばらくの沈黙。そのあとで張りのあるドイツ語で話し出した。次の言葉は臨終の言葉である。『国と国との和解が生まれなければならない。国と国とが融合しなければならぬ。』

遺族は手紙で、彼の死顔には天国の微笑みがあつたと私につたえてきている。

誰もが共鳴することは、団結だけがわれわれの唯一の希望であるということである。それがフランスとドイツとの真の使命である。それが東と西の使命である。その反対は分裂と死である。M R Aこそは世界に対し、すべての国が改変して存続し、団結して生存する、最後の機会を与えるものである。

2 優れたイデオロギー

ハインツ・グロース

ハインツ・グロース博士は北ライン・ウエストファリア労働省の官吏として、十万の労働者を包含するデュセルドルフ労働評議会に、マルクス弁証論の訓練をするための組織をつくつた人である。阿博士は一九四九年と一九五〇年にコーを訪れたが、この文はそのときにのべたものである。

私は法律家としての教育を受けてきたので、すべてのことを冷静に判断をすることが習性となつてゐる。われわれは現在もつとも大切な世界的精神革命の真只中にある。

数日の間に大産業を代表する人たちに精神的革命が起るのを、ここにいるわれわれは実際に見たのだが、こうした変化こそ、われわれにとつての最大の希望である。これこそ精神革命によつてもたらされる新しい世紀の始まりであり、われわれは単にその証人であるばかりでなく、その伝達者でもあるのだ。個人の変化（変じ）に始まつて、家庭におよび、政治に、また産業にまで及ぶこの革命の伝達者はわれわれである。この意味でコーは、今日われわれが直面している共産主義の挑戦に対する唯一の純粹な解答である。

ドイツの社会民主主義者として私は、ドイツの社会主義者が今日までそうした解答をもつていなかったといわざるを得ない。そして、ドイツが求めている精神的なものも与えられず、また現代ドイツ青年に見られる無気力と精神的空白を満すこともできずにいた。この世代のニヒリズムに対して答がなかったのである。それだから、労組関係のわれわれは、イギリス地区のドイツ労組議会の第一回目の議長ハンス・ベークラーが、この演壇から次のようにのべたのをきいて喜んだのである。

「人間が、古いもの、また時代遅れのものから自由になるためには、新しい目標をたてて、ヒューマニズムと道徳的価値を第一にしない限りだめである。MRAが人間生活のあらゆる面で確定的な改善を与えることを私は確信している。人が変わるとき、社会機構も変わる。社会機構が変われば人も変わる。両方とも必要で、併行するものである。MRAが到達しようとしている目標は、私が組合員として戦っているものと同一である。」

幾百万のドイツ大衆は、単にパンと住宅だけでなく、ドイツとして感じる大きな精神的必要をも満たす解答を求めている。ドイツの社会主義者として私は、その解答をコーで見出した。われわれ自身の中にある唯物主義的精神を征服することなくして、他の唯物主義——それが資本主義であつても、或いは国際的世界秩序を求めているものであつても——に打ち勝とうとすることは狂気の沙汰である。われわれドイツ人は、過去に誤つた道をえらんだことを認めている。そして過去数年間、その責めを負うてきた。他の国の幾百万の婦人はその夫を失い、幾百万の子供たちは父親をなくした。また、われわれが家から追い払つた幾百万の人びともいる。これはわれわれの罪過である。諸君の赦しを乞いたい。そしてわれわれは全力をあげて、平和な国と国との関係をきずくために他の人びとと協力したい。

もうひとつ、私が社会主義者として、また組合員として、マルキストとして、はつきりいなければならぬことがある。今までわれわれは広島に対し、また原子爆弾に対して答を持たなかつた。その解答は、すべての国が融合できる共通の精神的基礎を発見するときに見出される。東と西、国と国、資本と労働の間によこたわるみぞに橋をかけうるものはMRAのイデオロギーだけである。マルキシズムにも、階級闘争にもそれはできない。もうこれ以上デュセルドルフ地区の労働評議会に階級闘争の戦術を教えこむ必要はない。この方法で、どれほど人の心に憎しみと悪感情をあおつてきたか分らない。コーの道以外に道はない。

3 ある共産主義者の十ヶ條

ドイツのメルスのライン・プロイセン炭鉱会社の労働評議会議長マックス・ブラデックは過去二十一ヶ年共産党員であつたが、一九五〇年の七月にコーで左の声明をした。

かつての共産主義者であつた私が、なぜ今ではMRAの闘士として闘つてゐるか、その理由をいいたい。

一、MRAは物よりも人間を尊ぶ。

二、MRAはドイツでもまた世界でも人と人とを結び、新しい正義の時代をもたらす。MRAは四つの絶対道徳標準をもととして、すべての宗教と信条の人びとを一つにしうる唯一のイデオロギーである。

三、MRAはデモクラシーに属する人びとに各自の責任感を植えつける。

四、MRAは何にも反対するのではなく、労資といつた反対的立場の人をも結んで健全な間がらをつくる。それは労働者自体とそして国全体とのため最善をはかる間がらでもあるのだ。

五、この標準に従う政治家は全部党派的觀念を超越し、大衆の眞の利益のため努力するようになる。

六、MRAは人と人とを争わせる代りに、愛をもつて敵をも友にする道を示す唯一のイデオロギイで、その意味からいつてこれは世界平和への闘いである。

七、MRAはすべての国に新しい平和時代と人類の真の幸福をもたらすことのできる政治及び経済のあり方を与える。

八、このイデオロギイが大衆に受け入れられると戦争が阻止できるから、われわれは人間生活と文化の根本を守ることができ、人類の正しい進歩発達を生むために全力を傾倒して働くことができる。

九、MRAは健全な家庭生活をつくる。そして健全な国、健全な世界をつくる。

十、MRAはだれをもつまはじきしない。善意の団結であらゆる人種と階級とを一つにし、真の心の国連をつくり出す。

これ以上のことができるイデオロギイが他にあらうか。それ故私は、私の信頼と力との全部をそそいで、このイデオロギイのために働くのだ。

4 ゲシユタポー報告

ゲシユタポー報告書、「オックスフォード・グループ」は第三ドイツ帝国国防省の本庁で作成された。一

二六頁のこの文書は、フランスからドイツ軍が撤退したとき発見され、アメリカ評論記者デウィット・マツケンジーがAP通信を通して発表した。一九四五年十二月二十五日附のロンドンのタイムズ紙に左の手紙が掲載された。

編集局宛

ナチス・ドイツがキリスト教弾圧を目的としていたことはすでに明らかであつたが、今度発見されたゲシュタポ秘密文書ほど確定的にそれを示したものはない。現在までのところ、十分に報道されていないので、ここに新聞読者の注意を喚起するため、この文書を紹介することを許されたい。

この文書はその表紙の説明するようにライヒ（第三ドイツ帝国）国防省本庁でつくられたものであり、ブックマン博士とオックスフォード・グループに関している。グループが「ナチスに対して正面切つた反対の立場をとつている。」とその文書は抗議している。

「彼らはその会員にキリスト教の十字架への忠誠を誓わせ、キリストの十字架によつてスワスチカ（ナチスの鉤十字）をたおそうとしている。スワスチカはキリストの十字架を破壊しようとするものである。」と彼らは主張する。

「グループの重要性は正直にいつてその点にある。すなわち現在われわれ（ナチス党）が撲滅すべ

く努力しているキリスト教的罪惡觀を復活させる。これはドイツ人を奴隸化するための第一歩である。しかもこの運動は、われわれと同文人種のアングロサクソンから始まり、この罪惡觀を根底として国際関係を調整しようとしている。」

この文書は更に「この運動は英米外交の基調である。」として、「ライヒに新しい政治的、イデオロギイの状態を作ろうとするものだ。」と述べている。

「グループは全体的に国家主義に反対するもので、国家として警戒をゆるがせにできない。国家主義に對する革命を説き、キリスト教的な立場で国家主義に反対している。」

更にMRA運動の影響については次のごとく述べている。

「イギリスやその他でブックマンの道徳再武装提唱^Aに参加している主要な人びとの名前をみれば、この運動の政治的背景は自ら明らかになる。すなわちユダヤ人的西欧デモクラシーである。またこの運動の対照がなんであるかも疑う余地がない。一九三八年は、ドイツが小国オーストリーを無惨にも進攻したともつばら報道された年だ。……グループは西欧デモクラシーの息がかかっている。デモクラシーの世界意図にキリスト教的衣をきせようとするものだ。グループとデモクラシーは互いに補充し合い、成果を助けあっている。」

この報告書は全体としてナチスの心理に興味ある光を投ずるとともに、このキリスト教的運動について流布されていた逆宣伝に終止符を打つものである。この文書の完訳がイギリスの読書界に提供さ

れることを望む理由は、われわれ自身、敵のほうがはつきり認識していたデモクラシーの精神的根源を知り、彼らが最も恐れ、また撲滅しようとする努力したものを守るためにつくすべきではないか。

署名者

労働党上院議員 ロード・アモン

ロンドン労働党支部長 ハロルド・クレイ

大英帝国保守派連盟会長 ロード・コーソープ

英国教会リッチフィールド監督 エドワーズ・ウッド博士

ロイター通信社社長 サー・リンデン・マカッセイ

オックスフォード大学セント・ジョン・カレッジ学長 サー・シリル・ノーウッド

オックスフォード大学オリエル・カレッジ学長 後オックスフォード大学副総長 サー・

デヴィッド・ロス

5 共産黨員とMRA

アールバイダーブラデット紙（ノールウェイ社会党政府機関紙）は一九五〇年十月十二日にノールウェイ共産党組織（一九二三年）以来、中央執行委員をつづけてきたハンス・ビヤークホルト氏との会見記を掲載

した。

彼はコミンテルン代表として、モスクワに三度行つた。一九三六年以来ノールウエイ労働連合会の有給役員であり、オースフォルト地区労評の書記長である。次の声明は彼がコデー語つたものである。

十六歳のときから私は最極左の労働運動に参加し、一生を労働者の運命にかけてきた。たくさんの出来事があつた。二十世紀の初めから第一次世界大戦までは、資本主義の下に比較的静かな発達があつた。向上的で労働者の待遇もよくなつていた。しかし資本主義は、全世界の労働者にほんとうの安全感を与えなかつた。第一次世界大戦が資本主義機構にひびを入れた。労働階級にも危機と分裂がやつてきた。

その間にロシア革命が起り、世界の被圧迫大衆は大きな希望をもつた。それからヒトラーが現われ、第二次大戦となつた。共産主義者も、社会主義者も、「ヒトラーは戦争を起す」といつた。われわれはヒトラーを未然にふせぎ、大戦をさけることができたろうか。たしかにできたと思ふ。ドイツの労働者が、先ず全労働者を結ぶにたるだけのイデオロギーをもつていたら、それができたと思ふ。

その後われわれには、恐怖と欠乏から自由な世界のすばらしい可能性が見えはじめた。ソビエツトとデモクラシー諸国がヒトラーを倒せば、社会主義の平和的移行がありうると思つた。私は自国で平和な社会主義移行のため、労働者の団結に努力したひとりである。戦後の事情は、そうした希望を全

部破つてしまつた。

現在ではその紛争が、惨害の一步手前までわれわれを押しやつている。今日は一階級と一階級の抗争でなく、階級が全部相互に抗争している。「階級闘争を徹底的にやる。」とわれわれはよくいう。しかし私の見るところでは、現在は階級闘争の終末にきている。しかもそれは一階級の終末であるばかりでなく、全文明の終末でもある。

今日世界にある分裂と混乱は、今までにない大きなものである。西歐世界の政治家は、その解決に焦慮している。会議が続ぎ、委員会が続く。一般大衆も政治家も混乱の状態にある。先頃、北欧のある総理大臣が労働者の会合でいつた。「われわれ全部をむすぶ共通基準が必要だ。」

解決はあるだろうか。あると思う。私は人が変わることができると信じている。階級と人種を越えて、すべての人びとを結ぶイデオロギーが発見できると信ずる。問題は、私は何をすべきかである。私はここで発見した新しい概念をあえて受け入れて、進む決心をした。この思想を私は党の中で、また各組織の中できたんなく伝えるつもりだ。私が変われたら、党の誰もが変われるはずだ。他のマルキストたちもここで確信を話した。重大なそして困難な仕事であるが、正しいと知つた以上、どんな困難があつてもやり通す決心はまげない。

闘争力は、イデオロギーがなければ出てこない。共産主義者は幾度敗北しても、なお存在する。その秘訣は何であろうか。イデオロギーに押されているからだ。それが闘争意欲と闘争力を与えるのだ。

われわれには団結のイデオロギーが見出せるだろうか。見出せると思う。コーにきて見出せることがわかつた。先ず、自分からはじめねばならない。私はそれをはじめた。そしてすでにある結果をえている。欠乏と恐怖から自由な世界をつくるために、労働者をひとつに結ぶ運動に私はすべてを投ずるのである。

6 大衆は支持する

「忘れられた要素」がドイツのブレーメン市で上演されたとき、一九五〇年二月六日附のウエッサー・クリアー紙に編集長フリクス・フォン・エックカートの書いた次のような論説が掲載された。

ブレーメンにMRAの人びとがきたことと、彼らの労使劇「忘れられた要素」とは、この市の知識人の有力者たちに大きな共感を与え、懐疑的な人びとの予期を全然うらぎつた。他の都市に起つたことが、ブレーメンでも起つたのだ。意見のちがいはどうであろうと、MRAが人びとの求めている何かを与えたことは疑う余地がない。

崇高偉大な思想に全身を捧げたいという憧れが大衆の心の中にびそんでいる。己れの善意を向ける目標を求める心、人生に生きがいを求めてやまない気持がある。彼らはまた致命的な危険が頭上

にただよつてゐることを感じ、物質的方法だけでその危険を防ごうとすることにも疑いをもつてゐる。

コーの人びとはこの情勢をよく知つてゐる。基督教文化、ひいてはヨーロッパ文明とその文化をうけついでゐる国ぐにが直面する脅威は、共産主義の動員力とか、タンク、飛行機、あるいは原子爆弾とかいふ物質的要素ではなく、共産主義のイデオロギーに身を投じた人びとである。確かにこの人びとは、反対側の立場に立つものからも理想主義者として尊敬をうける資格がある。

大衆はこの危険を感じるので、たとえ無意識的に感じる程度にしても、西欧デモクラシーの物質的力——それがどれほど強大なものであつても——だけでは安心がなく、内心の不安をどうすることもできない。デモクラシーの物的力が驚くほど強いので一応外見は安全を感じさせるけれども。

なぜ西欧の力が安全感を与えないのだろうか。また与えるにしても局部的なのであろうか。それは力の源泉、すなわち物質を支配するイデオロギーがないからである。非常事態には正しく力を行使することを認めるイデオロギーを持たないのだ。

今日、大衆がなにかを求めていると前にも述べた。というのはイデオロギーの根底をもたないデモクラシーは、外面的な機構にのみ捕われ、それでは人を心から満足させることもできないし、恐怖から自由にすることも、犠牲をはらう力も与えることができない。MRAはデモクラシーに道徳的基礎を与えるので、この欠陥を埋めてゐる。

コーはキリスト教の教えに新しい血脈をつぎ込む役目をはたそうとしているし、現代の問題の真只中に飛びこんでくる。人間と機構の^{チェンジ}変革は、いつも先ず人間自体の^{チェンジ}変革から始まらなければならないと叫び、まずわれわれ自身が憎悪と不信とを捨てることで、大衆の和解は、相手に説教することより、自分が実行することから始まるべきだと説く。というのは、個人的体験によつてのみ、自分の周囲に決定的な影響を与えられるからである。

内面から湧きあがつてくる信仰は、誰かが「古くさい」といつたくらいでは、一向その価値がおとろえない。

MRAの人びとは理論闘争で答えようとはしない。彼らのイデオロギーの恒久性を実践によつて証明している。彼らが世界に与えている影響は、いわゆる「現実的」な政治家の考えるよりはるかに広く、深い。この事實は彼らの心に楽しい確信を与える。キリスト教が今日直面している危険を自覚している多くの人びとはこの道をえらぶであろう。コーの運動の恒久性は、すでに幻想的の時代をすぎ、て実在の時代にうつっているからである。

7 シューマン仏外相とMRA

フランク・ブックマン博士講演集のフランス語版は一九五〇年に出版されたが、左の一文はフランス外相

この講演集の編集者は政界の人間、現在閣僚の地位にある私に序文を書くことを依頼した。正直にいつて今までのところ、政治家は「世界の再造」にほんの僅か成功しただけだ。しかし事實は、その仕事は誰よりも彼らの職務であつて、このために与えられるあらゆる援助を歓迎すべきである。

MRAが何か新しい厚生施設とか、または既成の学説と同系統の新しい理論でもあるなら、私は懐疑的であるだろう。しかしMRAがもたらすものは、実践にうつされた人生哲学である。

新しい道徳を樹立したというのではない。キリスト教徒にとつてはキリスト教の道徳で十分で、ただ人間として、また国民として生きる道をそこから引出すのである。

必要とするのは、互いに教え合うことで、おたがい同志が相対する態度を具体的に教えあう教室であるが、これが新しいところだと思ふ。この教室ではキリスト教の原則が、人と人の関係にあてはめて有効であることを証明するだけでなく、異つた人種、階級、国家間を分裂させている偏見と悪意に有効的に打ち勝っている。

今日、世界を分裂させているものすべてに橋をかけ、真の兄弟愛の融和が育つような道徳的雰囲気をつくるのが第一の目標である。

人間とその問題についての理解をますために、集会や個人的会合で話し合う機会をつくるのがその

手法である。

新しい世界をつくり、和解の使徒として、どの国にも奉仕する人びとを訓練している。

これが、社会機構の^{オムシジ}変革の第一歩であつて、過去十五年の戦争によつて荒らされた期間にも、その第一歩は既にふみだされている。

政策の変化を問題にするのではなく、人間の変化が問題である。デモクラシーとその自由とは、デモクラシーの名において行動する人びとの生活の質によつて決定される。

このことをブックマン博士は、素朴な、そして感動的な言葉で表現している。博士は唯物主義と個人主義——この二つが利己的な分裂と社会不正義とを生み出す双生児であるが——に戦を挑んでいる。

なお兄弟互いに攻めあうような分裂にたずさわつている全世界の国々に人びとに、より多く博士の言葉が伝えられ、受け入れられんことを望むものである。

一九四八年にはフランス首相として、シューマンは、MRAの十周年大会に次のメッセージを送つた。

各国政府は困難な、しかも重要な食糧、生産、資金、物価という問題と取り組んでいる。また人種間の偏見と、相容れない利益をもととした紛争によつて、国と国との間の平和がおびやかされるのを

感じている。国内では、大衆は統制と自由をどう調和するか、階級間の理解をいかにしてつくりだすかに悩んでいる。

真のデモクラシーをめざすMRAに、私は心から敬意を表する。MRAこそ、悩める人類の心に精神的価値の尊さを再び打ち立てるものである。

8 西ドイツの歓迎

一九五〇年五月、西ドイツ共和国首相コンラッド・アデナウア博士がフランク・ブックマン博士に送った手紙。

ブックマン先生

ドイツのフロイデンシュタットにおられたとき、想をねられ、始められたMRAは、戦後のドイツでは普遍的に知られるようになりました。また、MRAチームがルール地方で「忘れられた要素」^{フオロトレン・ラマター}を通して与えた大きな成功を考えるのですが、この結果、政治、実業、及び労働界の有力者がMRAにふれるようになったのです。そのうえ、多くの有力な政治家、組合指導者、産業界の指導者がコーの年次大会に出席しています。彼らはみなコーで与えられた機会——ドイツの早急に処理しなければな

らない問題を世界的規模でかたりあう機会、さらに個人の自由の約束されている雰囲気で各国代表と心からの協力の精神でかたりあえたことを深く感謝しています。

東ドイツの全体主義の攻勢を前にして、連邦共和国、その中でも特にルール地方は、MRAの思想を宣示するのに適しているように思われます。

故にルールでホイットサン祭の日曜にMRA会議とデモンストレーションの計画を歓迎し、その会議に全世界より代表の招待されることを期待いたします。

アデナウア 署名

9 アーノルド知事の招待

ノース・ライン・ウエストファリア地区総理（当時、連邦議会下院議長）カール・アーノルドからブックマン博士への手紙。

MRAの活動はドイツとヨーロッパの創造的力を呼び起こすことができることを実証しています。私のもとにきた報告を総合してみると、ルール地方でおこなおうと計画しておられるMRAのデモンストレーションは、すでに開拓された道をさらに前進し、成果を収める機会であると確信します。

その期間に貴下がもし御来独くだされば、非常な幸いです。そのため、私は心より貴下をお招きいたしたく、また他の地方政府も御計画に参与したき希望をもつていふことをお伝えします。

アーノルド 署名

一九五〇年五月十九日ボン市、ドイツ連邦共和国下院議長としてカール・アーノルドが新聞に発表したステートメント。

ヨーロッパおよび世界が直面する極度に急迫した情勢、またドイツが東と西との中間に存在する特殊な異性を考慮に入れて、連邦首相と下院議長とはホイットサン日曜にルールで開かれるMRAデモストレーションを歓迎する。

MRAの思想はドイツにとつて新しいものでない。二年前、英米進駐下各地区地方政府総理達がブクマン博士の七十才誕生日に祝電を送つた中に、このイデオロギーは「世界平和の基礎、またヨーロッパ及び世界再建に必要欠くべからざるもの」であると述べている。

その後、MRAはドイツでは普遍的に知られるようになった。二十四の都市の各党、各階級、各職業を網羅した十四万の人が、イデオロギー劇「善き道」と「忘れられた要素」を見てゐる。この冬は、ハムブルグとブレーメンの市長及び上院議員の招待で「忘れられた要素」が両市で上演され、最近にはルールのギルセンキルヘンを中心として、合計二万五千の観客がみている。

ブックマン博士を招聘したわれわれは、ヨーロッパに新しい生命を生む力のあることを実証したならば、国際状況は一夜にして変わり得ると信じている。ヨーロッパの工業中心地で行われようとしている計画の目的は、イデオロギー的団結の基本を示すことで、世界的なイデオロギー戦の決定的戦場たるこの国にその実証を与えることである。

10 生産への刺戟

一九四八年六月六日イギリスのスペクテーター紙記載。

われわれは先ず讃辞を呈すべきところに讃辞を呈しよう。今週石炭増産にすばらしい刺戟が与えられたことを耳にした。ある大炭坑の管理人が、どういふ経過か知らないが、ウエストミンスター劇場で上演されているMRA劇「忘れられた要素」を見た。劇にひどく感動した彼は、帰るなり各課長を集めて、彼自身の新しいものの見方を説明したところ、劇に対する関心が次つぎと伝わつて、約三百人の炭坑夫が劇を見に行つた。——費用は自分持ち、全部で少くとも三十シリング位かかつた。——その上、夜勤に間にあうように帰つてきた。その結果、その炭坑はそれくらい、その地方でいつも生産高では第一位を占めるようになった。この話はMRAの人びとから聞いたのではなく、その

地方の炭坑と炭坑夫をよく知つてゐる人から聞いたものである。

11 労働者の使命

一九四七年にミシガン州マキノ島で開かれたMRA大会には、アメリカとカナダの各地から七百名の代表が参加した。その中の労働界の指導者たちは、八月三十一日、産業とデモクラシーの将来についての宣言を発表した、九月一日附のニューヨーク・タイムズ紙はこれを次のように報道した。

アメリカ合衆国とカナダの労働指導者たちの署名する宣言が、MRAの北米大会で今日発表された。この宣言は産業界に呼びかけて、チームワークの模範をつくり、デモクラシーを世界に歓迎されるものにする事ができるといふ内容のもので、七百名の代表者たちの前で発表された。

宣言は労働者の使命を、次の如く述べていた。

『全世界の富と職とをすべての人のものとし、何人にも搾取させないこと。
無私[・]の経済理論によつて繁栄を見出すこと。

質においても量においても、誇れる品を生産すること。

労働界の先覚者がもつていた情熱と確信、すなわち神の導きに従う労働勢力こそ世界を再建でき

るものであるという確信を再びもつこと。』

『更に労働指導者たちは産業界全体に呼びかけて、協力を求めている。

『われわれ自身の誤ちを認め、心の変化から生まれるチームワークの力を發揮すること。』

新しい世界建設の熱情を産業の目的とすること。

すべての決定を、誰が正しいかでなく、何が正しいかによつてすること。

デモクラシーが世界に受け入れられるもののできるチームワークの模範をつくること。

レーバー・デー（労働者の日）の前夜発表されたこの声明書の中には、次のような署名者があつた。

CIO 副会長・全米ゴム労組国際会長バックマスター、AFL 副会長・郵政従業員労組全米会長ウイリアム・ドーデイ、鉄道車掌労組会長フレージャー、国際機械工組合会計書記長エリク・ピーターソン、ヴァージニア州CIO代表アーネスト・ピュリー、ミシガン州製管労組会長アーチャー・パーチュリー、ネールズモビル自動車工労組支部六五二支部長ラッセル・ホワイト(CIO)、アメリカ鋼鉄労組カナダ組織部長チャールズ・ミラード、アメリカ鋼鉄労組国際代表ジョン・ライフ、カナダ鉄道労組副会長・カナダ労働議会副議長エルロイ・ロブソン。

12 炭坑のイデオロギー

次の論説は一九四八年六月十八日、イギリス北部炭鉱地区ストーク・オン・トレントのシテイ・タイムズ紙に掲載されたものである。

ノース・スタフォードシャの炭坑夫はいつたい何を求めているのか。

過去数週間のうちに相次いでインドの郵政大臣やボムベイの労働大臣が、この炭坑に来たのはなんのためだろう。ノース・スタフォードシャの炭坑夫が、なぜアメリカやヨーロッパの国ぐにの有力な政治家に招待され、出かけて行つたのだろうか。単に生産が増加したからだろうか。それとも石炭以上に各国が必要としている目に見えない何かを輸出するからだろうか。

現在ハンレー市のヴィクトリアホール会館で、炭坑夫たちがM.R.Aの全国大会をやつているとのことだが、その標語は「ヨーロッパに与える炭坑夫の答」である。

この大会には、イギリスの炭坑全部からの代表、更に北フランス、ベルギー、オランダ、西ドイツのルール等から炭坑代表が集まつてきている。

解答の輸出

これは全国石炭管理委員会に拍車をかけて、生産を増強するための方法だろうか。

それももちろん必要なことだ。が、炭坑夫たちには、もつともつと大きな目的があるのだ。彼らは石炭を輸出するばかりでなく、デモクラシー諸国が今日、何ものにもまして必要な真のイデオロギ―を輸出しはじめたのである。

過去十八ヶ月の間、殆んど毎週土曜の午後ストーク・ステーションから、炭坑夫とその妻君たちが三時十八分のロンドン行きの列車にのるのがみられた。

彼らの帰りは土曜の夜中過ぎになり疲れてはいるが、楽しそうな彼らを、特別バスがノース・スタフォードシャのあちこちに降ろすのであつた。

彼らはどこに行つてきたのだろうか。そして費用は誰が払っているのだろうか。

彼らは自費でロンドンにでかけていき、MRAの劇「忘れられた要素」^{フオゴットン・フアクター}を、ウエストミンスター劇場に見行つたのであつた。一九四八年の特別に寒かつた冬を通して、十月から四月までこの劇は一杯の観客を引きつけていた。

少くともこの地区では、三万人以上の炭坑夫がこの期間にみにきた。だから「忘れられた要素」の出演者一同が全英炭坑組合とノース・スタフォードシャの炭坑経営側からの要請をうけたのは不思議ではない。この劇はロンドンの上演の合間をさいて、一週間ポタリースの町にきたが、パーズレムのクインズ・ホールでは前後五回にわたる上演を七千人の人びとがみている。

新しい刺戟

まもなくこの地区の多くの炭坑から生産増加の報告がでてくるようになり、経営者側と労働者側のチームワークと新しい生産への刺戟、また産業内の破壊分子にたいする解答が報告されるようになった。

ある炭坑の副支配人は、坑内で組合支部の書記長にあうくらいなら悪魔にあうほうがまだとさえいつていたのだが、「忘れられた要素」を見た後の二人は一しよに仕事ができるようになった。

最近ある新しい炭坑で、資金についての面倒な交渉が長びいていた。普通ならばきつと行詰りになるものだが、これについて支部書記長はいつた。「われわれはノース・スタフォードシヤでかつてない方法をとつた。石炭管理委員と経営者側の代表を、組合の月例会により、問題を誰が正しいかでなく、何が正しいかという見方で話し合つたために解決がついた。」

ある組合書記長の妻は「夫が『忘れられた要素』を見たのは十五ヶ月前だけれど、それらしい家庭生活が新婚の頃のように楽しくなつた。』といつていた。

炭坑夫たちは、輸出する価値のある秘訣がここにあるとまもなく気がつき、ある土曜の夜、ウエストミンスター劇場を借切つて、全イギリスの炭坑調停労働委員たちを招いた。

劇場は各地の炭坑からきた炭坑夫とその家族で一杯になり、その後百五十の炭坑から、彼らの地方に劇をもつてきてもらいたいという要請があつた。ウオーウイタシヤ、ライセスターシヤ、キャンノ

ツクチエーズ、北ウエールズ、南ウエールズの炭坑地帯で上演した他、ウォルバーハムプトンとバーミンガムの工業地帯でも劇を上演した。

各地方で上演したときには、ノース・スタフォードシャの炭坑夫たちが劇を紹介するのが常で、そのため彼らは一日の仕事を終えてからはるばるとでかけ、その晩おそく帰つて、次の日にまた働くという努力をつづけた。

炭坑から国会へ

アメリカ国会の委員がマーシャル援助法の運営上の意見を提出すべく、ヨーロッパへ研究に出かけたとき、特にノース・スタフォードシャやその他MRAが活動している地方の炭坑夫にあいたいと申し入れた。炭坑を代表して、ビル・イエーツが昨年のクリスマスにアメリカに招かれたが、非常に深い印象を与えたので、再び、アメリカ国会上下両院の委員会に招かれて、カルフォルニアで開かれるMRA大会にでかけた。

その他にも、西ドイツのルール地方のウツパタルの炭坑労働者と工場労働者の大会で話をした人もいたし、「忘れられた要素」が北フランスではじめてフランス語で上演されたときには、ルールとレンの炭坑夫たちにこれを紹介した炭坑夫もあつた。

他の人びとは、スイス、ノールウェイ、スエーデン、デンマーク、オランダ等を訪問し、閣僚や産業界、労働界指導者にノース・スタフォードシャで起つていることを話している。

いつたいこの運動の資金はどこからくるのか。当然な疑問だ。空や海の旅はもちろん、汽車の旅ですら随分金がかかる。時間もまた金だ。教ヶ月前から炭坑夫たちは相談して闘争資金をつみたてることにし、自分たちの代表を必要に応じて、世界のどこにでも送る資金としている。

そのために、ある人は酒やタバコをやめた。大事にしていたものを売った人もある。幾千の労働者が大きな目的のために犠牲を払っている。

ブラック・カントリ工場の人事主任が次のように結論している。

『イギリスに始まった産業革命は世界の相貌を変えた。「忘れられた要素」^{フォゴットン・ファクター}の革命的な力が、世界の心を変えるであろう。』

13 希望の谷間

イギリスの南ウェールズに「忘れられた要素」^{フォゴットン・ファクター}が上演されたあとで、「ロンダ・ラウンド・アバート」という小説の著者で有名なジャック・ジョンズは、一九四八年九月に「希望の谷間」と題してこの劇の影響についてかいている。

ウェールズには石炭と歌とで有名な谷間がある。炭坑地帯の中心地ロンダ・ヴァレーだ。

多くの人はこの地方をイギリス革命運動の急先鋒だといっている。多分事実であろう。イギリス共産党の指導者、ハリ・ポリットもこの地区から選挙にでて、一九四五年にはもうすこしで労働党の候補者をまかすところだった。

一九四八年に、共産主義よりはるかに革命的な思想がロンダをおそつた。M R A の劇「忘れられた要素」がこの地方に精神革命を起こした。

M R A のチームはカーディフ市で一週間つづけて七回この劇を上演したのち、カーディフの古城で何千人という人びとを集めて大会を開いた。

次の夜、ロンダきつての大劇場で劇をみせた。この劇場は一九一七年にイギリス戦時内閣を代表してスマッツ將軍が講演をして、第一次世界大戦中最も危険であつた時期の炭坑ストライキを未然にふせぐことのできたところである。

善意の革命

この劇場の舞台からはかつて多くの人が、——私もそのひとりだが——失業者や失業しかけている炭坑夫の感情をおつたものだ。しかしその夜M R A のメッセージがマキノのコーラスと「忘れられた要素」の出演者によつて劇的に伝えられた。

毎日入場をまつ人が列をなし、中には三時間もまつ人もあつた。何干という人が入れず、特別にマチネーをしなければならなかつた。それでも見たい人の十分の一くらいしか入場できなかつたので、

場所をかえてさらに一週間上演されることになった。

この炭坑地方で、かつて五十からの炭坑の閉鎖を余儀なくさせたストライキに関係して、投獄されたことのある炭坑夫はいつた。

「これこそわれわれが待っていた平和と善意の革命だ。」

この地方の多くの人は、MRAの闘いに加わりたいと思っている。この地方で一番有名なバンドで、イギリス放送局からもよく放送したり、クリスタル・パレスでも演奏をやったバンドの指揮者は、「どこでも、われわれのできるのなら何でもします。」といつていた。

その次の日曜にストーク・アポン・トレントで開かれたMRA大会の音楽は、有名なバーク・アンド・デヤ・バンドが受け持った。この地方きつての歓迎が、上演者と舞台がかりのMRAチームに与えられた。昼はこの地方から選出されている国会議員が劇を紹介し、夜は地方議会（イギリスで一番広い区域であるが）の議長が紹介をした。「ロンドンにとつて最も重要な週間」と二人ともがいつていた。彼らは過去半世紀に、産業の闘争がどんな悲劇をこの谷間に残したかを、知っているのだ。

イデオロギーの悪夢

かつては美しい緑につつまれていたこの谷間も、今はカナクズでどす黒い。ここに住む人びとには、忘れられない多くの思い出と忘れてしまいたい多くの思い出がある。戦争と戦争の噂、ストライキと暴動、爆発と悲哀、失業と飢餓、音楽と歓喜——多くのことがあつたにも拘らず、この谷の人びと

は歌を忘れなかつた。

次つぎと襲つてきた悪夢のようなイデオロギーによつて分裂しながらも、彼らは歌によつて結ばれていた。その歌をうたう心で、長い間、彼らを支配し、底の知れぬ沼道へと導いていたイズムの独裁から解放するものとしてMRAを迎えた。

ついに、ロンダの人びとは善い道を見出し、二十世紀前半のひどい混乱から脱れようとしていく。

MRAの優れたイデオロギーはロンダの住民を互いに仲間とし、長年悪感情を抱き合っていた経営者と炭坑労働者との間にも友情を生み、何が正しいかを土台として共に生活することが出来るようにした。

経 済 的 解 決

前には南ウエルズから年々輸出する四千万トンの石炭が、イギリスの生活に必要な輸入品を買入れるのに役立つたものである。「忘れられた要素」の精神的メッセージの反響は、イギリスの経済的解決となるかもしれない。

ロンダには新しい精神が生まれた。というより古い精神が新しく生まれ直したというほうが適切かもしれない。ロンダのやま、——石炭と歌のこのやまに住む者は、世界的なMRAを提唱した精神的指導者であるフランク・ブクマン博士、この偉大なアメリカ人に心から感謝している。この偉大な

14 炭坑問題の新しい方策

物、MRAの恵みは全世界の人びとを真の家族にすることができよう。新しい国も古い国も、人種、信仰、皮膚の色の違いをもこえて、誰でもがみんな一つになれる純粋なイデオロギーをMRAに見出している。世界の人びとがこれを悟ることができるようにと神に祈らずにはいられない。そのときこそ、ロンダばかりでなくすべての暗い谷間はかがやくことだろう。

14 炭坑問題の新しい方策

一九四九年コー大会でのイギリスの燃料政務次官ホールレス・ホームズ国會議員の演説。

私は少年時代に炭坑に入ってから、四十七年になる。三十年以上も私は坑内で働いた。長年の間、組合運動にも力を入れた。一九〇二年から一九四五年の間、私は産業についてマルクスの唯物論的解釈を拮めていくことに努力をし、労使間の憎しみを形づくろうとしてきた。

社会改革のためには随分闘った。しかし今私は、いささか違った立場からものをみるようになった。MRAを人びとの心や生活に拮げていくことはほんとうに楽しい。われわれは前と同じ問題に直面しているが、別の角度から解決に向うことができるのだ。この角度から炭坑事業のあらゆる層に大きな変化の起つたことを、イギリスばかりでなく、フランスでもみている。

フランスでみたことを、私はミドランドでも、郷里のヨークシャでも、スコットランドでも、ウェールズでもみた。労使が今までだつたらみられない態度で交わつてゐる。M R A の道徳標準に照して炭坑支配人と組合役員が問題解決の方策をねつてゐるのを見た。前よりもよい気持で労働者が仕事につくのを見たし、また経営者が新しい態度で問題にのぞむため生産が増加してゐるのもみている。どこに行つても M R A の根本的なものをつかもうとする努力をみるが、これこそ将来の問題を解決するものと思う。

15 労働界の矛盾

次の文はイギリス化学薬品労働組合の書記長で、ヨーロッパ合衆国社会主義者組織連盟の国際委員会会長ロバート・エドワーズの書いたもので、一九五〇年八月三十日にウエリントンで発行されているオーストラレジャ地域唯一の日刊労働新聞「サザンクロス」紙に掲載されたものである。

最近数年間に目立つてきたことは、M R A が世界の組合運動に与えている影響である。ここ数週間にも、世界の労働指導者として名のある人びとが、スイスのコーにいつてゐる。そこで彼らは、生涯かけて努力してきた平等と実践社会主義が実験されていたのをみたのである。

MRAの新しい偉大な革命的な力は、ますます世界の労働界に影響を与えるであろう。その理由は、どの国の労働界にもみられる矛盾に解答をあたえているからである。もともと労働運動は、新しい文化を築くために一身を捧げた人びとによつて築かれてきた。その新しい文化とは、競争の代りに協力があり、人びとに自由と安定があたえられ、自由と平和の精神で世界の国ぐにが結ばれるような文化であつた。

労働運動の先駆者たちは唯物主義者であり、無神論者であるといつてはいるが、事實は、強い宗教的情熱をもつた人びとであつた。

個人生活で模範となり、また自己犠牲を払わねばならぬ必要も彼らはよく知つていたが、次第に各国で実権をにぎり、また権力を獲得しはじめるにつれて、この犠牲の精神や宗教的情熱が消えていった。労働運動の道程を四つの言葉に要約すればつぎのようになる。すなわち犠牲、闘争、成功、沈滞。沈滞は道德的、倫理的問題を度外視したところから起つてゐる。政治や経済の議論だけにとらわれてきたが、個人の變化チェンジという根本的な必要をあまり考へなかつた。

世界を征服して、新しい文化を築くはずであつた偉大な力が、その推進力を失ひ、ロシア共産主義の唯物的攻勢に屈服させられてしまつた。

私は一九二六年に青年首席代表として始めてソ連にいつたが、そのとき、トロツキー、スターリン、モロトフのような指導者たちにあつた。そのときの印象は、この新しい社会的実験から必ず新しい文

化が築かれ、平和の強い礎石ができるであろうという気持であつた。

あとになつて、私は幻滅を感じ、労働界の矛盾解決を新しい方向に求めるようになった。それを私はコーでみいだした。

コーにいたとき、朝鮮の悲しむべき事變の勃発を知つた。それは人類を無惨な原子戦に導くかもしれないものだ。

尨大な富と無数の生命を犠牲にしたデモクラシーのための戦いが、軍事的勝利をえていながら、なぜ敗れようとしているのだらう。西欧デモクラシーは軍事的勝利をうることはできるが、それだけでは不十分だ。政治形体というものは大衆に押しつけるべきものではない。教育を通じて、大衆が信頼する政府を選出すべきである。これは単に組織や機構でできることではなく、根本的には道德の問題で、人びとの信仰と信念によつて決定されるものである。

朝鮮と同じように東ヨーロッパでは、次つぎと全体主義的唯物主義の力が、まるで政府などなかつたかのように進展していつた。その多くの場合、西欧デモクラシーに失望した労働大衆があたえた協力が共産主義の蔓延をたすけている。

彼らの信頼を失つた原因として考えられることは、教会はキリスト教の教えを説くが実践がなく、政治家は自己の利益ばかりを追い求めると感ずるからであり、更に、全体主義的共産主義に代つて大衆が支持するようなものを西欧が示しえないからである。

世界大衆の要求は極く単純である。

大衆は新しい文化を要求する。青年がその青春を楽しむことができ、大学が大衆の子弟のために開放され、文化機関が少数の富所有者の独占でなく、国と国とを結ぶくさりとなる時代を要求するのだ。

彼らは幸福で冒険に富む自由な生活のできる時代をのぞんでいる。

M R Aの革命的思想が生もうとしている世界はこれである。

16 コーと世界の労働者

これは「コーと世界の労働者」の序文である。この本は労組指導者、社会主義者の演説や報告が編集されたもので、序文の筆者はエバート・クーパー氏である。彼はオランダ労組連合会長（一九二八―四〇年、一九四五―四八年）社会党国會議員（一九二九―四八年）世界労連副会長（一九四五―四九年）世界自由労連準備委員、ヨーロッパ復興援助計画労組側顧問会会長である。

これはありふれた書物ではない。この書物には全世界の有名無名の労組、社会主義指導者の声明がのせられている。これらは現代社会でのM R Aイデオロギーの重要性を強調している。

この人びとはみな労働階級の物質的、精神的な生活標準を高めるために努力し、偉大な足跡を残した人たちである。大部分は労働階級の苦しみを自ら体験した人びと、——低い賃銀、長い労働時間、悪い住宅、社会福祉法、社会安全保障の欠除等を味わった人たちである。そうした社会不正に対しては全身をもつて抗議し、すべてを投げだして闘った人びとである。

労働者の物質的進歩にもなつて、精神的進歩もみられるようになった。いくつかの国では労働運動が非常に発達し、半世紀前には夢にもみられなかつた社会的、政治的地位を獲得している。

にも拘らず、何か欠如していることを、多くの人が感じている。その欠けたものは、現在の世界にみられる恐ろしいような国と国との分裂に答える精神的安定性である。

MRAはすべての人にこういう。「世界をよくしたいと思うなら、先ず自分から始めよ。」と。

このところ何年かの間にコー大会に出席した何千という人は、MRAが現代にあたえるメッセージと、そこに見られる真の同志的交わりと団結とに深く感動している。たくさんの人がこの本の中で、この点を強調しているので、是非一読されることをすすめたのである。

最後に私は、MRAの提唱者フランク・ブックマン博士の偉大な指導力とヒューマニティにふれた。博士は一生を人類進歩の健全な基礎をつくるために努力されている。彼の業績がコーの大会を生んだインスピレーションである。

一九五〇年二月

アムステルダムにて

エバート・クーパー 署名

17 世界産業会議

——一九五〇年六月——

一九五〇年のコー世界大会は、有力な産業家及び労働指導者の主催する特別な会議に始まつた。その招請状を左に掲げる。

政治、産業、労働界の指導者たちは、今日人間の叡智だけでは解決されない問題に直面しており、産業時代の技術的問題はイデオロギー時代の激流によつて複雑化されています。

一つのグループ、一つの階級、一つの国、または民族だけでは今日の問題を解決することはできません。また世界の潮流を変え、失業、貧困、戦争から安全な繁栄の時代にすることもできません。

これはすべてのものの協力を必要とし、最も賢明なものよりも、なおすぐれた高い叡智の助けが必要で

要です。コーのMRA会議は八十二ヶ国の指導的人物を吸引し、世界を結び、かつ再造することのできるイ

デオロギーの秘訣を学び、その実証を見聞する場所であり、政治と産業とに長年の経験をもつた人、あらゆる政党内、経営者と労働者、信仰者、無信仰者、すべての人が現在のイデオロギー時代の問題に対する鍵をコーで発見しています。

それ故我われは貴下をコーにご招待し、直接、ルール工業地帯、イギリス炭坑と港灣地区、イタリア、フランス、スイスの工場、ベルギー、オランダ、スカンデナビア、オーストラレリア及びアメリカから提供される世界産業の直面しているイデオロギー的問題の解答と実証をみて頂きたいのであります。

おのおの責任担当者であつた人びとが、こうした實際的結果の起つた過程を一つ一つ説明し、その産業界または政治界に變化の起つた有様を説明致します。

アフリカ、インド、パキスタン、近東、極東の代表も、その国民的またイデオロギー的な要望にたいし、積極的に建設的な方向を発見し、MRAの世界計画について十分な報告をいたします。

人類の危機にのぞんで、コーは東と西、左と右、経営者と労働者に橋をかけて結びつけるイデオロギーを實際に示すものであります。

イタリー工業連盟会長

北米経済連盟理事、前会長

フランス経営者連盟会長

アンゼロー・コスタ

ハワード・クインレー

ジョージ・ヴィリエー

イギリス鋼鉄産業コイルビルス・リミテッド社長

サー・ジョン・クレイグ

ドイツ・ギルセンキルヘン石炭会社社長

オットー・スプリングホルム

前蔵相、エジプト工業連盟理事長

ハッサイン・ベイ・ファアミー

インド・タタ工業理事長

タタ

オーストラリア工業連合会会長

マツケイ

オランダ労組連合会会長（一九二八年—四〇年、一九四五年—四八年）、

歐洲復興プログラム労組顧問委員会会長

エバート・クーパー

ベルギー労働総同盟書記長、世界自由労連会長

ボウル・フィネー

イギリス労組議会中央評議会、紡織工連合会書記長

アンドルー・ニースミス

イギリス労組議会中央評議会、海員組合書記長、

国際運輸労働連合会執行委員

トム・イエーツ

アメリカ・ユナイテッド鋼鉄労組（CIO）財勢書記長、

世界自由労連執行委員

デーヴィッド・マクドナルド

イタリア工業連盟副会長

クイントー・クインテリ

北フランス経営者連盟会長

アンドレー・ワラーユ

オランダ鉄道重役会会長

デン・ホーランダー

日本銀行総裁

一万田尚登

トランスプール炭坑連合会会長（一九四五年—四六年、一九四八年—四九年）

マクリー

ドイツ金属工業経営者連盟会長

ハンス・ビルスタイン

フランス・ジュート工業社長

ロベール・カーマイケル

デンマーク船主連合会会長

クリスチャン・ハーホフ

ブラジル・S・A・エレバドーレス・アトラス社長

ルイズ・デ・ヴィラレズ

ドイツ・ギルセンキルヘン炭坑会社、ギルセンキルヘン・グループ総支配人

ハンス・デュティンク

ドイツ・デュースベルグ製鋼所専務理事

エルンス・クッス

スイス連邦工科大学金属科教授

ロベール・デュラ

ドイツ・エッセン商工会議所会頭

セオ・ゴルドシュニミット

インド国民労組議会議長

カーンデッパイ・デサイ

オーストラリア労組評議会

ブロードビー

ニュージランド労働総評議会議長

クロスカーリー

日本労働総同盟会長

松岡 駒 吉

インド国民労組議会議長

ハリハルナツ・シャストリ

インドネシア労働総同盟会長

シエン・ホング

フランス・基督教労組連合会会長、

国際基督教労組連合会会長

ガストン・アシエー

イラン労組書記長、アジア労働総同盟会長

コースロヴ・ヘダヤト

南アフリカ炭鉄労組会長

ポール・ヴィッサー

大ベルリン独立労組連合会会長

エルンスト・シャルノウスキー

ベルギー・基督教労組連合会会長

ビエー・オウガスト・クール

ニュージーランド労働総同盟書記長

ケン・バックスター

ドイツ・ハムブルグ商工会議所会頭

アルバート・シェーファー

エジプト工業連盟会長

ハッサン・ナカト・パシヤ

ドイツ・テレフォンケン電気会社専務

マルテン・シュワブ

オランダ・フィリップススレジオ副社長

フリッツ・フィリップス

ドイツ（マンネスマン鉄鋼会社）ヒッテンベルケ・

フックキンゲン専務

フリードリック・アルフレッド・スプリングゴラム

ノールウェイ水力電気会社専務

ビョーン・エリクセン

イギリス・パーミンガム法律家

ニュージーランド農業家連盟会長

スイス・オーリコン機械製作所専務

ニュージーランド・オークランド経営者連盟会長、

オークランド市長

スウェーデン国民工業訓練大学創始者

ノールウエイ・スリトエルマ製銅会社専務

スウェーデン・オスラム専務

フィンランド農園労組会長、労働会役員

デンマーク一般労働者全国連合組合会長

ブラジル市電従業員連合会会長

フランス・産業幹部連合会会長

フランス・基督教労組連合会会長

ニュージーランド木材労組中央書記長

ニュージーランド港灣労組中央書記長

サー・ロイ・ピンセント

ペリー

ルドルフ・ヒューバー

サー・アラム

グエスタ・エケレーフ博士

ケエヨール・ルント

フレデリック・シエレ

イーロー・アンテカイネン

クリスチアン・ラーセン

ペクエノー

ジャン・デュクロス

モーリス・ブラドール

クレイグ

フリーランド

今夏を通じてコーに開催されるMRAの会議に、現在までのところ四十七ヶ国より千六百名の代表が参集している。

会議の重点は世界状勢を背景とした産業問題であつて、出席者中には、労働大臣、産業界と労働界の指導者、経済連盟及び商業会議所代表等がある。

強力な代表がインド、日本からきているが、会議のひとつの目的は東と西の会合を可能ならしめることである。会議様式は、諸種の体験を総合する公開会談の型で、決議文等はなく、会議は殆んど終

一九五〇年七月六日、ロンドンのタイムズ紙ゼネパ特派員が世界大会から報道したもの。

18 産業界の人間味

スイス・基督教社会主義労働書記長

ニュージーランド労働総同盟副会長

デンマーク木工組全国会長

ニュージーランド農家産業会社総支配人

フィンランド・エンジニアリング・メタル工業連合会重役

アウガスト・ステフェン

ウアルシェ

ヴェストヴィグ

コールダー・マツケイ

ヘエイキ・ヘルリン

始、同運動の主唱者ブクマン博士によつて司会されている。

MRAの基本的思想はまだ發展過程にあるが、広く注目の的となつたひとつの理由は、日本代表のひとりがいつた「国際間に顕著な分裂の傾向がある今日、再建の責任を負う地位にあるものは、平和と秩序を目的とする運動をみすごしにしておくことはできない。」とのことばに表わされている。ブラジルのある産業家は「今日では産業的であるよりはイデオロギー的に最先端であることが必要だ。」といつた。

MRAの目的は、世界問題を新しい精神で解決しようというのである。彼らによると、唯物主義は国ぐいの道義性をむしばんでいる。階級闘争は時代後れであるし、新しいイデオロギーによつて克服されねばならない。階級闘争にかわるものは、個人から出発する道徳と精神の勢力で、階級、人種、国家権益を越えたものである。

貧困、不安、失業が世界不安の背景であるから、このイデオロギーを世界の産業地域に拡げ、協力の雰囲気で指導者が問題を検討できるようにする。産業界の両面を代表する人びとの話を綜合すると、労働者と使用者との間に人間味が取りもどされ、道徳を基準としてそれがなされねばならないことになる。

日本代表団はスイス連邦大統領に招待されてベルンに赴いた。広島市長は歓迎にこたえて、「原子爆弾は広島にとつてひどい体験であつた。MRAの思想が世界的に受け入れられないかぎり、原子

爆弾は危険な時代を開いたものといわねばならない」とのべた。

19 産業の新しい使命

ブラジル紡織業者アーネスト・デーデリクセンは一九五〇年八月、コーにおいて次の演説をした。

現代の経営者が自己の使命を新たに自覚すべきときがきている。その使命は、産業を絶対の道德標準に基いて世界再建へと導くことである。それは改変チェンジを経験した経営者と労働者側の、絶対的協力によつて生みだされるすぐれた指導精神を意味する。

経営者は変わらねばならない。MRAのイデオロギーを実行するために変わらねばならない。このイデオロギーは三つの特徴をもっている。第一は世界的な大きさであること。第二は「自分のあり方が、国のあり方であり、また工場のあり方でもある」という点を明らかにする。第三は人間ひとりびとりに、経営者のためにも、労働者のためにも計画があるということである。

私にとつてその計画は、経営者の責任を自覚し、それを実践することである。それはわれわれが労働者を人として取扱ひ、全責任を負うことであり、人間は機械よりも大切であることを考え、労働者を生産の一要素と考えるのでなく人として考えることなどが含まれている。私個人の意見であ

るが、経営者が十分にその責任を自覚して努力しなかつたことが、今日産業界における悪感情となつていふと思う。私は個人として、また経営者の名においてもこの大きな誤ちについてあやまりたい。

ともかく経営者は変わつて、その眞の責任を実践しなければならぬ。労働者が工場にいるときだけでなく、工場からでてからの彼らに対しても責任をもつことだ。われわれには労働者の現状、仕事や賃金に責任がある。

しかし、それだけでは経営者の改変は不十分である。経営者は労働者のイデオロギーにも責任がある。産業界にMRAのイデオロギーの実践を押しひろめることが、労働者にたいして経営者が与えることのできる最善の安全保障である。それは神の導きと絶対の道德標準に生きる幸福な家庭をつくることを意味する。労働者が家庭の幸福を知らないで、どうして能率を向上できよう。

次に賃金の問題がある。家庭で幸福であるためには、もちろん絶対の道德標準が必要だ。しかし十分生活して行けるだけの賃金も必要だ。これは経営者と労働者とが神の導きと絶対の道德標準によつて生きるべきとき、その結果として生まれる。

第二に経営者は貪慾についてどのような解決を見出し、それを実践できるだろう。経営者の貪慾によつて労働者が随分苦勞した。われわれは今変わつて、四つの絶対を基としたイデオロギーを実践せねばならない。労働者は利益の正しい分配にあづかるべきだ。しかし、その額はどれだけが正しい

か。これは大きな問題だ。われわれがコーで学んだチームワークによるならきつと解決できる。経営者と労働者が、正直と理解の上に立つて努力すればよい。これが貪慾への解答だ。

フランク・ブクマンはいう。

「みんなが互いに思いやり、分ち合えば、みんなが十分であり得るのではないか。世界にはすべての人の必要を満すだけのものはあるが、すべての人の貪慾を満すだけのものはない。産業に対する新しい目標、新しい最高の必要が今や提供された。それは世界を再建することである。」

20 アメリカ産業連盟への報告

一九五〇年にアメリカのNAM（産業連盟）を代表して、ハワード・バード氏がコーに来たが、これはその報告の一部である。

人の心を捕える闘いは、物質的繁栄と高度の生活標準を与えるだけでは解決されないということ、一般的に認められている。MRAの人びとの考えはわれわれの生き方に合つていて、デモクラシーの解答である。それは過激な革命家の心さえも捕えうる思想である。革命家というのは、人間生活の改善のために燃え、その目的を遂げる道としては、唯物主義的共産主義以外にないと考えている人

びとを私はさしているのである。原子爆弾の脅威や、反共運動でその人びとの心をかちえることはもちろんできない。

コーで私は、憎悪と階級闘争をこととしていた各国の職業革命家と保守的な経営者との双方が、MRAのイデオロギーを土台としたとき、たがいに友情の手をのべ、新しいチームワークをする事実をみた。また伝統的に敵視しあつている国民同志が、互いの国の間にあつた、憎しみを克服して世界の平和に及ぶ道をつくるのを見た。MRAは世界的勢力である。それは驚嘆すべき可能性をもつていて、十分な研究と支持に価するものである。

21 将来への希望

（ヘンリー・フォード（フォード自動車会社創立者）が一九三九年、全米にMRAが展開したときに発表したもの。）

MRAの目的は私の強く信じているものである。MRAが拮めようとしている努力と態度は、現在公的にも私的にも力を持つ人が学ぶ必要のあることだ。普通一般の人間としてのわれわれは、前の時代よりも強く、より健全な道徳的観念を持つているように私には思える。大部分の人は、普通正直で、

親切で、心も健全で、勤勉で、家庭と子供を中心とした世界に生き、何にも勝つて平和、秩序、公平な処置などの福祉を望んでいる。

フランク・ブックマン博士の指導するオックスフォード・グループの目的は、一般には大切にされている正直さとヒューマニティをいわゆる偉い人たちの間に入れていこうということであるから、私は心からこれを支持する。人間の心には、どんな戦争でも、階級の差別でも、経済的沈滞でも克服できるだけの善意が十分にあるが、そのためには、その善意の力が人間の問題、国と国との関係に働きかけられなければならない。この力が政治にたずさわる人には欠けているし、またこれを使う可能性についてもあまりよく知っていないようだ。個人的な道徳の確信を公の政策に反映させる方法を知っている運動は、世界を次の段階に進展させることを願うものすべての支持をうけずにはいない。MR Aの実績をみると、私はアメリカおよび世界の将来に希望を感じる。

22 裁かれる人

左の一文はイギリス海軍中将サー・エドワード・コ克蘭（戦時中輸送船護衛司令官）の筆になるもので、一九四六年五月四日のエブリポデイ週刊紙上に掲載されたものである。

イギリス運動界の偉大な選手のひとり、偏見をもつ宣伝屋と心ない大衆により、公平な裁きなくして罰せられている。彼の名はバニイ・オースチンでテニス選手としてイギリスのため、四年間デビス杯を護つた人である。

この人が戦時中、デモクラシーのためにつくした事実について、十分語られてよいときであり、私はそれのできる立場にある。

私自身この戦争に従軍し、ひとり息子はM・C勲章を授けられ、後にヒトラーのアフリカ軍と交戦中戦死したのであるが、そうした者として、私はバニイ・オースチンを友人にもつことを誇りとするといいたい。彼が自由のために捧げた功績は大きく、また効果的だつた。私個人としても、またアメリカの国家的指導者の地位にあるものも、オースチンと彼の同志たちの努力が多く、連合軍將兵の生命を守つたと考えている。

ある人びとはいう。「バニイ・オースチンはイギリス人であるのに、なぜ戦時中アメリカに行つていたのか。」彼は一九三九年の春にアメリカの有力指導者に招かれていき、ホワイト・ハウスでルーズベルト大統領にも謁見した。彼はニューヨーク・マデソンスクエア・ガーデンで多数の会衆に話し、またカリフォルニアではホリウッド・ボールに三万の大衆が集まり、一万は入場できず、場外にあふれた大集会で話した。

当時アメリカはちょうど眠る巨人のようなもので、デモクラシーを脅やかす危険について十分自覚

せず、イギリスのプロバガンダにたいしては極度に警戒し、ヨーロッパ戦介入をさけることのみを努めていた。

しかし、オースチンがイギリスの理想をアメリカの聴衆に説明したとき非常に歓迎を受け、各州において受け入れられた。サンフランシスコ・ニューズ紙は書いた。「これがイギリスのプロバガンダであれば結構なものだ。より多くしてもらいたい。」

バニイ・オースチンは戦争開始の二週間前にイギリスにもどつた。一九三九年の冬はフォニイ・ウワ（偽似戦争）であつた。アメリカは帝国主義戦争と皮肉つていた。一九三九年の終りに彼は再びアメリカからの熱心な招待をうけたが、招待した人びとはデモクラシーの直面していた危険をよく知つていた人びとであつた。

外務省、情報省、労働省に相談した結果、三省ともオースチンが渡米することに賛成した。

後にオースチンと他のイギリス人は国に帰るべきか、それともその当時従事していた仕事に留まるべきかをイギリス領事館で相談した結果、大使館からの注意で滞米が決定した。

一部ではオースチンは非戦論者であるという説が流布された。それは虚偽である。彼は極く最近、二年半の軍務を終えて除隊した。

彼は四十歳であるが、アメリカの徴兵法に従つて彼と同年輩で同じ事情の下にあつた者が服したと同様な軍務に服したのである。アメリカ空軍に務めていた当時のことを、空軍大佐ロバート・スナイ

ダー氏（現空軍司令部附）は次のようにいつている。（同大佐はロンドンのV弾防衛に当り二度叙勲された人である。）

「彼がウィンブルドンの聴衆に、親愛の気持を起させたと同じ特質が、空軍内の仲間の尊敬をえた。私は彼を通して新しくデモクラシーの認識を深め、また何のために戦っているかをいつそうはつきりと知つた。」

入営通知があつた当時、大統領動員調整委員会の決定に従つて職業的延期を請願したことがある。その委員会決定の一部には明確に—MRAは我が国のあらゆる方面より熱心な支持をうけ、国防プログラムの見地より絶対必要な運動と認める十分な記録がある。」と示されていたし、オースチンと友人たちはこの運動にたずさわつていたのである。

一部の新聞では、オースチンが特別免除を運動しているという悪宣伝が行われた。ニューヨーク徴兵局主任エームス・ブラウン將軍は、この問題に関し公けに声明していつた。「私のとつた処置は、これらの人びとにその当然の権利を与えただけのことであつて、何か後暗い特別な運動があつたという推測は偽りである。」

パニー・オースチンはオックスフォード・グループの関係者に招待されて渡米したのである。一九三九年に彼が著わしたモーラル・リアーマメントという本は、二版をかさね五十万部発行された。

それは十一ヶ国語に訳され、オランダ女王は国民へのラジオ放送にそれについてのべ、オーストラ

リアの総督ロード・ガウリーは全国のモーラル・リアーマメントを宣言し、後に首相ジョン・カーチンが日本の侵入に直面したとき、国民の道徳再武装をせまるとなつた。

アメリカではオースチンと他のM.R.A運動者は、大衆の理解できる単純な明確なイデオロギーを土台とした産業界と国全体のチームワークについての国民読本の編集をした。「アメリカを守りましょう」という題で、百万部が売りつくされた。

アメリカ現存陸軍大將最高の地位にあり第一次大戦のアメリカ軍司令官であつたジョン・パーシング將軍がこの序文を書いた。合衆国の陸軍省では、オースチンたちのものした読本を最高の言葉をもつて賞讃し、国防精神に關してつくられた最善のものであるといつた。

徴兵局主任、州知事、有力市民の招請によりオースチンと同志たちはアメリカの最も工業化した二十の諸州を巡歴した。アメリカの二大労組連合会の会長ウィリアム・グリーンとフィリップ・マレーたち及び経営者たちは、オースチン一同がアメリカ労働界の健全な考えをもつた人びとを強め、生産低下を計り労組の支配権を握らうとする反デモクラシーの細胞やグループとの闘いに當つていことに支持を与えた。

結果がまもなく明らかになつた。アメリカ新聞界で最も情報に明るい最も著名なニューヨーク・タイムズ紙のアーサー・クロックが、アメリカの重要飛行機製作所の労組指導者の間に変化（チェンジ）のあつたことを報告した。その労組は反デモクラシーの勢力によつて占められ、生産がサボタージ（サボタージュ）されていた。

クロックの報道によると、ゲリー・コットンという男が労組内で善意はあつても一向ひとつに団結して努力する気のなかつた人びとを動かさし、協力して破壊分子を追放し、労組を再び健全分子の手にもどしたのである。

後にゲリー・コットンはクロックに手紙を書き、オースチンやMRAの友人たちが与えてくれたプログラムによつて、労組大衆の心を武装し、反アメリカ勢力の破壊行為をくい止めることができたことを報告した。

直ぐに生産率が上りはじめた。

ちょうどその頃トルーマン上院議員（前大統領）は、アメリカ産業界が自由のために貢献している現状にあき足らず、三万五千マイルの旅行をして無数の工場や軍事施設を調査していた。ワシントンに帰ると彼は軍事産業調査委員長に任命された。

上院調査委員会の成功が、トルーマンの大統領選挙の途となつた。調査の途中、彼はオースチンとその同志たちの仕事にぶつかつた。それについて彼はこういつた。

「私はこの問題について多くの時をさき、また熟慮したが、MRAプログラムの与えているよき解答は、我が国の生産事情の中で一番緊急なものであるという明確な結論に達した。他の人びとが傍観し批判している場合に、彼らは実際の努力をした。この人びとが全幅的な支持の下に努力するとき、数週間のうちに破れない工業界の行き詰まりはひとつもない。」

ステイールマン氏（ホワイトハウス産業顧問）は調停官として戦時産業界の紛争に八万の事件を取扱った経験者であるが、オーステンと彼の同志は、現在アメリカで労資協力のために働いている人びとのうち最も有効な人びとであると公けに発表した。

軍人としてまた軍人の父として、私は心からオーステンとその同志が戦時中努力してくれたことにたいし神に感謝したい。これこそ無私の奉公であり、最高の愛国行為である。

23 アメリカ産業界の問題

当時上院議員であつたハリール・トルーマン（前大統領）は、一九四三年十一月十九日フィラデルフィア市でMRA劇「忘れられた要素」が上演されたとき、次の言葉を述べた。

上院戦時調査委員会の仕事は、国内事情を調べ推薦報告をすることであるが、その委員長として私は何百もの証人にきき、五百万語の証言をとり、責任あるアメリカの各層、政府及び実業界の最高指導者から、タンク熔接労働者や航空機々械工に至るまでの人びとの意見を聴取してきた。私個人としても十万マイルを旅行し、幾百の都市や軍事工場を訪問、バンゴからサンディエゴ、シャトルからマイアミまで行つた。

アメリカを内部からみた結果、私は誇りを感じるとともに、また憂慮をも感じる。アメリカ人としての誇りは、経営者と労働者の偉大な努力によつて、世界にかつてみたことのない強力な陸海軍装備が洪水のように生産されていることである。憂慮は国内に存在する分裂で、階級と階級、農村と都会、党と党、人種と人種の分裂である。国民生活の中にある分裂を起す力も、歴史になかつたほど強いようである。しかも強くなりつつある。

産業人は、国内の重要な軍事工場に存在する支配権獲得の争いについて知つてゐる。たいていの経営者も労働者も戦争に勝ち、恒久平和をつくるためには協力を望んでいるのだが、両方に極端な人がいて問題をおこすわけだ。彼らはわれわれの思想とは相反する争いの哲学に立脚する思想の持主で、従つて外国のイデオロギーに利用されやすい。

これに対する答は、唯一つである。それは、アメリカ産業界の労使双方の責任ある建設的な人びとと、少数ではあるが活潑に決定的な闘争をこととする人との間に一線を引くことである。

現在こそ、利己主義をすてて、すべての人の心底にひそんでいる崇高な生活への憧れに訴えるによいときである。すべてのアメリカ人がほんとうに望むものは、価を払わずに利益を約束されることなく、何か偉大なもののためにすべてを捧げる機会である。われわれが望むものは、単に戦争地域や選挙戦のときだけに限られているのではなく、戦時、平時を通じて同じ熱意を持つて戦える目標である。

私はこのグループを、一九三九年六月四日以来しつてゐる。その時、ワシントンのコンスチテューション・ホールで開かれたMRAの国内大会に送られた大統領のメッセージを読んだ。そのとき私が感じたのは、彼らがアメリカの直面している危険について実にはつきりしていることと、国民の目を覚ますための熱意と賢明さである。劇『忘れられた要素』と『アメリカを守りましょう』の二つを、アメリカのあらゆる軍事工場の経営者と労働者に見せたい。MRAの人が十分な支持を得て動き出したなら、数週間のうちに解決できない産業界の紛争はないであろう。

この精神は産業に必要である。国にも必要だ。アメリカがこの精神で動かない限り、戦争に勝つても平和は確保できないであろう。われわれがこの精神を持ちさえすれば、アメリカのために尽くす可能性も無限となり、アメリカが世界に尽くす道も無限となる。

24 第一目標

一九四九年にビルマ首相タキン・ヌーはコー大会に際し、左のスタートメントをブックマン博士によせた。

貴会議開催に際し、メッセージをお送りする機会を得たことを大なる光栄と存じます。道徳価値を

再評価し、それを現代の問題にあてはめようとする努力はすこぶる重要であります。そのような再評価について話し合うことは、世界の諸問題により影響を与えたいと思います。

世界人類のもつべき第一目標は正しい人生観です。手近いところにそれがあるにも拘らず、無関心の故にそれをつかみえないことが、今日の世界に混乱を生んでいる原因でありましょう。

答えはひとつです。たとえ西洋人であろうと東洋人であろうと、搾取者であろうと被搾取者であろうと、クリスチャンであろうとなかろうと同じで、正しい人生観が必要です。

この根本概念にたつときは、決して物質的目標を重点におこうとしません。物質の与えるものは僅かな満足で、まばたきする程度の長さしかありません。この第一義的な目標が正当な位置に置かれるとき、真の平和が世界に現われるでしょう。これの認識が世界にない限り、原子力も理想的な決議も無限の説教も、人類に真の平和と融合とをもたらさないでしょう。

25 危機より解決に

一九五〇年九月、インドの政界および産業界十八名の全インド委員会は、次のような招請状をフランク・ブクマン博士に送つて、MRAの国際チームとともに同博士のインド来朝を懇請した。その委員のひとりといわせると、このような有力者たちが一致して行動したのは、これが始めてであるということである。

ブクマン博士

われわれの多くは貴下を知る光栄にあずかつたものであり、またMRAの仕事については、ヨーロッパ及びアメリカで親しくこれを知る機会をもつたものであります。

社会的経済的状態を恒久的に変革する真ののぞみと、世界の平和をもたらしには、MRAによつて生みだされた実際的な結果を増大する以外になく、産業に新しい刺戟を与え、個人と団体の中から不信、不平、憎悪をのぞき、理解と協力とをもたらす以外にないと存じます。

故にかかる道徳の再武装こそ現代の緊急事であるとともに、将来への希望であります。

貴下のいわれるように、これはあまりにも大きな仕事であり、一団体や、一階級、一国家または一民族のなしうることではありません。現代の問題を解決し、世界の風潮を変え、失業、貧困、戦争への方向を安定と繁栄に向けかえるには、すべての者の努力に加えて、最も賢明なものよりも更に優れた叡智をもつ偉大なものの力が加わらねばなりません。

建国の父マハトマ・ガンジーは、最高の理想に従つて歩めという不死の靈感を与えました。インドがこの尊い使命を果たすために、いかなる努力をも惜しまないことをわれわれは誓うものであります。

もし、この冬、貴下と国際チームがおいで下さつてその体験を伝えて下さるならば、どんなに幸い

かと存じます。世界を危機から解決へと導くために、経営者と労働者、左と右、東と西に架橋するイデオロギーを宣示する努力を私ども一諸に致したいものであります。

ワルダ州、サルヴォダヤ・サマジ外務省長官

アガルワル博士

英総督執行官評議会元会員

サー・サルタン・アーメッド

インド航空会社専務

サー・グルナス・ピウーア

連邦地方議会議長

シュリ・チャンドラパール

インド国民労組議会議長

カーンドバハアイ・デサイ

国家企画委員・予算委員（一九五〇年）

サー・クリシュナマカリ

国家企画委員

シュリ・メタ

マドラス大学副総長

サー・ラクシュマナスワミ・ムダーリア

国家企画委員会副委員長

シュリー・グルザリエル・ナンダ

国家企画委員

シュリ・パーティル

オリッサ地方議会議長

パトナイク

産業経営者

シュリ・ラムナス・ボーダー

電通長官

シュリ・クリシュナ・ブラサダ

インド商業会議所前会頭

サー・シュリ・ラム

ウエスト・ベンガル首相

連邦地方政府文部大臣

ビハール労働大臣

タタ工業社長

ローイ

サムプラナンド博士

ジンナー

タタ

26 パキスタンのメッセージ

一九五〇年八月十四日パキスタン独立日に、スイス、コーのMRA大会にヌルル・アミン首相が送ったメッセージ。

独立後三年のこの記念日に際し、私は個人として、また国を代表するものとして、道徳的相互理解の上に世界の殆んどすべての国を近づけることに成功しているMRAを通じ、世界の国々に親善と友好のメッセージを送る。

パキスタンは自国内で、あらゆる階級の人びとに社会正義を与えると同時に、他の国でも同じ理想が実現することに努めることを誓っているのだが、階級闘争の終止によつて新しい世界秩序をつくらうとするブククマン博士の新しいイデオロギーに全幅の信頼をおいて、己れを捨てて努力する一団の

人びとを見出している。

われわれは、創造主のみが個人にも、社会にも、人類にも、真の幸福を与えうることを信じている。この創造主から遠ざかれれば遠ざかるほど、われわれ自身の不幸を増すのである。われわれ自身の失敗を認め、他の意見を尊重し、人類を利己主義の道から相互理解の道へ呼び戻すことができれば、現在のようにイデオロギーによつて兄は弟から、姉は妹から分離するような分裂の世界も、ずつと住みよいところとなるだろう。これこそ世界に恒久の平和を打ちたてる道であり、平和愛好のパキスタンはこの崇高な目的のために、MRAとともに闘うものである。

27 より偉大な歴史

東パキスタン首相ヌルル・アミン氏は一九五〇年八月三十一日にロンドンのMRA本部の午餐会に招かれ、次のように述べた。MRAの本部は、曾てインドのクライブとして有名だったインド征服のイギリス総督の邸宅であつた。

ブククマン博士に、私の心からなる感謝を伝えて頂きたい。博士の友人たちの御尽力がなかつたらば、今回の私のヨーロッパ訪問は失敗であつたと思ふ。

ブックマン博士は偉大な哲人であり、また現代の必要を先見しておられる点で予言者である。MR
Aを通じて博士の名は歴史に不朽となるであろう。

この邸宅が歴史的意味をもつものであることを私は知っている。すなわちペンガルを征服したイン
ドのクライブの邸宅である。彼の征服は武力によつてなされた。クライブの家の今の主、ブックマン
博士はより偉大な人で、武力によらず、精神と道徳のイデオロギーによつて、より偉大な歴史をつく
られるだろう。私はここに迎えられることを光栄と思う。

28 アメリカ国会議事録より

一九五〇年七月二十四日のアメリカ国会議事録に載つたニュージャージー州選出のアレキサンダー・スミス
上院議員の演説の抜萃。

民主日本の代表者であるこの一団の人びとが、現在韓国に起きている状態、アメリカの世界政策、
特に極東に対する態度に理解を持つこと、さらに国連加盟国としてアメリカもともに戦っている人間
の根本的自由を尊ぶことなどは、太平洋の安全保障にとつて重要なものである。

この代表団は六週間前にマッカーサー司令部の許可を得て日本を出発し、スイスのコーに開かれた

MRA世界産業大会に四十七ヶ国の千六百名の代表とともに出席した。代表の大部分の費用はその人びとの属する日本の団体が出し、不足分はアメリカの有志が寄附したときいている。

三週間前にコーをでて以来、西欧の主だつた都市を訪問、各地の政界指導者に歓迎され、民主国家世界家族への復帰の第一歩をふみ出している。スイスの大統領、西ドイツのアデナウア首相、在独の最高辨務官マクロイ氏の歓迎、またドイツ内閣の閣僚、ボン国会上下両議員にも正式歓迎を受けている。一行のうち数名はベルリン市長の招待でベルリンへ飛び、その他ハンブルグ、ブレーメン、エッセン、ケルンの市長らの歓迎を受けている。数名はまたローマ法王に謁見している。

パリでは外務省に正式に招待をうけ、閣僚とも会見し、ロンドンではマンシヨン・ハウスでロンドン市長の歓迎、上下両議院の招待も受け、オックスフォード大学にも招待されている。

昨日、特別機でニューヨーク空港に到着したのだが、オドワイヤ市長、国連オースチン米代表らの歓迎の準備もある様子である。

この重大なときに当つて、この代表一行をアメリカに迎える意義を思うとき、特にこの上院に迎へたく感じる。故に来る七月二十八日にこの代表中の国会議員を当院に招待することを動議する。願わくは万場一致の御賛同あらんことを。

一九五〇年七月三十一日アメリカ国会下院のレイバーン議長は日本の国会議員を下院議場に招待

し、歓迎の辞をのべ、マーチン野党院内総務会長（現議長）によびかけ、同氏の同調を求めた。つづいて議事録には次のように載せられている。

議長、議長は日本国会民主議長嶺県選出の前大蔵大臣北村徳太郎氏を御紹介する。

北村代表、この議場に御招待を頂いた日本一行を代表して数言の御挨拶を申し上げたい。

第一にこの議場に入ることを許された光栄、さらにこの壇上より感謝の辞をのべることを許された光栄は、言葉に表わせない感激である。

日本国民の代表の一人として私は、アメリカに中国に、ヨーロッパの国ぐくに、またオーストラリアにたいして、（オーストラリアの代表は今日傍聴席におられるときいているが）なした悲劇的行為にたいし、衷心からおわびしたい。（拍手）

第二には戦後の復興のためアメリカが日本に与えた食料、その他の物質的援助にたいして日本人がもっている感謝をこの際お伝えしたい。この行為は貴国民の寛容の心の表われとして、物質的援助の道徳的、精神的裏付けとして、われわれは感謝している。（拍手）

不幸にして、この歴史的時期に極東の一角に重大事態が起っている。世界と極東の自由を守るため、アメリカの若い血が流されているという大いなる犠牲にたいし、われわれ日本人として敬服するものである。

日本は未だ正式には世界国家家族の一員として受け入れられていないが、極東を守るために取られた決意と行動に対して、許された範囲で支持して行きたい。戦争の破壊から日本はあらゆる努力をして復興しようとしている。四百万の家を戦争によつて焼失したことから、その混乱がいかなるものかは判明するが、その中から秩序をとり戻すため最善のことをしている。

このため、今までは日本に最も必要なのは経済的、また物質的復興であると考えてきたが、それよりも根本的な復興があることを悟つた。それは極東及び日本の真の道德的秩序である。この道德的秩序の上にこそ、はじめて真の経済的秩序もあり得る。(拍手)

今回、日本の各界の指導者の人びと多数はスイスのコーに開かれたMRA大会に出席して、MRAのいう四つの道德標準を基礎としてこそ、わが国の復興、再建は可能であることを知つたのである。

(拍手)

現在、共産主義の勢力が極東にのびつつある際に、われわれ日本人は、共産主義に答となり、極東の真のデモクラシーの基礎となり得るより優れたイデオロギーを見出す必要と責任を痛切に感じる。これこそ日本人に課せられた大きな問題であつて、その解答を見出し、実行しなければならぬ。

(拍手)

29 敵を友とする

一九五〇年七月二十九日附ニューヨーク・タイムズ紙に「日本よりの訪問者」と題した社説が掲載された。

国家の間でも、個人の間でも、昨日の友が必ずしも今日の友であり得ないという事実は悲しむべきことであるが、その代り、昨日の敵が必ずしも今日の敵でないということもありうる。

六十名の日本各界の代表団——政府、産業、労働各方面の人びと——を迎えて、パークレー副大統領は最近の戦争前まで、長い間平和な友好関係のあつたことを想い起し、今後再びそうした関係を将来に望みたいとのべた。日本の国会議員栗山長次郎氏が、アメリカの上院で日本のおかした誤ちについて遺憾の意を表し、同時にアメリカの赦しと寛容さに言及したとき、上院の議員たちは熱心に聴いていた。このことはすべて一九五〇年七月二十八日に、ワシントンで起つたのだ。広島と長崎に原子爆弾が落ちてから、未だ五年を経っていないのである。

一九四五年を想い起こし、さらに未来のある時を望観してみよう。今、日本と親しくなることは、決して、過去において日本の指導者が国の名と国民の協力のもとに行つた罪禍をそのまま赦すことではない。しかし、平和と親善は如何なる恐ろしい出来事のあとでも回復できることをはつきりさせる

であろう。悪人は憎まねばならないとしても、——だれが恥なくして、ナチスの強制で行われた惨酷な殺人の下手人どもをゆるし得ようか——しかし、救いは必ずある。望みのない国はないことをわれわれは知っている。今は「ロシア」という名は皮肉なひびきを感じる。いつかは今の暗い影も去り、明朗な新しい感じをもつようになるときもあろうが、神のみの知ることであろう。

広島と長崎の市長もこの訪問団に加わっていた。彼らもゆるす立場にあることを感じていたとしたら、彼らの心の中では、すでにその奇蹟が行われていたといわずばなるまい。一瞬間、われわれは現在の暗黒の彼方に、人類が兄弟として暮す時代をはるかに垣間みた気がした。

30 全アジアは耳を傾ける

一九五〇年七月二十二日、イギリスのオブザーヴァー紙に記載された日本代表団のメッセージ。コーのMRA世界大会に出席した日本代表団が、自由党の栗山長次郎氏と前大蔵大臣、民主党の北村徳太郎の両名の名で発表したもの。

共産主義に対する答を見出すべく、共産主義の誕生地ヨーロッパにきたわれわれは、コーにおいて、MRAのイデオロギーにそれを発見した。MRAの生き方こそ、アジアが今日直面している問題

の解答となる基礎であると思う。われわれはブクマン博士及びMRAの人びとに、その開拓の努力を深く感謝したい。

同時にヨーロッパの人びとの温い歓迎にも感謝したい。過去においては日本が誤つた思想の道を選んだために多くの人に苦難を与えたが、将来は国全体として心を新たにし、世界再造の努力に貢献するものになりたいと希望するのである。

フランス、イタリー、ドイツ、イギリス等の政府当局者と懇談した際に、極東に起りつつある諸勢力について認識があることを知つて大いに心強く感じたが、こうした理解をわれわれは歓迎する。

我らをして云わしめれば、デモクラシーの思想がアジアに受け入れられるためには、そのイデオロギー的面の認識が今までより以上になされるべきである。極東の大衆に、全体主義の魅力を失わしめるような生き方と哲学を示す必要がある。

ロシアがアジアに進出したのは、ソ連がイデオロギー戦の技術を理解し、人びとの心を捕えるために努力するからである。われわれが西欧の政府と国民に願うところは、西欧も同じ努力をして、来るべき世界のイデオロギーともいうべきMRAの哲理と実践に専心してもらいたいことだ。そのとき、全アジアは耳を傾けるであらう。

31 最大の記憶

一九五〇年九月、コーの世界大会に南アフリカから三大政党を代表する議員団が出席した。これは代表団の一人、下院議長ナウデ氏の演説である。

コーへきて、私は個人と、国、そしてイデオロギーさえも変えられるのを見た。私はレーキサクセス（前国連本部）のことを考える。レーキサクセスをコーにもつてくるか、コーをレーキサクセスにもつて行くか、どちらかをしなければ、成功はのぞめないだろう。

私はフィンランド、ノールウェイ、スエーデン、ドイツ、スイスを歴訪する機会に恵まれたが、将来に希望を与えるという幸福を見出せる唯一の場所はコーだ。数ヶ年後に自分が訪問した国について考えるであろうが、その最大の記憶はコーになると思う。

今までにも私は、多数の人に会う機会に恵まれていた。アメリカ大統領にも会い、二人のイギリス国王にも拝謁している。しかし、昨日ブックマン博士に会ったときほどの大きな光栄はなかった。というのは、博士ほど人類に多くのものを与え、大衆に幸福を与えた人は他にないからである。願わくは長生きをされて、この偉大な仕事をなすとげることを祈るものである。

MRAは私の国——小国ではあるが——のために、非常に多くのことをしてくれた。私の国は世界の黄金産額の六割を産出する場所である。「忘れられた要素」上演のおかげで、ストライキの起りかけたとき、その劇の精神が働いて無事解決した。

商業会議所——私の国の資本家——と鉱山労働者が協力して解決してくれた。われわれはこの素晴らしい劇『善い道』が南アフリカにくることを望み、それが実現するまで安んじないであろう。

32 インド居留民

これは一九五〇年六月三十日に『インデアン・オピニオン』紙に掲載されたものである。この新聞は南アフリカで発刊され、マハトマ・ガンジーが創立者で、現在はその息マニラル・ガンジーが編集している。この社説は『忘れられた要素』がダーバンのインド居留民地域で上演された際に発表されたものである。

32 インド居留民

道德再武装が『忘れられた要素』を上演する人びとの目的である。この劇を通じてわれわれは、全世界にMRAを進展させている人びとの精神を知ることができる。MRAだけが戦争によつて分裂している世界を救う唯一の道である。「忘れられた要素」はわれわれが先ず自分の態度を変え、自分の誤ちを認めるとき、全世界を変えることができることを教えている。

この劇はわれわれ自身の中にも、また世界的な企画とそれを指導する人の中にも欠けているある要素を示している。欠けている要素は、すなわちデモクラシーにイデオロギーがないことである。ブクマン博士がその著書『世界を再造する』の中でいわれるように、

『われわれはあまりにも長い間、安全とか、繁栄とか、安楽とか、文化とかが人類の自然の状態であるように思う雰囲気にとりすぎている。そして昔ながらの善と悪との戦いを忘れている。その戦いに勝利を得ることが、安全と繁栄の恵みをもたらすのである。この戦いに敗北すること、いな無頓着であることすら、貧困、飢餓、奴隷、死をもたらす。……MRAは変わること土台としたすさまじい融合の力をもっている。問題は国と国とをへだてる鉄のカーテンではなく、人と人をへだて、全人類を神の支配から引きはなす鉄のような利己主義である。人が神に聴き、従うとき、鋼鉄も熔けさつてしまう。』

MRAの人びとは全世界のすべての国民によびかけ、あらゆる分裂の垣を取りのぞき、人類愛に生きよと訴えている。彼らは『人が神に支配されない限り暴君によつて支配される』という事実をわれわれに示そうとしている。われわれはそれから学ぶものが多い。そして、この運動を継続させていく必要がある。これこそは暗黒な嵐の世界の燈台であり、正しい道に我らを導く力でもある。この劇は暗い現代に新しい希望と力とを与えてくれた。あたかもわれわれの心を取りまいていた暗黒が除かれたように感ずる。

アメリカ国会への報告

一九四九年六月初旬、アメリカ下院議長レイバー氏は国会の万場一致の承認を得てコイの世界大会に各派合同の委員を送る決定をした。ジョージア州選出プリンス・プレストン氏を委員長として、ニューヨークのドナルド・オツウィル氏、ペンシルバニアのダニエル・フラッド氏、ミシガンのジョージ・ドンデロー氏、インディアナのアール・ウィルソン氏らであつた。六月四日に彼らは陸軍特別車でコイに到着した。これは帰国後、下院でなされた委員長プレストン氏の報告から抜萃したものである。(一九四九年六月二十一日議事録記載)

この運動が、なぜ上下両院の少くとも百名の議員の注目するところとなつたのであるか。なぜ下院は最近行われた会議を傍聴させるべく委員を派遣したのか。アメリカの新聞もこれと同じことをきいていた。その質問にたいする答えとして、私はこの運動がヨーロッパで活潑に共産主義に答えているからだといいたい。

33 コ 地域的にこの運動が成功していることは議論の余地がない。われわれ委員たちは各方面の労組会長、国の首脳者及び工場経営者から、紛争と激しい分裂がMRAの影響によつて、調和と友情におき

代えられた実証をきいた。

ルールの炭鉱経営者と労組指導者がともにMRA劇『善き道』と『忘れられた要素』の効力について語り、彼ら自身この二つの劇によつて、相互の態度を変えようになつたと話してくれた。

この運動が産業界の争いの解決に如何に成功しているかは、一九三七年から一九四四年までアメリカの調停局の局長をしていたジョージ・ステイルマン博士の言葉に表わされている。すなわち『わが国において、産業界調停に最も効果ある運動である。』

多数の世界的有力者がこの奉仕的な一団の人びとを称讃しているが、アメリカの司法省も一九四九年四月一日に次のようなメモを発表している。『MRAは現在世界がその渦中にあるイデオロギー戦に対して、自由国家のイデオロギー的準備を完成するのを目的としているもので、本省はこの目的を有意義なるものとし、且つ全世界のデモクラシー勢力を強化するに有効であると認める。』

人類が靈感にみちみちて歩調を合せ、自由にたいする燃えるが如き愛によつて一つの目標に向かつて進んでいるこうした姿は、地上のどこを探してもこれ以外には見ることはできないであろう。その一つの目標は、紛争解決の手段としての戦争を放棄し、各国民、各民族が互いに相擁するためのものである。

平和を求める心は今日ほど強かつたことはない。今までよりも学問の普及している今日の世界は、

どうしたら世界の国々が一つの家族となり、裏切ることのない兄弟となれるだろうかという昔ながらの疑問に夢中になつて答えを求めている。理想主義的に聞えるかも知れないが、融合へのいかなる努力にも先行して、徳義と節操が打ち立てられねばならないことは事実である。これはしかし、道徳と宗教の影響が、政策を決定するときにも、また実行にうつす場合にも、当然のこととして受け入れられてはじめて実現できるのである。

フランス外相ロベール・シューマン氏は、この運動がマーシャル計画と大西洋協約を生かすものと信じておられる。その理由は、デモクラシーのイデオロギーが神の前にはすべての個人は尊厳性を認められるとの前提によつて確立しているからであるが、この意味において、われわれとしてもこの運動を歓迎すべきであり、建設的に用いるべきである。

34 コーの秘訣についての反省

一九五〇年九月、イタリアのカトリック著作者、歴史家として知られているカール・ロベラ・ディ・カステリョーネ伯の演説。

ここ何年かというもの、私は毎日の生活の煩わしさから逃れるために毎年コーにきて、毎年コーか

ら帰るときには、毎日をよりよく生きるための力と助けとをはつきりえてきた。

コーのよい結果はどこからくるのか。四つの絶対からか。生活の生き方か。よい手本か。平和と冥想をたのしめるからか。会う人びとからだろうか。私はコーのほんとうの秘訣はこうしたものの中にはないことが分つた。その秘訣は、実証が持つ迫力と、實際の手本と、その示し方にあることが分つた。

コーの大広間で、すべての人種、すべての職業、すべての文化、すべての国語の人がきて代る代る話すが、その生きた体験の合致したものが、ものすごい迫力となつて人にせまってくる。

労働者が、彼らの生活状態、彼らの苦難、彼らの受けた誤解、彼らの貧困、彼らの悪感情について自由に語る言葉には、人生の複雑さがそのままにじみ出ている。そのときの彼らはすでに労組員としてではなく、経営者の前に心を開いて語る一人の人間である。また労働者との関係について語る経営者もある。労使の和解を通じて、あるいはまた労使の目的を一つにすることによつてえられる迫力と恩恵（単に道徳的なものばかりではない）について語る経営者、単に経済世界でなく道徳世界に生きる経営者がいる。

長い苦闘の結果、自由をかちえた若い国が、過去の悪感情をここで克服している。今なお正義の取扱いを待つ人種も、彼らを支配している国の人に向かつて、自由にその思いを告げている。

宗教的な人で、ここにくるまでは何となく時代おくれで無力だと思つていた昔ながらの真理も、実

踐に欠けていたからだということが分り、よりよく生きる力を発見したという人もいる、ここには人間の経験が無限にあるが、それが単純な基本的な線で描写され、きく人各自が直面している問題の根源を見出すと同時に、解決の実際的な道も示される。

コーの迫力の秘訣とともに、その魅力の秘訣もある。コーは世界に開いた窓で、世界の各大陸の十字路である。特に世界の窓をのぞく機会が少なく、仕事の単調さ、経済力または労組の活動等に制限されている労働者は、広い地平線を眺めて、世界の大衆がこの惨酷な時代に求めてやまない、より大きな正義にふれる機会を喜ぶ。その正義は唯物史観が教えるように、単に分配の再調整や、外科手術的の切りはりで、もたらされるのでなく、往々にして経済的不安の重圧に苦しむ人間の精神を強めるのが、第一であることをここで学ぶ。たとえ日々に貧困に押しひしがれ、家屋の不足、人口過剰、その他あらゆる不幸と、不倫と、人間生活の頹廢の基となる苦難に出会っている人には、精神力を強めるといつても一見不可能に見えるが、それでもなお、そのために努力するのが第一であることが分る。

人間の尊厳を主張するのが、コーの主目的の一つである。誰でもコーに行くものはこのことを感じる。それは単にコーが存在するという事実によるばかりでなく、あらゆる問題を解決しうる簡単な公式が示され、いろいろのイデオロギーや階級闘争が、不必要に問題を複雑化しているのを単純化する。

この簡単な公式はいつも同じである、無私、正直、純潔、愛。これは日常茶飯事にも、また世界の悩んでいる大きな社会的、政治的な問題にも役立つ。

しかし、コーでもう一つのことを感ずる。それはかつて心と心のかよつた多数の親しい人びとが見えないことだ。東地区のドイツ人、ポーランド人、ハンガリー人、ユーゴスラビヤ人、みな正しい誇りをもつた、かつては自由で幸福であつた人びとが、現在は良心のすみずみ、人間の尊厳性、あらゆる点で圧迫されている人びとである。この国ぐにの幾名かの代表もここにきているが、彼らは悲劇からの亡命客で、痛々しくヨーロッパの敗北を思い起させる。それはヨーロッパが与えられていた古い使命を裏切つた結果である。ヨーロッパは今日、かつて気軽に受け入れ、手厚くもてなした唯物的イデオロギーにおびやかされている。それを進歩と思い、非文化的なものへの反抗と見なし、平和と呼び、すべて永続的な恩恵だと子供時代に教え込まれたものと思いこんだのだ。悲しい虜われの人びとにわれわれは心からの同情と、神への祈りと祝福とを捧げたい。

彼らの姿が見えないことこそ、コーが与えてくれる現実的な警告である。世界を再造せよ、破壊の中から拾い上げた破片をあつめて、住みよい、有難い、新しい家をつくれということだ。さらにありがたいことは至るところで、家を建てるには煉瓦も、タイルも、セメントも必要だが、一番必要なのは設計者だという確信がふえつつあることだ。誰が設計者だろう。四つの絶対標準の正直、純潔、無私、愛はちようど建築材料のようなもので、設計者が家を建てるには、材料を十分に知らなければな

らないと同様に、四つの絶対標準が世界の再建に役立つには、世界の無駄な饒舌には構わずに、それを生きぬくことだ。

こうしたところにコーの教訓の全貌がある。フランク・ブックマンに与えられた静聴を通しての経験と力がお互いをおぎない合い、完たからしめている。静聴を通して導きに従うようになると、それが個人の良心の求めと合致し、それが家庭の良心となり、さらにその結果が国の良心となる。世界も結局は、国の集まりである。コーは真の使命を示している。階級間に、イデオロギー間に、人種間に分裂を根絶せよと挑戦している。『根絶せよ』、これがコーの主題の一つだ。それなくして変革チェンジはない。

今日、われわれの目前に一つの征服的な勢力がみえる。共産主義には何も建設的なものがないと断言することは、光を無視することだ。コミニズムが偉大な征服的な全体主義勢力であることについても同様だ。コミニズムはその目的を知っている。その支持者は大きな犠牲を払う覚悟と、大きな信仰と、世界を再造しようとの意欲を持っている。世界を思想的に、規律的に、文化的に、経済的に一つとし、独裁的に包含しようとしている。

コミニストの夢には、確かに新しいものと優れたものへの憧れがあるにちがいない。それだからこそ若い人びとが、彼らの気易さと知識欲から、今までかつて誰も試みなかつた冒険を演じながら、アルゴノート号の昔語りのように新世界を求めて出発しているのだろう。しかし気を付けなければなら

ないことは、建物の高さに目がくらんで屋根があるかないかもわからないのに感心してはならない。屋根は見えないのでは無く、全然ないのだ。経済論と押しつけの平等主義は問題を解決しない。マルキスト・ロシア自身がそれを証明している。

ロシア自身が精神的なものを必要としている。戦争に勝ち、国内のあらゆる困難にうちかつたために、ロシアは何に価値を見出しているか。かつて否定した精神的要素、名譽、愛国心、栄光、犠牲、競争心、また御法度の宗教まである程度取上げている。

これこそ、コーがいつていることだ。経済的解決だけでは世界は再造されない。個人も国家も、生活に、家庭に、職業に、事業に、外交に、政治に道義的原則を取入れてこそ、その偉大性を發揮できる。ここにマルキシズムへの真の勝利がある。マルキシズムはなるほど経済人の遺産ではあるが、物神両面を有する全人間の遺産ではない。MRAの勝利はそれ自体独自のものでなく、真の解答、すなわち福音の道義に立ちかえること、聰明、活潑、しかも近代的に福音を適用するという意味において、MRAは唯一の解答である。MRAの内的力は、すへてキリストの精神を反映しているところにある。ここにコーの偉大な秘訣がある。

MRAは神の計画に人びとを従わせようとする運動の例にもれず二種類の敵をもっている。唯物主義者と道德頹廢者で、両者とも、こうした運動をおそれるのである。彼らは、はつきり敵であることを宣言している。彼らに関する限りわれわれとしては、どこでどう戦えばよいか分っているからおそ

れない。しかし他にも敵がある。MRAを知らずにいて、それを批判しようとする者がそれだ。彼らは相当な害をなすから、われわれとしては毎日の生活にMRAの原理をあてはめると同時に、家族や、友人や、職場の仲間や事務所の同僚に、MRAのことを伝えねばならない。末梢的な内容に捕われたり、浅薄な小さな問題の議論に落ち入ることなく、事実を伝える必要がある。反対者は好んでそうした議論に引き入れようとするものだ。われわれはMRAの思想、精神、教訓及び実行力の精髓を個人にまた世界に伝え、これを守るため努力しなければならない。

もう一種類の敵は悲観論者である。彼らはいふ。「何という大それた話だ。世界を再造するなどは。それに君たちが！」と。しかし、世界の再造を考えているのはわれわれだけだろうか。コミニストも真剣に世界を再造しようとしている。どういう風にしてそれをやろうとしているか。どこから出発するのだろうか。先ず細胞からはじまつてチームをつくる。彼らと同様なことがなせわれわれにできないのか。善悪によらず、世界の出来事にわれわれも責任があると心から信じるならば、各人の領域でわれわれは細胞であるわけだ。このことは真剣に考える必要がある。ヨーロッパの壁にも書く、神秘的な手が『われれ汝を計り、審き、刑の宣告をせり。』と書いてるのが見えないか。この重大な時機をいたずらに過しているとしたら、いつたいわれわれは如何なるクリスチャンだろう。こうした現実を目をふさいでしまふとしたら、何という智慧の貧困さだろう。愛するが故に行動することをしないというのは何という卑怯な人間だろう。

こんな疑問が、私のコー滞在申冥想した結果であつた。この疑問に信仰をもつて答えることは、われわれ一人一人の責任である。

35 M R A と西欧キリスト教

左の一文は一九五二年八月号のチュービンゲン神学評論に掲載されたカール・アダム教授の論説の抄訳である。

西欧の各国勢力が意識的に協力しようと思せず、かえつて互いに競争したり、ある場合には反対の方向に進んだりしている限り、アメリカが決定的に乗り込んでくる前に、ロシアの巨大な力によつて西欧は木つ葉微塵にくだけてしまふであらう。われわれは自立政策を持つ必要がある。共産主義の脅威はわれわれに、現在まだソ連の唯物史観から束縛されていない国々にを包含した超国家的な社会を建設することを余儀なくさせている。しかもこの社会は、それ自体の力で、東欧からの暴虐と無智と無宗教の勢力に、抵抗することのできるようなものであるべきである。強力なイデオロギーに養われ、厳格な規律によつて統制された東欧のコミニズムの力に対して、単に政治的、また経済的な点だけで西欧が団結するのでは、決して成功はしないだろう。

単に政治的、経済的な方法だけでは問題は解決されない事実を文明国全体に気付かせた人は、M R

A（道徳再武装）の提唱者フランク・ブクマン博士である。彼は人間性の必要に対する鋭敏な洞察力と、特別な力と、徹底した思いやりをもつてそれをやりとげた。さらに大衆をその権力下におさえているコミニストのイデオロギーにたいして、新しい、よりよい、より優れたイデオロギーが必要であることも示した。このよりよいイデオロギーは単に人間が持つている社会本能を捕えて動かすばかりでなく、人間性全体の奥深く浸透するものでなければならぬ。

ブクマンは強調している。

『人間性が問題なのだ。世界は自己の罪のためにつんぼとなり、利己主義のためめくらになつていゝ。それだから個人の完全な変化、徹底的な革命的な変化が必要なのだ。個人を自覚めさせれば、国をも自覚めさせるのである。』

生まれ変わる道は四つの標準——絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛——で、個人から家庭に、そして国全体を変えるところまで行くのだ。『人間の考えを変えるには超人的な力が必要。この力は神からのみくる。それはキリストの十字架を通して神がわれらのうちに働く力である。キリストの十字架のメッセージは、すべての利己心を亡ぼし、十字架の力によつて、人類史上最大の革命をわれらに実現できるようにさせることだ。必要なことは十字架を見上げ、キリストに聴くことである。すべての人が神に聴くことはできる。』それだからこそ、ブクマンが静聴のとき——自己をふりかえり、神が何を自分にどのぞむかを考える時間——をのみ出したのである。これは自らすすんで神の導

きを受ける道に自己をおくことである。

MRAは単なる道德運動ではなく、宗教的なものであり、その深い意味は基督教的なものである。しかし、それは決して信條的なものでもなければ、教會的なものでもない。その目的は人びとの心に、いろいろの信條のもとともなる原理と基調を呼びさますもので、その上に立つて各信條はそれぞれの方法をうち立てることができる。そのもつ唯一の目的は、古い真理を新鮮にして世界に伝えることである。ブクマンは聖イグナシウス・ロヨラの言葉を記憶している。『神にすべてを捧げきつた十二人の人を我に与えよ。そのとき、自分は世界を回心させるであらう。』

ブクマンが新しい基督教會をつくろうというのではなく、すべての活力ある宗教の源泉ともなる道德的、宗教的アブリオリ（経験以前のもの）の個人的体験を再造することであるから、基督教徒でない、多数のインド、中国、日本等の人びとでさえも、MRA運動の熱心な支持者であるのは理解できる。

ブクマンは基督教徒にも基督教徒でない支持者にも、自己検討と個人体験の道を真剣に強く指しており、個人体験の話合いを奨励している。過去三十年の間に偉大な世界的勢力にまで成長したこの運動に参加している人びとは単なる夢想家ではなく、著名な知識人、世界的な政治家、大きな産業人や労働指導者たち、労働組合員、港灣労働者、鉱山労働者等があり、閣僚から料理人に至るまでさまざまな人が加わっている。彼らの目的の一つである。福音の光によつて、政治、経済、社会、文化等

の最も困難な問題を解決しようというのである。山上の垂訓の単純な、そして明快な觀念が、最も複雑な政治や経済の問題に光を与えている事実をくり返し見ることはすばらしく、また驚くべきことである。四つの絶対、神への絶対帰依、キリストの十字架の力を信ずること、ブックマンがすすめる静聴はみな基督教的生活の根本的要素で、実践の基督教である。それであるからブックマンの教えの核心は、キリストの教えである。

コーでカトリック教徒が新しい真理を見出さないということは解る。しかし徹底的にゆさぶられて認めざるを得ないのは、コーでは基督教が多くのカトリックの社会においてよりもよりよく理解され、生活されているということだ。

『コーはカトリック教徒に何を与えるか』という質問に、ストラスブルグ聖堂の主教フィッシャー師は次のように答えている。

『コーで第一にわれわれをうつものは、良心の声である。修道院を除いて、コーほど多くの祈りが捧げられる場所は地球のどこにもないであろう。』

36 ブラーク学生会議には行かぬ

八十の大学から青年学徒がコーの大会に出席した。この記事は一九五〇年八月十四日のノールウェイ社会

党政府機関紙アールバイダーブラデットに掲載されたものである。

ノールウェイ学生連合会会長のヤン・ハリングスコグは、MRAのヨーロッパ本部のコーに十四日滞在した結果、国際大学学生会連合(IUS)主催のブラーグ国際学生会議に出席することを中止した。

ヤン・ハリングスコグは、現在コーからストックホルムに向かっているが、帰る前に記者は彼に決定の理由をたずねた。

「君の考えが短期間に変わったのはなぜか。」

「僕は鉄のカーテンの東にいる青年層と縁を切つてはならないと思つて努力してきた者のひとりだ。ブラーグの会議はそうした学徒と出会つて、彼らに影響を与える唯一の機会と思われた。IUSとの関係を完全に切るのは、国連の努力が無効であることを認めることであるから正しくないと考えていた。国連は東と西のチームワークを生み出し、橋わたしをしようとしているのだから。」

「それではコーで君は反共に転じたのか。」

「決してそうではない。ここに来て今まで以上に確信を持つたことは、反共は共産主義への解答ではないということだ。単に反対することは、何に対しても解決ではない。」

「それではいつたいどうしたのか。蒼白い理想主義をすてたというのか。」

「コーで僕は、東欧と西欧との分裂にこたえるイデオロギーを見出した。それは違つた国、人種、階級、宗教に属する人と人を結び、戦争と分裂とに答える社会をきずくことができる。共産主義は過激だが、徹底していない。それは機構を^{チェンジ}変革しようとするだけだが、MRAは人間の^{チェンジ}変革をめざしている。」

「それなら勿論君はブラーグに行くべきだろう。」

「その通り。もし西欧のデモクラシーが共通のイデオロギーを持ち、共産主義に解答を与えるため一致して出席できるのならば、そうすべきだ。しかし今はだめだ。われわれ自体分裂している。この分裂を共産主義者は十二分に利用している。そればかりか、われわれの分裂をいつそうひどくしようというのが彼らの手だ。世界の危機に際し、僕を選んでブラーグに送ろうとしている学生諸君に対する真の忠誠は、ブラーグで粗上へのせられる問題に答え得るもの、すなわちコーで見出したものこそ見出されるであろう。」

37 MRAの出發

一九三八年六月、フランク・ブックマン博士六十才の誕生祝賀会がイギリス労働運動の生誕地ロンドンのイーストハム公会堂で開かれたとき、博士はMRAを抗議して次の演説をしたのである。

世界の情勢は人びとの心に不安を起さずにはいない。国と国、労働者と資本家、階級と階級との間に反感が増して行く。悪感情と恐怖のために浪費される額は日々に増して行く。摩擦と失望が家庭生活を破壊している。

個人と国家を癒し、迅速にそして満足な回復をもたらす療法はないものだろうか。

療法は単純なありふれた真理、われわれが母の膝で学び、その後あるいは忘れ、あるいは等閑に附しているもの——正直、純潔、無私、愛の中にあるのではなからうか。

危機の根本は道徳的なものである。国々には道徳の再武装をしなければならない。根本的にいつて道徳回復が経済回復に先行するものである。すべての国に絶対の正直と絶対無私の新しい自覚が潮のようにおしよせたらどうなるだろう。どんな結果が生まれるだろう。税金は、借金は、貯金は、どうなるだろう。国々に無私の大津浪が起れば戦争はなくなる。

道徳が回復すると危機の代りに信頼が生まれ、生活のあらゆる面に融合が生まれてくる。世界の国々にどうしたらこの道徳回復を促進できるだろうか。人間性を変え得る強い力が、そして人と人、党派と党派との間に橋を架ける力が必要である。すべての人が相手の誤ちを拡大して指摘する代りに自分の欠点を認めるとき、これは可能となる。

神のみが人間性を変えることができる。

この秘訣は人びとが忘れていた偉大な真理の中にひそんでいる。すなわち人が聴くとき、神は語

り、人が従うとき、神は働く。また人が変われば、国も変わるのである。少数者の間にこの力が活潑になると、国全体の問題に解決が与えられる。指導者が変わり、国の考えが変わり、世界自体が平和になる。

「われらが世界を再造する」、これが一般人の欲し、また願っていることではなからうか。一般人は相手が正直であることを望み、他の国が自分の国と平和であつてほしいと思つている。われわれは、みな何かを相手から要求したが、指導者の考え方が変わると、みな互いに与えようという気持ちになるだろう。この新しい精神の中に、現在経済の回復を妨げている問題の解答が見出せるだろう。

みなが十分の思いやりを持ち、みなが十分に分ち合つたなら、みなが十分に持てるのではなからうか。世界にはすべての人の必要を満たすものは十分にある。しかし、すべての人の貪慾を満たすだけのものはないのだ。

失業者が全部MRAを実行するために動き出したらどうだろう。国民のすべてが刺戟され、国ぐにの安全と保障と正常のために動員するようになったらどうだろう。

すべての男、女、子供に至るまでみな加わり、すべての家庭が要塞にならなければならない。われわれの目標は、単にすべての人が生活の必要を満たされるばかりでなく、MRAを実現する必要な所につき、国の平和と世界の平和を確保することだ。

すべての人に靈感と自由を与え、あらゆる政治的活動にも具わつて、神は国全体を包含する計画を持つてゐる。

就業しているものも、失業しているものも、MRAの仕事につくことができる。人を、家庭を、事業を再建するためにみなが働くこと、これこそ国への最大の奉仕である。あるスエーデンの鋼鉄労働者が私にいつたことがある。「人間と産業界の両者を満足させるのは、精神革命だけだ」と。

ある労働指導者がいつた。「私は労働運動が勝利を得るのを見た。そして勝利の真中に空虚を感じた。オックスフォード・グループは私の人生に新しい内容を与えてくれた。このメッセージの中にこそ全世界の労働運動と産業界の将来への答がある。」

人間の中に新しい精神ができてこそ、産業に新しい精神を入れることができる。利己主義が国への奉仕に置きかえられ、産業の企画も神の導きに従うようになるとき、産業は新しい秩序の開拓者となることができる。神の導きの下に、労働と、経営と、資本との三者が協力者となるとき、産業は国の生活の中で、そのあるべき正しい位置につくといえる。

新しい人間、新しい家庭、新しい産業、新しい国、新しい世界。

神の心にひそむ偉大な創造力をわれわれは未だ使つていない。神は計画をもつておられる。国の道徳的精神的勢力が集結するとき、の計画を見出すことができる。

世界を再造するに足る道徳的精神的力を生み出すことはわれわれにとつて可能であり、生み出さね

ばならないし、必ず生み出すであろう。

38 輝く明星

南ダコタ選出上院議員カール・マント氏は当時ヨーロッパにおけるアメリカ情報活動調査委員長であつたが、一九四七年九月、コペンハーゲン市から次の手紙を彼の選挙民に送つた。

われわれ委員はスイスのコーを訪問し一日と一夜を過したが、MRAの大会はヨーロッパの現在にたいする輝く明星であると思われた。そこでMRAの提唱者フランク・ブクマン博士と会見、新しい音楽劇「善い道」^{グッド・ロード}の世界初演を見た。

MRAは五ヶ月継続の会議を、永世中立国のスイスで開いている。今日までに完成した事実は殆んど奇蹟といつてもよい。

アルプスの山頂高く、この珍らしい善意の人びとが、力と地位とを世界に得つつあることは見るだけでも愉快なことである。ヨーロッパも世界も、今日必要なのは戦争と破壊のための武器よりも道徳の高揚と武装である。コーの会議に出席した者で、来会者の顔に希望の輝きのかぶのを見た者は、ひとりとして、団結した善の力が団結した悪の力に勝つという確信をもたないものはない。もちろん

楽な戦いではない。しかしそのために払う犠牲は将来おこる戦い、あるいは敗北から生まれる結果と比べると、到底比較にならない。

39

忘れられた要素

一九四四年五月ワシントンのナショナル劇場でMRA劇「忘れられた要素」の世界初演が行われた。主催した全米委員会の委員長は、ハリー・トルーマン上院議員とジエームス・ワズワース下院議員の二人であった。フィラデルフィアで労資関係の指導者のために上演した際、トルーマン上院議員とワズワース下院議員とは終幕後観客に演説をした。

トルーマン上院議員の演説

自分は今見たばかりの劇の巧みな演出と教訓に心を打たれた。

わが国は世界のどの国が直面したよりも、より偉大な将来か、または逆に禍をみるかの岐路に立っている。どちらでも選ぶことができる。

過去二ヶ年半の経験は、私に人間性が過度の刺戟や重荷に対して、どう作用するかをいくらか分らせてくれた。相手を信頼せずに世界第一の共和国を維持できないし、また相手国にも信頼するに足ら

ものであることを示さねばならない。そのことをこの人びとが、われわれの中に目覚まそうとしている。この国を發達させ、今日の偉大さをもたせた根本的な開拓者精神を呼びさまそうとしている。

フィラデルフィアのみなさんは素晴らしい機会にめぐまれている。諸君のような指導者がMRAの精神を汲んで、あらゆる方面にこれをあてはめる努力をするならば、アメリカ全体が求めている解答を示すことができる。

私は三十年若くなつて、この仕事の完成をみたいと思う。二世代後にまたもどつてきて、世界歴史にかつてみなかつた偉大な国の姿をみたい。

アメリカは今日、基本的な道徳の真理を必要としている。それがあざやかに、また興味深く今夜上演された。今夜みたこの教訓を實際にあてはめて生きるようになる、世界は変わり、われわれがみんな望む世界となるにちがいない。

ワズワース下院議員の演説

アメリカの同胞諸君、私はこの運動に心からの信頼をもっている。それは本能的ともいえる信頼の念である。産業界で勞資の双方から、多方面の経験をもつた人びとの筆や口で、これが推薦されるのを見たり聞いたりした。今夜ここで聞いた演説やこのおどろくような劇の中で、それが働いているのを知った。この劇は人の心の中に深く喰い入つていく。

わが国は現在、非常な危機に直面している。危機は去つていない。危機がうすくなる前に、一段と

深刻になるであろう。戦死傷者も多くなろう、犠牲も大きくなろう、銃後のわれわれへの呼びかけも強くなるであろう。われわれのもつているすべての力と精神力を傾ける必要がでてこよう。手と手をたずさえて協力し、親しさの中から生まれる相互の信頼があるならば、われわれの責任は完全に果しうるであろう。MRAがこれをわれわれに教えている。

わが国の国内問題の危機は、戦争が勝利の内に終結しても終らないであろう。新しい困難、とても複雑なむずかしい問題に直面するであろう。もし人びとが協力して働かず、個々に仕事をして、互いに信頼しないならば、敵を破つても、われわれが尊敬してやまない国のよさといつたものはみんな失われてしまうであろう。

たしかに前途には困難が横たわつている。私はこの人びとが与えてくれた靈感に心から感謝する。諸君もそれを受けられたであろう。この靈感こそがわれわれを武装せしめ、来るべき闘争の用意をさせ、互いに肩を組んでアメリカ同胞として戦うための刺戟となろう。

「忘れられた要素」

一九四四年以来「忘れられた要素」は、アメリカで二十五万、イギリスで二十万、ドイツで十二万、南アフリカで十万、ノールウェイ、スウェーデン、デンマークで三万六千、スイスで三万五千、ニュージーランドで三万二千、フランスで三万、フィンランドで二万七千、カナダで二万五千、オーストラリアで八千の覽衆がこれを見ている。

ニュージールランドからきたこの劇の招待文は典型的なものであるが、それは五名の現閣僚、五名の前閣僚及び他の有力な人びとが署名している。外務大臣大ドイジ氏は一九五〇年二月二十一日にウエリントン市で上演されたとき、次のように述べた。

「世界はまさに戦闘状態だ。すさまじい、またやむえをない戦闘だ。善と悪との闘争、人の心をつかむ戦い、それがこの劇の主題である。

MRAの目的はイデオロギーの空白を埋めることだ。この闘争をとおしてひとつの大切な事実がわかる。今の戦いは権力の争いであるのみでなく、人の心と魂をとらえようとする闘争だ。

この戦争から世界を救いたいなら、われわれは原子爆弾以上にMRAが大切であることをさとらねばならない。」

40 ギリシヤ

一九四九年十一月、ギリシヤのパウロ国王がブックマン博士にギリシヤ国王ジョージ一世勳章を授與したとき、前首相、現国防相パナヨテス・カネロプーロスは他のギリシヤの指導者とともに祝電を送った。

MRAの原理は古代と現代のギリシヤ文化に相通ずる。貴下の世界平和への偉大なる貢献を認め、ギリシヤ勲章を贈呈するに際し、一同の心からなる祝意を表す。

ギリシヤ首相セミストクレス・ソフーリス氏は、一九四九年、コーの大会に次のメッセージを送った。

人類の自由への戦いの前衛として、ギリシヤは自由と平和のくるまで戦う決心である。自由のイデオロギーとしてのMRAは、すべての国が融和と力を得るために必要なものである。世界を再造し融和させる貴下の靈感による努力に対し、心よりの支持を送るものである。

カネロプーロス氏は一九四八年MRA十周年大会に、ロスアンゼルスホリウッド・ボールでギリシヤを代表して発言した。「共産主義は真晝の闇と云われているが、MRAは真夜中の太陽である」

一九四六年以来、ギリシヤからは二百十二名の代表がコーにきた。一九五〇年の大会には、ギリシヤ空軍機で、十八名の労働者、経営者及び学徒を含めた特別代表が参加した。

41 生きる目的は何か

この講演は一九五〇年六月四日の誕生日にブックマン博士が、ドイツのギルセンキルヘンでハンス・ザックス・ハウスの招待会で話したものだ。この集まりは北ライン・ウエストファリアのカール・アーノルド知事を始め五名の州知事の招聘によつてルールで開催されたMRA十二周年記念大会のクライマックスであり、首相アデナウア氏の支持を受けたものである。

十二年前、私はフロイデンシュタット近くのブラック・フォレストの森を散歩していた。世界はまさに波瀾の極に達しようとしていた。今日と同様に人びとは平和を望みながら戦争の用意をしていた。森の中を歩いていると一つの考えがくり返し心に浮かんできた。『道徳と精神の再武装、道徳と精神の再武装。(モラル・リアーマメント)。次に来る世界の大運動は各国の道徳再武装を計る運動である。』

その後数日して私はロンドンに行き、イギリス労働運動の生誕地イーストハム区に行つた。労働者たちは賛成してくれた。MRA(道徳再武装)が世界に拡がって行つた。新聞が書き立てた。ラジオが放送した。十二年後の今日、世界の各地で人びとが国々にMRAを計画するために集まってい

る。ロンドンの労働者は港灣労働者とともにボブライ公会堂に集まっている。パーミンガム公会堂では労使代表がイギリスの重工業と炭坑関係から集まり、グラスゴーではクライドサイド造船工員が大衆を開いている。

アメリカでは私の友人たちが大西洋横断電話で、アメリカでの運動の発展ぶりをわれわれに知らせ、またドイツのニュースを聞くことになっている。

メッセージが数日前から到着しつつあるが、オーストラリア、ニュージーランド、インド、南アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ各地、日本、極東各地からきている。その代表的なのはインド政府企劃院総裁グルザリラル・ナンダ氏の言葉である。『世界の病根を根絶する唯一の希望はMRAにあると信ずる私たちの挨拶をお送りする。MRAは年とともにその世界的意義と力を増している。全世界の全地域においてMRAの思想を、政治、経済、社会の思想と実践において最も顕著な、また最も力あるものとするまでは、MRAはその目的を達したものとはいえない。』

神に与えられた思想が勝利を得る秘訣は何であろう。私やまた世界の何千何百という平凡な男女が、非凡なことをなし得るのは何故だろう。極端な自己中心主義者か盲目者でない限り、今日の世界を今のままでよいと思うものはいない。われわれの多くは世界を変えたいと思つている。問題は大部分の者が自分勝手な方法でそれをやりたいと思つていることだ。

ある者は正しい診断を下すが、治療法がまちがっている。彼らは神を度外視し、人間性の改変を無

視しているから、結果は混乱、悲哀、戦争となる。またある者は、理論的に立派な解答をもつていて思つてゐる。しかしいつも先ず誰かが、また他の国がそれを始めることを希望している。結果は焦燥と絶望とである。

正しい診断と正しい治療法が一緒に与えられるとき、奇蹟が生れる。人間が改変することによつて社会が変わるのである。

この点を私個人の体験で説明しよう。というのがある日、こういう事が私に起こつたのである。突如として私は私のもつていた誇、利己心、失敗、罪が明白に解つた。「己」という一字が私の生活の中心に立つてゐた。私が変わるためには、その大きな「己」という字が抹殺されねばならない。

六人の人に対する憤怒の情が、心の中に墓標のように立つてゐることがわかつた。

私は神に私を変えて下さいと願つた。神は私に六人の人と和解せよと命じた。私は神に服従して、六通の謝罪の手紙を書いた。

その同じ日に神は私を用いてひとりの人を改変した。そこで神に従えば奇蹟が起こるということを悟つた。人が聴くとき、神が語り、人が従うとき、神は働く、人が変わるとき、国も変わる。

この革命的な道を私は四十二年前に踏み出した。今では幾百万の人が歩いてゐる。そして今日、私は諸君にもこの道を歩くことを挑戦したい。

諸君は何のために生きてゐるのか。諸君の国は何のために生きてゐるのか。利己的な個人と利己的

な国家は、世界を全体的破滅に導く。新しい型の政治家、新しい型の国策——それが現在、最も必要なのだ。この目的のためにMRAは生まれた。

この春、若い、富も地位もある有望なスイスの技師が、家族と友人を残して死んだ。彼も私と同様に生命と財産とを投じているが、チェンジ改変を土台とした新しい世界創造の秘訣を発見していた。彼は妻と子供と一緒に、世界のMRAセンターとなるコーの実現にすべてを捧げた。彼が短い五年間に、多くの人が一生を費してもなし得ない大事業を完成したことを、人びとは今となつて認めだした。

この若いスイス人は今から七百年前に世界を変えるために、名誉も富もすべて、持てるものすべてを与えた、ある青年の足跡をふんだのである。彼はヨーロッパに新しい生命を与え、彼の一生は幾百万の人びとを感動させている。彼の名はアシジの聖フランシスである。聖フランシスの詩をこの若いスイス人の技師は日々愛唱していたと彼の妻はいう。この詩こそ世界を変える鍵でもある。

神よ、汝の平和を

もたらす器うつかとならせたまえ。

憎しみのある処に 愛を

敵意のある処に 赦しを

紛争のある処に 調和を

誤謬のある処に 真理を

疑惑のある処に 信仰を

絶望のある処に 希望を

暗黒のある処に 光明を

悲哀のある処に 喜悅を

与えるものとならせたまえ。

私の主よ

慰められる者となるよりは

慰むる者と

理解せられる者となるよりは

理解する者と

愛せられる者となるよりは

愛する者と ならせたまえ。

そは、与えることによつて

与えられ

生命を失うことによつて

生命を見出し

赦すことによつて

赦され

死することによつて

永遠の生命に

廻よみがえり得ればなり。

42 新精神の興隆

一九四八年、カリフォルニアのリヴァサイドで開かれたM R A十週年記念大会に各国代表は、アメリカ上下両院両党八十三名の議員の招待をうけて出席した。代表は会議の終了後、首都ワシントンに行つたが、時の下院議長デヨゼフ・マーチン氏、上院議長代理アーサー・ヴァンデンバーグ氏、大統領顧問ジョン・スチールマン夫妻に歓迎された。

大会開始前に、下院少数党首領ジョン・マコーマック氏が議場で歓迎の辭を述べた。その抄訳をここに掲載する。

議長、六月六日より十四日までカルフォルニアのリヴァサイドでM R Aの世界大会が開かれ、二十

四ヶ国より有力な代表が参集する。道德の再武装、又は個人と国家が神の道にたちかえるという大目的のために開かれるこの世界大会は世界的にみて重要である。あらゆる信条の人びとが世界を健全な道、『神の道』とでもいうべきものに引きもどすため懸命の努力をしている。

すべての人と国の道德再武装は今日の世界に充満している唯物主義の感情や事態に対処する第一のそして現実的な答である。私の考えでは、現在の唯物的時代のあとには、世界の大衆が長く共通の信仰に生きる時代が来ると思う。歴史をみても人類が正しい道からはずれたかと思われる時もあるが、常に彼らは精神的真理に立ちかえり、その結果人類の進歩が起つていく。

私はこの世界大会に出席している人びとに祝辞を呈したい。この仕事は現在も将来も無駄ではない。MRAこそ世界の安定、幸福、平和への道である。

一九三九年十一月三十日、時の議長、故ウイリアム・バンクヘッド氏は、その年十二月一、二、三日開かれた世界大会に先立つて、立派な力強いラヂオ放送をしたが、その予言的言辭は今日なお意味があるものと思うのでここに収録してのべたい。

(左の一文はアメリカ下院議長ウイリアム・バンクヘッドが全米放送局ブルー・ネットワークを通して一九三九年十一月三十日に放送した演説の抜粋である。)

アメリカで、MRAが力強く動いているところでは、労働者と資本家が共に会い、又労働者の相

争う分派もM R Aによつて話し合えるようになってくるので、産業平和への希望が新しくなつてい
る。

政党政治について考えても、今日のように問題の多い時代に、われわれはとかく先づ第一にアメリカ人であるという自覚にたつよりも、民主黨員であるとか、共和黨員であるとか政党中心に考え易い中で、この運動の影響を私は見ている。この新しい精神がアメリカに、いなわれわれに必要だと上下両院、両政党の人が異口同音に唱えているが、私の長いワシントンでの生活の中で、このようなことはかつて見たことがない。

われわれが真に国内の融和を望むのなら凡ゆる点で相手の党が先ず動くのを待つというやり方ではだめだということを自覚させているのもこの運動である。国全体として考えれば自党としても正すべきことが当然あるし、国内に協力の精神を造りあげることがは愛国者の義務でもある。

協力を学ぶ必要のあるのは、正にわが国だろう。社会的、政治的に特別な洞察力がなくとも、国の力が国内融和にあること位は誰にでも分ることだ。

世界情勢について一言すれば、国際連盟の夢が破れたのは、たとえどんな崇高な理想によつて造られた国際機構も、それに属する国ぐにに新しい精神がない限り成功しないという点に気がつかないからである。フランク・ブックマン博士は最近の放送で言つた。『平和は単なる観念ではない。人びとが変ることだ。』この言葉は十分考慮さるべきである。過去のあやまちを指摘すると同時に、将来

の平和を作ろうとする者のとるべき道を示している。

国も結局個人と似たもので、利己的なものに動かされ、憎しみを抱き恐怖に支配される。世界での己れの地位に敏感で、機会さえあれば押し上がるうとし、少くとも現在の地位を守ろうと努め、必要やむを得ないときに限つて、その地位をひこうとする。たいていの国はできれば公正な方法で目的を達しようし、仕方がなければ手段はえらばない。

平和を達成するために国家間の新しい精神が先づ必要である。新しい精神がない限りいかなる解決も不可能である。ある有名な評論家が最近書いたものの中に、罪を犯さぬ国はないのだからすべての国は悪いといえるといつてゐる。現状に対してみな責任があると素直にみとめることは、ヨーロッパの平和を齎らすのに非常に力あることだ。この精神をもととした平和ならば、今回の戦争にみな勝利者となれる。さもなくば唯一の勝利者は各国で間断なく働いてゐる破壊を目ざす勢力で、彼等にとつて世界の紛争こそは歴史的な機会となるのである。

今日われわれは歴史の決定的瞬間に生きてゐる。凶り知れぬ力を持った多くの勢力が行進しはじめている。人類の内にひそむ癒しの力を集めて、混乱との競争に勝つような勢力がどこかにあるだろうか。

他のすべての勢力をしのぎ、われわれの決心一つで国の将来を形づくるような勢力が存在する。それは個人と国に向つて心の改変^{チェンジ}を迫る力づよい新精神の挑戦であり、神に聴き従う幾百万の人びとの

の平和を作ろうとする者のとるべき道を示している。

国も結局個人と似たもので、利己的なものに動かされ、憎しみを抱き恐怖に支配される。世界での己れの地位に敏感で、機会さえあれば押し上がろうとし、少くとも現在の地位を守ろうと努め、必要やむを得ないときに限つて、その地位をひこうとする。たいていの国はできれば公正な方法で目的を達しようし、仕方がなければ手段はえらばない。

平和を達成するために国家間の新しい精神が先づ必要である。新しい精神がない限りいかなる解決も不可能である。ある有名な評論家が最近書いたものの中に、罪を犯さぬ国はないのだからすべての国は悪いといえるといつてゐる。現状に対してみな責任があると素直にみとめることは、ヨーロッパの平和を齎らすのに非常に力あることだ。この精神をもととした平和ならば、今回の戦争にみな勝利者となれる。さもなくば唯一の勝利者は各国で間断なく働いてゐる破壊を目ざす勢力で、彼等にとつて世界の紛争こそは歴史的な機会となるのである。

今日われわれは歴史の決定的瞬間に生きてゐる。凶り知れぬ力を持った多くの勢力が行進しはじめている。人類の内にひそむ癒しの力を集めて、混乱との競争に勝つような勢力がどこかにあるだろうか。

他のすべての勢力をしのぎ、われわれの決心一つで国の将来を形づくるような勢力が存在する。それは個人と国に向つて心の改変を迫る力つよい新精神の挑戦であり、神に聴き従う幾百万の人びとの

融和が生む結果である。この精神に忠実であるとき、人は榮えたし、この精神から遠のいたときには、国もおとろえた。今こそ、われわれが自分の世代と次の世代のために真の愛国心を生む道徳と精神力の道に立ちかえる機会である。

国防の必要を忘れることはできない。しかし、物的防備もその背後に高い土氣と共通の使命を知り、如何なる犠牲をも払うだけの決心を持つ団結した国民がなければ、恒久性をもつわけにはいかない。

国防の第一線はその国民性と指導者の指導力とである。国が富み、貿易が盛んであり、伝統を誇つても、信仰がとぼしければ、必ずその国はおとろえる。信仰の豊かな国はすべてに豊かな国である。国の品格を高めると国力も強まる。信仰を再建すると国は偉大になる。品格は富であり、信仰は力である。

戦争を生む原因は古い世界だけにひそんでいるのではない。アメリカにも同じ唯物主義、同じ利益の衝突、問題の真髓に対する同じ盲目さ、同じ権力とそれを維持しようとする慾望が渦をまいて働いている。「持てるもの」はそれを維持しようとし、「持たざるもの」はとろうとする。国内でも、国外でも、健全な考え方は、他の人や他の国に批判の指をむけることではない。世界の問題が最も身近かに感じられるところ——即ちアメリカから正しくしていくことだ。

西洋文明を維持しようとするなら、M R A がわが国の生活の基調となり、又国内及び外交政策の基本とならねばならない。

人種と信条の如何にかかわらず、われわれはみなこの新精神を先づ自己に、それから家庭に、事業に、社会にあてはめることができる。利己主義と怠惰を先づすてよう。全国民が道徳と精神の武装のため動員することがアメリカを安全にする道だ。

われわれがこの大陸だけにでも人の和をもたらず秘訣を実証するならば、われわれは人類の平和建設者、恒久的な正しい平和の建設者と、なることができる。かくしてこそ、われわれは現在の危機に正しく処することができる。かくしてこそアメリカは将来に対して確信をもち、世界もまた希望をもち得るのだ。

ECA(マーシャル欧州援助計画)のポール・ホフマンが大会に送ったメッセージ。

貴下に絶大の信頼と支持を送る。MRAはマーシャル計画のイデオロギー的側面である。

43 劇評『ジョサムの水門』

一九五一年二月十八日、ニューヨーク・デァーナル・アメリカン紙に掲載されたジョージ・ソコルスキーの『ジョサムの水門』の劇評。

たまたまの会話が劇に及んで、十から十四歳位の子供を連れて行くとしたら、何の劇がよからうという事になつた。町の飲み屋をうろつく詭弁派でないわれわれは、劇作家が終幕のセリフに困つて、思いついた、いやな言葉を見かけは無邪氣そうな娘に言わせるといつたものに愛想をつかしている。勿論そうしたやり方がいつも観客の爆笑をうけるのはたしかだが。又、劇を見に行つたからとて、子供たちがアメリカの生活は性以外にはないと思ひこんでもらいたくないし、人生にはもつと高尚な、又善良な瞬間——道徳的ともいえる瞬間——もあるのだということを知つてもらいたい。

それでわれわれは『ジョッサムの水門』^{ゲイト}を見に行つたわけだ。この劇は道徳再武装^{M R A}を唱える一群の人びとの出しもので、玄人の上手さで演出されている音楽劇で、『オクラホマ』の歌謡に匹敵する歌もある。而も物語りは現実的で、どの家庭にも起り得るものだ。見に行つたわれわれはみな楽しんでしまつた。

『ジョッサムの水門』^{ゲイト}は仲たがいをしている兄弟二人を主題として、二人の憎しみが隣り近所に迷惑を及ぼすのだが、兄が水門を閉ざすに至つて部落全部が水飢饉となる。法的には許される行為だが、道徳的には許さるべきではないことだ。健全な社会生活を営むのに法的権利だけでは足りないという普遍性がここにある。立法府の作る法律は単に不完全であるばかりでなく、人間の作つたものであるから往々にして不健全でもあり得る。勿論われわれは人の作つた法律に則して生きねばならないが、自然律、神の法は人の法を越えるものである。

劇の終りでは、真理の鍵が兄のかたくなな心を開き、彼の開いた水門を流れ出る水に、放牛はのどのかわきをうるおし、神の恵みを感じるとき、生活ははじめて楽しく、兄弟は和解する。

筋は少年と少女が愛し合い、両親が反対するという「ロメオとジュリエット」と同様、ありふれた簡単なものだ。大抵の場合最も偉大な劇は簡単であることは、あたかも偉大な交響楽が一寸したメロディを中心にしてできているようなものである。(例えば、ベートーベンの第五交響楽のメロディの如き—チャーチルはこれを使つて勝利の象徴としたのだが。)

単純さは真理を含んでいるのみでなく、面白く、又冒險的でもありうる。海岸の花崗岩の上に誇らかに立つ一本の松ほど単純なものはあるまい。灰色の空を背景にのびている孤影ほど崇高なものはない、近代の画家が画板にどんなものを塗りたくつてもそれに及ばない。しかも、詩人がいつたように、樹は神のみが作り得るのだ。

『ジョサムの水門』では、筋の単純さが、音楽と人をひきつける背景と相まつて、人を真理に導き、信仰のもたらす謙虚さの中に人を変^{チェンジ}える力があることを示している。

この劇がコミニストやホモセクシュアル(変態性欲者)の劇団関係者からきらわれるのは当然だ。前者は決心一つで人間が向上できるということを知らせたくないし、同性愛の連中は彼らの不道徳性を必然的なものとしておきたいからである。彼らは自分たちの性質はどうにもならないから、悪でないと考えたがる。

『ジョサムの水門』は大人が見ても良い劇だが、青年と子供は是非見るべきだ。人間が価値ある生活を楽しむさえすれば、生き甲斐のある人生は送れるという考えを、品よく、愉快に、示している。劇の思想は別に新しいものではないが、常にくり返す必要のあるものだ。人が憎しみに生きるのは、憎むことを楽しんでゐるからであるが、一たび憎しみをやしむことをやめれば、憎しみは消える。憎しみの原因はよく突きとめてみると、多くの場合些細なことで馬鹿らしい程意味のないものである。私は互いに激しく憎みあつてゐるグループのあるのを知つてゐる。私は双方を知つてゐるので、彼らの憎しみが確信に基いたものでなく、疑いと習慣からきたものであることも知つてゐる。和解がむづかしいのは、どちらも「私は間違つてゐた、馬鹿だつた」と先に言わないからだ。双方とも間違つており、馬鹿げてゐるのに……。

世界もその通りだ。そして結局は戦争から死へとつきすすむ。子供や若い人びとが『ジョサムの水門』を見たら、多分よりよい生活への鍵を見出すだろう。

44 道義の指導精神

アメリカ上下両院外交委員会委員長と委員の名で一九五一年五月二日、ヨーロッパ、アジア、アフリカ諸国に送られた招待電文。

ミシガン州マキノ島で六月一日から十二日迄開かれる世界諸国の道徳再武装會議（MRA）に貴下が招待せられたことにたいし、われわれはミシガン選出両院議員の歓迎に加えて合衆国国会両院の外交委員の名に於て支持を表明するものである。

貴下が今回アメリカに來朝されることは、世界共產主義の脅威にたいし、とるべき健全な処置として、何をなすべきかをアメリカ国民に考えさす最もよい機会となるであろう。道義の面での一致した力を示さないで、自由国家群を守らうとする共同の軍事、政治、経済の努力では、その全機能を發揮することはできないであろう。われわれの将来に影響を与える世界の危険地域にも、かかる積極的道義精神によつて、デモクラシーを有能な活力として確立し得た実証は我われを深く感動させるものである。此の大会が道徳標準と神の導きを土台としたデモクラシーを世界に宣示するよい機会であることを思い、又それは、自由をまもる最善の防壁と思う。

貴下の御來朝を歓迎する。

上院外交委員会委員長

トム・コナリー 上院議員

アレキサンダー・ワイラー 上院議員

下院外交委員会委員長

ジョン・キー 下院議員

副委員長

ジエームス・リチャーズ 下院議員

チャールス・イートン 下院議員

ジョゼフ・マーティン 下院議員(現下院議長)は一九五一年六月八日フランク・ブックマンに次の電文を送った。

過去十二年間私は貴下の偉大な業績に深い関心をもつてきた。それが世界情勢に与えた影響は深く、私の知る限り他の何にも優つて国と国とを結ぶ力である。国会議員有志を代表し、貴下の祝福を祈るとともに、マキノ島に集まられる自由世界の有力代表者に歓迎の意を表する。

AFL会長(組織労働者六百万)故ウイリアム・グリーンは次の招請状をヨーロッパとアジアの労働指導者に送った。

合衆国会両院外交委員長及び委員並にミシガン州選出の両院議員は一九五一年六月一日から十二日まで、ミシガン州マキノ島に開催されるMRA世界大会に出席する各国の有力代表者の歓迎を發表した。アメリカの労働界もこの歓迎を心より支持し、貴下並にヨーロッパ、アジア、アフリカ、オー

ストラレジア及び南北アメリカ諸国より多くの労組の兄弟が、この大会に出席しわれわれすべてが希望している自由と正義の新しい世界をつくる努力に参加されんことを希望するものである。

ウイリアム・グリーン 署名

45 光をつけよ

左に掲げるものは一九五一年六月二日、アメリカ・ミシガン州マキノ島のMRA世界大会に於けるブックマン博士の開会演説である。

今日の世界は混乱している。現に戦争が起こつてゐる処もあり、戦争の噂もある。進撃的な強い力が世界を制圧しようとしている。至る処に——炭鉱に、港灣に、遠い朝鮮に、マレーに、インドネシアに、オーストラリアに、その力はそのびようとしている。これは地球大の争いである。人びとは真剣に憂えている。恐れが彼らを捕えている。どうしてよいか答えがわからない。

十三分間の短い放送時間に何がいいえよう。しかし、その間に諸君に解答を示そうとするのが私の仕事である。

誰でも幸福に暮したいと願つてゐる。誰も心を煩わされるのを嫌う。しかし、いや応なしにそれが

起こる。たとえば税金に関係がある場合、これはみんなに影響するので、税金が度を越えて高くなる
と否でも応でも何とか解決を見出そうと本気になるものだ。

どこへ行つても人びとは不満足だ。ミラノ市で私は建物に『共産主義万歳』と書いてあるのを見
た。他にどんな標語を掲げたらよいのだろう。何を『万歳』と云えよう。一致した答えがまだない。

党の主義主張も前ほど意味がなくなっている。民主党といひ共和党といつても、大した差がない。
その中のある者はよいが、ある者は悪い。人びとが心から求めているものを与えるような普遍的な型
の指導者は、ワシントンでなかなか見当たらない。この人ならと全幅の信頼をおける人があまりにも
少い。昔はワシントンで政治にたずさわり、名譽に埋まつていることもそう困難ではなかつた。しか
し今では、さまざまな意見がひどく渦巻いているので頗る面倒だ。すべての人を満足させ得る技術を
持つていないとむずかしい。今日必要なのは殊更宗教くさくなくて、しかも生活のあらゆる面を
第一義にする人である。敵をゆるし得る人。はつきり決定のできる人。

イギリスではそうした指導者が港灣労働者の中にいる。この間までこの人びとはストライキを起こ
したり、騒いだりして、頭痛の種となつていたのだが、それがみんな変わった。そして今度はイギリ
ス国会の人びと——下院と上院の議員に、問題の解決を示しているという理由で、MRAの本を贈る
ようになった。労働党の議員ばかりでなく保守党員にまで贈つたのだが、保守党幹部の一人が自分た
ちに欠けている何ものかをこれらの港灣労働者が持つていることを認めている。『保守党でさえあれ

ばそれで十分だと呑気に考えている人もあるが、彼は階級的な考え方もつことは誤りであり、どんな階級でも、どんな人でも常に正しいということはないとあなた方は教えてくれた。』という。

自分より他の人が勝つていっていることを認めるのはなかなか辛いことだ。とかく人は自分の重要性ばかり考えていて、他のことをかえりみる余裕などない。新しい、より高度な生き方、今までに見たことのない生き方が必要である。正しさを認めて誤りを捨てるのがそれである。このことは光明をもたらせる。

われわれはあまりにも長く暗闇の生活をしてきた。あるとき、私はトーマス・エジソンと夜明け頃まで話したが、そのとき彼は聞いた。『天国にはあかりがあるでしょうか。』『もちろん』と私は答えた。『その心配はありません。とうに光がついていますよ。地上に光をとすだけであなたの仕事は十分なのです。』

すべてに光があり得る。政治にも光を与えたらどうだろう。そうしたら議論も熱の代りに光となるだろう。『光をつけよ。もつと光を』これが混乱への答えだ。はつきり物が見えないでよい理由はない。

あかりをたくさんつける現代的な設備はできている。エジソンが世界に与えるためにもした電燈は、まづ一つの家を明るくした。霧を貫く電波探知器もある。またものの内部を見せてくれるX光線もある。だが神の与えているものはそれだけでない。これだけ光の設備を持ちながら、世界は暗黒の

中に隊伍を組んで行進しているように見える。

われわれの信仰も悟りの光をうけて輝かねばならない。ひかりが必要である。すべての信仰も超自然の輝きを必要としている。『天なる焰もてあきらかならしめよ。神はわが光、わが救い、われ誰をか恐れん。』

このひかりには絶対の道德標準が照明として必要で、それに照らされるとき、個人も国家も変わるべき処を示される。基督教実践をして基督教徒としての生活の錆を落し、磨きをかけなければならぬ。この標準をいつも生かし、活用させることが大切である。そしてすべての人によつてそれが生かされる時、成功の秘訣となるのだ。

ミシガン州のグリーンフィールドの町にエジソンの実験室が永久に保存されているが、これはいま一人の偉大なアメリカ人ヘンリー・フォードの貢献である。エジソンだの、フォードだのの名前は何故現代人の心を引きつけるのだろう。彼らが将来を見透していたからだ。現在の政治家に欠けているものはそのことではないか。

ヘンリー・フォードがかつて次のようなメッセージを送つてくれたことがある。『MRAの實踐を見ると、この国に、そして世界の将来に希望がもてる。』

エジソン夫人もMRAを理解していた。『主人の与えた光と同様に、この光もすべての家に行きわたらなければならぬ。』といつた。また令息のチャールズ・エジソンも海軍長官として次のように

いつている。『私は道徳の再武装が物的再武装に劣らず重要であることを確信している。』
彼らは産業時代の先駆者であつたために、世界に光を与えるMRAを理解し得たのである。
現在の世界状況は各人がそれぞれ光をつけることを要求している。それこそわれわれの希望である。

ロンドンのダゲナム地区にあるフォード工場の例をひこう。組立工場の監督はいう。『戦後の不安時代に私は工員たちにきつく当つていた。ある日工場代表委員たちが、MRAの四つの標準を基にして問題を討議してくれないかと提案してきた。討議の結果は上々で、工員たちに拍手をかけなくても生産能率は上つた。この部門は、前よりはるかに経済的に運営されている。この四月の能率は九九・四三%で、戦後最上のものであつた。』

この大会は全世界に光が拡まりうる証拠をみせる。われわれは現実的である。新しい便利な道具が出来れば、すぐ家に具えつける。テレビジョンもその一つだ。なぜこの新しい遠くまで見透す光明をすべての家に具えないのだろう。

アメリカ国会の両院議員有志たちがこの仕事を支持するのは何故か。何故外交委員会の人びとが世界中の首都に招待電報を送つたのか。このことは全然高度な、新しい政治的指導精神を示している。敵をも友だちにできる政治力である。日につづいて夜のくるように、共産主義は暗黒を伴う。しかし、この事実を自国で体験したある関係がいつた。『共産主義が真昼に暗やみをもたらすものである

とするなら、MRAは真夜中に太陽を輝かすものだ。』

今日ノールウェイの共産党の生みの親であり支柱であり、三十四年間党員生活をした人がわれわれと一緒にここにいるのもこんな理由からである。労働指導者でコミニストだった人びとがルールから、ロンドンの港湾から、フランスから、イタリアからきて、アジア、ヨーロッパの経営者側の人びとや、各種の信条をもつ人びと、また信仰の全然ない人びと、あらゆる人種、ちがった背景を持った人びとが、みな受け入れることのできる真理の実体を見出している。彼らはいう。『これこそわれわれが今まで知らなかつた、よりよいものだ。現実的に役立つ。』また『これこそ勤労者の求めているものだ。』と事業家もいう。彼ら自身もそれを欲し、それを楽しむ得るものだ。

始終問題に悩んでいる人びとが自分の誤ちを認め出すと問題も紛争も解決してしまい、手持無沙汰になるほどである。CIOのある指導者がいつた。『今では床につくとグッスリねむることが出来るようになった。問題は解消した。』

変わる事によつて新しい秩序の提唱者となつた人びとが本日列席している。彼らはこの革命の進展を知っている。ちようど一年前、私はドイツ首相コンラッド・アデナウア博士の招待で、ベルリン市の共産党示威運動の影響を削減するためにルール地区で大集会を指導していた。翌朝ドイツの一新聞は一面に『ベルリンは大失敗、MRAは根本的解答』と見出しをのせた。

フランス外相シューマン氏も、フランスとドイツの關係にこの運動の効果を認めている。

過去六年間のミラノ市長は社会党の人だが、『MRAは誰をも征服することなく、誰にも征服されず、みんなが勝利する唯一の武器だ』といった。

中国軍隊の最高司令官であつた何応欽將軍は、最近日本の参議院会館で次のように語つた。『中日恒久平和の基礎はMRAである。これこそ最も重要である。』

今やMRAは世界に進展し、その力はいよいよ拡大している。『世界の再建』という著書は十ヶ国で出版され熱心に読まれているし、広く理解されている。

一月に私はある記者会見で『航空会社が道を開くであろう』といった。この大会に特別飛行機で五つの代表団が各航空会社から送られてくるのを見ても、この導きが如何にすばらしく実現したかを示すものである。つい数日前、イースターン航空会社のリッケンバッカー社長は二千五百人の従業員に向かつて次のようにいつた。『われわれが道徳的に成長しない限り、智能的な、また経済的な発展はとまつてしまふだろう。MRAの主張する革命的標準の第一、正直をわれわれが本気で生活すれば、他の三つもつづくにちがいない。われわれはMRAの教える高い質の指導力を養成しよう。われわれ各自がこの精神を一夜にして行動に移すなら、アメリカは亡びないであろう。』

私の願ひは、アメリカ人の一人一人が神の導きによる自由を得て、アメリカのために闘うことである。その時アメリカ自身が目に見えない実在である神に導かれて、罪惡のきづなから真に自由となるであらう。このことを私はまた他のすべての國のためにも望みたい。次の世代の人たち、殊に戦場で

戦っている青年たちに答えをもたせたい。答えのないことは彼らを罪にしばることであつて、そのままにしておいてはいけない。そうでないと、われわれに対抗している人びとと同じ考え方が彼らを支配するようになる。そんなことでは靈感によるデモクラシーはつくりだすことはできない。正しい革命を遂行するには信念をもたねばならない。この革命を早く遂行できるか出来ないかが、アメリカと世界が救われるかどうかを決める。この革命がなければ、混乱の革命が起こるだけである。

強い薬が必要だ。罪のあと口はにぶく、重苦しい。『その子イエス・キリストの血、すべての罪よ
りわれらをきよむ。』すべての人が探し求めるものはこれであり、これこそ答えである。

そのときはじめて世界が喜んでついてくるすばらしい手本になれる。賢明なもの、正直なものが味方になれるアメリカができる。これこそ世界がアメリカに望んでいることである。自由の雄叫び、それこそアメリカの欲しているものだ。そのときこそ、靈感による真のデモクラシーが得られる。

老いも若きも、かつてリンカーンが闘つたように戦うであろう。若者は戦いの目的を知り、そして勝利を得るであろう。そのとき、われらはすべての人、また世界と和らぐものになる。

46 サンフランシスコでの努力

ワシントン市の著名な評論家でグリデロン、クラブ前会長グールド・リンカーン氏は一九四五年六月三十

日のワシントン・スター紙の彼の欄「政治の水車」で次のように書いている。

サンフランシスコ発

国連会議は親善の感を深めて終つた。この親善の空気が今度集合した五十ヶ国の代表とその国民の間に維持出来れば、この偉大な機構は確かに成功する。

ある委員会の最後の協議の席でイギリス代表エヴァンス氏が言つたことは、他の多くの代表も同感であつたと思う。「どんな完全な機構も動力がなければ動かない。戦争を除去する最後の力は人の心の変化である。」ノールウェイ議会の議長で、国際連盟の前会長であつたカール・ハムブロー博士も同じ意味のことをかかつて言つた。「現在最も必要なのは新しい機構でなく、心の改変である。最も完全な国際憲章も、それだけでは人類の安全を保障出来ないことは、あたかもいくら上等な鋤でも、それだけでは農業に成功しないと同様である。」

会議の期間中、ある一団の人——会議とは正式な関係のない——がサンフランシスコで活動してゐた。これはフランク・ブックマン博士の指導するMRAの一団であつた。過去に於けるこの一団の業績については大部分の代表は全然知らなかつたが、数人の代表は熟知してゐた。会議に対してこの人が何が影響を与えたということが、何名かの代表の口から証言された。その影響は「忘れられた要素」の上演を通じて行われたが、代表団五十の中三十以上がこれを見ている。

ボヘミアンクラブの劇場で上演されたとき、フィリップ代表団首席カーロス・ロムロ中將が、歓迎の辞をのべたが、その中で、『今夜この舞台に見るものは、そのまま、われわれの会議室に持つて行つても良いもので、この精神が会議室に及べば、その時われわれは新しい世界を誕生させる大憲章を世に送ることができよう。』彼は更に語をついで、『最初この劇を見るときは、見ようと思つて見たのではなかつたが、後では、「必要とあれば強制的にでも全代表に見せたい劇」とまで思うようになった。』と言つた。

47 文明を救う機会

ニューヨークで『善き道』^{グッドロード}初演の際、南極探險で有名なバード少將が行つた演説。

これは感動に満ちた靈感を感じさせる演出である。私は心から感動した。

私は全世界の何千という男女がMRA運動のために家を離れ、すべてのもてるものを投じ、無給で長時間の労働も惜しまず、アメリカ生活を救ひ、世界の自由を救うために努力していることを思うと、尊敬の念を禁じられない。ブックマン博士が今ここにおられること、またこの時機にアメリカに來られたことを喜ぶ。博士は国際チーム三百名を連れて來られたが、その中にはヨーロッパの十ヶ国

を代表する六十八名が参加しておられる。この人びとはMRAによつて生産が増加し、デモクラシー諸国の指導者の間に融合をもたらし、共産主義のイデオロギーに解答を与えているのを直接に知つてゐる人びとである。

全世界の自由が破壊の危険にさらされていることは、疑いのない事実である。

世俗的唯物科学は人事関係と精神的進歩にくらべると何世紀も先行している。それ故、世界はひどい苦境に立つてゐるのだ。アメリカの大衆は未だ十分にその危険に目覚めていない。彼らは実情を知らざるべきだ。

五年後には他の国ぐにも原子弾をもつてであろうし、そうなると自由国家群は受け身の立場に立つこととなる。

原子爆弾は、人間の物質主義的考への表われである。それであるから、原子弾そのものが問題ではなく、人間性が問題である。人間性の中に巢喰う悪が征服されねばならない。人間性は変わらねばならない。好戦的な国家の指導者が変わらねばならない。

しかし、ときが次第にせまつてきた。文明の最後のときが刻々と迫つてゐる。おそらくわれわれが思う以上におそいではなからうか。

人間性を変え、世界から好戦的な暴君をのぞくには時間がかかるから、人類が自らつくつた原子弾的環境に適応して生きる道を学ばず、これらの暴君をつないで置く必要がある。

全人類が共通の目的のために、統合体となつて働ける道が必要だ。これこそ原爆時代の要求するものであり、M R A は文明を救うため各人が探し求めていたその方法を示すものだ。M R A は世界中の平和と自由を愛好する指導者を、道義的に強める運動である。

私はM R A の世界的力に、諸君の活潑な御支援を願うものである。アメリカは自由の最後のとりでである。重ねて願うことは、人類が共通の世界的目的のために、このM R A の運動をおし進めるべく団結する精神的熱意を示すことである。

48 アジア・アフリカ代表の声明書

一九五五年一月一

ワシントンのMRA世界大会に出席した、アジアおよびアフリカの指導者一同は、一月十七日、MRAと世界情勢について次のような声明を発表した。

「この道徳的なイデオロギーが地球上に広がるべきに、ただ紙上でなく人びとの心中に署名され、恒久の平和に対しての人類最高の希望がもたられるものであることを、ここにわれわれ一同の確信として声明する。」

声明書はさらにつづいている。

「インドネシヤで近く開かれるアジア・アフリカ会議に多くの関心がよせられている。そしてMRAが、アジアとアフリカの幾百万の人びとに、誰も恐れる必要のない、しかも全人類に裨益し得る建設的協力をかちうる道を指し示すことをわれわれは確信する。」

どういふ変化がおこつたのか

MRAが効果をあげている、具体的な事実、を声明書は次のように列挙している。

(一) 黒人と白人との間に、また東洋と西洋との間に融和をもたらし、南アフリカでは、民族の優越と流血革命とに代るものを提供した。

(二) マウマウ団の原因となつてゐるものに解決をあたえ、数百のマウマウをM R A支持にかえつた。

(三) 西アフリカでは、自治政府への歩みに欠くことのできない新しい道徳生活を築きつつある。

(四) チュニジア国家主義者とフランス政府との間の話し合いを可能にした道徳的要因をあたえた。

(五) インドでは今度はじめて、共産主義とすべてのイズムに代るものを幾百万の人びとにあたえた。

(六) 日本、オーストラリア、韓国、およびフィリッピンのようなアジアの国々にの内部に融和をもたらし、また戦時中の苦にがしきや不信頼の残滓をなくすることによつて、これらの国の間にも融和をもたらしつつある。

「わが大陸の幾百万の者は、植民地主義からぬけ出て国家主義に入りつつある。これはたしかに偉大な革命であるが、国家主義は、新しい世界をつくるためには小さすぎる動機である。われわれの現在の考え方と生き方は、世界中の幾百万の人びとの心の中に燃えさかっている。変革を要求するイデオロギーの勢力の伸長の前にいつまでも突つ立っていることは許されない。変革は今や国々に、

二つの勢力の何れかによつてもたらされつつある。すなわち、共産主義革命か、M R Aのルネッサンスかによつてである。」

「共産主義世界の団結と情熱ではなく、自由世界の団結の熱情の欠けていること、これがわれわれの直面している最大の挑戦である。ロシアや中共その他の国ぐにが変らざるを得ないほど真剣に真のデモクラシーを生きぬく国はいつたいどの国だろうか。」

「われわれのなかには、自由を求めて大いに戦つてきたものもいるが、たいていの場合は憎しみに根ざした革命によつていた。流血の革命こそが社会の構造を変えることができると信じ、他人種の喉を押さえる真似ばかりしていた。」

「その戦いは間違つていた。人類が皮膚の色によつて分裂することほど、世界の悲劇の最たるものであると信ずる。」

「M R Aは変ることを通じて融合をわれわれにもたらし、自分自身からはじめて、一切のへだてをなくすほどの力をもつている。M R Aは新しい指導力である。それだけが一九五五年にふさわしいイデオロギーの見通しである。これこそがアジアとアフリカとに対する新しい希望の光である。というのは、M R Aはアフリカとわれわれの多くの国にとつて、丁度リンカーンがアメリカになしたと同じ事をなしつつある。すなわち、国のいたでをいやし、人びとを自由にしているのである。」

声明書は結論として次のようにのべている。

「われわれの望むところは、すべての国ぐにに、M R Aをその国の政策とするために、一切を捧げる男女の強力な一大勢力をつくることである。われわれはこの目的のために生涯を捧げる。」

日本参議院議員、右派社会党執行委員

戸 叶 武

インド国会議員、不可触階級連盟主事

P・N・ラジャボウ

インド・ボンベイ港湾労働者組合役員

ジョージ・フェルナンデス

アフリカ青年協議会創始者、初代会長

ウィリアム・ヌコマ博士

アフリカ、東部ナイジェリア土地庁次官

ミハエル・オゴン

アフリカ、ナイジェリア、ラゴス市立大学学長

フレッド・マックエン

イラン国王特使

アブルファズル・ハゼイ教授

エ ジ ブ ト

M・H・ファラック少将

フィリッピン国会議員

リ ム

昭和28年6月1日 第1刷発行
昭和28年8月10日 第3刷発行
昭和30年6月20日 第4刷改訂増補版発行

世界の再建

定価 250円

送料 30円

著者 **ピーター ハワード**

訳者 **相馬 雪香**

発行所 **MRAハウス**

東京都港区麻布富士見町19

振替・東京 164055番

印刷 白文堂

Printed in Japan

